畑ノ前遺跡・菅原Ⅰ遺跡・クボ山遺跡
菅原Ⅱ遺跡・菅原Ⅲ遺跡・廻田Ⅴ遺跡
保知石遺跡・浅柄Ⅱ遺跡・柳ノ内Ⅰ遺跡

山陰自動車道鳥取益田線（宍道～出雲間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２

２００５年３月

日本道路公団中国支社

島根県教育委員会

畑ノ前遺跡・菅原Ⅰ遺跡・クボ山遺跡
菅原Ⅱ遺跡・菅原Ⅲ遺跡・廻田Ⅴ遺跡
保知石遺跡・浅柄Ⅱ遺跡・柳ノ内Ⅰ遺跡

山陰自動車道鳥取益田線（宍道～出雲間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書２

２００５年３月

日本道路公団中国支社

島根県教育委員会

序

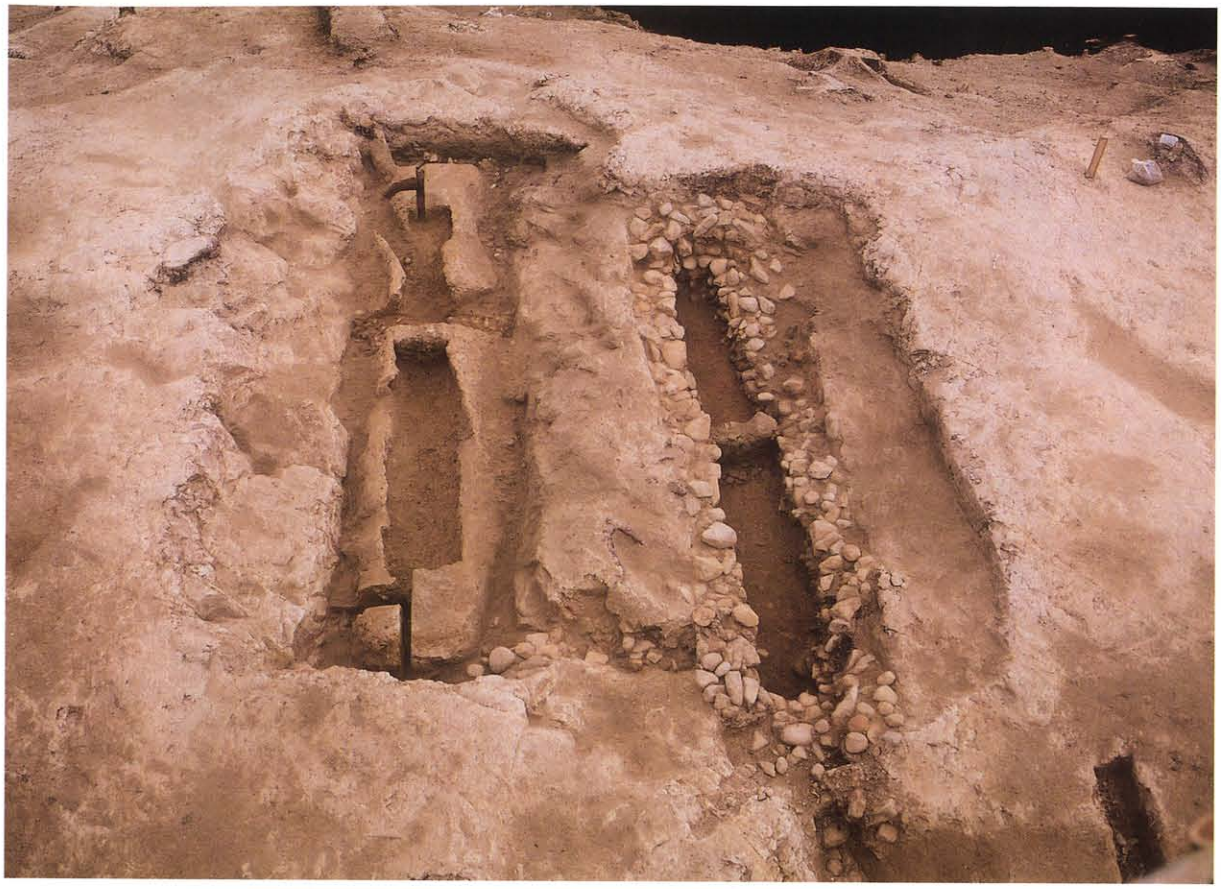
山陰自動車道鳥取益田線は、「国土開発幹線自動車法」に基づいて、均衡ある国土の開発に寄与する高速道の一環として計画が進められ、このうち宍道～出雲間につきましては、平成14年３月から鋭意建設を進めております。これに先立ち、路線敷地内にある遺跡について島根県教育委員会と協議し、記録保存のための発掘調査を進めてまいりました。本書は松江工事事務所担当区域である出雲市における浅柄Ⅱ遺跡などの貴重な遺跡の発掘調査の記録であります。

この記録調査がはるかな過去に生きた先祖の生活や文化様式を、時代を超えて現代に蘇らせ、また、現代に生きる私どもの未来の道しるべとなるとともに、今後の調査研究の資料として活用されることを期待するものであります。

なお、この発掘調査および本書の編集は島根県教育委員会に委託して実施したものであり、ここに関係各位のご尽力に対し、深甚なる謝意を表するものであります。

平成17年３月

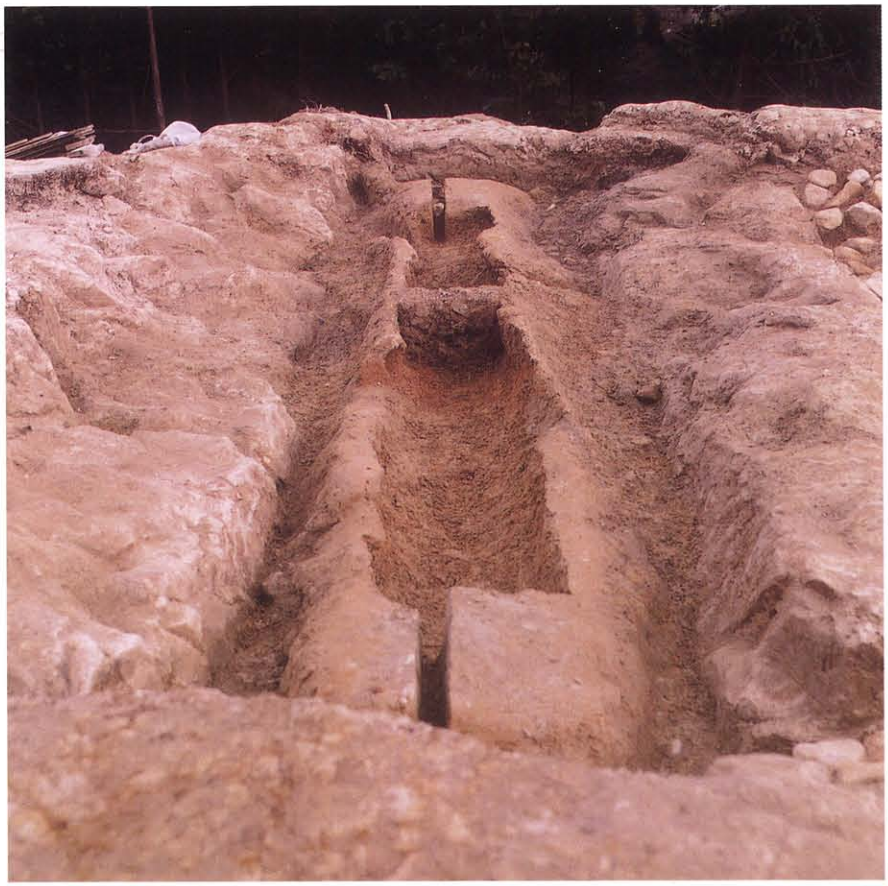
日本道路公団中国支社 松江工事事務所
所長　竹下幸次



浅柄Ⅱ遺跡　埋葬施設（西から）

浅柄Ⅱ遺跡　第１主体部鉄剣出土状況

巻頭写真２



浅柄Ⅱ遺跡　第１主体部（西から）

浅柄Ⅱ遺跡　第２主体部（西から）

序

山陰自動車道鳥取益田線は、「国土開発幹線自動車法」に基づいて、均衡ある国土の開発に寄与する高速道の一環として計画が進められ、このうち宍道～出雲間につきましては、平成14年３月から鋭意建設を進めております。これに先立ち、路線敷地内にある遺跡について島根県教育委員会と協議し、記録保存のための発掘調査を進めてまいりました。本書は松江工事事務所担当区域である出雲市における浅柄Ⅱ遺跡などの貴重な遺跡の発掘調査の記録であります。

この記録調査がはるかな過去に生きた先祖の生活や文化様式を、時代を超えて現代に蘇らせ、また、現代に生きる私どもの未来の道しるべとなるとともに、今後の調査研究の資料として活用されることを期待するものであります。

なお、この発掘調査および本書の編集は島根県教育委員会に委託して実施したものであり、ここに関係各位のご尽力に対し、深甚なる謝意を表するものであります。

平成17年３月

日本道路公団中国支社 松江工事事務所

所長　竹　下　幸　次

序

島根県教育委員会では、日本道路公団中国支社の委託を受けて、平成12年度から山陰自動車道鳥取益田線（宍道～出雲）建設予定地内に存在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してきましたが、この度この区間で二冊目の報告書を刊行する運びとなりました。

本報告書は平成14年度から15年度にかけて調査を行った出雲市船上津地区の畑の前遺跡、菅原Ⅰ遺跡、クボ山遺跡、菅原Ⅱ遺跡、菅原Ⅲ遺跡と出雲市神門地区の廻田Ⅴ遺跡、保知石遺跡、浅柄Ⅱ遺跡、栁ノ内Ⅰ遺跡について調査成果をまとめたものです。なかでも浅柄Ⅱ遺跡から検出された古墳は出雲平野で最も古い前期古墳で、当地方の古墳文化の導入および普及を知る上に重要なものとなりました。

本報告書が地域の歴史を解明する手がかりとなり、郷土の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心が高まる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたり御協力いただきました地元の方々、日本道路公団中国支社、出雲市文化企画部、その他関係機関、関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成17年 3 月

島根県教育委員会

教育長　広　沢　卓　嗣

例　　言

1．本書は日本道路公団中国支社の委託を受けて、島根県教育委員会が平成14・15年度に実施した山陰自動車道鳥取益田線（宍道～出雲間）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2．本書で扱う遺跡は次のとおりである。

島根県出雲市船津町	1994－2他	畑ノ前遺跡
同	1987他	菅原Ⅰ遺跡
同	1960他	クボ山遺跡
同	1369－1他	菅原Ⅱ遺跡
同	1940他	菅原Ⅲ遺跡
同	芦渡町字廻田2376－4他	廻田Ⅴ遺跡
同	芦渡町字宮下1638－3	保知石遺跡
同	知井宮町字坂之下谷2394他	浅柄Ⅱ遺跡
同	知井宮町字栁ノ内2461他	栁ノ内Ⅰ遺跡

3．調査組織は次のとおりである。

調査主体　　島根県教育委員会

（平成14年）現地調査

〔事務局〕宍道正年（埋蔵文化財調査センター所長）卜部吉博(同副所長）内田　融（同総務課長）坂本淑子（同総務係長）

〔調査員〕川原和人（同調査第2課長）久保田一郎（同文化財保護主事）勝部喜代志（同教諭兼文化財保護主事）横木尚文（同教諭兼文化財保護主事）勝部悠美（同調査補助員）松崎恵美子（同調査補助員）

（平成15年度）現地調査

〔事務局〕宍道正年（埋蔵文化財調査センター所長）卜部吉博(同副所長）永島静司（同総務課長）

〔調査員〕川原和人（同調査第2課長）横木尚文（同教諭兼文化財保護主事）松崎恵美子（同調査補助員）

（平成16年度）報告書作成

〔事務局〕山根正巳（埋蔵文化財調査センター所長）卜部吉博(同副所長）永島静司（同総務グループ課長）

〔調査員〕川原和人（同調査第1グループ課長）久保田一郎（同文化財保護主事）松崎恵美子（同調査補助員）

4．発掘作業（発掘作業員雇用・重機借り上げ・発掘用具調達等）については、島根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人中国建設弘済会

平成14年度　（現場担当）　矢野秀雄（技術員）保科　昭（技術員）

（事務担当）　中尾由美（事務員）

平成15年度　（現場担当）　矢野秀雄（技術員）
（事務担当）　板倉律子（事務員）

5．現地調査及び資料整理に際しては、文化財課・埋蔵文化財調査センター各職員及び下記に記す方々から有益な御指導・御助言・御協力をいただいた。

田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）蓮岡法暲（島根県文化財保護審議会委員）渡邊貞幸（島根大学教授）河上　稔（出雲市企画文化部文化財室長）倉瀧一誠（出雲市建設事業部）穴澤義功（たたら研究会会員）大澤正巳・鈴木瑞穂（九州テクノリサーチ）曽田一富（元上津公民館長）金山元治朗・内部仙市・妹尾武治・金山重信・金山　勇・金山雄治・奥井　晃（神門コミュニセンター所長）勝部俊治・漆谷　勉・寺田昌弘

6．クボ山遺跡等から出土した鉄関連遺物については、穴澤義功氏の指導を得て「鉄関連遺物観察表」及び「同詳細観察表」を作成した。

7．鉄関連遺物の冶金学的分析を株式会社九州テクノリサーチに依頼した。

8．挿図中北は測量法による第３座標系Ｘ軸方向を指す。平面直角座標系ＸＹ座標は日本測量地系による。レベル高は海抜高を示す。

9．第１・３・４・69・91図は国土交通省国土地理院発行のものを使用した。

10．本書に掲載した写真のうち空撮は株式会社ジェクトが撮影し、浅柄Ⅱ遺跡出土鉄剣のレントゲン写真は財団法人元興寺文化財研究所が撮影した。その他の遺構・遺物写真は調査員の他、仁木聡、林　健亮、東山信治、是田　敦、廣江耕史（埋蔵文化財調査センター職員）が撮影した。

11．本書に掲載した実測図は調査員の他、林、東山、是田が作成し、調査員が浄書した。

12．本書の執筆は川原、久保田、横木、穴澤、大澤、鈴木が分担して行い、その文責を目次に記した。編集は川原が行った。

13．本書掲載の遺跡出土遺物及び実測図、写真などの資料は島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33番地）で保管している。

本　文　目　次

1．調査に至る経緯 …… （川原） … 1
2．遺跡の位置と歴史的環境 …… （横木） … 3
3．出雲市上津地区の調査
　第１章　遺跡の位置及び周辺の遺跡 …… （川原） … 9
　第２章　調査の概要
　　第１節　畑ノ前遺跡 …… （久保田） … 11
　　第２節　菅原Ⅰ遺跡 …… （川原） … 17
　　第３節　クボ山遺跡 …… （久保田） … 29
　　第４節　菅原Ⅱ遺跡 …… （川原・久保田） … 45
　　第５節　菅原Ⅲ遺跡 …… （久保田） … 87
4．出雲市神門地区の調査
　第１章　遺跡の位置及び周辺の遺跡 …… （川原） …107
　第２章　調査の概要
　　第１節　廻田Ⅴ遺跡 …… （川原） …109
　　第２節　保知石遺跡 …… （川原） …113
　　第３節　浅柄Ⅱ遺跡 …… （川原） …173
　　第４節　栁ノ内Ⅰ遺跡 …… （川原） …199
5．クボ山遺跡鉄関連遺跡の考古学的観察 …… （穴澤・久保田） …203
6．クボ山遺跡出土鋳造関連遺跡の金属学的調査 …… （大澤・鈴木） …211

表目次

第１表　山陰自動車道鳥取益田線（宍道～出雲間）ルート上の遺跡一覧表 …… 2
第２表　本書掲載遺跡とその周辺の遺跡一覧表 …… 4
第３表　畑ノ前遺跡・菅原Ⅰ遺跡・クボ山遺跡・菅原Ⅱ遺跡・菅原Ⅲ遺跡とその周辺の遺跡一覧表 …… 10
第４表　畑ノ前遺跡　建物計測表 …… 14
第５表　畑ノ前遺跡　遺構外出土土器観察表 …… 15
第６表　畑ノ前遺跡　遺構外出土石器観察表 …… 15
第７表　島根県における石鍋出土遺跡一覧表 …… 27
第８表　クボ山遺跡　遺構外出土金属器観察表 …… 34
第９表　クボ山遺跡　鉄関連遺物一般観察表 …… 41～43
第10表　菅原Ⅱ遺跡　建物１出土土器観察表 …… 66～67
第11表　菅原Ⅱ遺跡　土坑１出土土器観察表 …… 68
第12表　菅原Ⅱ遺跡　建物２出土土器観察表 …… 69
第13表　菅原Ⅱ遺跡　建物２計測表 …… 71
第14表　菅原Ⅱ遺跡　加工段１出土土器観察表 …… 73
第15表　菅原Ⅱ遺跡　加工段２出土土器観察表 …… 75
第16表　菅原Ⅱ遺跡　土坑２出土土器観察表 …… 75
第17表　菅原Ⅱ遺跡　土坑２出土石器観察表 …… 75
第18表　菅原Ⅱ遺跡　加工段４出土土器観察表 …… 75
第19表　菅原Ⅱ遺跡　加工段５出土土器観察表 …… 75
第20表　菅原Ⅱ遺跡　土坑３出土土器観察表 …… 78
第21表　菅原Ⅱ遺跡　遺構外出土土器観察表 …… 80
第22表　菅原Ⅱ遺跡　遺構外出土石器観察表 …… 81
第23表　菅原Ⅱ遺跡　遺構外出土金属器観察表 …… 82
第24表　菅原Ⅲ遺跡　地山面検出の土坑一覧表 …… 92
第25表　菅原Ⅲ遺跡　建物１計測表 …… 96
第26表　菅原Ⅲ遺跡　建物２計測表 …… 97
第27表　菅原Ⅲ遺跡　土坑26及び周辺出土土器観察表 …… 101
第28表　菅原Ⅲ遺跡　建物４計測表 …… 104
第29表　菅原Ⅲ遺跡　土坑１出土土器観察表 …… 105
第30表　廻田Ⅴ遺跡・保知石遺跡・浅柄Ⅱ遺跡・栁ノ内Ⅰ遺跡とその周辺の遺跡一覧表 …… 108
第31表　クボ山遺跡　鉄関連遺物観察表１ …… 202
第32表　クボ山遺跡　鉄関連遺物観察表２ …… 203
第33表　クボ山遺跡　鉄関連遺物観察表３ …… 204
第34表　クボ山遺跡　鉄関連遺物観察表４ …… 205
第35表　クボ山遺跡　鉄関連遺物観察表５ …… 206
第36表　クボ山遺跡　鉄関連遺物観察表６ …… 207
第37表　クボ山遺跡　鉄関連遺物観察表７ …… 208
第38表　クボ山遺跡　Table. 1　供試材の履歴と調査項目 …… 216
第39表　クボ山遺跡　Table. 2　供試材の組成 …… 217
第40表　クボ山遺跡　Table. 3　出土遺物の調査結果のまとめ …… 218

挿図目次

第１図　山陰自動車道鳥取益田線（宍道～出雲間）ルート上の遺跡（S＝1/75,000） …… 2
第２図　上津地区・神門地区の位置図 …… 3
第３図　本書掲載遺跡とその周辺の遺跡（S＝1/100,000） …… 5
第４図　畑ノ前遺跡・菅原Ⅰ遺跡・クボ山遺跡・菅原Ⅱ遺跡・菅原Ⅲ遺跡とその周辺の遺跡（S＝1/75,000） …… 10
第５図　畑ノ前遺跡　試掘坑及び本調査範囲位置図（S＝1/1,000） …… 11
第６図　畑ノ前遺跡　調査前地形図（S＝1/300） …… 12
第７図　畑ノ前遺跡　遺構配置及び調査後地形図（S＝1/300） … 13
第８図　畑ノ前遺跡　建物跡実測図（S＝1/60） …… 14
第９図　畑ノ前遺跡　土坑１・２実測図（S＝1/30） …… 15
第10図　畑ノ前遺跡　出土遺物実測図（１：S＝1/3，２～４：S＝1/2） …… 16
第11図　菅原Ⅰ遺跡　周辺地形図（S＝1/1,000） …… 17
第12図　菅原Ⅰ遺跡　調査前地形図（S＝1/400） …… 18
第13図　菅原Ⅰ遺跡１区　調査後地形及び遺構配置図（S＝1/300） …… 19

第14図　菅原Ⅰ遺跡１区　土層実測図（S＝1/120）…… 19
第15図　菅原Ⅰ遺跡１区　加工段１・２・３実測図（S＝1/90）… 20
第16図　菅原Ⅰ遺跡２区　調査後地形及び遺構配置図（S＝1/150）
…… 20
第17図　菅原Ⅰ遺跡　出土遺物実測図１（S＝1/3）…… 22
第18図　菅原Ⅰ遺跡　出土遺物実測図２（S＝1/3）…… 23
第19図　菅原Ⅰ遺跡　出土遺物実測図３
（48～59：S＝1/3，60～61：S＝2/3）…… 24
第20図　島根県における石鍋変遷図（S＝1/8）…… 27
第21図　クボ山遺跡　周辺地形、試掘坑及び本調査範囲位置図
（S＝1/1,000）…… 29
第22図　クボ山遺跡　本調査区地形及び遺構図（S＝1/100）…… 30
第23図　クボ山遺跡　基本土層図（S＝1/100）…… 31
第24図　クボ山遺跡　溝状遺構等実測図（S＝1/60）…… 31
第25図　クボ山遺跡　出土遺物実測図１
（１～６・８：S＝1/3，７・９：S＝1/4）…… 32
第26図　クボ山遺跡　出土遺物実測図２（S＝1/4）…… 33
第27図　クボ山遺跡　出土金属製品実測図
（１～２：S＝1/2，３：S＝1/1）…… 34
第28図　クボ山遺跡　鉄関連遺物構成図（S＝1/8，ただし４・12・
15・26・31：S＝1/10，24・27・32：S＝1/6）…… 35
第29図　クボ山遺跡　鉄関連遺物実測図１（S＝1/3）…… 36
第30図　クボ山遺跡　鉄関連遺物実測図２（S＝1/3）…… 37
第31図　クボ山遺跡　鉄関連遺物実測図３（S＝1/3）…… 38
第32図　クボ山遺跡　鉄関連遺物実測図４（S＝1/3）…… 39
第33図　クボ山遺跡　鉄関連遺物実測図５（S＝1/3）…… 40
第34図　菅原Ⅱ遺跡　調査区配置図（S＝1/1,000）…… 46
第35図　菅原Ⅱ遺跡１・２区　調査前地形図（S＝1/600）…… 47
第36図　菅原Ⅱ遺跡１・２区　調査後地形及び遺構配置図
（S＝1/600）…… 48
第37図　菅原Ⅱ遺跡１区　土層実測図（S＝1/120）…… 48
第38図　菅原Ⅱ遺跡１区　加工段1実測図（S＝1/40）…… 49
第39図　菅原Ⅱ遺跡１区　土坑１・２・３実測図
（遺構：S＝1/15，遺物：S＝1/3）…… 50
第40図　菅原Ⅱ遺跡１区　出土遺物実測図（S＝1/3）…… 51
第41図　菅原Ⅱ遺跡２区　土坑１・２・３実測図（S＝1/30）…… 52
第42図　菅原Ⅱ遺跡２区　遺物出土位置及び土層実測図
（位置図：S＝1/300，土層図：S＝1/90）…… 53
第43図　菅原Ⅱ遺跡２区　出土土器実測図（S＝1/3）…… 54
第44図　菅原Ⅱ遺跡２区　出土石器実測図
（30～38：S＝2/3，39～41：S＝1/3）…… 55
第45図　菅原Ⅱ遺跡３区　調査前地形図（S＝1/300）…… 58
第46図　菅原Ⅱ遺跡３区　調査後地形及び遺構配置図（S＝1/300）
…… 59
第47図　菅原Ⅱ遺跡３区　基本土層図（S＝1/100）…… 60
第48図　菅原Ⅱ遺跡３区　建物１実測図（完堀後）(S＝1/30)　… 61
第49図　菅原Ⅱ遺跡３区　建物１及び遺物出土状況実測図
（S＝1/30）…… 63～64
第50図　菅原Ⅱ遺跡３区　建物１出土遺物実測図1（S＝1/3）… 65
第51図　菅原Ⅱ遺跡３区　建物１出土遺物実測図2（S＝1/3）… 66
第52図　菅原Ⅱ遺跡３区　土坑１実測図（S＝1/30）…… 68
第53図　菅原Ⅱ遺跡３区　土坑１出土遺物実測図（S＝1/3）…… 68
第54図　菅原Ⅱ遺跡３区　建物２及び遺物出土位置図（S＝1/60）
…… 70
第55図　菅原Ⅱ遺跡３区　建物２出土遺物実測図（S＝1/3）…… 71
第56図　菅原Ⅱ遺跡３区　加工段１実測図（S＝1/60）…… 73
第57図　菅原Ⅱ遺跡３区　加工段１出土遺物実測図（S＝1/3）…73
第58図　菅原Ⅱ遺跡３区　加工段２・土坑２実測図（S＝1/30）…74
第59図　菅原Ⅱ遺跡３区　加工段２出土遺物実測図（S＝1/3）…74
第60図　菅原Ⅱ遺跡３区　土坑2出土遺物実測図（S＝1/3）…… 74
第61図　菅原Ⅱ遺跡３区　加工段３・４・５実測図（S＝1/60）… 76
第62図　菅原Ⅱ遺跡３区　加工段４・５出土遺物実測図（S＝1/3）
……76
第63図　菅原Ⅱ遺跡３区　道路状遺構下方遺構群実測図（S＝1/80）
…… 77
第64図　菅原Ⅱ遺跡３区　土坑３・４実測図（S＝1/30）…… 78
第65図　菅原Ⅱ遺跡３区　土坑３出土遺物実測図（S＝1/3）…… 78
第66図　菅原Ⅱ遺跡３区　石列実測図（S＝1/30）…… 79
第67図　菅原Ⅱ遺跡３区　遺構外出土遺物実測図
（１～４：S＝1/3，５～６：S＝1/12）…… 80
第68図　菅原Ⅱ遺跡３区　出土鉄器実測図（S＝1/2）…… 81
第69図　出雲平野における建物跡検出状況図（S＝1/75,000）… 84
第70図　菅原Ⅲ遺跡　調査前地形図（S＝1/300）…… 87
第71図　菅原Ⅲ遺跡　基本土層図（S＝1/100）…… 88
第72図　菅原Ⅲ遺跡　調査後地形及び遺構配置図１（S＝1/300）
…… 89
第73図　菅原Ⅲ遺跡　土坑群実測図１
（S＝1/60，土坑19のみS＝1/20）…… 90
第74図　菅原Ⅲ遺跡　土坑群実測図２（S＝1/60）…… 91
第75図　菅原Ⅲ遺跡　土坑群実測図３（S＝1/60）…… 93
第76図　菅原Ⅲ遺跡　土坑６出土縄文土器実測図（S＝1/3）…… 93
第77図　菅原Ⅲ遺跡　出土石器・鉄器実測図
（１～２：S＝1/1，３：S＝1/2）…… 93
第78図　菅原Ⅲ遺跡　調査区西半の遺構群（S＝1/60）…… 94
第79図　菅原Ⅲ遺跡　調査後地形及び遺構配置図２（S＝1/300）
…… 95
第80図　菅原Ⅲ遺跡　建物1実測図（S＝1/60）…… 96
第81図　菅原Ⅲ遺跡　建物2実測図（S＝1/60）…… 97
第82図　菅原Ⅲ遺跡　調査後地形及び遺構配置図３（S＝1/300）
…… 98
第83図　菅原Ⅲ遺跡　土坑26・土坑２及び遺物出土位置図
（S＝1/60）…… 99
第84図　菅原Ⅲ遺跡　土坑26中心部実測図（S＝1/30）…… 100
第85図　菅原Ⅲ遺跡　土坑２実測図（S＝1/30）…… 100
第86図　菅原Ⅲ遺跡　土坑26及び周辺出土遺物実測図（S＝1/3）
…… 101
第87図　菅原Ⅲ遺跡　土坑27実測図（S＝1/30）…… 102
第88図　菅原Ⅲ遺跡　調査後地形及び遺構配置図４（S＝1/300）
…… 102
第89図　菅原Ⅲ遺跡　建物３実測図１（S＝1/60）…… 104
第90図　菅原Ⅲ遺跡　土坑１遺物出土状況及び出土遺物実測図
（遺構：S＝1/15，遺物：S＝1/3）…… 105
第91図　廻田Ⅴ遺跡・保知石遺跡・浅柄Ⅱ遺跡・柳ノ内Ⅰ遺跡と
その周辺の遺跡（S＝1/75,000）…… 108
第92図　廻田Ⅴ遺跡　周辺地形図（S＝1/1,000）…… 109
第93図　廻田Ⅴ遺跡　調査前地形図（S＝1/200）…… 109
第94図　廻田Ⅴ遺跡　土層実測図・調査後地形及び
出土遺物実測図（遺構：S＝1/80，遺物：S＝1/4）…… 110
第95図　保知石遺跡　周辺地形図（S＝1/500）…… 112
第96図　保知石遺跡　調査後地形及び土層実測図
（地形図：S＝1/240，土層図：S＝1/90）…… 113
第97図　保知石遺跡１区　出土土器垂直分布図（S＝1/150）… 114
第98図　保知石遺跡１区　東側砂層遺物出土状況実測図
（遺構：S＝1/60，遺物：S＝1/12）…… 114
第99図　保知石遺跡１区　粘質土層出土遺物実測図１（S＝1/3）
…… 116
第100図　保知石遺跡１区　粘質土層出土遺物実測図２（S＝1/4）
…… 117
第101図　保知石遺跡１区　粘質土層出土遺物実測図３（S＝1/4）
…… 119
第102図　保知石遺跡１区　粘質土層出土遺物実測図４（S＝1/3）
…… 120
第103図　保知石遺跡１区　粘質土層出土遺物実測図５（S＝1/3）
…… 122
第104図　保知石遺跡１区　粘質土層出土遺物実測図６（S＝1/3）
…… 125
第105図　保知石遺跡１区　粘質土層出土遺物実測図７（S＝1/3）
…… 126
第106図　保知石遺跡１区　粘質土層出土遺物実測図８（S＝1/3）
…… 131
第107図　保知石遺跡１区　粘質土層出土遺物実測図９（S＝1/3）
…… 132
第108図　保知石遺跡１区　粘質土層出土遺物実測図10
（180：S＝1/6，181～188：S＝1/3）…… 133

第109図　保知石遺跡１区　砂層出土遺物実測図１（S=1/3）…136
第110図　保知石遺跡１区　砂層出土遺物実測図２（S=1/3）…137
第111図　保知石遺跡１区　砂礫層出土遺物実測図１（S=1/3）……140
第112図　保知石遺跡１区　砂礫層出土遺物実測図２（S=1/3）……141
第113図　保知石遺跡１区　砂礫層出土遺物実測図３（S=1/3）……144
第114図　保知石遺跡１区　砂礫層出土遺物実測図４（S=1/3）……145
第115図　保知石遺跡１区　砂礫層出土遺物実測図５（S=1/4）……148
第116図　保知石遺跡１区　砂礫層出土遺物実測図６（S=1/3）……149
第117図　保知石遺跡２区　出土遺物実測図１（S=1/3）……152
第118図　保知石遺跡２区　出土遺物実測図２（S=1/3）……153
第119図　保知石遺跡　出土石器実測図１（S=1/4）……156
第120図　保知石遺跡　出土石器実測図２（S=1/4）……157
第121図　保知石遺跡　出土石器実測図３（S=1/4）……158
第122図　保知石遺跡　出土石器実測図４
（28～29：S=2/3，30～36：S=1/3）……159
第123図　保知石遺跡　出土木器実測図（S=1/8）……160
第124図　保知石遺跡　出土突帯文編年図（S=1/16）……164
第125図　保知石遺跡　出土扁平打製石斧分類図（S=1/8）……166
第126図　出雲平野及び斐伊川・神門川流域における
扁平打製石斧変遷図（S=1/12）……168
第127図　保知石遺跡　中世土器編年図（S=1/2）……169
第128図　浅柄Ⅱ遺跡　周辺地形図（S=1/30,000）……172
第129図　浅柄Ⅱ遺跡　調査前地形図（S=1/400）……173
第130図　浅柄Ⅱ遺跡　調査後地形及び遺構配置図（S=1/400）……173
第131図　浅柄Ⅱ遺跡　土壙１・土坑１実測図（S=1/30）……174
第132図　浅柄Ⅱ遺跡　土坑２・３及び出土遺物実測図
（遺構図：S=1/16，土器：S=1/4，石製品：S=1/8）……175
第133図　浅柄Ⅱ遺跡　埋葬施設実測図１（墓壙及び礫床）
（S=1/40）……179～180
第134図　浅柄Ⅱ遺跡　床面鑿痕状況図（S=1/30）……181
第135図　浅柄Ⅱ遺跡　鉄剣出土状況実測図（第１主体部）
（S=1/20）……181
第136図　浅柄Ⅱ遺跡　出土鉄剣実測図（S=1/3）……182
第137図　浅柄Ⅱ遺跡　埋葬施設実測図２（粘土槨及び礫槨１）
（S=1/40）……183～184
第138図　浅柄Ⅱ遺跡　埋葬施設実測図３（粘土槨及び礫槨２）
（S=1/40）……186
第139図　浅柄Ⅱ遺跡　排水溝検出状況実測図（S=1/40）……187
第140図　浅柄Ⅱ遺跡　埋葬施設埋め土土層実測図（S=1/40）……188
第141図　浅柄Ⅱ遺跡　第２主体部礫槨断面実測図（S=1/20）……189
第142図　浅柄Ⅱ遺跡　焼土を伴う土坑実測図（S=1/20）……189
第143図　浅柄Ⅱ遺跡　礫の集積遺構実測図（S=1/20）……189
第144図　柳ノ内Ⅰ遺跡　調査前地形図（S=1/600）……199
第145図　柳ノ内Ⅰ遺跡　調査後地形及び遺物出土状況図
（調査区：S=1/300，遺物：S=1/12）……199
第146図　柳ノ内Ⅰ遺跡　土層実測図（S=1/120）……200
第147図　柳ノ内Ⅰ遺跡　出土遺物実測図（S=1/3）……200

図版目次

巻頭写真１　遠景（南西から）
菅原Ⅱ遺跡より山陰道建設予定地をのぞむ
巻頭写真２　遠景（南東から）
図版１　畑ノ前遺跡　全景（試掘調査後）
畑ノ前遺跡　建物跡
図版２　畑ノ前遺跡　土坑（落とし穴）
畑ノ前遺跡　全景
図版３　畑ノ前遺跡　出土遺物
図版４　菅原Ⅰ遺跡　全景
菅原Ⅰ遺跡１区　全景
図版５　菅原Ⅰ遺跡２区　全景
菅原Ⅰ遺跡１区　加工段１・２・３（南から）
図版６　菅原Ⅰ遺跡１区　加工段１・２・３（東から）
菅原Ⅰ遺跡　出土遺物１
図版７　菅原Ⅰ遺跡　出土遺物２
図版８　クボ山遺跡　全景（調査前・東から）
クボ山遺跡　溝状遺構下方の「窪み」
図版９　クボ山遺跡　溝状遺構（北から）
クボ山遺跡　全景（北から）
図版10　クボ山遺跡　出土遺物１
図版11　クボ山遺跡　出土遺物２
図版12　クボ山遺跡　出土遺物３
図版13　クボ山遺跡　出土遺物４
図版14　クボ山遺跡　出土遺物５
図版15　クボ山遺跡　出土鉄関連遺物１
図版16　クボ山遺跡　出土鉄関連遺物２
図版17　クボ山遺跡　出土鉄関連遺物３
図版18　クボ山遺跡　出土鉄関連遺物４
図版19　菅原Ⅱ遺跡１・２区　全景
図版20　菅原Ⅱ遺跡１区　北側遺構群
菅原Ⅱ遺跡１区　土坑1（西から）
図版21　菅原Ⅱ遺跡１区　土坑1に伴う遺物出土状況
菅原Ⅱ遺跡１区　加工段１
図版22　菅原Ⅱ遺跡２区　遺物出土状況（西から）
菅原Ⅱ遺跡１区　出土遺物
図版23　菅原Ⅱ遺跡２区　出土遺物
図版24　菅原Ⅱ遺跡３区　全景（調査前）
菅原Ⅱ遺跡３区　建物１遺物出土状況
図版25　菅原Ⅱ遺跡３区　建物１（改修前・西から）
菅原Ⅱ遺跡３区　建物１（改修後・西から）
図版26　菅原Ⅱ遺跡３区　建物２（東から）
菅原Ⅱ遺跡３区　加工段１（東から）
図版27　菅原Ⅱ遺跡３区　加工段２西端
菅原Ⅱ遺跡３区　加工段３
菅原Ⅱ遺跡３区　加工段４
図版28　菅原Ⅱ遺跡３区　加工段５
菅原Ⅱ遺跡３区　土坑１遺物出土状況
菅原Ⅱ遺跡３区　土坑１
図版29　菅原Ⅱ遺跡３区　土坑４
菅原Ⅱ遺跡３区　石積み
菅原Ⅱ遺跡３区　石列
図版30　菅原Ⅱ遺跡３区　調査区下半のピット群
菅原Ⅱ遺跡３区　加工段６
菅原Ⅱ遺跡３区　加工段７
図版31　菅原Ⅱ遺跡３区　調査区西半（古墳時代の遺構面）
菅原Ⅱ遺跡３区　全景
図版32　菅原Ⅱ遺跡３区　建物１出土遺物１
図版33　菅原Ⅱ遺跡３区　建物１出土遺物２
図版34　菅原Ⅱ遺跡３区　建物１出土遺物３
菅原Ⅱ遺跡３区　土坑１出土遺物
菅原Ⅱ遺跡３区　建物２出土遺物１
図版35　菅原Ⅱ遺跡３区　建物２出土遺物２
菅原Ⅱ遺跡３区　加工段１出土遺物
図版36　菅原Ⅱ遺跡３区　加工段２出土遺物
菅原Ⅱ遺跡３区　土坑２出土遺物
菅原Ⅱ遺跡３区　加工段４出土遺物
菅原Ⅱ遺跡３区　土坑３出土遺物
菅原Ⅱ遺跡３区　加工段５出土遺物

図版37　菅原Ⅱ遺跡３区　遺構外出土遺物
図版38　菅原Ⅲ遺跡　全景（調査前）
菅原Ⅲ遺跡　建物１
図版39　菅原Ⅲ遺跡　建物２
菅原Ⅲ遺跡　土坑26（前）・溝状遺講・土坑２（奥）
図版40　菅原Ⅲ遺跡　土坑26・27
菅原Ⅲ遺跡　土坑26中心部
図版41　菅原Ⅲ遺跡　土坑２
菅原Ⅲ遺跡　建物３
図版42　菅原Ⅲ遺跡　土坑１遺物出土状況
菅原Ⅲ遺跡　土坑１
菅原Ⅲ遺跡　土坑27
図版43　菅原Ⅲ遺跡　土坑27
菅原Ⅲ遺跡　土坑27
菅原Ⅲ遺跡　土坑４
図版44　菅原Ⅲ遺跡　土坑３
菅原Ⅲ遺跡　土坑５
菅原Ⅲ遺跡　土坑６遺物出土状況
菅原Ⅲ遺跡　土坑６
図版45　菅原Ⅲ遺跡　土坑７
菅原Ⅲ遺跡　土坑10
菅原Ⅲ遺跡　土坑11
菅原Ⅲ遺跡　土坑12
図版46　菅原Ⅲ遺跡　土坑８
菅原Ⅲ遺跡　土坑９
菅原Ⅲ遺跡　土坑19
図版47　菅原Ⅲ遺跡　土坑13
菅原Ⅲ遺跡　土坑14
菅原Ⅲ遺跡　土坑15
図版48　菅原Ⅲ遺跡　土坑16
菅原Ⅲ遺跡　土坑17
菅原Ⅲ遺跡　土坑18
菅原Ⅲ遺跡　土坑20
図版49　菅原Ⅲ遺跡　土坑22
菅原Ⅲ遺跡　土坑24
菅原Ⅲ遺跡　土坑25
菅原Ⅲ遺跡　Pit81
図版50　菅原Ⅲ遺跡　土坑21
菅原Ⅲ遺跡　土坑23
図版51　菅原Ⅲ遺跡　調査区西半の遺構
菅原Ⅲ遺跡　全景
図版52　菅原Ⅲ遺跡　土坑６出土縄文土器片
菅原Ⅲ遺跡　土坑21出土石鏃
菅原Ⅲ遺跡　土坑23出土石鏃
菅原Ⅲ遺跡　遺構外出土鉄器
菅原Ⅲ遺跡　土坑26及び周辺出土土器１
図版53　菅原Ⅲ遺跡　土坑26及び周辺出土土器２
菅原Ⅲ遺跡　土坑１出土土器
図版54　廻田Ⅴ遺跡　全景（調査前・北から）
廻田Ⅴ遺跡　全景（西から）
図版55　廻田Ⅴ遺跡　遺物出土状況１
廻田Ⅴ遺跡　東西畦断面
図版56　廻田Ⅴ遺跡　遺物出土状況２
廻田Ⅴ遺跡　出土遺物
図版57　保知石遺跡　全景（北から）
保知石遺跡　全景（西から）
図版58　保知石遺跡１区　東側全景
保知石遺跡１区　土器出土状況（粘質土）
図版59　保知石遺跡１区　土器出土状況（砂層）
保知石遺跡２区　全景（西から）
図版60　保知石遺跡　出土遺物１
図版61　保知石遺跡　出土遺物２
図版62　保知石遺跡　出土遺物３
図版63　保知石遺跡　出土遺物４
図版64　保知石遺跡　出土遺物５
図版65　保知石遺跡　出土遺物６
図版66　保知石遺跡　出土遺物７
図版67　保知石遺跡　出土遺物８
図版68　保知石遺跡　出土遺物９
図版69　保知石遺跡　出土遺物10
図版70　保知石遺跡　出土遺物11
図版71　保知石遺跡　出土遺物12
図版72　保知石遺跡　出土遺物13
図版73　保知石遺跡　出土遺物14
図版74　保知石遺跡　出土遺物15
図版75　保知石遺跡　出土遺物16
図版76　保知石遺跡　出土遺物17
図版77　保知石遺跡　出土遺物18
図版78　保知石遺跡　出土遺物19
図版79　保知石遺跡　出土遺物20
図版80　保知石遺跡　出土遺物21
図版81　保知石遺跡　出土石器１
図版82　保知石遺跡　出土石器２
図版83　保知石遺跡　出土木器１
図版84　保知石遺跡　出土木器２
図版85　浅柄Ⅱ遺跡　全景（調査前・西から）
浅柄Ⅱ遺跡　全景（上空から）
図版86　浅柄Ⅱ遺跡　埋葬施設１（西から）
浅柄Ⅱ遺跡　埋葬施設２（西から）
図版87　浅柄Ⅱ遺跡　埋葬施設３（西から）
浅柄Ⅱ遺跡　埋葬施設４（西から）
図版88　浅柄Ⅱ遺跡　第１主体部埋め土
浅柄Ⅱ遺跡　第２主体部埋め土
図版89　浅柄Ⅱ遺跡　第１主体部断面
浅柄Ⅱ遺跡　第１主体部東小口
図版90　浅柄Ⅱ遺跡　第１主体部西小口
浅柄Ⅱ遺跡　鉄剣出土状況１
図版91　浅柄Ⅱ遺跡　鉄剣出土状況２
浅柄Ⅱ遺跡　出土鉄剣
図版92　浅柄Ⅱ遺跡　第１主体部礫床断面
浅柄Ⅱ遺跡　第１主体部完掘状況
図版93　浅柄Ⅱ遺跡　第２主体部内部断面
浅柄Ⅱ遺跡　第２主体部東小口礫出土状況
図版94　浅柄Ⅱ遺跡　第２主体部西小口礫出土状況
浅柄Ⅱ遺跡　第２主体部南壁断面
図版95　浅柄Ⅱ遺跡　第２主体部北壁断面
浅柄Ⅱ遺跡　第２主体部丹土貼り付け範囲
図版96　浅柄Ⅱ遺跡　第２主体部礫床断面
浅柄Ⅱ遺跡　第２主体部完掘状況
図版97　浅柄Ⅱ遺跡　排水溝（南から）
浅柄Ⅱ遺跡　排水溝（西から）
図版98　浅柄Ⅱ遺跡　排水溝
（南から・第１主体部から第２主体部の間）
浅柄Ⅱ遺跡　排水溝完掘（第２主体部部分）
図版99　浅柄Ⅱ遺跡　排水溝完掘
（南から・第１主体部から第２主体部の間）
浅柄Ⅱ遺跡　排水溝完掘（西斜面から）
図版100 浅柄Ⅱ遺跡　第１主体部床面鑿痕東側
浅柄Ⅱ遺跡　第１主体部床面鑿痕中央
図版101 浅柄Ⅱ遺跡　土壙１
浅柄Ⅱ遺跡　土坑１
図版102 浅柄Ⅱ遺跡　土坑２遺物出土状況（上から）
浅柄Ⅱ遺跡　土坑２遺物出土状況（南から）
図版103 浅柄Ⅱ遺跡　土坑２
浅柄Ⅱ遺跡　土坑２出土遺物
図版104 浅柄Ⅱ遺跡　土坑３
浅柄Ⅱ遺跡　土坑３出土石製品
図版105 柳ノ内Ⅰ遺跡　全景（調査前）
柳ノ内Ⅰ遺跡　全景（南東から）
図版106 柳ノ内Ⅰ遺跡　全景（北東から）
柳ノ内Ⅰ遺跡　調査区断面
図版107 柳ノ内Ⅰ遺跡　出土遺物１
図版108 柳ノ内Ⅰ遺跡　出土遺物２

1．調査に至る経緯

山陰自動車道鳥取益田線は、中国横断自動車道尾道松江線·山陽自動車道·中国縦貫自動車道·西瀬戸自動車道（通称しまなみ海道）と接続し、日本海側地域と瀬戸内海地域の広域的な高速交通ネットワークを形成することにより沿線地域の産業·経済·文化の発展と活性化を図ることを目的に、昭和62年に予定路線が決定した。宍道～出雲間18.1㎞については平成３年12月に基本計画が、そして平成８年12月には整備計画も決定した。

この計画にともなう予定地内埋蔵文化財調査（トンネル予定地を除く八束郡宍道町·簸川郡斐川町·出雲市地内にかかわるもの）については、平成９年２月７日付で県土木部より県教育委員会に分布調査の依頼があった。これを受け、同年３月後半から分布調査を開始し、６月に調査結果を回答した。しかしこの調査は樹木の繁茂した中でのものであり、路線決定（用地杭設置）後及び立木伐採後の各段階での再踏査が必要であると確認された。なお、斐川町では県高速道路事務所の依頼を受け、この年８月から９月にかけて祇園原遺跡のトレンチ調査を行い、結果を９月末に回答している。12月には日本道路公団に対して施行命令があり、翌平成10年1月には工事実施計画も認可された。再踏査は条件の整った平成11年２月に行われた。

平成12年４月１日、「平成12年度埋蔵文化財発掘調査（松江）」の契約締結により、山陰自動車道建設予定地内の調査が本格的に開始することとなる。５月には、社団法人中国建設弘済会に作業員確保・発掘現場における物件確保・測量掘削工事等の調査補助業務を委託するための契約が結ばれた。

平成12年度は６月から１パーティで斐川町の３遺跡を調査した。大井Ⅱ遺跡·大井Ⅰ遺跡・畑谷Ⅰ遺跡を対象としたこの年の調査は９月６日に終了、道路公団には10月２日付で結果を通知した。

これに並行して８月には次年度の調査を見据え、ルート上の同町学頭～神庭に所在する遺跡の調査範囲も決定された。

平成13年度は４パーティでの調査体制となった。４月25日に開始した西Ⅰ遺跡の調査を皮切りに、23遺跡を調査対象とした。斐川町内では学頭地区３遺跡、神庭地区５遺跡、三絡地区５遺跡、直江地区４遺跡、さらに出雲市内では上津地区６遺跡を調査し、12月に調査は終了した。この年の調査遺跡のうち、西Ⅰ遺跡・祇園原Ⅰ遺跡・石橋Ⅰ遺跡・高瀬城北遺跡については平成14年度に報告書を刊行した。

平成14年度は２パーティの体制となる。調査は出雲市内のみとなり、上津地区６遺跡、神門地区12遺跡を対象とした。調査は４月18日に開始し、翌年１月に終了した。平成15年度は１パーティ体制で上津地区１遺跡、神門地区３遺跡を４月７日から翌年２月13日までの期間で調査した。

今回報告するのは、平成14年度から15年度にかけて調査した上津地区の５遺跡（畑ノ前遺跡・菅原Ⅰ遺跡・クボ山遺跡・菅原Ⅱ遺跡・菅原Ⅲ遺跡）と、神門地区の４遺跡（廻田Ⅴ遺跡・保知石遺跡・浅柄Ⅱ遺跡・栁ノ内Ⅰ遺跡）であり、いずれも出雲市内に所在する。

第１図　山陰自動車道鳥取益田線（宍道～出雲間）ルート上の遺跡（S＝1/75,000）

第１表　山陰自動車道鳥取益田線（宍道～出雲間）ルート上の遺跡一覧表

番号	遺跡名	調査年度	主な内容	所在地
1	畑ノ前遺跡	平成14年度	建物跡、落とし穴	出雲市船津町
2	菅原Ⅰ遺跡	平成14年度	建物跡、散布地	出雲市船津町
3	クボ山遺跡	平成14年度	鋳造関連遺跡（散布地）	出雲市船津町
4	菅原Ⅱ遺跡	平成14年度 平成15年度	古墳時代中期建物跡	出雲市船津町
5	菅原Ⅲ遺跡	平成14年度	建物跡、落とし穴	出雲市船津町
6	廻田Ⅴ遺跡	平成14年度	祭祀遺跡	出雲市芦渡町
7	保知石遺跡	平成15年度	遺物散布地	出雲市芦渡町
8	浅柄Ⅱ遺跡	平成15年度	前期古墳	出雲市知井宮町
9	柳ノ内Ⅰ遺跡	平成15年度	散布地	出雲市知井宮町

2．遺跡の位置と歴史的環境

畑ノ前遺跡・菅原Ⅰ遺跡・クボ山遺跡・菅原Ⅱ遺跡・菅原Ⅲ遺跡 廻田Ⅴ遺跡・保知石遺跡・浅柄Ⅱ遺跡・柳ノ内Ⅰ遺跡

出雲平野は、斐伊川と神戸川の二つの河川により形成されてきた沖積平野である。古代の出雲平野を概観すると、北に島根半島、南に中国山地と南北を山に挟まれ、東には古宍道湖、西には神門水海が位置する。二河川の沖積作用は約６～５千年前頃の縄文時代から始まり、晩期の海退の影響もあわせ、後期から徐々にこの辺りを平野化させていく。神戸川は急峻な丘陵地帯を貫流しながら平野南西部に達し、そこを潤しながら神門水海を経由し日本海へ注ぐ。斐伊川は流路が不安定な氾濫源でもあったが、流路沿いには縄文時代からいくつもの集落が栄えていたと思われる微高地がある。この川はもともと平野に出ると西流し神門水海から日本海へ流れ出ていたが、寛永16（1639）年の大洪水以来流れを東に変え宍道湖に向かうこととなった。さらに近世以降はたたら製鉄隆盛に伴うかんな流しの影響もあり、東部はますます平野化していき、現在に至っている。

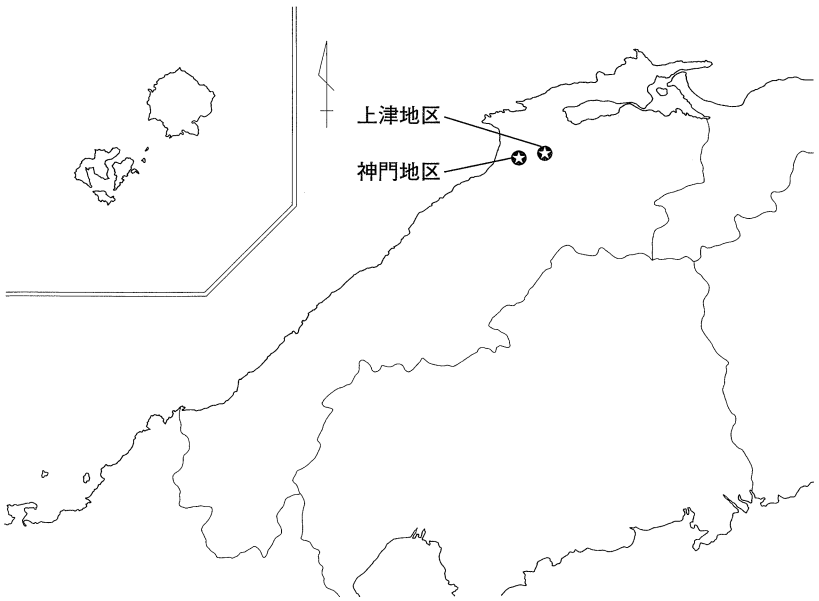
本書で扱う遺跡はいずれもこの出雲平野南側の丘陵上および丘陵裾にあり、畑ノ前遺跡・菅原Ⅰ遺跡・クボ山遺跡・菅原Ⅱ遺跡・菅原Ⅲ遺跡は斐伊川左岸に、廻田Ⅴ遺跡・保知石遺跡・浅柄Ⅱ遺跡・柳ノ内Ⅰ遺跡・は平野西部、神戸川左岸に位置している。

旧石器時代

出雲平野における旧石器時代の遺跡は現在まで発見されていない。

縄文時代

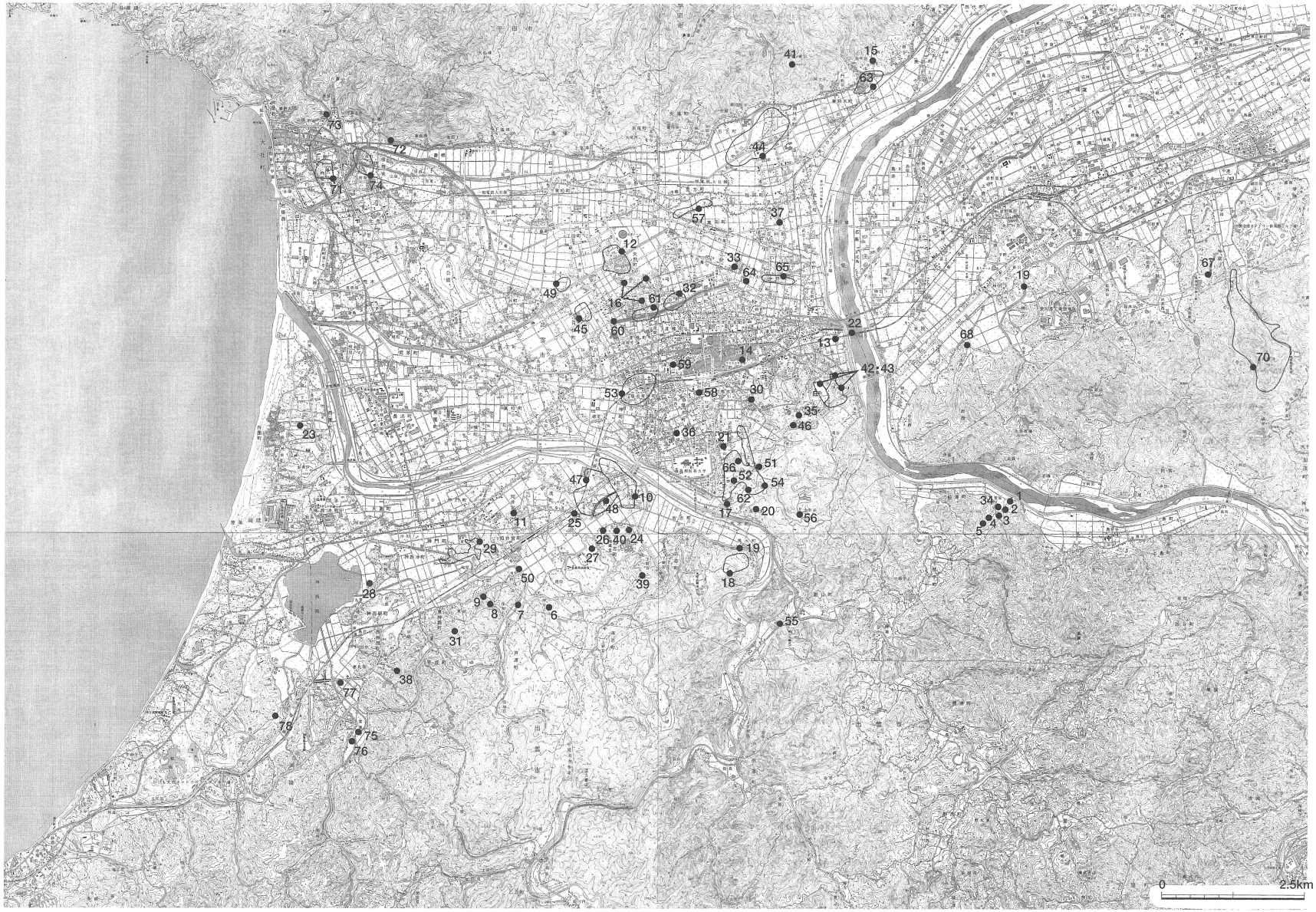
出雲平野で最も古い遺跡としては、早期末、大社弥山南麓にあった菱根遺跡が知られる。また、近くの浜山砂丘裾には上長浜貝塚があり、多くの遺物が見つかっている。



第２図　上津地区・神門地区の位置図

第２表　本書掲載遺跡とその周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	所在地	番号	遺跡名	種別	所在地	番号	遺跡名	種別	所在地
1	畑ノ前遺跡	住居跡	出雲市船津町	27	地蔵堂横穴墓群	横穴	出雲市下古志町	53	天神遺跡	集落跡	出雲市天神町松下
2	菅原Ⅰ遺跡	散布地	出雲市船津町	28	山地古墳	古墳	出雲市神西沖町	54	上塩冶横穴墓群	横穴	出雲市上塩冶町
3	クボ山遺跡	散布地・鋳造関連遺跡	出雲市船津町	29	神門横穴墓群	横穴	出雲市神門町・知井宮町	55	朝山古墓	古墓	出雲市朝山町
4	菅原Ⅱ遺跡	集落跡・散布地	出雲市船津町	30	向山城跡	城跡	出雲市上塩冶町下沢	56	大井谷Ⅱ遺跡	集落跡	出雲市上塩冶町
5	菅原Ⅲ遺跡	集落跡	出雲市船津町	31	北光寺古墳	古墳	出雲市東神西町北光寺	57	高岡遺跡	散布地	出雲市稲岡町・高岡町
6	廻田Ⅴ遺跡	祭祀遺跡	出雲市芦渡町	32	姫原西遺跡	その他	出雲市姫原町	58	藤ヶ森南遺跡	散布地	出雲市今市町南本町
7	保知石遺跡	散布地	出雲市芦渡町	33	中野西遺跡	集落跡	出雲市中野町	59	海上遺跡	散布地	出雲市塩冶町
8	浅柄Ⅱ遺跡	古墳	出雲市知井宮町	34	菅原横穴墓群	横穴他	出雲市船津町菅原	60	渡橋沖遺跡	集落跡	出雲市渡橋町渡橋沖
9	柳ノ内Ⅰ遺跡	散布地	出雲市知井宮町	35	長者原廃寺	寺院跡	出雲市上塩冶町長者原	61	蔵小路西遺跡	集落跡・館跡	出雲市渡橋町小山町
10	古志本郷遺跡	集落跡	出雲市古志町本郷	36	神門寺境内廃寺	寺院跡	出雲市塩冶町揚	62	三田谷Ⅲ遺跡	集落跡	出雲市上塩冶町
11	知井宮多聞院遺跡	貝塚	出雲市知井宮町本郷	37	荻杼古墓	古墓	出雲市荻杼町槍ヶ崎	63	青木遺跡	集落跡	出雲市東林木町
12	矢野遺跡	貝塚	出雲市矢野町	38	神西城跡	城跡	出雲市東神西町	64	中野美保遺跡	集落跡	出雲市中野町
13	石土手遺跡	散布地	出雲市大津町	39	栗栖城跡	城跡	出雲市上島町新宮	65	中野清水遺跡	集落跡	出雲市中野町
14	大念寺古墳	古墳	出雲市今市町鷹ノ沢	40	浄土寺山城跡	城跡	出雲市下古志町	66	池田古墳	古墳	出雲市上塩冶町
15	大寺古墳	古墳	出雲市東林木町	41	鳶ヶ巣城跡	城跡	出雲市西林木町鳶巣山	67	荒神谷遺跡	青銅器埋納地	斐川町神庭西谷
16	小山遺跡	集落跡	出雲市小山町	42	西谷墳墓群	墳墓	出雲市大津町下来原	68	後谷遺跡(旧後谷Ⅴ)	官衛跡	斐川町出西後谷
17	三田谷Ⅰ遺跡	集落跡・古墓他	出雲市上塩冶町半分	43	西谷墓	古墓	出雲市大津町下来原	69	上ヶ谷遺跡	散布地	斐川町神氷上ヶ谷
18	刈山古墳群	古墳	出雲市馬木町	44	山持遺跡	集落跡	出雲市西林木町	70	高瀬城跡	城跡	斐川町神庭学頭
19	小坂古墳	古墳	出雲市馬木町	45	白枝荒神遺跡	散布地	出雲市白枝町	71	鹿蔵山遺跡	貝塚他	出雲市大社町杵築南
20	光明寺古墳群	古墳	出雲市馬木町	46	菅沢古墓	古墓	出雲市上塩冶町菅沢	72	菱根遺跡	散布地	出雲市大社町杵築北山根
21	上塩冶築山古墳	古墳	出雲市上塩冶町築山	47	下古志遺跡	集落跡	出雲市下古志町・古志町	73	出雲大社境内遺跡	散布地	出雲市大社町杵築東宮内
22	斐伊川鉄橋遺跡	散布地	出雲市大津町神立	48	田畑遺跡	集落跡	出雲市下古志町上組	74	原山遺跡	散布地	出雲市大社町修理免原山
23	上長浜貝塚	貝塚	出雲市西園町上長浜	49	井原遺跡	集落跡	出雲市白枝町	75	奥ノ谷遺跡	散布地	出雲市湖陵町常楽寺
24	放れ山古墳	古墳	出雲市古志町新宮	50	浅柄遺跡	集落跡	出雲市知井宮町	76	御領田遺跡	集落跡・貝塚	出雲市湖陵町常楽寺
25	宝塚古墳	古墳	出雲市下古志町	51	大井谷城跡	城跡	出雲市上塩冶町大井谷	77	三部竹崎遺跡	散布地	出雲市湖陵町三部東三部
26	妙蓮寺山古墳	古墳	出雲市下古志町	52	半分城跡	城跡	出雲市上塩冶町半分	78	姉谷恵比須遺跡	散布地	出雲市湖陵町二部姉谷



第３図　本書掲載遺跡とその周辺の遺跡（S＝1/100,000）

上ヶ谷遺跡では海進により生活領域は変わっていくものの、前期末から中期にかけての遺物が見つかっている。また、三田谷Ⅲ遺跡においても中期の土器が見つかった。ともに平野端部つまり丘陵裾の遺跡である。

海退が進む後期以降は平野南部の丘陵裾でも安定した生活が営めるようになり、さらに平野中心部にも生活の跡が見られるようになる。平野端部では、平成９年に埋没していた丸木舟が出土した三田谷Ⅰ遺跡、三田谷Ⅲ遺跡、御領田遺跡、後谷遺跡、原山遺跡、大社境内遺跡などが知られる。平野中央部の遺跡としては矢野遺跡や姫原西遺跡が知られ、自然堤防が早くから発達したこの地では、古墳時代初頭まで集落が形成されていた。他にこの時期の遺跡として三部竹崎遺跡や奥ノ谷遺跡、姉谷恵比寿遺跡などをあげることができる。

弥生時代

前期の遺跡としては、縄文時代から続く矢野遺跡、後谷遺跡、三田谷Ⅰ遺跡などが知られる。原山遺跡では磨製石剣や配石遺構が見つかった。蔵小路西遺跡では突帯文系の土器が出土している。

中期前葉になると、蔵小路西遺跡、三田谷Ⅰ遺跡、矢野遺跡、本報告書所収遺跡にも近い平野西部の浅柄遺跡などを残し、縄文時代から長く続いた遺跡もいったん姿を消してしまう。そして中期中葉以降あらためて、神戸川沿いの微高地を中心に集落が分布するようになる。出雲平野に遺跡が急増するのはこの時期である。古志本郷遺跡、下古志遺跡、田畑遺跡、天神遺跡は多重環濠をもつ集落遺跡として知られる。他にも四絡遺跡群、姫原西遺跡、白枝荒神遺跡、知井宮多聞院遺跡、海上遺跡など多くが知られる。また平野南の丘陵には荒神谷遺跡や加茂岩倉遺跡がある。平野北東部の青木遺跡[(1)]では中期後葉の最古型式の四隅突出型墳丘墓が話題となった。また方形貼石墓や土壙墓も検出され、副葬品として銅鐸片が見つかっている。さらに出雲平野中東部の中野美保遺跡でも四隅突出型墳丘墓（山陰地方沖積地では初めての検出）や方形貼石墓（中期中葉、出雲平野では初の検出）が見つかっている。この遺跡では遺物や遺構などから中期以降中世まで生活が営まれていた痕跡が伺われる。

後期になると集落は平野全体に広がることとなる。小山遺跡や中野美保遺跡、山持遺跡などが知られ、また姫原西遺跡では木橋が、下古志遺跡では布掘り建物跡が検出された。四隅突出型墳丘墓で知られる西谷墳墓群は、後期後葉、平野南の丘陵に築かれた遺跡である。また前述の青木遺跡でも、後期後葉の四隅突出型墳丘墓が３基検出されている。

古墳時代

前期の遺跡としては矢野遺跡の西にある井原遺跡、斐伊川左岸の中野西遺跡、中野美保遺跡、中野清水遺跡等が知られる。また平野の南北にそれぞれ山地古墳と大寺古墳（出雲平野最古の古墳）が築かれたのも前期末である。

斐伊川鉄橋遺跡、石土手遺跡、三田谷Ⅰ遺跡からは中期から後期にかけての遺物が出土している。古墳としては池田古墳、西谷15・16号墓、北光寺古墳が知られる。

後期になると大念寺古墳や妙蓮寺山古墳、上塩冶築山古墳など、武具や馬具を出土した大型古墳を含み、古墳や横穴墓が急増する。神戸川流域を支配した首長墓が丘陵上に現れる時期である。このほか神戸川左岸の古墳として宝塚古墳、放れ山古墳が知られる。

出雲平野に玄室の形態が妻入り家形を特徴とする横穴墓が出てくるのはこの時代終末期である。地蔵堂横穴墓群、神門横穴墓群などが知られ、神戸川右岸の上塩冶横穴墓群からは金糸が見つかっ

ている。

奈良・平安時代

出雲平野は、古代の行政区画では神門郡と出雲郡の一部となる。官衙関連の遺跡としては、木簡・緑釉陶器・墨書土器が出土した三田谷Ⅰ遺跡、緑釉陶器・墨書土器が出土した天神遺跡、礎石建物跡を検出した後谷遺跡などが知られる。古志本郷遺跡では企画的に配置された大規模な掘立柱建物跡や区画溝、柵列が見つかり、また墨書土器や刻書土器、円面硯や腰帯金具も出土しており、神門郡家の政庁の一部と推定されている。青木遺跡では地盤に版築を施した跡の見られる礎石建物跡や、9本柱の掘立柱建物跡が検出された。また石敷きの井戸跡や果実を充填した甕埋納遺構も見つかり、木彫神像や絵馬、大量の墨書土器や売田券木簡などの出土遺物と併せ、官衙でもあり宗教的な役割ももった施設があったことが考察される。

古代寺院関連の遺跡では神門寺境内廃寺、長者原廃寺が知られ、前者は神門郡新造院比定地とされている。

集落遺跡では古墳時代末から奈良時代にかけての水田跡が見つかった藤ケ森南遺跡、平安時代の水田跡が見つかった高岡遺跡、墨書土器やヘラ書き土器の見つかった小山遺跡、漁業関連道具が多量に出土した上長浜貝塚などがある。

神戸川流域最大規模の古墳群として知られる刈山古墳群の28号墳である小坂古墳では、石室内に蕨手刀とともに、銅製納骨器を納めたと思われる石櫃が置かれていた。このことは奈良時代に入っても火葬骨を納める追葬が行われたことを示している。このほかの古墓として、石製骨蔵器が使われた菅沢古墓や朝山古墓、須恵器の骨蔵器が使われた西谷墓、一辺75センチの立方体の石櫃が使われた光明寺3号墓などが知られる。

鎌倉時代以降

この時代になると、東国で台頭した武士政権の影響もあり、城館遺跡や屋敷跡が多く見られるようになる。主な山城として半分城跡、大井谷城跡、向山城跡、高瀬城跡、神西城跡、鳶ヶ巣城跡などが平野を見下ろす丘陵上に築城されている。下古志南部の丘陵にも古志氏の居城である浄土寺山城跡や栗栖城跡が築かれた。屋敷跡としては、総柱の掘立柱建物跡が確認され、またミニチュア五輪塔が出土した渡橋沖遺跡を始め、溝で区画された屋敷跡が確認された矢野遺跡、堀や掘立柱建物跡に伴う12～15世紀の遺物が確認された蔵小路西遺跡、備前焼が多量に出土した鹿蔵山遺跡などが知られる。そのほか、国重要文化財に指定された青磁碗が副葬された荻杼古墓、数珠や櫛、無文銭を伴う木棺墓が見つかった姫原西遺跡、平野部から谷の奥深くに見つかった寺院関連遺跡の大井谷Ⅱ遺跡が注目される。

註

(1) 当埋蔵文化財調査センター職員今岡一三の教示による。

参考文献

前島己基　『日本の古代遺跡20　島根』1985.2

出雲市教育委員会　『山地古墳発掘調査報告書』1986.3

出雲市教育委員会　『古志地区遺跡分布調査報告書』1988.3

出雲市教育委員会　『神門地区遺跡詳細分布調査報告書』1989.3
西尾克己・大國晴雄　「出雲平野の古墳」『出雲市民文庫９』出雲市教育委員会 1991.3
出雲市教育委員会　『上長浜貝塚』1996.3
島根県教育委員会　『古代出雲文化展－神々の国　悠久の遺産－』1997.4
出雲市教育委員会　『古志本郷遺跡第６次発掘調査報告書』1998.3
出雲市教育委員会　『出雲市駅付近連続立体交差事業地内天神遺跡第９次発掘調査報告書』1999.3
出雲市教育委員会　『西出雲駅南土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　浅柄遺跡』2000.3
出雲市教育委員会　『市道浅柄古志線歩道設置に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　田畑遺跡』2000.3
島根県教育委員会　『蟹谷遺跡・上沢Ⅲ遺跡・古志本郷遺跡Ⅲ』2001.3
島根県教育委員会　『長廻横穴墓群・長廻遺跡（Vol.１）』2001.3
島根県教育委員会　『古志本郷遺跡Ⅱ』2001.3
出雲市教育委員会　『平成11年度古志遺跡群範囲確認調査報告書　古志本郷遺跡　下古志遺跡』2002.3
島根県教育委員会　『古志本郷遺跡Ⅳ・放れ山横穴墓群・只谷間府・上沢Ⅲ遺跡（分析編）』2002.3
島根県教育委員会　『中野美保遺跡』2004.3

3．出雲市上津地区の調査

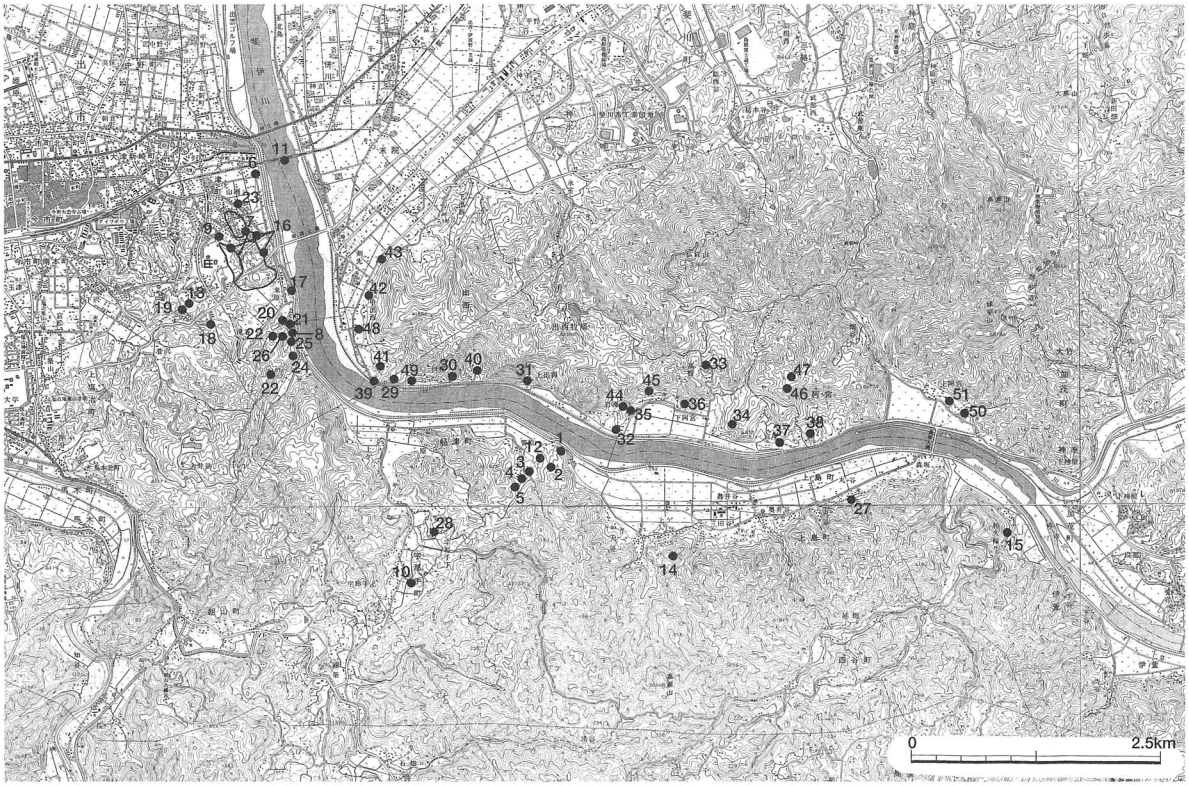
第１章　遺跡の位置及び周辺の遺跡

出雲市上津地区の本書掲載遺跡はいずれも出雲市船津町菅原に所在する。ここは出雲市の市街地から南東約６㎞の斐伊川東岸にあたり、小さな谷部となっているところである。谷の東側には標高300ｍの高瀬山から派生して斐伊川に向かって北東側に伸びている低丘陵がある。この丘陵の先端尾根上に畑ノ前遺跡があり、南西側の緩斜面に菅原Ⅰ遺跡が存在する。また、菅原の谷奥部にはクボ山遺跡があり、その西側に枝分かれして伸びている谷の両脇に菅原Ⅱ遺跡が存在する。さらにこの谷を越えた谷部に菅原Ⅲ遺跡がある。これらの遺跡は高速道路建設に伴う分布調査で明らかになったもので、以前から知られている遺跡としては菅原横穴墓群がある。

この横穴墓群は谷の中央部に向かって伸びる低丘陵の西斜面に３穴が現存しているが、その内2穴は後世の攪乱を受け、残りの１穴がほぼ原形を保っている。形態は丸天井に近く、土器が出土したという言い伝えが残っている。また、畑ノ前遺跡の西側斜面にも横穴墓群が存在していたが、昭和11年から行われた斐伊川堤防改修工事の採土のため消滅し、ここから出土した須恵器の蓋坏が上津コミュニティーセンターに保管されている。さらにクボ山遺跡の西側の畑の中には横穴式石室に使用されたと思われる石塊が存在している。このように菅原地区には今まで横穴墓の存在が知られていた程度であったが、今回の調査で、縄文時代と古墳時代～中世の遺跡が確認されたのは意義あるものと思われる。また、弥生時代の遺物、遺構が検出できなかったことは出雲平野及び周辺部の集落の変遷を知る上に重要な意味を持っていると考えられる。そこで、少し視野を広げ、この菅原地区の周辺の遺跡について見てみることにする。

出雲市の斐伊川東岸には北側から西谷墳墓群、斐伊川放水路建設に伴う調査で実態が明らかになった長廻遺跡などがある。西谷墳墓群は弥生時代後期の四隅突出形墳丘墓で、当時の墳墓としては国内最大級の規模を持ち、当地方の首長墓と考えられているものである。この時期の集落は平野部に集中して存在しているが、長廻遺跡では西谷墳墓群前後の時期にあたる加工段及び竪穴住居跡が数基検出されている。調査者は危機管理的な意識のもとに眺望のきく丘陵地に集落を配置したものと考えている。それ以外の時期のものとしては５世紀代の竪穴住居跡が見つかっており、近くの遺跡からは前期古墳を検出した権現山古墳、横穴墓が数基見つかった長廻横穴墓群等がある。放水路調査区から船津地区までは遺跡がほとんど知られていないが、上流の上島町では須恵器片が採集されている丸ヶ谷遺跡や和久輪横穴墓、中世の城跡である上之郷城跡が存在している。また、斐伊川を挟んだ対岸側の斐川町には横穴墓群や横穴式石室を持つ古墳、同時代の集落跡と思われる遺跡が数多く存在するとともに、奈良時代の河内郷の新造院と考えられる天寺平廃寺跡などが知られている。このように船津周辺地域では弥生時代の遺跡は現在のところほとんど存在していなく、古墳時代後期になって集落や古墳が盛んに営われてきた地域と考えられる。

参考文献　島根県教育委員会　『長廻遺跡（Vol.2）・権現山古墳』2003.3
上津郷土誌編纂委員会　『上津郷土誌』上津地区自治会 1993.3
出雲市教育委員会　『長廻遺跡発掘調査概報』2001
宍道年弘他　「天寺平廃寺について」『人雲立つ風土記の丘』No.84　島根県立八雲立つ風土記の丘 1987.7



第４図　畑ノ前遺跡・菅原Ⅰ遺跡・クボ山遺跡・菅原Ⅱ遺跡・菅原Ⅲ遺跡とその周辺の遺跡（S＝1/75,000）

第３表　畑ノ前遺跡・菅原Ⅰ遺跡・クボ山遺跡・菅原Ⅱ遺跡・菅原Ⅲ遺跡とその周辺の遺跡一覧表

番号	名称	種別	番号	名称	種別
1	畑ノ前遺跡	散布地	27	丸ヶ谷遺跡	散布地
2	菅原Ⅰ遺跡	散布地	28	火守神社南遺跡	散布地
3	クボ山遺跡	散布地	29	海の平横穴群	横穴
4	菅原Ⅱ遺跡	集落跡	30	岩樋上横穴	横穴
5	菅原Ⅲ遺跡	散布地	31	岩海横穴群	横穴
6	石土手遺跡	散布地	32	岩海古墳	古墳
7	中山丘陵遺跡	散布地	33	高野古墳群	古墳
8	権現山横穴墓群	横穴	34	布子谷古墳	古墳
9	西谷横穴墓	横穴	35	横手古墳	古墳
10	宇那手塚山古墳	古墳	36	下阿宮古墳	古墳
11	斐伊川鉄橋遺跡	散布地	37	阿宮公民館後古墳	古墳
12	菅原横穴墓群	横穴他	38	墓田横穴群	横穴
13	長者原廃寺	寺院跡	39	出西岩樋跡	水路跡
14	上之郷城跡	城跡	40	上出西Ⅰ遺跡	散布地
15	和久輪横穴墓	横穴	41	上出西Ⅱ遺跡	散布地
16	西谷墳墓群	墳墓・古墳	42	剣先横穴群	横穴
17	来原岩樋跡	水路跡	43	中出西Ⅰ遺跡	散布地
18	間府岩樋跡	水路跡	44	下阿宮Ⅰ遺跡	散布地
19	菅沢古墓	古墓	45	下阿宮Ⅱ遺跡	散布地
20	三谷遺跡	散布地	46	立栗山城跡	城跡
21	瀧谷山城跡	城跡	47	天寺平廃寺	寺院跡
22	藤廻遺跡	その他	48	中出西Ⅱ遺跡	散布地
23	神田遺跡	散布地	49	海の平遺跡	散布地
24	権現山古墳	古墳	50	上阿宮Ⅰ遺跡	散布地
25	長廻遺跡	集落跡	51	上阿宮Ⅱ遺跡	散布地
26	長廻横穴墓群	横穴			

第２章　調査の概要

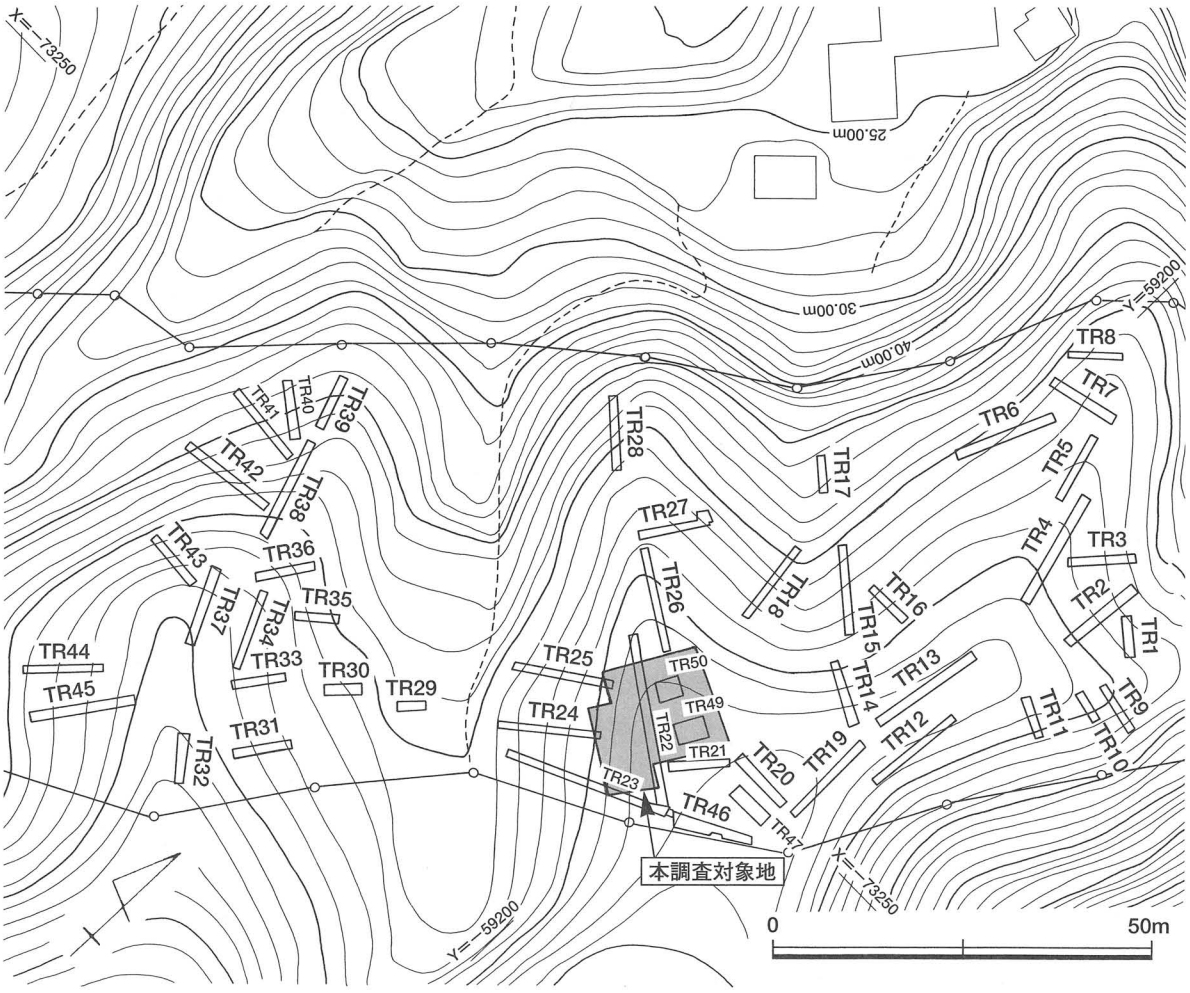
第１節　畑ノ前遺跡

試掘調査

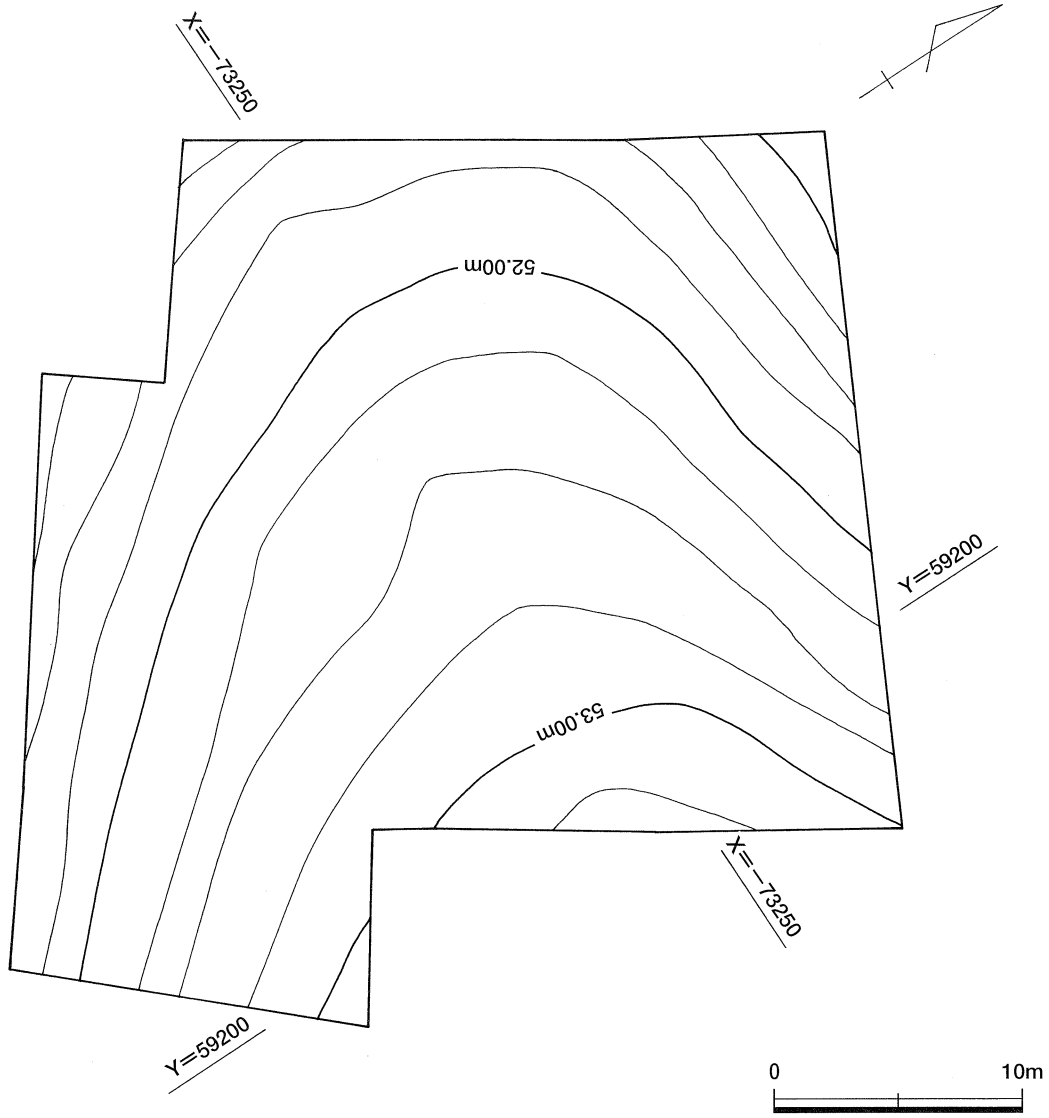
畑ノ前遺跡は、斐伊川へ突出した標高52mの広い低丘陵上に位置する（第５図）。丘陵の北端は昭和18年斐伊川堤防が決壊した際、土砂を採取するために削られている。その際横穴墓が発見され遺物が出土したが、土砂の採取を優先して横穴墓は破壊された。このとき出土した遺物は地元住民により保管され、現在は上津コミュニティセンターで展示されている。

山陰道建設の決定に伴い、平成９年６月、11年２月と二度にわたり分布調査を実施したところ、建設予定地からわずかに南にはずれる位置で堀切、平坦面など城館と見られる遺構を確認した。山陰道予定地内には、これらに続く城館関連遺構があることが予想されたので、平成13年度に試掘調査を実施した（第５図）。

試掘調査は、丘陵部を中心に一部の谷間にも試掘坑を入れたが、遺構と遺物の両方が確認されたのはTR50のみであった。このTR50を中心に、丘陵部の242㎡を平成14年度に全面調査し、建物、落とし穴などの遺構を検出した。予想された城館関連遺構、遺物は検出されなかった。



第５図　畑ノ前遺跡　試掘坑及び本調査範囲位置図（S=1/1,000）



第６図　畑ノ前遺跡　調査前地形図（S＝1/300）

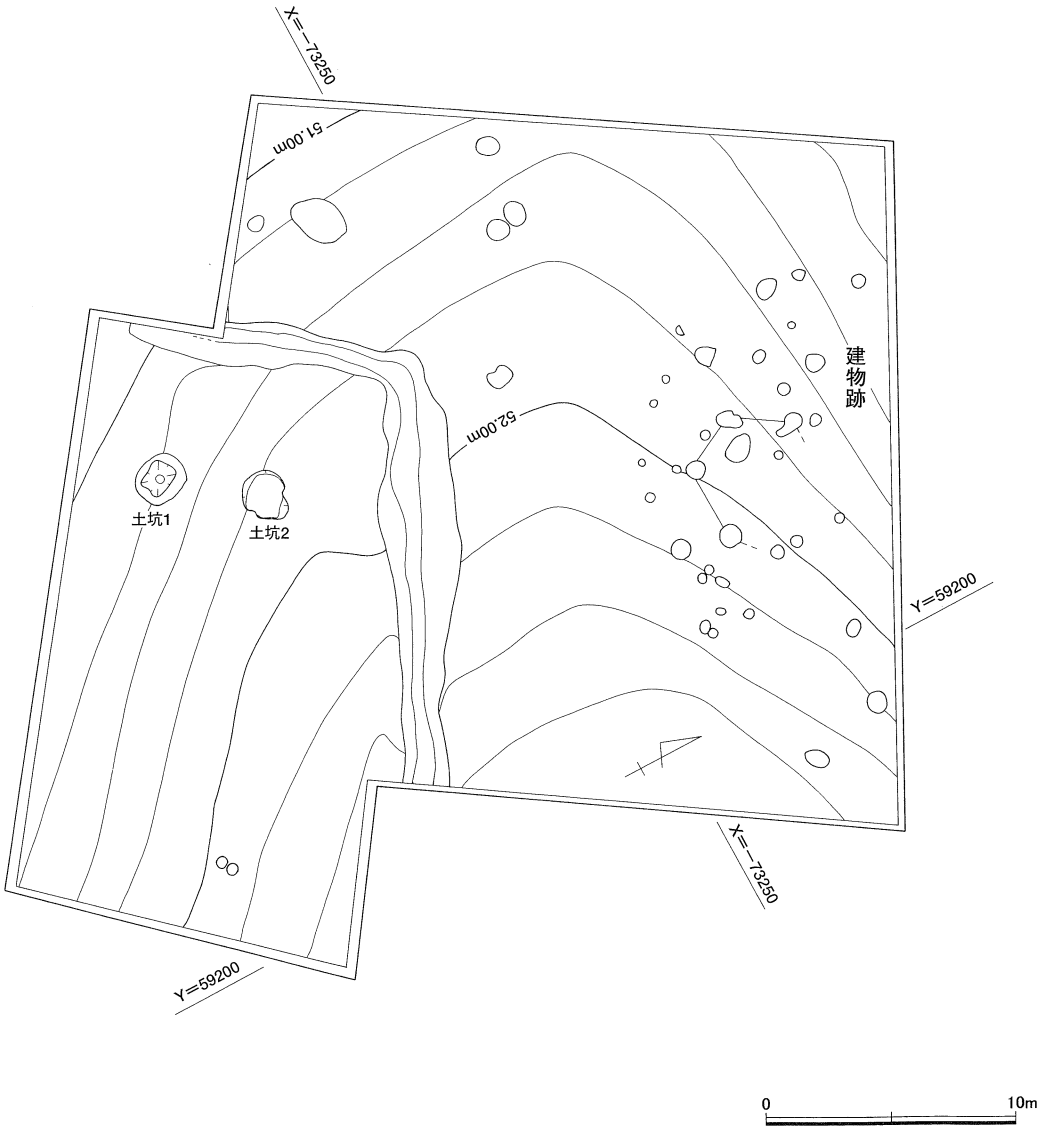
遺構と遺物

建物跡（第８図）

Ｐ１，２，３，４などを主柱穴とする建物跡である。すべての主柱穴を確認できなかったが、６本の主柱穴をもつ建物であったと推定される。Ｐ１とＰ３の底面の標高差が30cmで、山側の柱穴が谷側より浅く掘られる傾向がある。Ｐ４の底面標高が52.06mと他よりも高く、また６本柱の場合に柱穴があるはずの位置で検出されなかったのもこのためであろう。

主柱穴の外側には、径20cmほどの小ピットが並ぶ。これらのうち、Ｐ９―10－11及びP12－13－14がそれぞれ直線的に並んでいることが、建物の平面形を六角形と推定する際の根拠となった。いずれも掘り方は垂直であった。このうちP11～14については、不明瞭ながら黒い土が帯状にピットと重なるように残っていたが、ピットを検出する過程で消滅してしまった。おそらく壁体溝の最も底の部分が残存していたものと思われる。壁体溝内に、杭を垂直に立てるために掘られた小ピットであったと考える。

遺物は、ピット内から底部と思われる土器の小片が出土しているが、図化できるものではなかっ



第７図　畑ノ前遺跡　遺構配置及び調査後地形図（S＝1/300）

た。器種、時期ともに不明の遺物である。

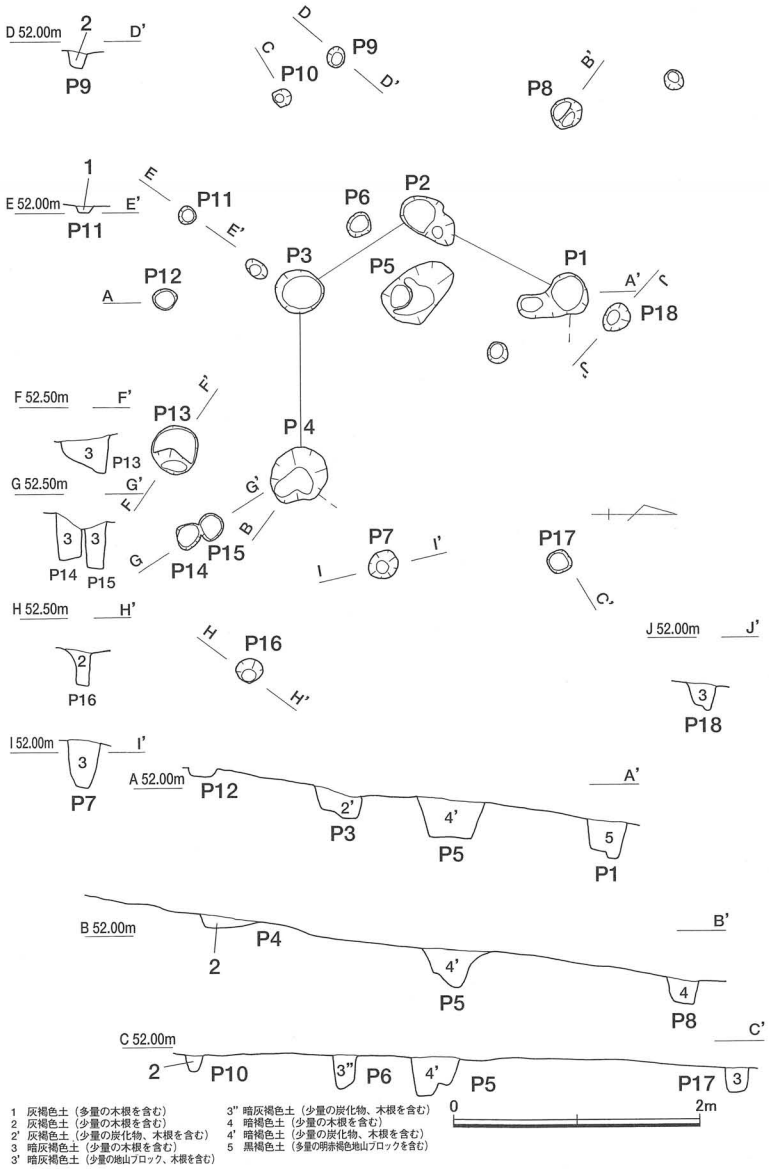
この建物の構造は、①もともときわめて掘り込みの浅い竪穴建物であった[(1)]、②削平されて異常に浅くなっていた、の２通りの可能性を考えた。主柱穴の残存状況が著しく悪かったことから、相当の削平を受けたことは明らかであり、浅い竪穴であればその削平で建物全体が消滅しているはずである。よって、①よりは②の可能性がより高いといえる。

土坑１（第９図）

平面長方形で、底面中央に小ピットをもつ落とし穴である。建物の南西寄りで検出された。長辺１m、短辺0.9m、深さ1.5mの土坑である。底面の小ピットは径10㎝、深さ20㎝あり、落とし穴に落ちた動物の動きを封じるため、杭を立てた跡と考えられる。

土坑２（第９図）

一辺１m弱の方形で、深さ約20㎝のごく浅い土坑である。埋土に多量の炭化物を含んでいることから、火を使用した跡であろう。遺物は出土しなかった。



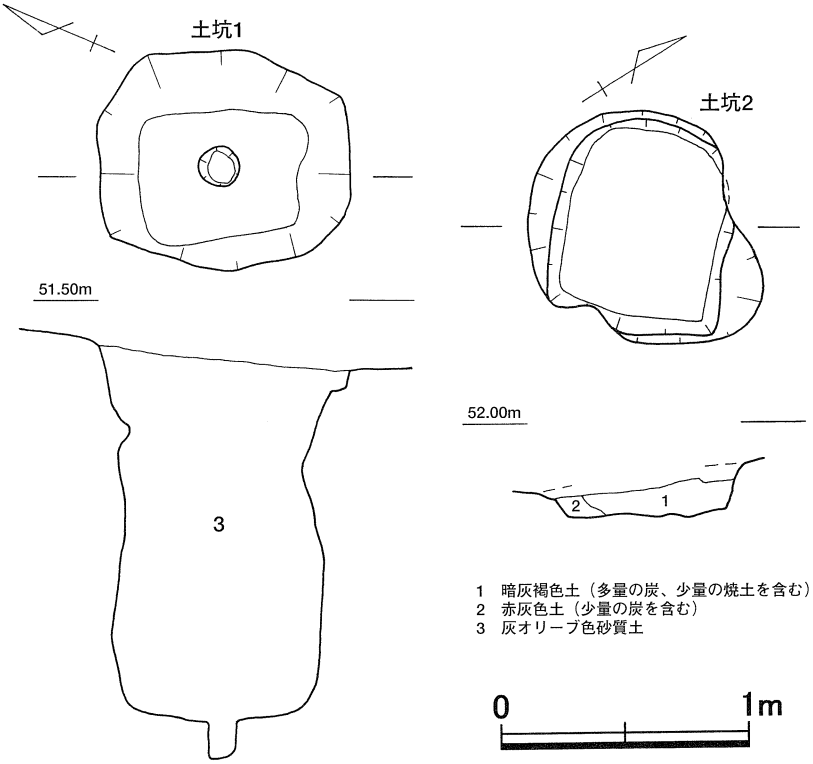
第８図　畑ノ前遺跡　建物跡実測図（S＝1/60）

遺構外出土遺物（第10図）

図化できたのは第10図に掲げる４点である。４点とも、遺構外からの出土である。石斧２は建物跡のすぐ東から、石斧３は南から出土した。しかし、建物が大きく削平され、堆積土も大きく攪乱されていると予想されるので、これらの遺物が建物に伴うものかどうかは不明である。石器４は調査区すぐ東の谷部で、試掘調査時に出土した。須恵器１は、調査区より南東の試掘坑から出土した。３は弥生時代の扁平片刃石斧が退化したものであろう[(2)]。４はナイフ形石器である。左側縁は明らかに刃部として使うためであろう。右側縁の加工は刃潰しとも見られるが、鈍い刃とみてスクレイパーとしての使用も可能である。さらに、先端の尖り具合から、刺突具としての使用も可能である。腹面からだけでなく、背面

第４表　畑ノ前遺跡　建物計測表

柱穴の埋土		褐色土（しまり悪い）					
番号		P1	P2	P3	P4	P5	P6
平面規模（m）		0.35×0.35	0.5×0.3	0.4×0.35	0.5×0.4	0.6×0.4	0.35×0.35
標高（m）	上面	51.70	51.80	52.00	52.20	51.90	51.90
	下面	51.40	51.70	51.70	52.05	51.60	51.70
柱間距離（m）		P1－P2	P2－P3	P3－P4	P9－P10	P10－P11	P11－P12
		1.40	1.20	1.50	0.60	1.20	0.70
番号		P7	P8	P9	P10	P11	P12
平面規模（m）		0.25×0.25	0.25×0.25	0.15×0.15	0.15×0.15	0.15×0.15	0.2×0.2
標高（m）	上面	52.10	51.60	51.90	51.90	52.10	52.20
	下面	51.70	51.40	51.80	51.80	52.00	52.10
柱間距離（m）		P12－P13	P13－P14	P13－P15	P14－P16	P15－P16	
		1.20	0.70	0.70	1.20	1.20	
番号		P13	P14	P15	P16	P17	P18
平面規模（m）		0.4×0.4	0.2×0.2	0.2×0.2	0.2×0.2	0.2×0.2	0.25×0.25
標高（m）	上面	51.80	51.85	51.80	51.75	51.80	51.60
	下面	51.50	51.50	51.40	51.45	51.60	51.40



第９図　畑ノ前遺跡　土坑１・２実測図（S＝1/030）

からも加工がなされている[(3)]。

まとめ～土坑と建物の時期について

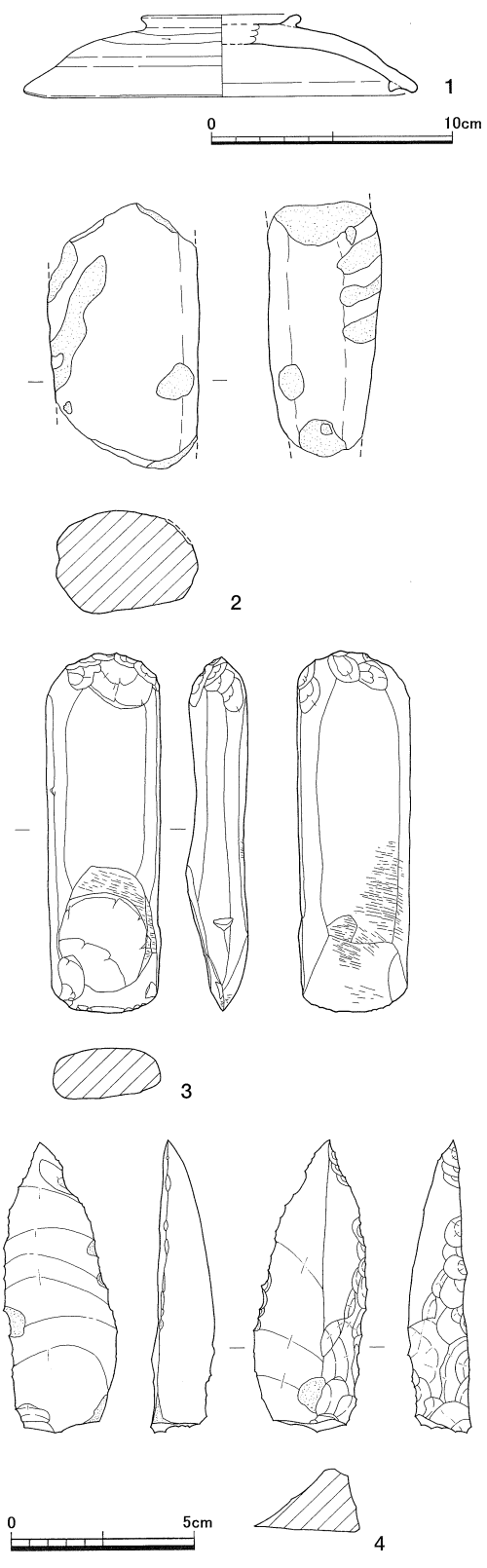
土坑１からも建物の柱穴からも、年代を確定できる遺物は出土していない。ただし、それぞれA：よくしまった灰オリーブ色細砂質土、B：しまりの悪い暗褐色土という異なった埋土であることが注意される。この埋土の違いは菅原Ⅲ遺跡でも確認されており、遺構の新旧の差を反映している。当遺跡の土坑１は、底面中央に小ピットを有するという形態上の特徴からも、縄文時代の落とし穴と考えるのが適当である。建物跡は、埋土がB：暗褐色土であることから、落とし穴が掘られ

第５表　畑ノ前遺跡　遺構外出土土器観察表

挿図番号 (写真図版)	出土地点	種別	計測値 ①口径cm ②器高cm ③口縁高cm	形態の特徴	調整・文様の特徴	色調	胎土	備考
10－1 (3)	本調査区 南東側	須恵器 蓋	①16.2 ②3.4 (ツマミ径)6.6	輪状ツマミとかえりを持つ	ツマミ：回転ナデ 天井：回転ヘラケズリ 口縁：回転ナデ	淡黄灰色	1㎜以下の白色の砂粒をごくわずかに含む	内外面（表面のみ）に1~2の黒色粒（炭化物か）が多数付着

第６表　畑ノ前遺跡　遺構外出土石器観察表

挿図番号 (写真図版)	出土地点	種　別	石　材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	研磨・使用状況	備考
10－2 (3)	建物跡 南東	石器 磨製石斧(大)	玄武岩	7.3	4.2	2.8	先端側、基部側とも欠損か。	
10－3 (3)	建物跡 南西	石器 磨製石斧(小)	安山岩	9.9	3.1	1.7	ほぼ全面を研磨。 先端に刃こぼれ	
10－4 (3)	表採	石器 ナイフ形石器 又はｽｸﾚｲﾊﾟｰ	黒曜石	8.0	3.5	1.7		



第10図　畑ノ前遺跡　出土遺物実測図
（1：S=1/3，2～4：S=1/2）

たと考えられる縄文時代よりは新しい。同建物に最も近い位置から出土したのは退化した扁平片刃石斧（第10図３）で、時期は斧が鉄器へ移行する以前の弥生中期末～後期初頭と見られる(2)。この石斧が建物跡に伴う遺物であれば、同建物跡は弥生時代中期末～後期初頭の可能性が高い。また、この建物の平面形は、現存する主柱穴の配置から多角形が想定される。

なお、当初予想された城館関連の遺物・遺構は試掘調査・本調査通じて確認されなかった。南に隣接する丘陵上では出雲市教育委員会により堀切などの遺構が確認されているが、城館の広がりは限定されていたようである(4)。

註

(1) 中国地方の縄文時代住居に、掘り込みの浅いものが存在する（山田康弘「中国地方の縄文時代集落」『島根考古学会誌』19、2002年）。同論文では、縄文時代の住居の平面形は「円ないし楕円形が多く、ついで方形をなすものが存在する」こと、しっかりした主柱穴を持つ例はほとんどないことが指摘されている。また、第１表「中国地方の縄文時代住居址」によれば、中国地方で多角形であることが確認された縄文時代住居址は皆無である。

(2) 当埋蔵文化財調査センター職員東山信治の教示による

(3) 北浩明氏（鳥取県教育文化財団）のご教示による。また、当教育委員会職員丹羽野裕、当埋蔵文化財調査センター職員稲田陽介からも助言を受けた。

(4) 三原一将氏（出雲市教育委員会）の御教示による。

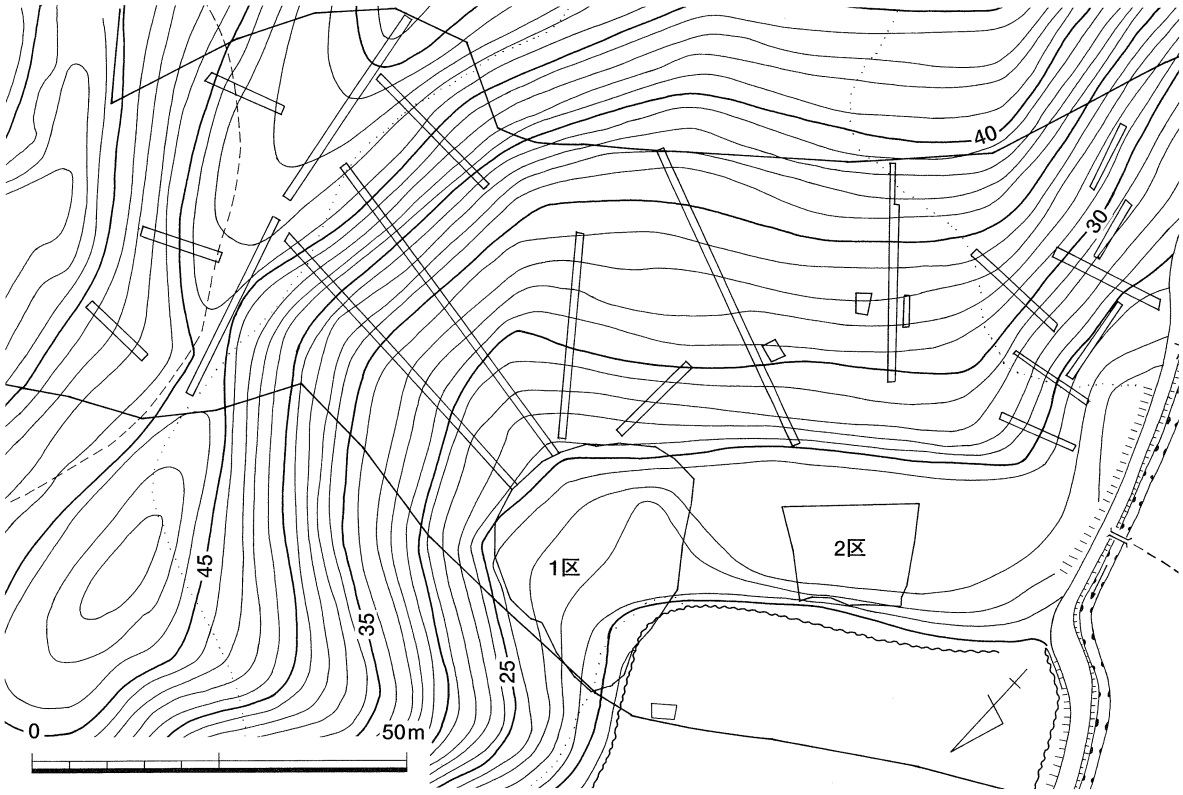
第２節　菅原Ⅰ遺跡

１．調査の概要

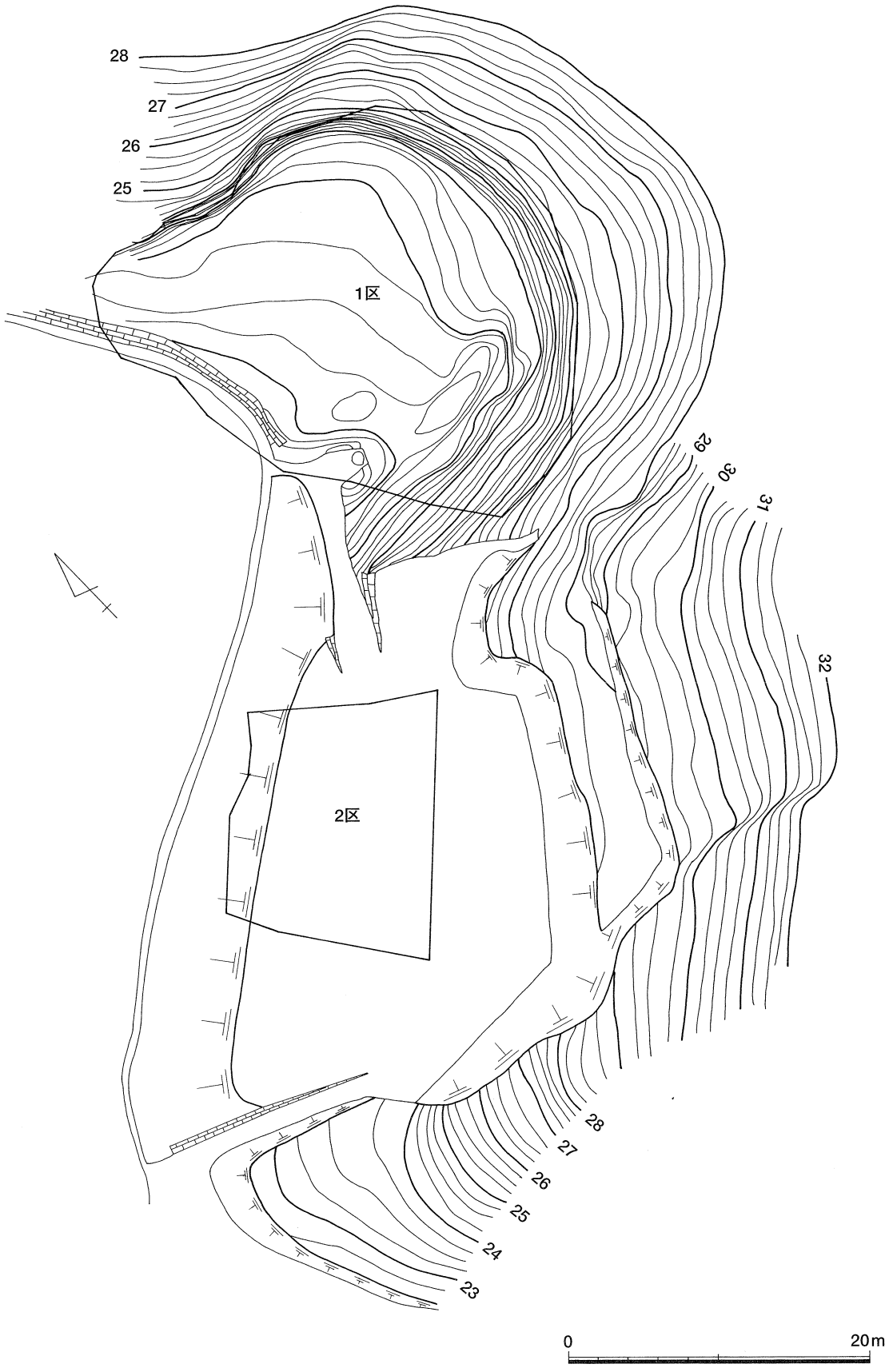
この遺跡は出雲市船津町1987番地外に所在する。ここは、船津地区東側の丘陵斜面に位置し、正面には菅原横穴墓群が存在しているところである。当初、緩やかな斜面が広がっていることから大規模な集落等が営まれているものと考えられていたが、平成13年度のトレンチ調査で、地滑りや、民家の建設等で地形が改変されていることが判明したため、調査の対象面積は1000㎡あまりとなった。調査は平成14年５月23日～８月１日にかけて実施し、東側の宅地跡である１区と西側の民家の敷地跡である２区に分けて行った。

１区は２段にわたって平坦面が存在していたが、ここは谷部を整地して民家を建てたところで、北側及び東側は、表土のすぐ下に堅い地山が有り、地山は南側と西側に向かって下がっていた。この低い部分の最下層にはシルトや砂礫層があり、その上に地滑りによって堆積した地山の二次堆積が見られた。遺物はその上方に存在していた淡黒色粘質土、黒色粘質土、茶褐色粘質土、暗茶褐色土、から各時代の土器が混在した状態で出土した。これらの遺物には縄文土器、古墳時代の須恵器、土師器、中世土器、白磁などがあり、その他、注目されるものとして滑石製の石鍋がある。この土層は民家の整地ないし地滑りによって堆積したものと思われる。また、北側からは地山を削りこんだ時期不明の加工段３基が見つかった。

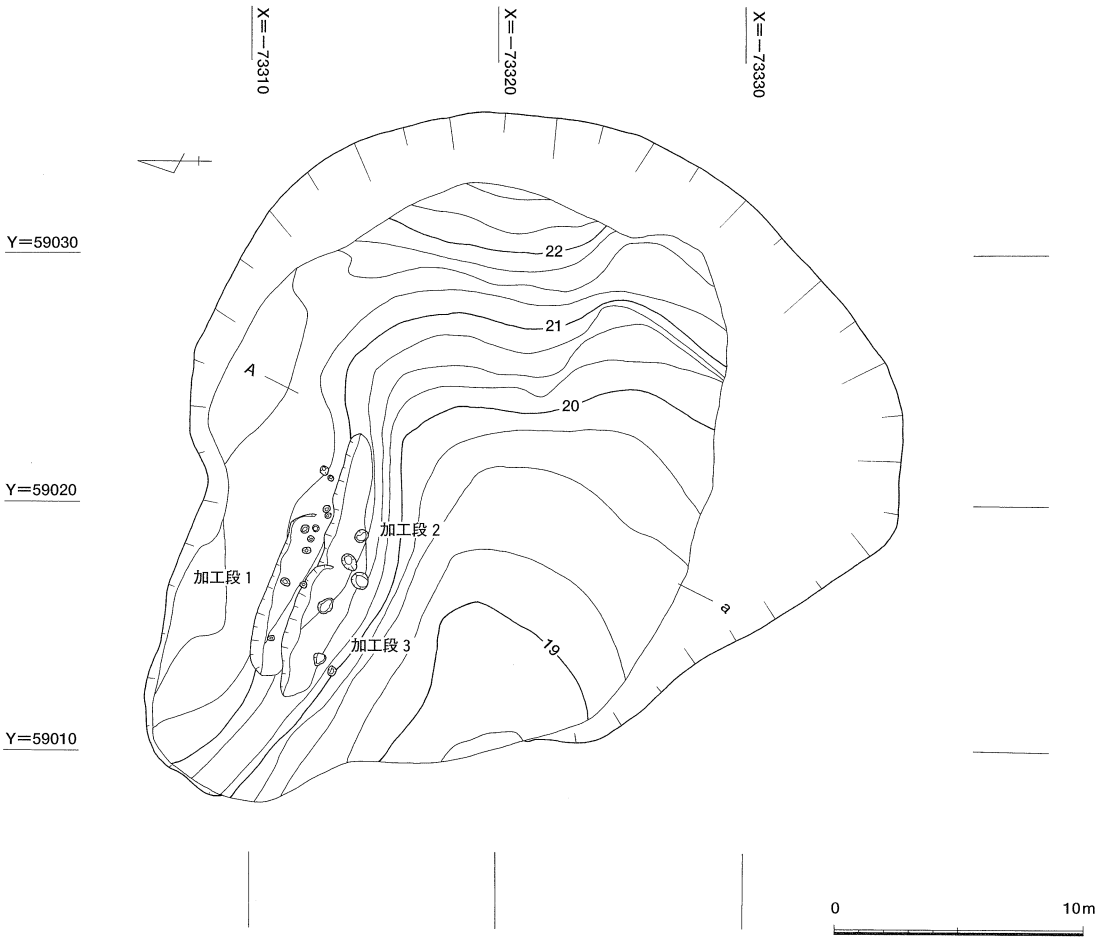
２区は民家のため斜面を整地しているところであるが、トレンチ調査で若干の土器が出土したため、整地面の前方の斜面を調査することにした。調査の結果、遺構は時期不明の土坑２基とピット状の小さい丸い形をした落ち込みが４基を検出し、遺物は斜面下方から古墳時代から奈良時代にかけての土器が少量見つかった。



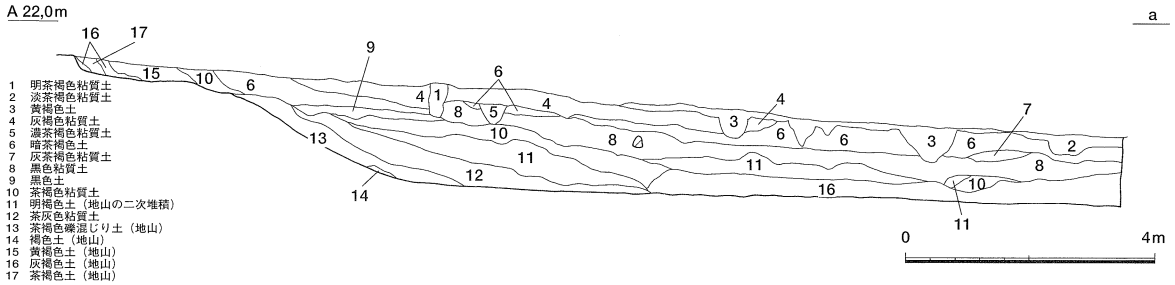
第11図　菅原Ⅰ遺跡　周辺地形図（S＝1/1,000）



第12図　菅原Ⅰ遺跡　調査前地形図（S=1/400）



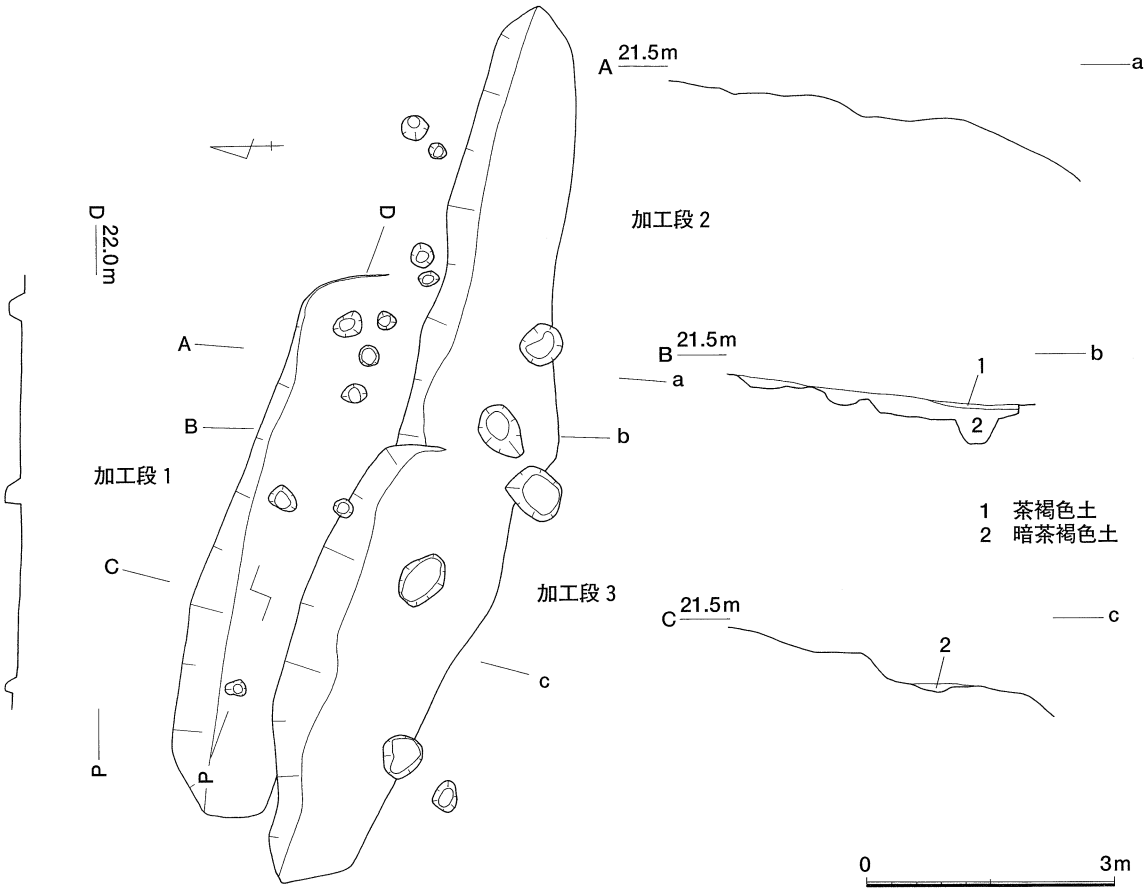
第13図　菅原Ⅰ遺跡１区　調査後地形及び遺構配置図（S＝1/300）



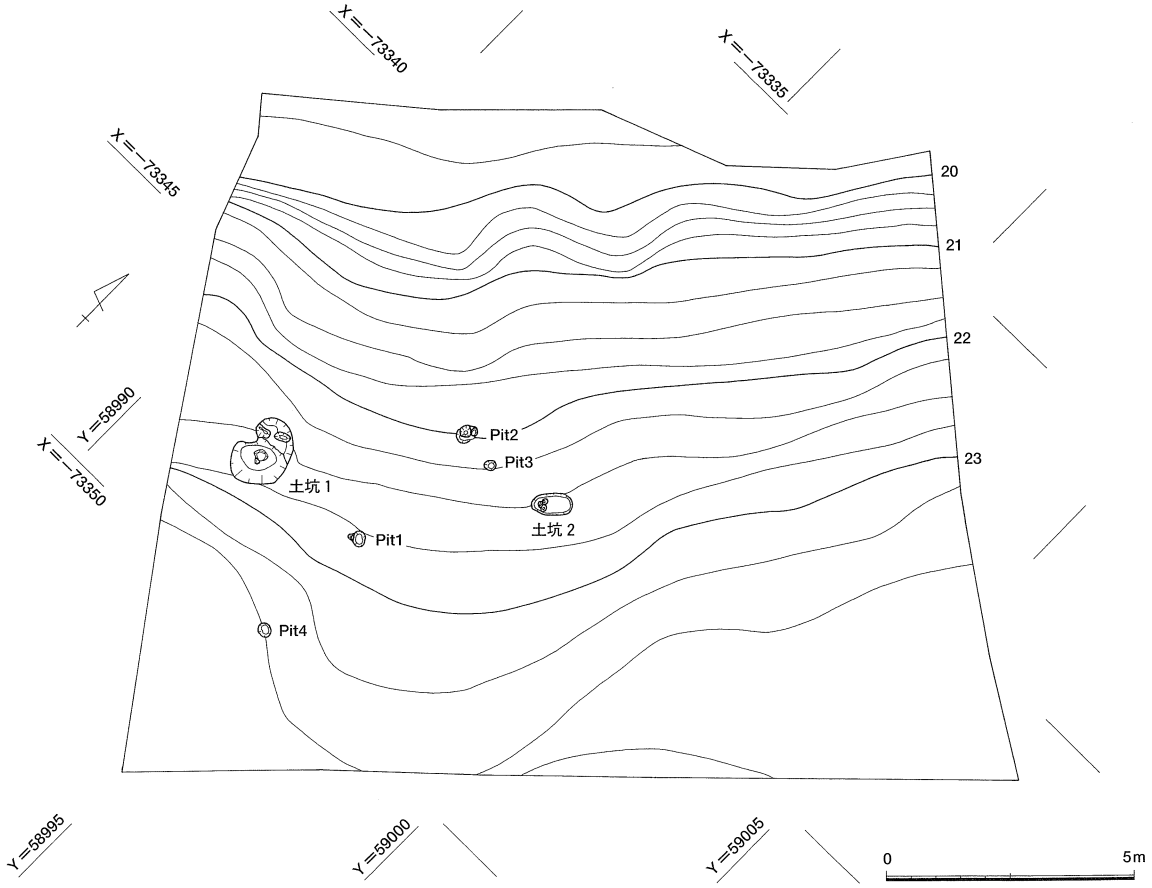
第14図　菅原Ⅰ遺跡１区　土層実測図（S＝1/120）

２．検出された遺構（第15・16図）

今回の調査で検出された遺構は、１区の３基の加工段、２区の土坑２、ピット４である。加工段は１区の北側から切り合う形で３基見つかった。ここは、民家建築の際に地山を削り取った平らな面から少し南側に下がったところで、最も北側に存在している加工段１は等高ラインに沿って東西方向に長さ6.7m、幅1.3mが現存していた。長辺の壁際には約2.2mの間隔に３つの柱穴があった。東側と中央の柱穴は径40㎝とやや大きめで、西側の穴は20㎝あまりである。加工段２は加工段１の東側下方の位置から 東側に伸びているもので長さ5.5mを測る。柱穴等は検出できなかったが性格不明の土坑が２基、西側の平坦地から出土した。加工段３は加工段１及び加工段２を切って造られており、３つの加工段の中では最も新しいものである。平坦面から径60㎝あまりの落ち込んだ穴が数基見つかったが加工段との関係は不明である。２区から検出した土坑は斜面上方に存在していた



第15図　菅原Ⅰ遺跡１区　加工段１・２・３実測図（S＝1/90）



第16図　菅原Ⅰ遺跡２区　調査後地形及び遺構配置図（S＝1/150）

 もので、西側の土坑1は二つの穴が切り合っていた。新しいものは1.1m×0.9mの長円形を呈し、深さは0.5mあまりで、底には20㎝大の石が二個存在していた。土坑２は0.8m×0.4mの小判形を呈したもので、深さは0.2mあまりである。ピットは径0.2～0.4mのものが４基見つかった。これらの遺構は時期、性格とも不明である。

３．出土遺物

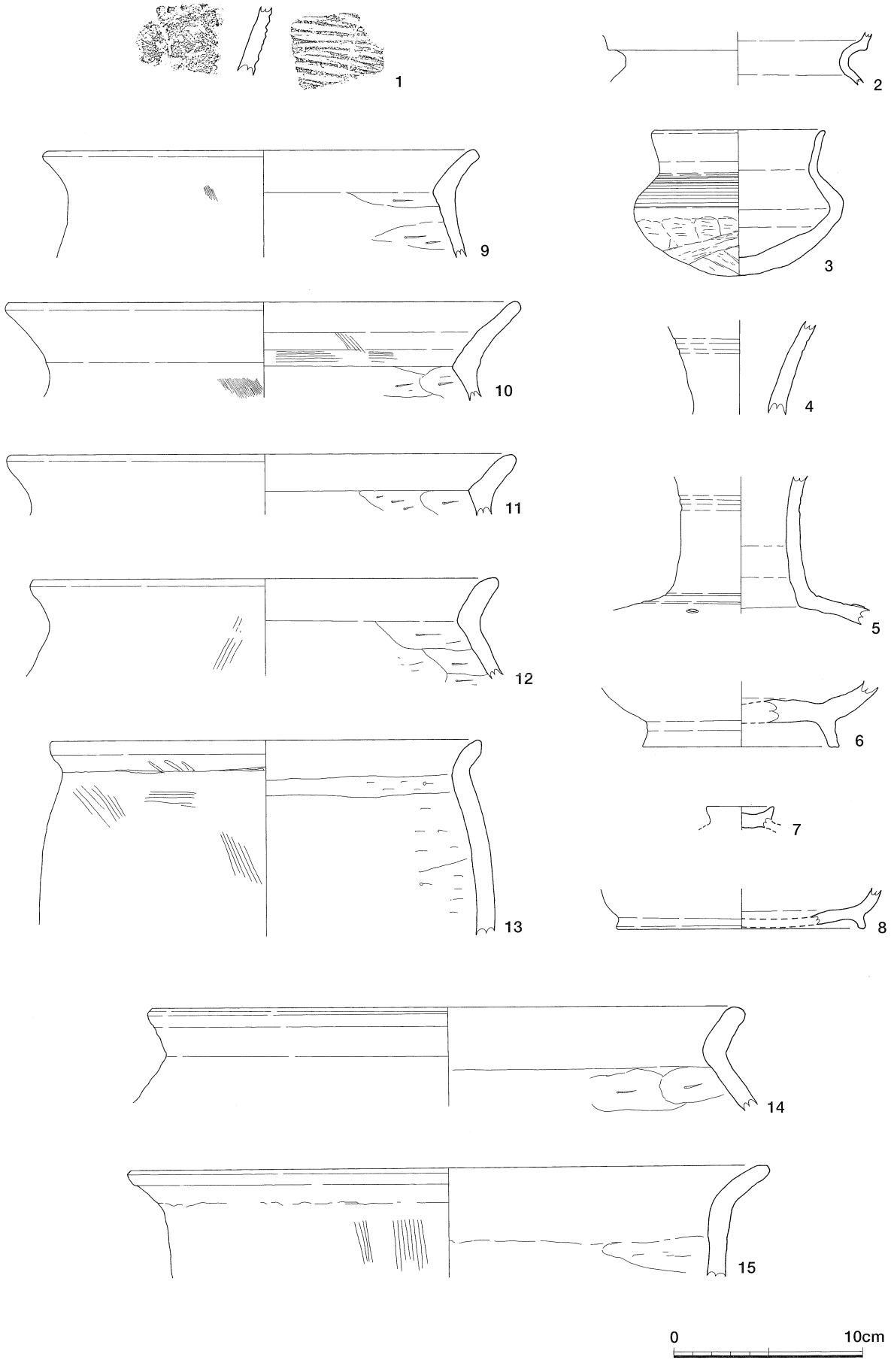
１）１区出土の遺物（第17～19図）

この調査区から出土した遺物は、谷部及びその斜面に堆積していた土層から各時代の遺物が混在して見つかったので、ここでは一括して取り扱うことにする。

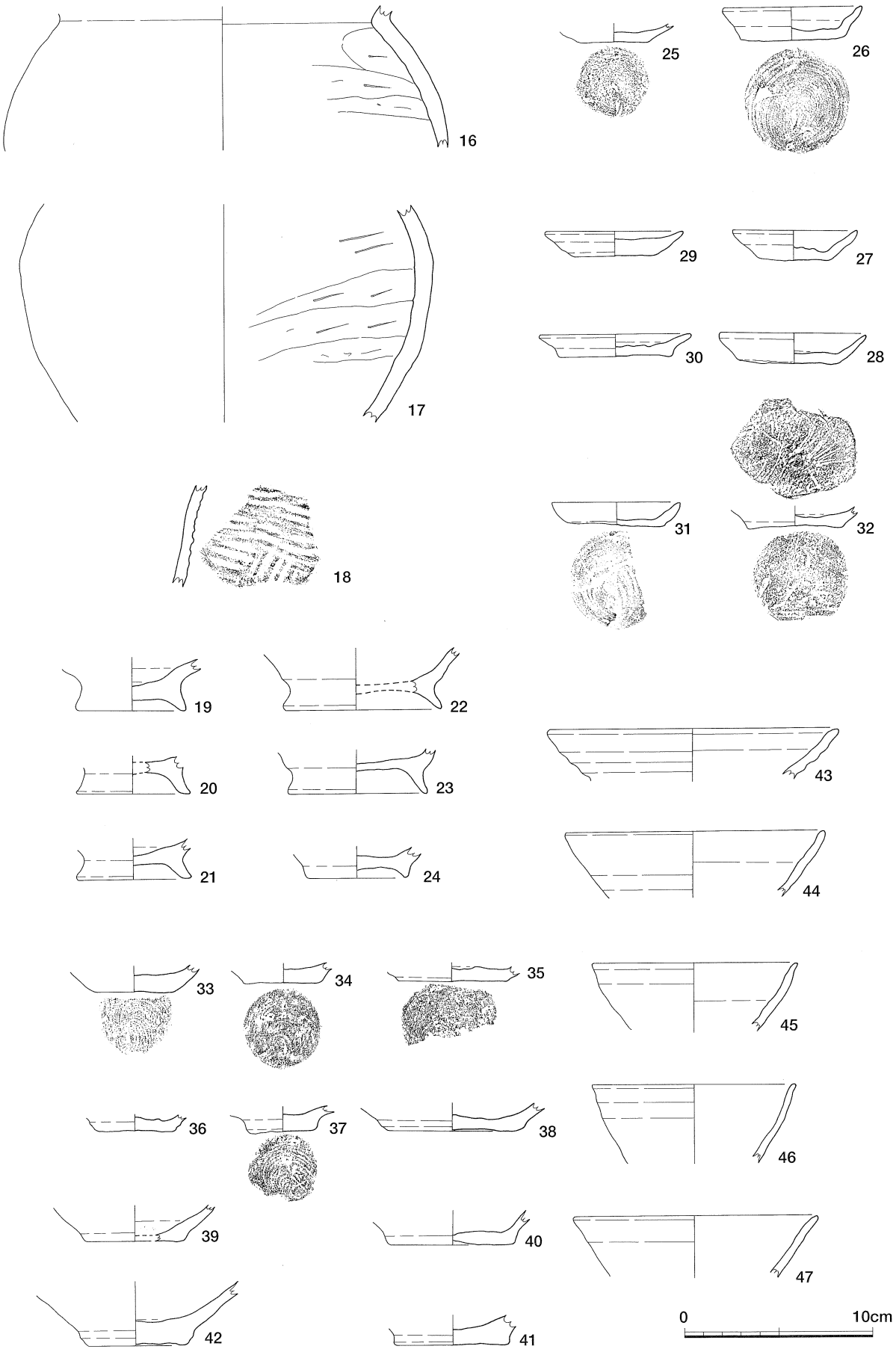
第17図－１は縄文土器の破片で、外面に貝殻条痕を施した粗製深鉢片と考えられるものである。暗茶褐色を呈し、胎土に金雲母を含み、器壁はやや厚い。時期は不明である。２は弥生時代後期の甕頸部片で、口縁部上方を欠くが複合口縁になるものと思われる。頸部下方内面にはケズリが見られる。３～７は須恵器片。３は口径8.9㎝、器高7.6㎝を測る短頸壷。口縁部はやや外反し、頸部から底部にかけては「く」の字形に大きく屈曲している。底部には手持ちヘラケズリが施され、肩部にはカキ目が存在する。体部の器壁はやや厚く、色調は茶褐色で古い時期のものと考えられる。４・５は長頸壷の頸部から口縁部にかけての破片。いずれもラッパ状に外に向かってひらくものと思われ、中ほどに２本の沈線が廻る。５は肩がやや張り、肩部に径0.6㎝の円形浮文がある。６は長頸壷の底部片で、「ハ」の字形に開いた高さ約1.2㎝の高台が付く。７は蓋坏の摘み片で径3.5㎝あまりを測る。３は５世紀末その他は７世紀～８世紀頃のものと思われる。

８～17は古墳時代～奈良時代にかけての土師器である。８は底部径13.2㎝あまりの高台の付く坏である。高台は高さ0.5㎝を測り、やや外側に張り出している。そこから続く体部は丸みを持って上方に伸びている。９～14は甕の口縁部片である。９・10は口縁がやや外反ぎみに上方にのび、頸部あたりの内面に顕著なケズリを施し、断面が「く」の字形を呈している。11～14は短い口縁が外傾し、内面には９・10より浅いケズリが施されている。16・17は甕胴部の破片で、肩部から丸みを持って下がっている。内部にはケズリがある。15は口径33.0㎝を測る甑の口縁部片で、外面の一部に縦方向のハケ目、内側にケズリが施されている。18は製塩土器片。外面にはタタキが見られ、色調は淡黄褐色を呈している。

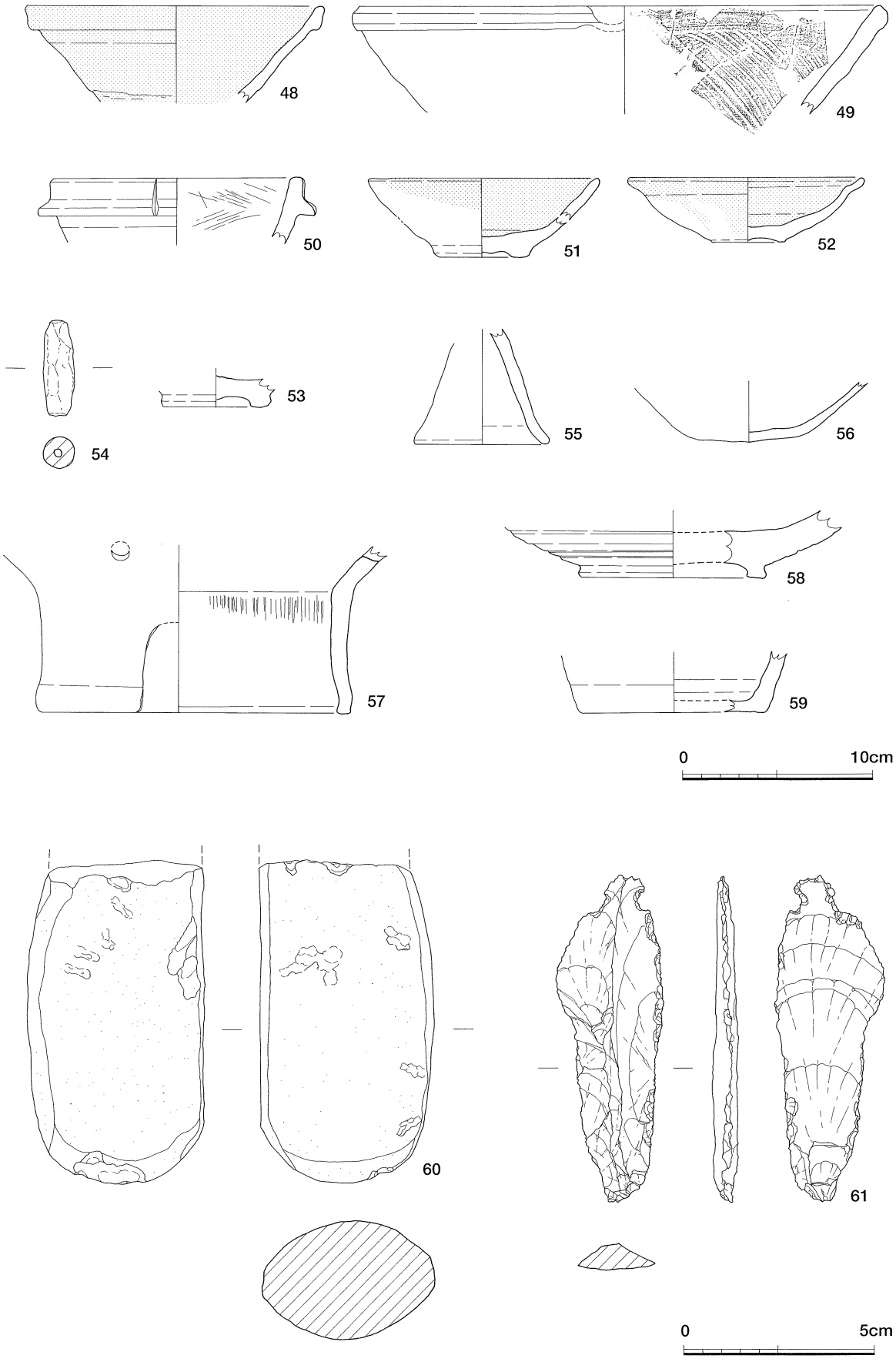
19～47は平安時代～鎌倉時代にかけての中世土器である。19～24は坏ないし碗の高台付きの底部片。高台は24を除き「ハ」の字形に開くタイプのもので、高さは0.5～1.0㎝を測る。端部は丸く尖っているものが多く、内面の底は19、21が丸く窪んでいる。高台より内側の底の部分はナデ調整をしているものが大半である。21の底には一部に糸切りの痕跡が残っていた。25～32は小形の皿になる中世土器である。25は口径は6.6～8.0㎝あまり、高さは1.2～1.7㎝を測る。26は底部から口縁部にかけての傾きが他のものより緩く、わずかに屈曲して口縁部にいたっている。27は26と良く似た形態を呈しているが、体部の傾きが大きい。28はやや大きめの口縁部を持ち、体部はやや内湾ぎみである。29は底部の器壁が厚く、25は口縁部は摘み出しによって形成されており、内側の深さは0.4㎝と極めて浅い。30は外側に大きく外反しており、31は体部がやや内湾しており、底部と比べこの部分の器壁が厚い。小形皿は風化しているものが多いいが、回転糸切りの痕跡が残っている。また、32の底部内側にはヘラ先のような工具で沈線による不規則な文様が描かれている。33～41は皿ないし坏、碗の平底の底部片である。33は底径4.2㎝で、器壁が厚く、やや内湾ぎみな体部を持つ。34



第17図　菅原Ⅰ遺跡　出土遺物実測図１（S＝1/3）



第18図　菅原Ⅰ遺跡　出土遺物実測図２（S=1/3）



第19図　菅原Ⅰ遺跡　出土遺物実測図３（48～59：S＝1/3，60～61：S＝2/3）

は外反して体部にいたっているもので、底部の径4.0㎝を測り、皿の底と思われる。35は底径がやや大きく5.7㎝あまりで、内面底部はロクロ挽きによる凸凹がある。36は底径4.1㎝、内面には35と同じような凸凹がある。37は底部の器壁がやや厚く1.0㎝あまりを測る。38は底径6.8㎝とやや大きく、39、40は坏42は碗の底部になるものと思われる。41は器壁が厚く、がっちりした作りになっている。43～47は碗ないし坏の口縁部片である。43は坏になる可能性があるもので、口径10.4㎝、外面にはロクロによる凸凹がある。口縁端部はやや外側に反っている。44～47は碗の口縁部片で、端部が内湾ぎみのもの（44）と小さく外反しているものがある。45は端部が細く尖っており、天目茶碗に似た形態を呈している。

48は白磁の碗で、口径15.5㎝を測る。口縁部は幅1.2㎝で、面が平らな帯状の突帯が廻っている。色調は茶白色を呈しており、体部の下方には釉薬がかかっていない。49は須恵器の片口の鉢である。口径は推定で27.5㎝、内面にはカキ目が施されている。50は滑石製の石鍋で、口径13.0㎝を測る。口縁部下方には断面正台形の鍔が廻り、口縁部から鍔にかけて縦方向に数本の刻目が施されているなど全体的に丁寧に作られた秀品である。51・52は唐津焼の碗ないし皿になるもので、淡白灰色の釉薬がかかっている。53は緑灰色の釉薬がかかった唐津焼の底部片。54は長さ５㎝あまりの土製の錘である。

２）その他の調査区（第19図）

２区から出土した55・56は土師器である。55は高坏脚部片で、底径7.0㎝を測る。56はやや丸みを持った平底の底部片。57～61はトレンチ調査で出土した遺物である。57は器種不明の土器で、脚部に逆「U」の字形、脚部から体部に変わる付近に円形の透かしがある。底径16.2㎝、灰褐色の色調を呈する。58は唐津焼の皿底部片、59は備前焼きの底部片である。60・61は縄文時代のものと考えられる石器である。60は断面長円形を呈した磨製の石斧で、基部は欠損し、刃部ははまぐり刃となっている。残存長8.4㎝、最大幅4.6㎝を測る。61はサヌカイト製の縦型の石匙で、長さ8.6㎝、最大幅2.8㎝を測り、縦剥の石片で作られている。

４．まとめ

今回の調査では明確な遺構を発見することができなかったが、１区の遺物包含層から縄文時代～近世にかけての土器を検出することができた。これらの土器のほとんどが古墳時代以降のもので、「く」の字形の口縁部を持つ土師器と中世土器が大半を占めていた。注目される遺物としては滑石製石鍋があるので、最後にこの石鍋について若干の考察を行ってまとめとしたい。

滑石製石鍋は島根県下で現在のところ20の遺跡から27点あまりの出土例があるが、今までまとまった集成や検討が行われていないので実態が明らかでない。ところが平成16年の10月23日、24日に広島県立博物館で開催された中世瀬戸内の流通と交流の公開シンポジュウムで、山口大学の今岡照喜氏等が滑石製石鍋の産地同定と流通と題した発表の中で、島根県出土の９遺跡の石鍋が長崎県西彼杵半島の石鍋製作所遺跡のものという分析結果の報告があった。また、この発表で、山口県の防長産の石鍋は限られた地域に供給されているのに対し、長崎産の石鍋は全国に広がっており中世における広域流通品の一品目に位置付けられた[(1)]。このことから島根県下の石鍋は長崎産がほとんどであることが判明したので、木戸雅寿氏の編年[(2)]をもとに県下の石鍋について検討してみたいと思う。

島根県下から出土している石鍋は完形品は一点もなく、出土場所も遺物包含層が大半を占める。遺構から見つかったものとしては、ピット、土坑、溝、池状遺構、水田跡と多種多様で破損したた

め破棄したものと推測される。また、出土した遺跡を見てみると安来市や松江市のある出雲東部及び出雲山間部は比較的少なく、出雲西部や石見部が多い。出雲市では菅原Ⅰ遺跡をはじめ６遺跡が知られており、石見部では浜田市４遺跡、益田市３遺跡、江津市1遺跡、六日市町１遺跡がある。このように現在のところ出雲平野から石見海岸部にかけて主に分布しているようである。

12世紀～15世紀にかけての石鍋は木戸氏の編年によると①口縁部は内湾から直立する。②全体的な器形は口縁部径と底径との比率の格差が広がり、新しくなると逆台形を呈する。③鍔は縦長正台形から正台形に移り、それから不等辺台形、三角形と退化してゆく、といった変遷が考えられており、石鍋は10世紀末から作り始め16世紀まで続くようである。県下から出土した石鍋をこの基準に合わせて検討してみると５つに分類できる。また、口径の違いから25㎝以上を大形、20㎝～25㎝を中形、20㎝以下を小形に分けた。

Ⅰ類　口縁部は直立し、鍔は断面が正台形で突起も大きく、基部と先端の厚みの差が少ないものである。浜田市下府廃寺跡（大形）安来市柳遺跡（中形）出雲市菅原Ⅰ遺跡（小形）等が該当する。また、菅原Ⅰ遺跡の物のように口縁部から鍔部にかけて縦方向の刻線を施した装飾的なものも存在し、全体的に作りが丁寧なものが多い。

Ⅱ類　口縁部はやや内傾し、内側端部は面取りを施しているものが出てくる。また、口縁部と体部の厚みの差が大きく、鍔は基部と先端の厚みの差が大きくなると共に、上下面の長さが異なり断面が正台形から不等辺の台形に移ってくる。しかしながら鍔先端は直立かやや外傾しておりしっかりした面を持っている。出雲市青木遺跡（大形）浜田市古市遺跡（中・小形）が該当する。

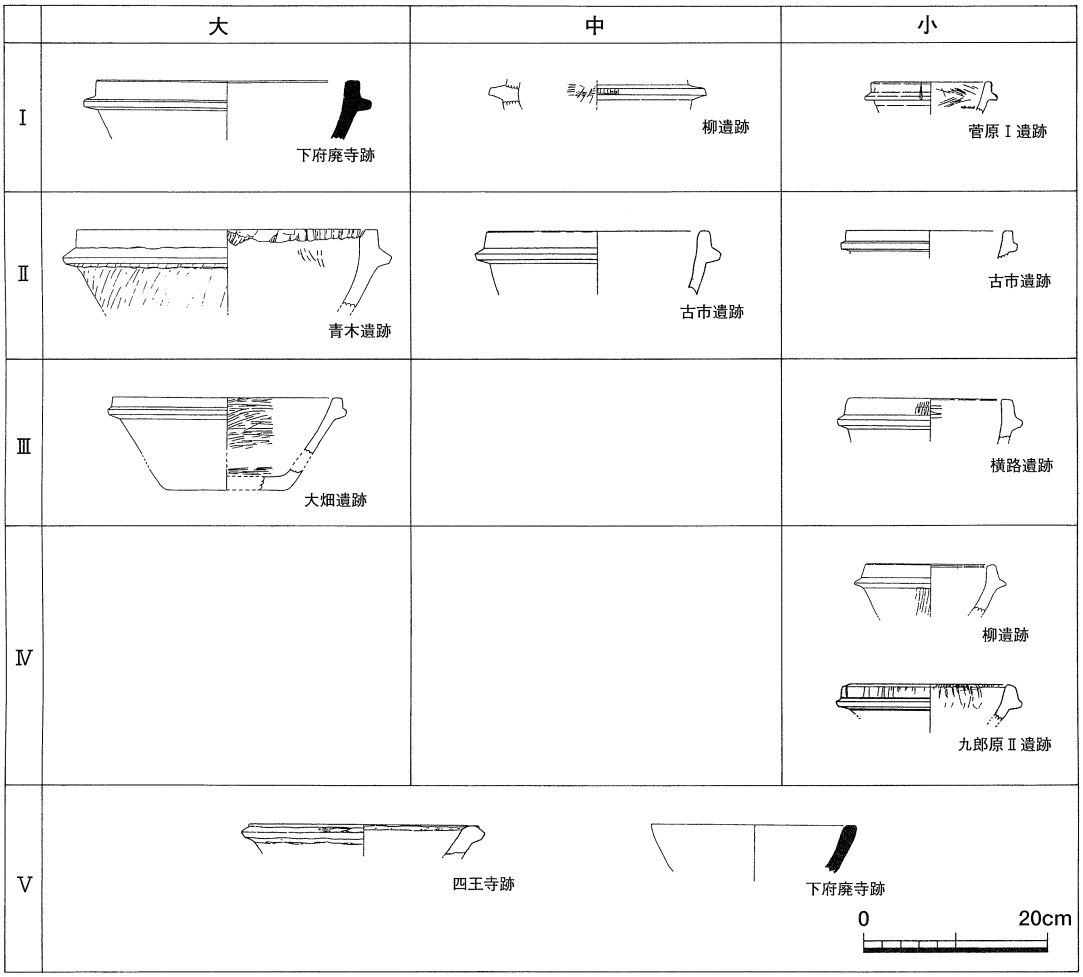
Ⅲ類　大形品は鍔と口縁部が一体化してきており、口縁高が低く、鍔の断面が不等辺台形を呈する。小形品は口縁部と鍔ははっきり区別されているが、鍔の断面が三角形に近い不等辺台形を呈し、鍔がやや退化してくる。益田市大畑遺跡（大形）益田市横路遺跡（小形）が含まれる。大畑遺跡のものは全体形が復元されているが、それによると口径と底径の比率は１：1.9である。

Ⅳ類　鍔の先端が尖り断面が三角形を呈するものや、口縁と鍔が一体化され、鍔の先端がわずかな面を持つもので、六日市町九朗原Ⅱ遺跡（小形）安来市柳遺跡（小形）が該当する。

Ⅴ類　鍔が無くなったもので、松江市四王寺のものは口唇部に接して断面が丸い突帯状の突起を持っており、鍔の名残が残っている。浜田市下府廃寺のものは鍔が無く、逆ハの字形の器形を呈しており、口唇部は平らである。

以上のように島根県下出土の滑石製の石鍋を５つに分類した。この分類は木戸編年に対応するとⅠ類はⅢ－a、Ⅱ類がⅢ－b、Ⅲ類がⅢ－c、Ⅳ類がⅢ－d、Ⅴ類がⅢ－e ～Ⅳになるものと考えられる。長崎県西彼杵半島産の石鍋は木戸氏のⅢ－a－２類（12世紀）～Ⅲ－d類（15世紀）の間が最も盛んに生産され全国的に流通している。島根県下出土の石鍋もまさにこの時期に該当しており、全国的な流れの中で出現したものと推測される。また、石鍋は16世紀初頭に消滅するものと考えられているが、この時期のものと思われる石鍋が浜田市下府廃寺跡から出土していることは注目される。

菅原Ⅰ遺跡出土の滑石製石鍋は、鍔が正台形を呈したもので、県下の中では古い部類に入ることが判明した。この石鍋が属するⅠ類は12世紀に比定されるが、同遺跡からは12世紀～13世紀にかけての中国陶磁の白磁や中世土器が出土しているので同時期のものと考えられる。



第20図　島根県における石鍋変遷図（S＝1/8）

第７表　島根県における石鍋出土遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	出土個数	地区名・出土遺構
1	柳遺跡	安来市荒島町・久白町	2	池状遺構
2	四王寺跡	松江市山代町144-3	1	調査区南半分地山加工段東寄り
3	夫敷遺跡	八束郡東出雲町字出雲郷	1	水田跡
4	三田谷Ⅰ遺跡	出雲市上塩冶町半分	2	
5	大井谷Ⅱ遺跡	出雲市上塩冶町大井谷	1	A区・大溝04I層
6	古志本郷遺跡	出雲市古志町	1	SE03・04
7	大梶古墳	出雲市古志町	1	
8	青木遺跡	出雲市東林木町	1	H13年度調査区
9	菅原Ⅰ遺跡	出雲市船津町	1	
10	神原Ⅱ遺跡	飯南町頓原町	1	Ⅲ区E7・　I抗
11	鰐石遺跡	浜田市治和町相田	1	包含層
12	下府廃寺跡	浜田市下府町	2	第10調査区・包含層 第13-2調査区・包含層
13	横路遺跡 （原井ヶ市地区）	浜田市下府町	1	原井ヶ市地区・CP189
14	古市遺跡	浜田市下府町	2	包含層・その他の遺物
15	大峠遺跡	益田市久々茂町イ690-2他	1	Ⅱ区・耕作土
16	大畑遺跡	益田市横田町	1	包含層
17	九郎原Ⅱ遺跡	鹿足群六日市町	1	包含層
18	沖手遺跡	益田市久城町	2	井戸跡
19	出雲国府跡	松江市大草町	3	包含層
20	高津遺跡	江津市都治町	1	包含層

註

(1) 今岡照喜他「滑石製石鍋の産地同定と流通」公開シンポジュウム『中世瀬戸内の流通と交流』資料集 2004.10

(2) 木戸雅寿「石鍋の生産と流通について」『中近世土器の基礎的研究Ⅸ』中世土器研究会1993.11

島根県下出土の石鍋文献一覧

1 島根県教育委員会『塩津山丘陵遺跡群（塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡・附亀ノ尾古墳）』1998.3

2 島根県教育委員会『風土記の丘地内遺跡発掘調査概報Ⅳ －島根県松江市山代町所在・四王寺－』1985.3

3 島根県教育委員会『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 －Ⅳ－』1983.3

4 島根県教育委員会『三田谷Ⅰ遺跡（Vol.3）』2000.3

5 出雲市教育委員会『斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書Ⅲ』2001.3

6 島根県教育委員会『古志本郷遺跡Ⅵ －K区の調査－』2004.3

7 山本清『出雲市古志町大梶古墳調査報告』1955

8 島根県教育委員会『青木遺跡（中近世編）』2004.3

9 本書掲載遺跡

10 島根県教育委員会『神原Ⅱ遺跡（3）』2003.3

11 浜田市教育委員会 原裕司氏の教示による

12 浜田市教育委員会『下府廃寺跡 －平成元年度～平成４年度市内遺跡発掘調査概報－』1990.3

13 浜田市教育委員会『横路遺跡（原井ヶ市地区） 浜田東中学校建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1998.3

14 浜田市教育委員会『伊甘土地区画整理事業伴う古市遺跡発掘調査概報』1995.3

15 島根県教育委員会『上久々茂土居跡・大峠遺跡 一般国道191号改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1994.3

16 島根県教育委員会『益田養護学校建設に伴う大畑遺跡発掘調査報告書』1999.3

17 島根県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1980.3

18 島根県教育委員会が平成16年度の調査で検出

19 島根県教育委員会が平成16年度の調査で検出

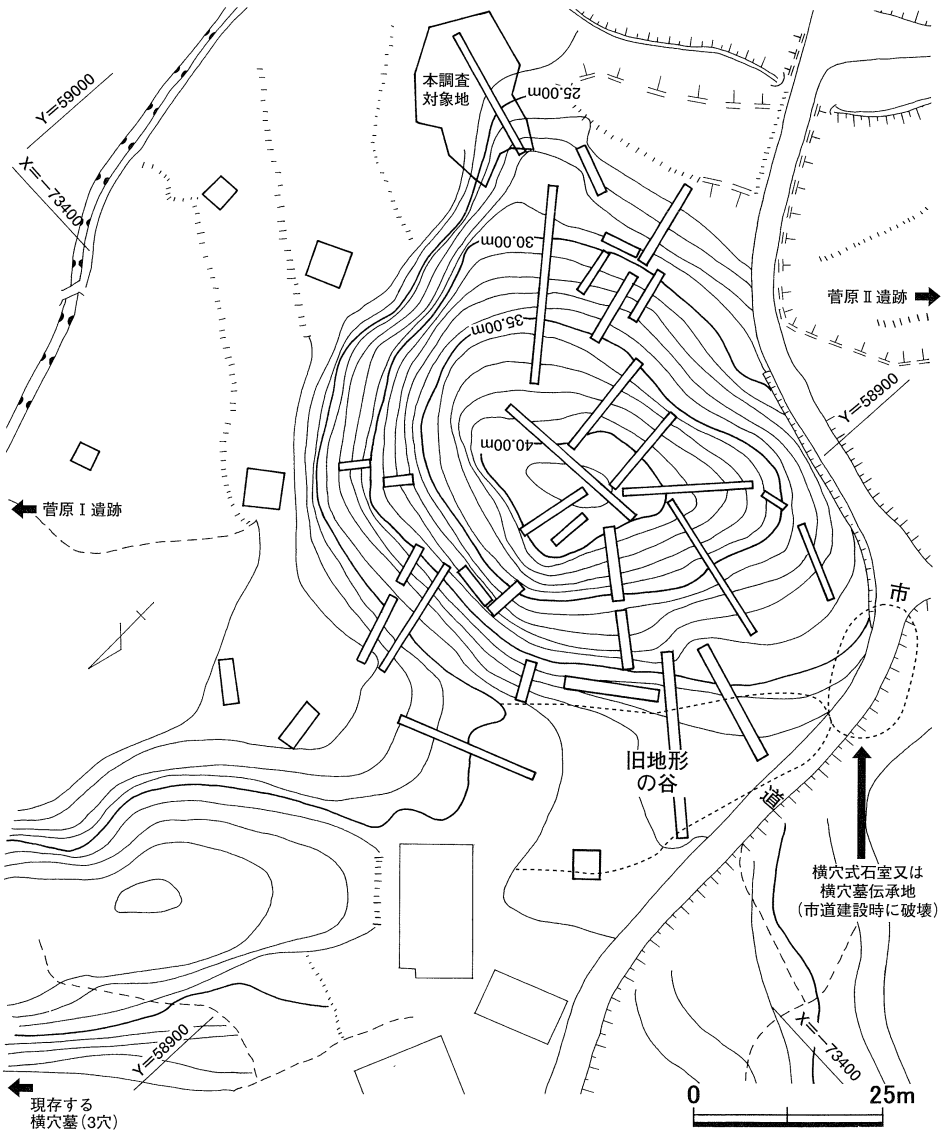
20 江津市教育委員会『高津遺跡調査報告書』2005.3に刊行予定

第３節　クボ山遺跡

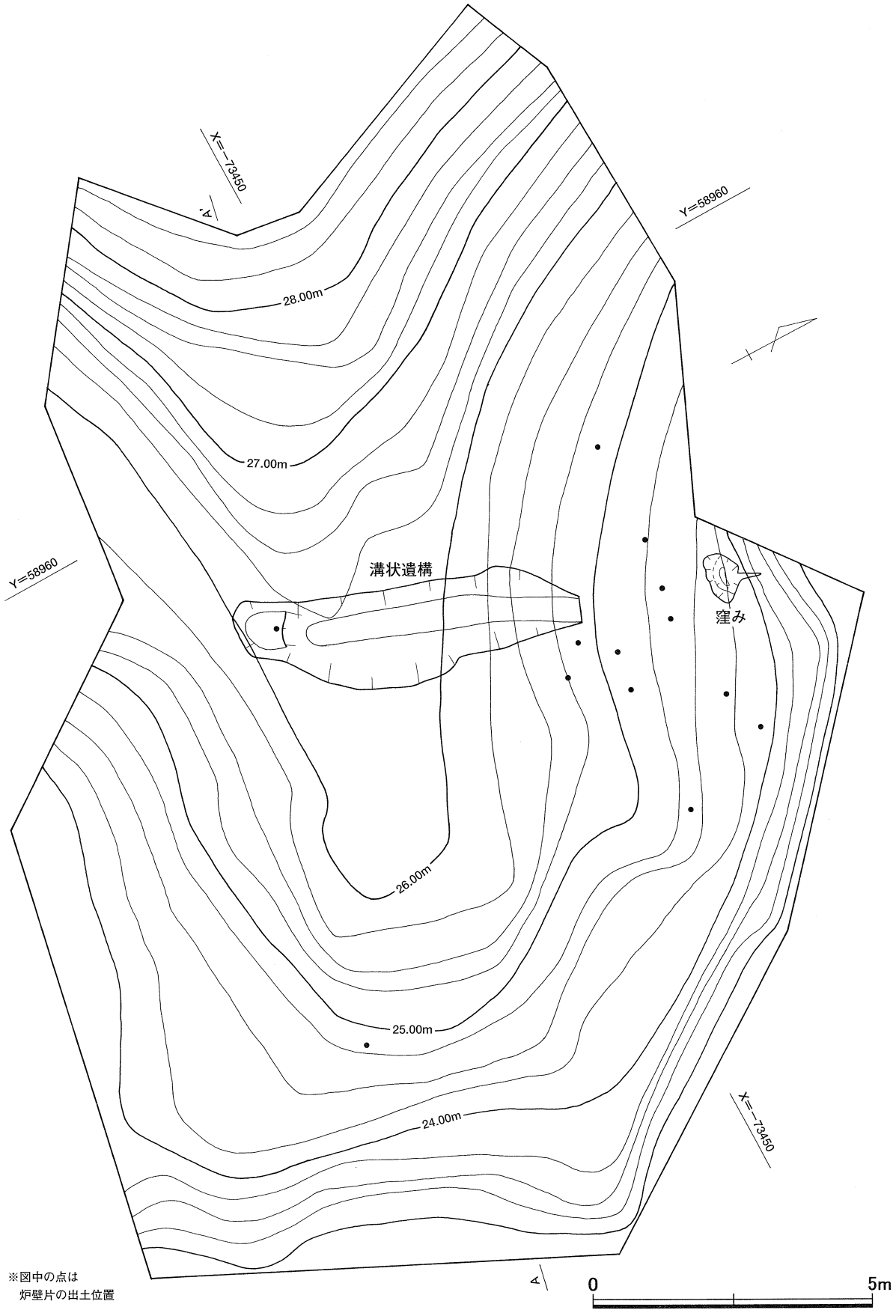
旧地形、現在までの地形改変のあらまし（第21図）

調査対象となったのは、菅原集落の東の谷を流れる菅原川に向かって、左岸（南西方向）からのびている丘陵で、地元の通称地名で「クボ山」と呼ばれる。菅原川は、現在はクボ山の東（菅原Ⅰ遺跡方面）にひかえる山の麓を流れているが、コンクリート化によって流路が固定する昭和30年代以前は谷の中を蛇行していたと思われる。クボ山から小さな谷を挟んだ北側にも細長い丘陵が北東方向へのびており、その北斜面に開口する３穴の横穴墓群は周知の遺跡である。横穴墓の所在位置は山陰道建設予定地の範囲外であったが、当初、この遺跡の名を取って「菅原横穴墓群」と命名していた。しかし、「クボ山」と周辺の平地を試掘調査したところ横穴墓は検出されず、遺跡名と遺跡の実体が乖離するようになったので、現地の小字名をとって新たな遺跡名とした。

現存してはいないが、かつてこの地域に「横穴墓があった」という伝承が存在する。「クボ山」はもともと南西方向（菅原集落の南端部、菅原Ⅱ遺跡方面）から長くのびる丘陵であったが、昭和50年代、稗原方面へ抜ける市道建設に際して分断された[1]。このときの切り通し工事の際に横穴墓が

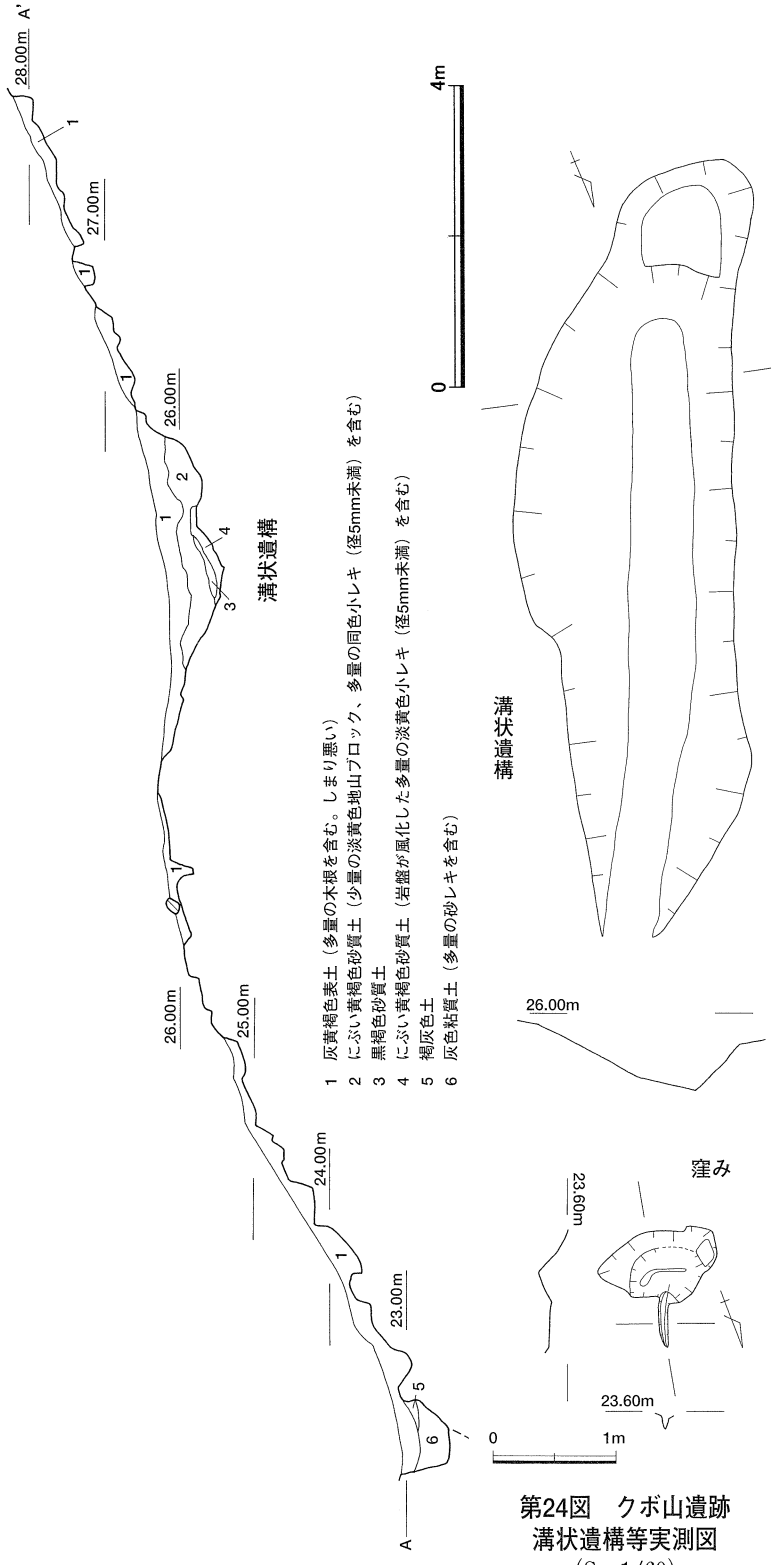


第21図　クボ山遺跡　周辺地形、試掘坑及び本調査範囲位置図（S＝1/1,000）



第22図　クボ山遺跡　本調査区地形及び遺構図（S=1/100）

破壊され、遺物は周囲の畑へ散らばったと伝えられる。ただし、現地の伝承では「横穴墓」と「横穴式石室」は厳密には区別されておらず、この伝承にいう「横穴墓」も横穴式石室をさしているらしい。石室を構成していたと思われる石材が、付近の畑地に集め置かれ、奉祭されている。「クボ山」の北はもとは東西にのびる細長い谷であったが、切り通し工事で排出された土砂で埋められ、現在は市道とほぼ同じ高さの畑地となっている。



第24図　クボ山遺跡
溝状遺構等実測図
(S=1/60)

第23図　クボ山遺跡　基本土層図（S=1/100）

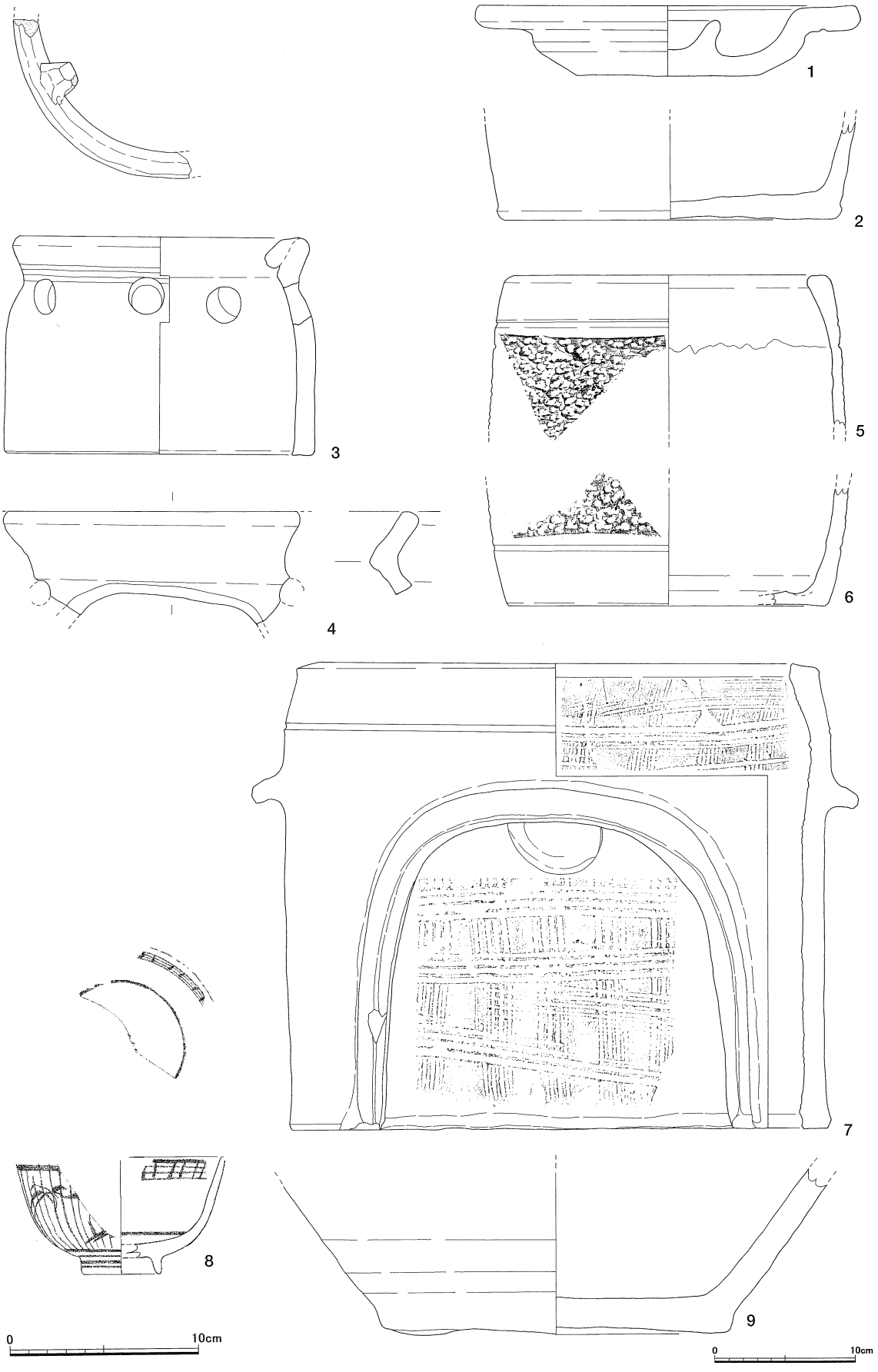
試掘調査（第21図）

試掘調査で検出した遺構としては、丘陵の最も川よりの位置に突出している小突起部で検出した溝状遺構が唯一の遺構であった。断面（第23図）のみの確認であったが、丘陵本体と小突起部分をこの溝状遺構により切り離す意図があるように思われたので、この小突起部分が古墳または古墓であると予想して本調査に入った。わずかな表土を取り除いて地山（岩盤）を露出させたが予想に反して埋葬施設などの遺構は検出されなかった。調査前と調査後で地形はほとんど変化していない。

遺構と遺物

溝状遺構（第24図）

試掘調査で検出した溝状遺構全体の規模は、確認された部分の長さが6.2m、最も広い部分の幅が1.7mである。断面形は逆台形であるが、遺構の南端近くは浅すぎて不明瞭である。遺構の南端から1.3mまでが平坦でテラス状になっている。その北は段がついて低くなり、北へ向かってゆるやかな下り傾斜が続く。下端から1.6mの地点でわずかに東へ曲がり、標高25mまで続く。



第25図　クボ山遺跡　出土遺物実測図１（１～６・８：S=1/3，７・９：S=1/4）

溝状遺構下方の「窪み」（第24図）

溝状遺構のほぼ北側延長線上、下端から2.4m北、比高にして60㎝下った位置に小さな窪みが見られた。自然地形か人為的な造作の跡か判断がつきかねたが、遺構の可能性があるものとして掲載する。

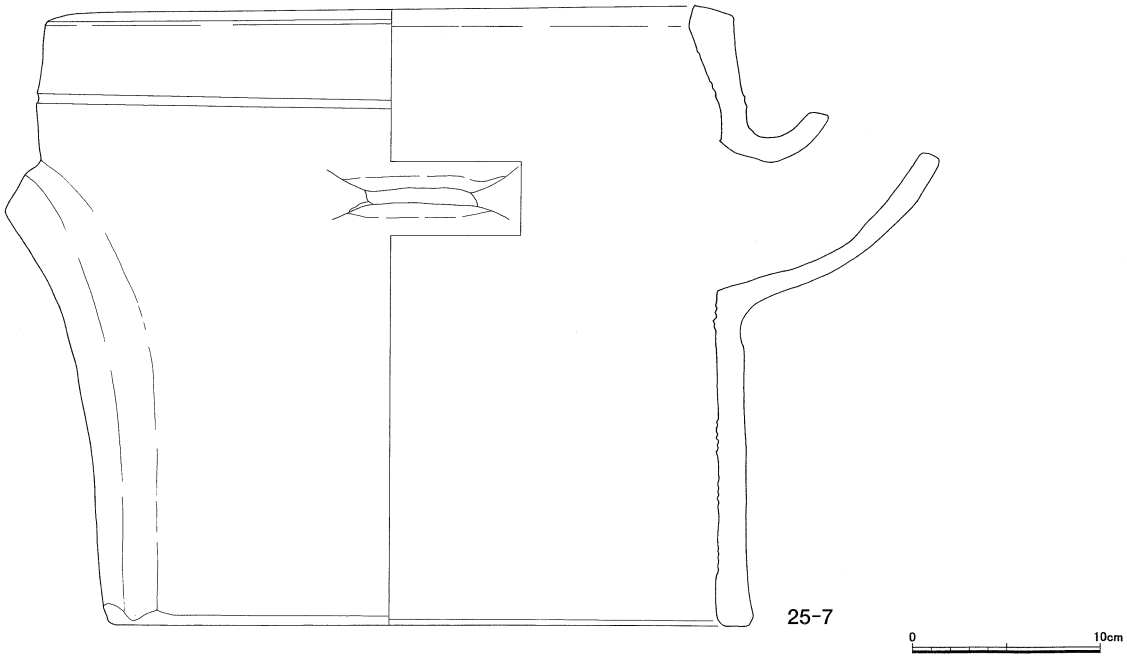
窪みの上場は長径１mほどの東西に長い楕円形と思われるが、地山の風化が著しく本来の地形はわからない。底部は面にならず、東西に長い溝状であるため、南北方向の断面はV字状を呈する。底部の溝状部分は、くびれている東端部分を除くと東西の長さが28㎝、幅は２㎝未満である。窪みの北側（谷側）には断面V字状の小さな溝がつき、北の谷側へ抜けている。確認できた長さは約40㎝で、窪みの側（南）から谷側（北）へ向かってゆるやかな下り傾斜となる。両端のレベル差は２㎝程度である。

遺物の出土状況（第22図）

第22図は、遺物のうち炉壁片の出土位置を「・」で示している。炉壁の破片は溝状遺構の下方の「窪み」付近で多数出土した。このため、当初炉壁と「窪み」、溝状遺構の関連が予想されたが、炉壁は反対側の南斜面や、丘陵頂部にも一部散らばっていた。

炉壁以外の金属関連遺物には、試掘調査時に平地部から出土した鉄滓がある。

溝状遺構の南端から少し南西へずれた位置で、陶磁器類が表土中からまとまって出土した。南東斜面からは、移動式竈やはんどの底部が出土した。移動式竈（第25図７）は、焚き口、把手、煙突のすべての部位が、格子目のある内面を上に向けた状態で出土した。仮に完形の品が廃棄後に潰れ

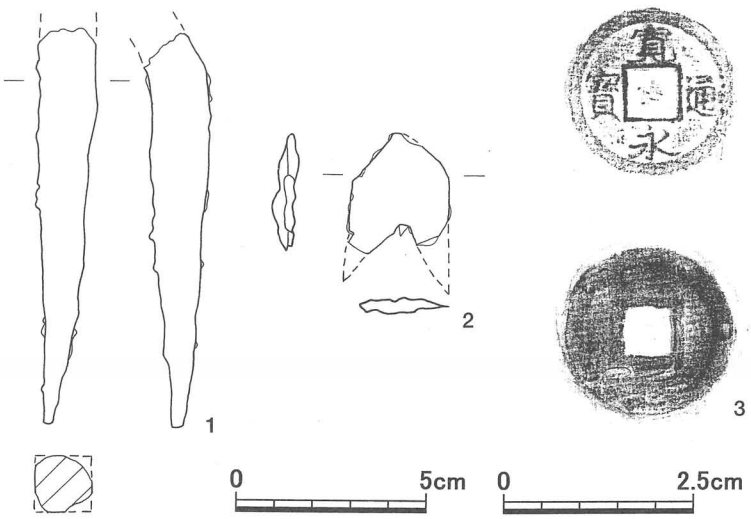


第26図　クボ山遺跡　出土遺物実測図２（S＝1/4）

たのであれば、上向きの破片と下向きの破片が混在した状態で出土するはずなので、本品は破片になった状態で廃棄された可能性が高い。上部が欠損したはんど（９）は、底部を真上に向けて倒立させた状態で出土した。底部の破片の下にも、大きめの破片が１点残されていた。

出土遺物（第25～33図）

第25図１～７は「大津焼」製品である。「大津焼」は調査区下流の出雲市大津町を中心とする地域で盛んに生産された焼き物で、表面全体にススを吸着させて灰黒色に仕上げるのを特徴とする。



第27図　クボ山遺跡　出土金属製品実測図
（1～2：S=1/2，3：S=1/1）

外型を使用して成形される[2]ため、外面には土師器のような調整の痕跡が残らない。器種は、火に関係する生活用具が多い。当遺跡出土の大津焼製品も、すべて火に関係したものである。

1・2は火消し壺の蓋と身のセットである。3は火鉢で、径2㎝の通気用の孔を複数持つ。当遺跡出土品は遺存状況が悪いが、本来は孔が等間隔で付けられていたと思われる。口縁部内面に、器を支えるための突起が

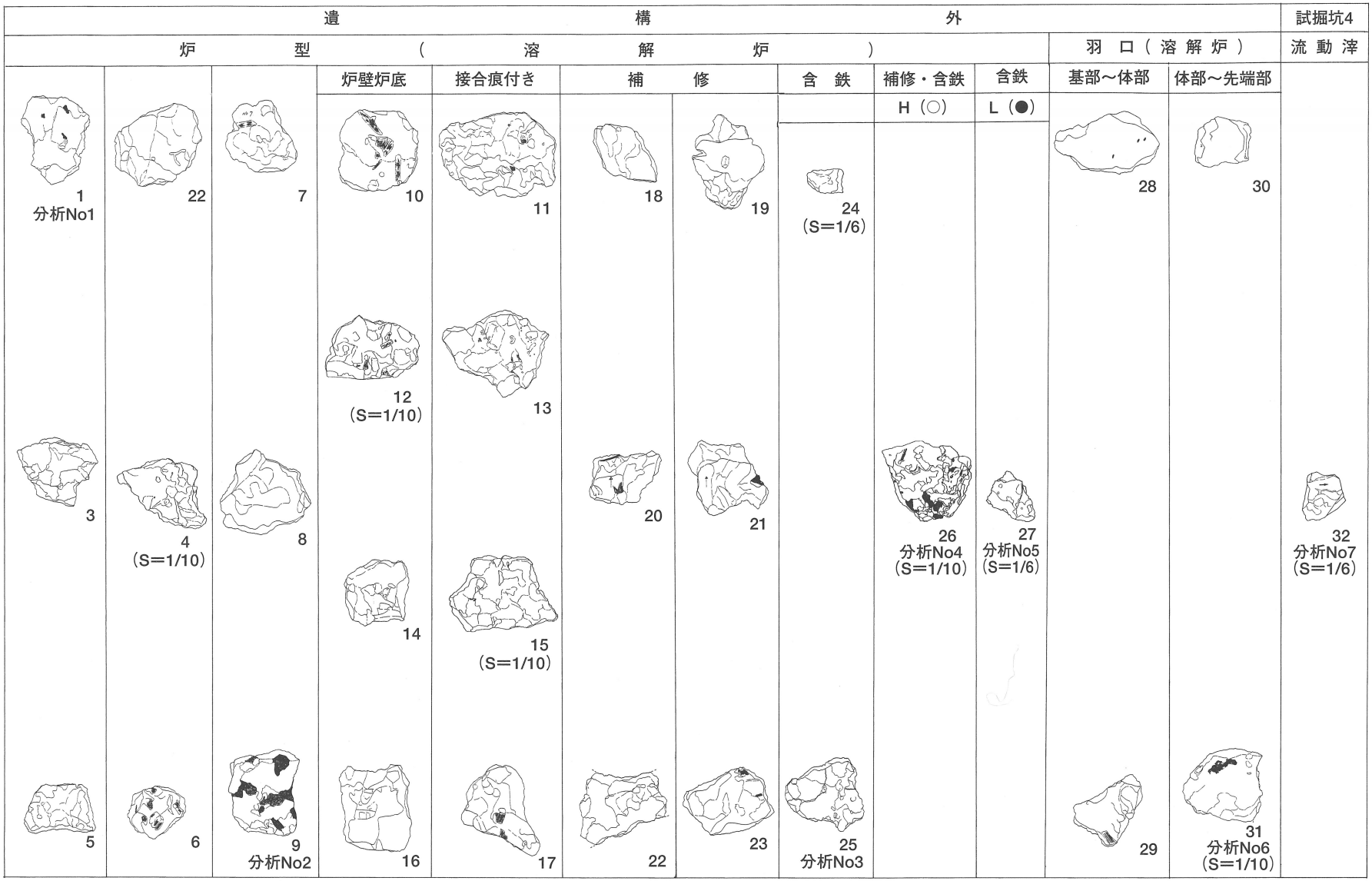
第8表　クボ山遺跡　遺構外出土金属器観察表

挿図番号（写真図版）	出土地点	遺物名（名称）	計測値（mm）長×幅×厚	重量（g）	遺存度	形態的特徴	備考
27－1（13）	地山面	鉄器釘または楔	106×14×15	79.67	1/2以上	頭部欠損	
27－2（13）	試掘調査	鉄器鏃	32×27×（5）	2.81	1/2以上	無茎五角形	目釘孔が確認できない
27－3（13）	地山面	銅製品銭	23×23×1.5	2.55	完形		

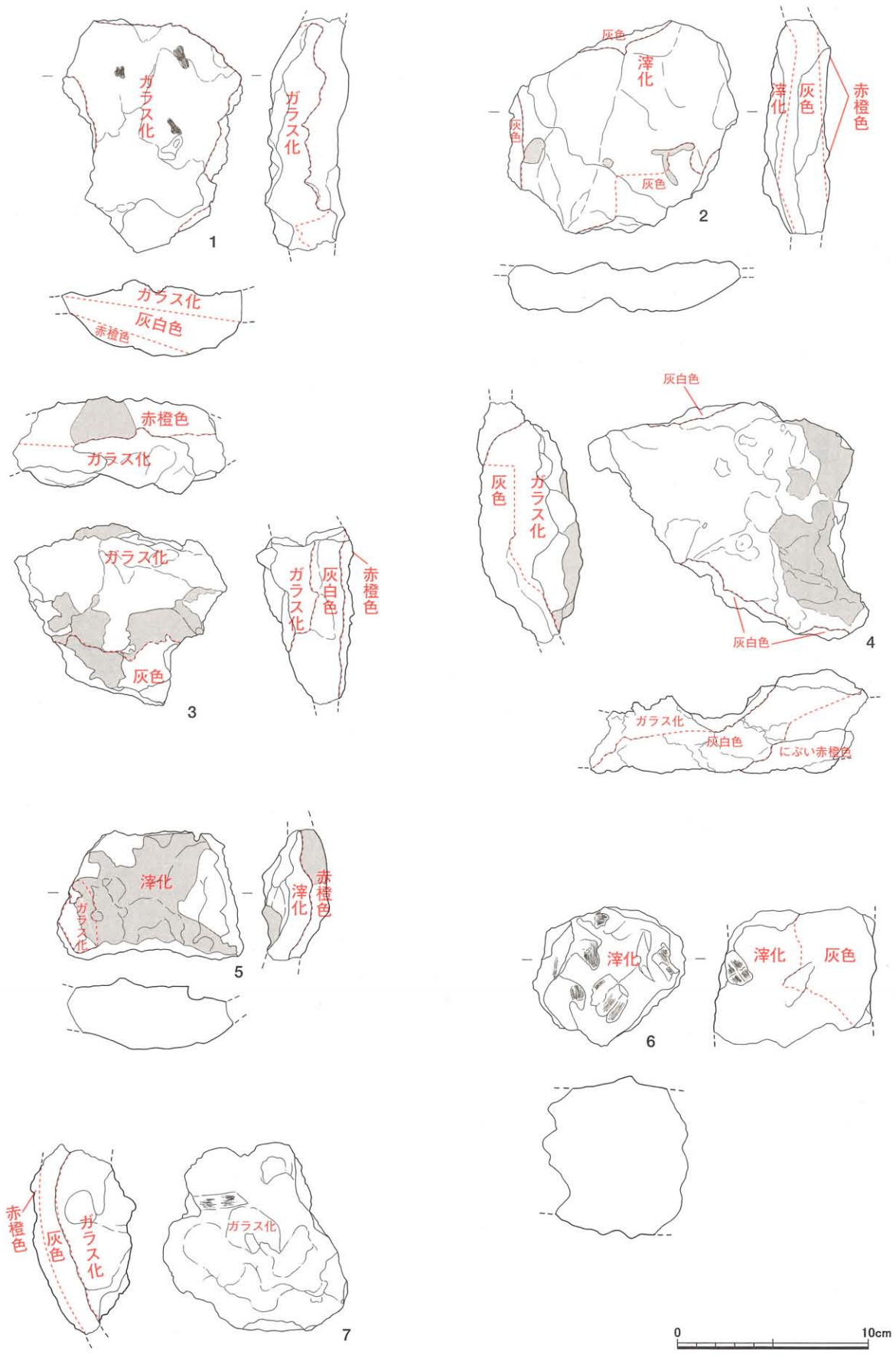
つく。頸部に帯状に付着していた酸化鉄の痕跡から、2条の針金を巻き付けて使用されたことがわかる。本品が火熱で急膨張して破裂するのを防ぐために、針金で締め付けた痕跡であろう[3]。同種の火鉢の焚き口部分が4である。復元した口径が3より大きく、針金の痕跡も無いので、別個体であろう。5・6は火鉢の口縁部と底部である。表面の凹凸は熱を放射する面積を増大させるためのものであろう。7は把手と煙突を持つ移動式竈である。把手直上には、針金を巻き付けるための沈線が一周している。内面には、櫛状工具によると思われる格子目が等間隔に施される。竈の器体から器への熱伝導を促進するためと推測される。8は、多量に出土した陶磁器の中で、19世紀に遡る可能性のある磁器碗である[4]。9は逆置きの状態で出土したはんどである。

第27図は金属器である。3は寛永通宝である。裏面は無文字。表面の「寛」「寶」の字体から新寛永と判明する。1と3は本調査部分の斜面に密着した位置で、2は試掘調査で出土した。

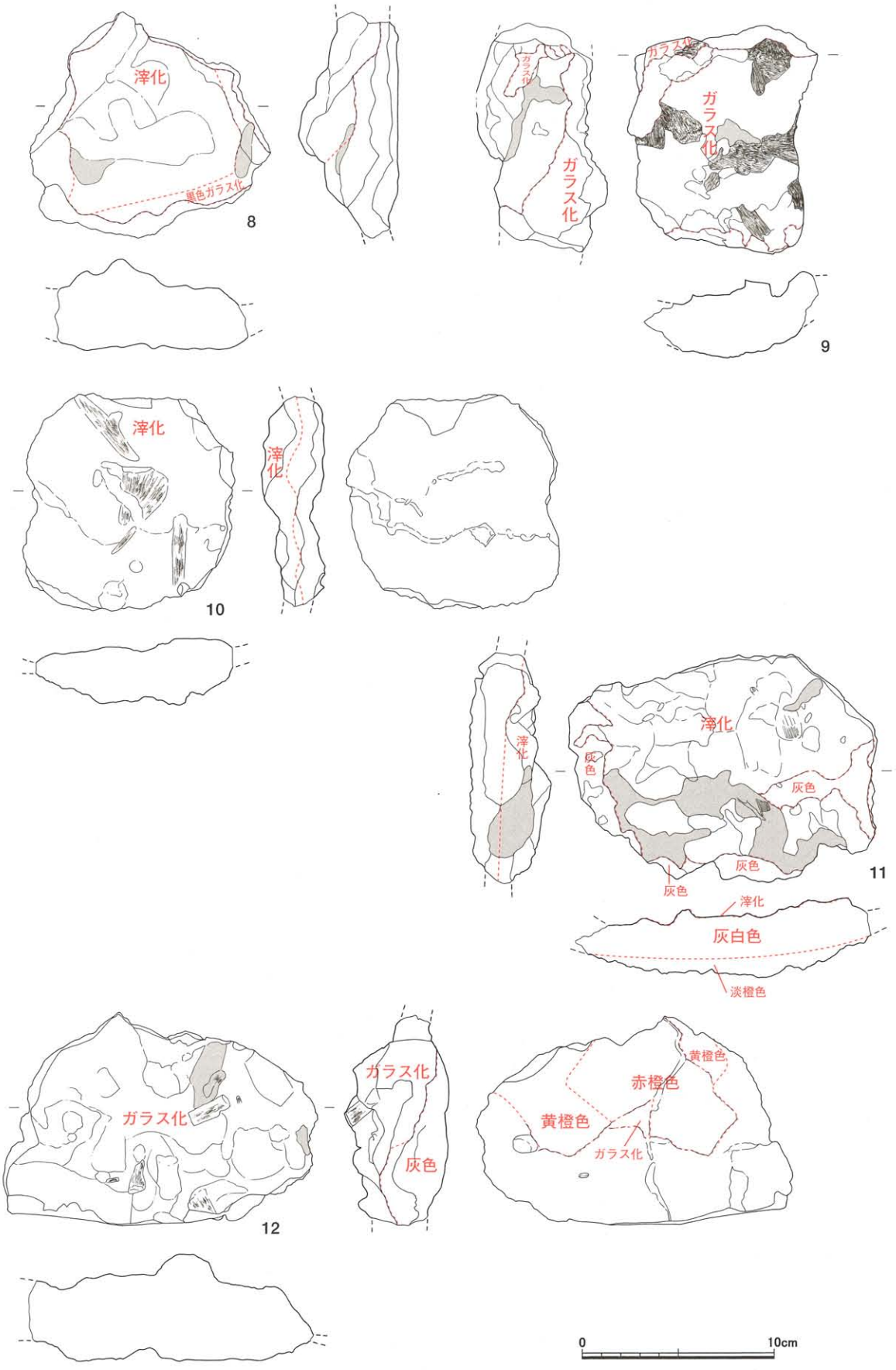
第29～33図は鉄関連遺物である。穴澤義功氏の指導を受けた肉眼観察で、大部分が鋳造炉の炉壁であると予想された。他に羽口が数点、離れた試掘坑から出土した鉄滓（流動滓）1点がある。これらの中から7点を冶金学的分析に供し、うち6点について、ガラス化した部分の結晶や付着した鉄・サビ等（6．クボ山遺跡出土鋳造関連遺物の金属学的調査.216P）から、鉄の鋳造炉の炉壁、及び羽口であるとの結果を得た。砂鉄を高温操業で製錬して作られた鉄塊を搬入して原料とし、当遺跡で溶解・鋳造を行ったのである。試料に付着した木炭などから、燃料はクヌギなどの広葉樹を使用していることが判明した（6．クボ山遺跡出土鋳造関連遺物の金属学的調査.216P）。



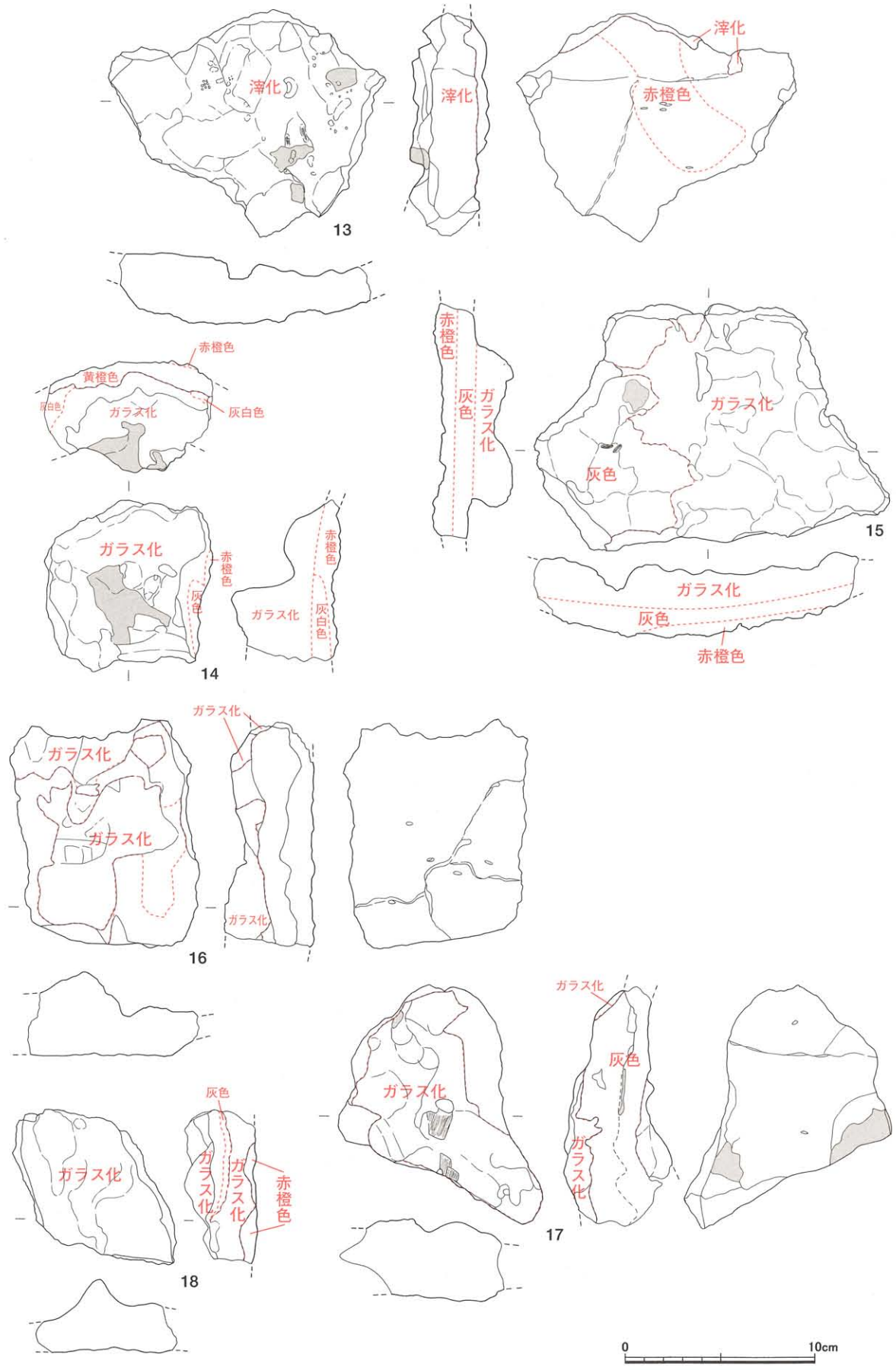
第28図　クボ山遺跡　鉄関連遺物構成図（S=1/8，ただし4・12・15・26・31=1/10，24・27・32=1/6）



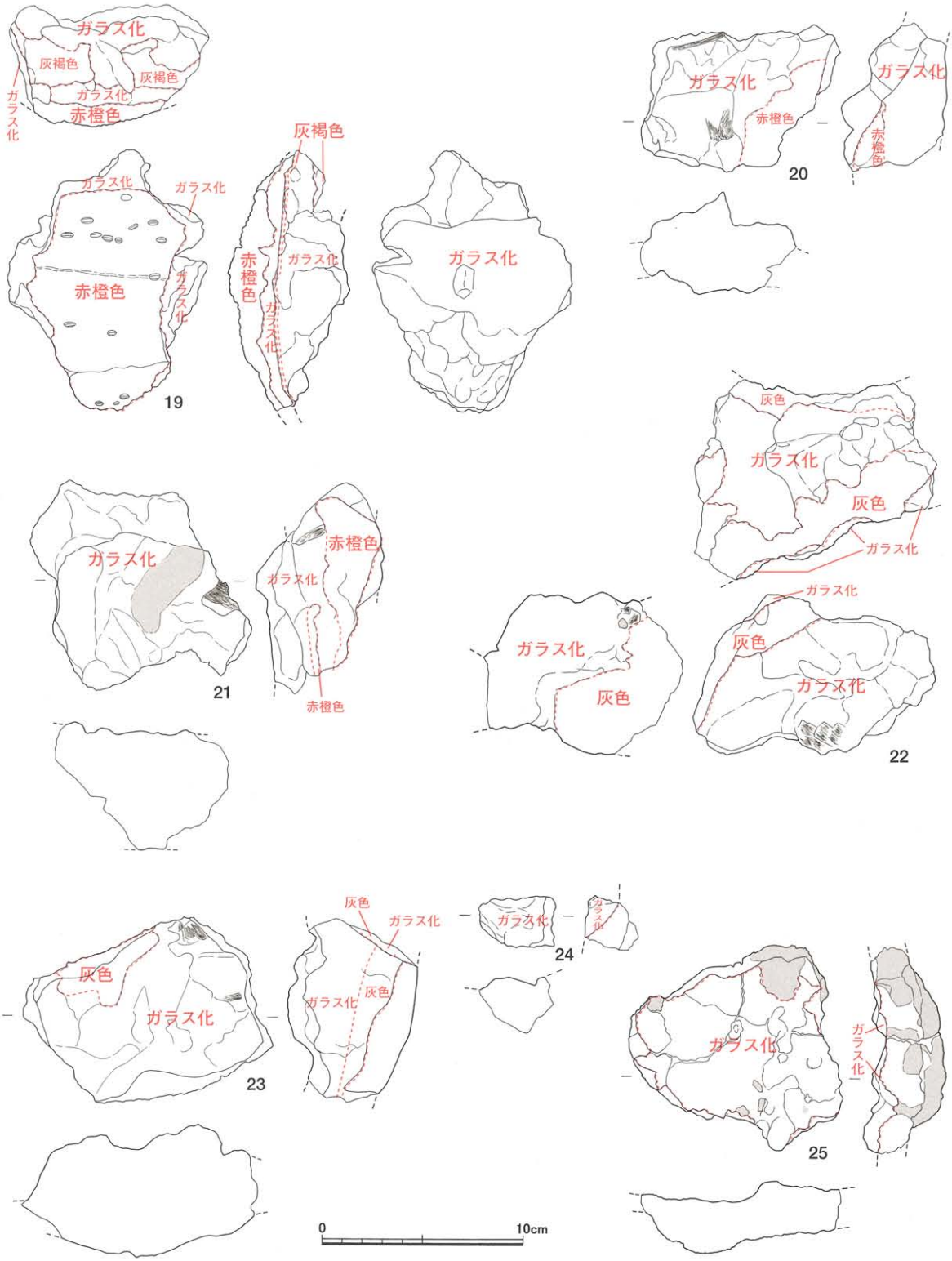
第29図　クボ山遺跡　鉄関連遺物実測図１（S=1/3）



第30図　クボ山遺跡　鉄関連遺物実測図２（S＝1/3）



第31図　クボ山遺跡　鉄関連遺物実測図３（S=1/3）



第32図　クボ山遺跡　鉄関連遺物実測図４（S＝1/3）

粘土の継ぎ目がよく残っている遺物（10～17）に恵まれたため、きれいに切りそろえられた粘土単位を積み上げて炉壁を構築した過程がよくわかる。炉壁・羽口とも胎土に籾殻を多量に混入して強度を高めている。籾殻はジャポニカ種で、完熟していない籾を使用している（第31表.204P参照）。被熱の程度はさまざまで、ガラス化して内面の垂れが強いもの（４・18・23など）から被熱の弱いもの（２・11など）まである。補修痕のある８点（18～24・26）は、いずれも被熱が強くガラス化

第33図　クボ山遺跡　鉄関連遺物実測図５（S＝1/3）

しており、傷み方が早かったことがわかる。炉壁は炉の様々な部位を含んでおり、羽口付近と推定される15・20や、炉床近くと見られる８・９・22・25がある。特に、分析試料に供した９・25には、剥離した炉床面の形状がよく残っている（第33・34表.206・207P参照）。

羽口は４点を掲載している（28～31）。炉壁の胎土と異なる土が用いられている可能性が予想されたが、分析試料６（羽口）の肉眼観察では、胎土・混和物ともに炉壁と大差なく、炉壁と羽口は一体で作られたと推定された（第36表.209P参照）。試料６の化学組成の分析でも、炉壁（試料１、４）

第９表　クボ山遺跡　鉄関連遺物一般観察表

構成No.	遺物名	地区名	計測値(cm)			重量(g)	磁着度	メタル度	備　　考	分析番号
			長さ	幅	厚さ					
1	炉壁　(溶解炉)	南斜面	12.2	9.4	4.1	287.7	2	な　し	分析資料No.1、詳細観察表参照	1
2	炉壁　(溶解炉)	P.No.35	11.2	12.0	2.5	284.5	2	な　し	内面が薄く滓化して、一部が発泡気味の炉壁片。内面の木炭痕は上下方向が目立つ。小さな錆ぶくれが点々と固着する。胎土は籾殻を多量に混じえた粘土質で、石粒も散在する。被熱はやや弱い。	
3	炉壁　(溶解炉)	P.No.28	9.5	10.2	5.2	324.2	2	な　し	内面が黒色ガラス化した炉壁片。上端部は滓が棚状に張り出す。内面は木炭痕の残る波状で、一部の錆色が強い。胎土は籾殻を多量に混じえた粘土質。	
4	炉壁　(溶解炉)	P.No.27	12.5	14.6	5.4	443.0	2	な　し	内面が黒色ガラス化して垂れの強い炉壁片。内面の右半分は大きな波状となる。黒色ガラス化部分は滓化が進み、抉れるように溶け落ちている。胎土は前者と同じで、僅かに滓粉が含まれている。	
5	炉壁　(溶解炉)	P.No.35	6.8	9.8	3.7	201.9	2	な　し	内面が滓化して、表面の８割ほどが錆色となった炉壁片。左側部寄りは黒色ガラス質。胎土は前者と同様で、より被熱が強く、ひび割れから滓が貫入しつつある。	
6	炉壁　(溶解炉)	P.No.35	7.2	7.9	8.6	432.0	1	な　し	厚みをもった炉壁片。内面が最大5.5cm以上の厚さに滓化して木炭痕がやや激しい。滓質はくすんだ濃緑色となる。左側部の木炭痕の一部に木炭が残る。裏面の炉壁胎土には横方向の亀裂が生じ、粘土単位の接合痕の可能性あり。	
7	炉壁　(溶解炉、炉壁炉底)		9.9	9.7	5.5	350.7	1	な　し	内面全体が激しく黒色ガラス化している炉壁片。木炭痕も突き刺さるように残されている。胎土は籾殻を多量に混じえた粘土質。裏面は上下で被熱差をもつ。上部は褐色で、下部は濃茶褐色。	
8	炉壁　(溶解炉、炉壁炉底)	北側斜面下	11.8	12.5	5.4	463.7	3	な　し	内面が滓化して中段が横方向の棚状となった炉壁片。滓化した表皮は下端部を除き灰色から灰白色となる。風化色も加わっている可能性が強い。胎土は籾殻を混じえたもので、部分的にくすんだ色調となる。下半部の1／3は還元色。	
9	炉壁　(溶解炉、炉壁炉底)	表土北斜面	11.9	9.9	5.8	594.1	2	な　し	分析資料No.2、詳細観察表参照	2
10	炉壁　(溶解炉、接合痕付き)		10.8	10.3	3.3	304.1	1	な　し	内面が滓化して浅い木炭痕を残す炉壁片。滓化は最大1.5cm程度と薄く、裏面は胎土部分が広い。胎土は籾殻を混じえており、横方向に緩やかな粘土単位の接合痕が残されている。	
11	炉壁　(溶解炉、接合痕付き)		11.8	16.1	4.2	545.5	2	な　し	内面がくすんだ濃緑色に滓化して、小さな垂れや木炭痕が共存する炉壁片。部分的に滓が棚状に張り出し、左下の部分には錆が固着する。裏面には多量の籾殻と石片や滓片を混じえた胎土が露出する。被熱はやや弱く、茶褐色気味となる。	
12	炉壁　(溶解炉、接合痕付き)		11.0	16.4	5.5	690.8	1	な　し	下端部に水平に切り揃えられた接合部を残す炉壁片。内面は黒色ガラス化して木炭痕が激しい。一部に２cm大の黒鉛化木炭が固着する。裏面には籾殻を混じえたひび割れの目立つ胎土が露出する。	

13	炉壁　(溶解炉、接合痕付き)	P.No.33	12.1	14.8	3.7	455.8	1	な　し	内面が滓化・発泡して灰褐色となった炉壁片。木炭痕も部分的に強い。裏面には籾殻を多量に混じえた粘土質の胎土が露出している。接合痕は斜め左上にのびており、水平方向を示す胎土中の籾殻痕の流れとは異なっている。	
14	炉壁　(溶解炉、接合痕付き)	南斜面	9.1	9.0	5.8	318.3	1	な　し	上端部に水平に切り揃えた接合痕を残す炉壁片。内面は黒色ガラス化してやや棚状となっている。木炭痕は残るが、全体的には不明瞭。内面の突出部は錆色となる。胎土は籾殻を多量に混じえたもの。上下逆の可能性もあり。	
15	炉壁　(溶解炉、接合痕付き)	北東部窪み	13.1	18.9	4.2	730.6	1	な　し	前者と同様、上面に水平に切り揃えた接合痕を残す大型の炉壁片。内面は左右でガラス化の調子が異なり、大きく三種類の質感からなる。右側端部寄りは無光沢で黒褐色の発泡部で、羽口周りの滓化の特色をもつ。中央部分は幅7cm前後が黒色ガラス質となり、やや棚状の特徴となる。左側は発泡して淡茶褐色となる。胎土は多量の籾殻を混じえており、一部に亀裂が生じている。	
16	炉壁　(溶解炉、接合痕付き)		12.1	10.2	4.8	470.0	1	な　し	下端部に水平方向の接合痕を残す炉壁片。内面は黒色ガラス化して垂れや木炭痕による窪みがやや激しい。黒色ガラス化は表面主体で、厚みは比較的薄い。胎土は籾殻を多量に混じえており、籾殻全体の方向と破面の接合痕とはズレをもつ。なお、上端部寄りにも接合痕が読み取れ、高さ方向は9cm前後の幅をもつ。	
17	炉壁　(溶解炉、接合痕付き)	表土北斜面	12.7	10.8	5.7	409.3	2	な　し	裏面の中段部分に切り揃えた接合痕を残す炉壁片。下端部は最大厚みが6cm近くあり、補修痕らしき重層部分が確認される。内面は黒色ガラス化してやや小振りの木炭痕が散在する。胎土は他と同じで、被熱は灰褐色と強めとなる。	
18	炉壁　(溶解炉、補修)		8.6	8.7	3.9	180.5	2	な　し	内面が重層した補修炉壁片。上面から右側面には黒色ガラス化した面がきれいに重層している。内面はやや垂れが強く、筋状となる。炉壁胎土の被熱は、補修の前後でかなり異なっている。当初の炉壁は籾殻を混じえた強い粘土質のもので、茶褐色に被熱しており、後者はややキメが細かく、被熱は灰色となる。胎土の差による発色差であろう。	
19	炉壁　(溶解炉、補修)	排土	13.1	10.0	6.1	420.9	2	な　し	裏面の中段に水平方向に切り揃えられた接合痕をもつ炉壁片。内面の黒色ガラス化した層が重層する補修炉壁。内面そのものは補修の前後とも黒色ガラス化しているが、裏面に残る籾殻を多量に混じえた胎土部分の発色は大きく異なる。当初の面が赤褐色で、補修面が灰褐色となるのは前者と同様。	
20	炉壁　(溶解炉、補修)	P.No.36	7.5	10.1	5.1	245.8	2	な　し	下端部の破面を中心に重層が確認できる補修炉壁片。内面の7割ほどが黒色ガラス化して一体となったもので、補修痕は部分的に残るのみとなる。内面のガラス化した表面には中小の木炭痕が連続し、部分的に瘤状やひだ状となる。補修後の壁の方が赤褐色と酸化色が強く、当初の面はくすんだ褐色となっている。構成№18,19と被熱の順序が異なるのは、補修部分が羽口の周辺に当るためかもしれない。	
21	炉壁　(溶解炉、補修)	P.No.35	10.4	11.0	6.4	365.1	2	な　し	右側面以外が明瞭に重層している補修炉壁片。内面がやや濃緑色にガラス化しており、木炭痕も連続的に残されている。5㎜大以下の錆ぶくれも数多い。左側部は重層した隙間が8㎜ほど開いている。当初の炉壁の中段には粘土単位の接合部らしき窪みが横方向にのびる。被熱は当初の面が茶褐色気味で、補修後の壁は灰色となる。こうした順序は構成№18,19と似る。	

22	炉壁　(溶解炉、補修)	南斜面	8.0	1.0	9.8	615.2	1	な　し	黒色ガラス化した内面が極めて厚い補修炉壁片。全体の厚みは8.5㎝強となる。補修前後の壁は一体となっている部分が広範囲で、中間層部分に錆色の木炭痕の目立つ部分が確認されることから補修壁と判断できる。裏面には水平方向に切り揃えられた接合痕が読み取れる。被熱が強く、やや炉床寄りの炉壁片か。	
23	炉壁　(溶解炉、補修)	北東部	9.2	12.5	6.5	529.1	1	な　し	内面が黒色ガラス化して垂れの目立つ炉壁片。上面の破面に補修壁であることを示す重層が辛うじて読み取れる。破面が発泡気味の炉壁で、補修前の壁面も黒色ガラス化している。裏面の縦断面形が下半部ほど丸みをもち、やや炉床の肩部を思わせる形状となる。なお、上半部の窪みの一部にコバルト色の斑点状の滓部が確認されるが、緑青というよりも木炭灰などに由来するカリ成分の発色と推定される。	
24	炉壁　(溶解炉、含鉄)		2.5	3.8	2.8	19.6	3	錆化(△)	裏面が錆化して放射割れが入った小さな炉壁片。内面は濃緑色にガラス化して小ぶりの木炭痕や垂れが生じている。また、含鉄部は錆化が進み、磁着はかなり弱くなっている。胎土は籾殻を多量に混じえた粘土質。	
25	炉壁　(溶解炉、含鉄)	南斜面	9.2	10.8	3.7	260.2	4	錆化(△)	分析資料№３、詳細観察表参照	3
26	炉壁(溶解炉、含鉄、補修、接合痕付き)	南斜面	13.8	15.5	5.4	865.2	2	H(○)	分析資料№４、詳細観察表参照	4
27	炉壁(溶解炉、含鉄)	南斜面	4.8	5.3	5.2	82.4	4	L(●)	分析資料№５、詳細観察表参照	5
28	羽口　(溶解炉、基部～体部)		14.5	8.7	6.5	354.0	1	な　し	外面に棚状の滓の突出部をもつ、羽口の基部から体部にかけての破片。長さは現状で14.5㎝を測る。通風孔部そのものは欠落してしまっているが、おおよその羽口の雰囲気は読み取れる。身厚は少なくとも1.7㎝以上と推定される。胎土は炉壁とほぼ同じで、多量の籾殻を混じえる。籾殻全体の方向が炉壁とは90°以上異なっている点と、羽口内面寄りの被熱が赤褐色気味であるという特色がある。外面は円筒状で、部分的にガラス質の滓に覆われ、一部は羽口胎土中の籾殻痕が露出してしまっている。外面の被熱は灰色。羽口先端部は欠落している。	
29	羽口　(溶解炉、基部～体部)		10.0	9.5	5.0	178.4	2	な　し	全体観から見て、溶解炉の羽口で、基部寄りの破片と考えられる。外面はやや弧状で、部分的に黒色ガラス質の滓に覆われている。通風孔部はナデによる粗い成・整形で、破面には炉壁との接合面らしき面が残されている。被熱は茶褐色から灰黒色、あるいはやや紫紅色と変化が激しい。胎土は籾殻を多量に混じえている。身厚は概略2.3㎝から2.0㎝程度を測る。	
30	羽口(溶解炉、体部～先端部)	P.No.35	7.8	6.9	1.9	109.5	3	な　し	外面が円筒状で、右側部が途切れている羽口先端部の破片。外面は緩やかな波状のガラス質の面で、色調は濃緑色に近い。右側部は結晶が発達した滓部と３㎜大の気孔が並ぶように残る。通風孔部の内面と基部側は破面となっている。現状の最大身厚は2.2～2.3㎝を測る。胎土は籾殻と石粒を混じえた粘土質で、外周部は灰色に被熱している。羽口先が平坦に溶損しているのは炉内への突き出し角度が弱いためであろう。	
31	羽口(溶解炉、体部～先端部)	排土	11.1	10.3	2.5	272.5	3	な　し	分析資料№６、詳細観察表参照	6
32	流　動　滓	暗褐色粘土質	4.5	4.1	3.5	112.4	1	な　し	分析資料№７、詳細観察表参照	7

と成分が近似しているとの結果を得ており（６．クボ山遺跡出土鋳造関連遺物の金属学的調査.216P）、肉眼観察の結果と合致した。羽口も炉壁も同じ胎土を使用したことは確実である。ただ、炉壁を補修した部分では、補修前と補修後とで異なる胎土が使われた（18～21）。

炉壁とは離れて試掘坑から出土した製錬滓は、製錬された鋳造原料に混じって、原料の供給元＝製錬元から搬入された可能性が考えられる（６．クボ山遺跡出土鋳造関連遺物の金属学的調査.215～216P）。

まとめ

鋳造炉壁の出土により、原料を搬入して当地域で鋳造が行われていたことが明らかになった。県内で５箇所目の鋳造関連遺跡である（第33表.206P参照）。溝状遺構等の遺構と炉壁の関係については、両者を関連づける根拠が乏しかったため、遺構から鋳造の実態に迫ることは今後の課題として残された。

宝暦４（1755）年の「神門郡萬指出帳」[5]には鋳物に関係する記事は現れない。また、昭和30年頃に調査された村内各戸の屋号にも鋳物にかかわるものは見られない。ただし、畑ノ前遺跡すぐ南の字大谷地内では、通称地名「たたら谷」が確認されている[6]。当遺跡の鋳造原料はこの「たたら谷」で製錬されたものが搬入されたと考えられる。（６．クボ山遺跡出土鋳造関連遺物の金属学的調査.215～216P）

一方で、当遺跡の鋳造業は文献・屋号・地名のいずれにも痕跡をとどめていない。操業開始時期が宝暦年間以後で短期間の内に廃絶した可能性が考えられる。

鋳造炉の操業時期は、確実な共伴遺物がないため確定できないが、出土した陶磁器や銭貨を参考にするならば、江戸時代以後の可能性が高い。前掲の「神門郡萬指出帳」[5]では、鋳物師や製鉄関連の記載は現れないので、当遺跡での操業は「指出帳」作成以後に始まった可能性もある。

註

(1) 上津郷土誌編纂委員会編『上津郷土誌』上津地区自治会、1993年３月

(2) 難波洋三「市坂の土器作り」『京都大学埋蔵文化財研究センター紀要』Ⅶ　1989年（102～105頁）

(3) 当遺跡の発掘調査に参加した秦幸正氏（中国建設弘済会）の御教示による。

(4) 当教育委員会職員西尾克己の教示による。

(5) 前掲『上津郷土誌』45P所引。

(6)『上津村誌』簸川郡上津村　上津村誌編纂委員会　1955年３月発行　1956年３月印刷190P。

第４節　菅原Ⅱ遺跡

１．調査の概要

この遺跡は菅原集落の南方に位置し、東西に伸びる小さな谷を挟んだ左右の低丘陵及び斜面に存在する。所在地は出雲市船津町1369－１他で、クボ山遺跡の西方にあたり、谷北側にある低丘陵の尾根には市道が通っている。調査対象地は市道北側斜面を１区、南側斜面を２区、谷南側の丘陵斜面を３区の３ヶ所である。当初、１・２区から調査に入る予定であったが、この地に立ち退きの民家が存在していたため、３区から行うことになった。

３区の調査は1600㎡あまりを対象に平成14年10月18日～平成15年１月17日にかけて実施した。その結果、調査区西側から建物跡、加工段、土坑等がまとまって検出した他、中央部からも建物跡や土坑が見つかった。これらの建物跡は出雲市では出土例の少ない古墳時代中期のもので注目される。一方、１・２区の調査は平成15年４月７日～８月20日に行った。１区は民家の建設及び耕作地によって地形が改変されていたため、遺構としては中世の土坑や時期不明の加工段、土坑、ピットを検出したにとどまった。また、２区も１区と同様に開墾や民家のため地山が削られていたため明確な遺構は見つけることができなかった。ただ、畑を開墾する際に二次的に堆積した暗褐色粘質土の中から縄文時代の石鏃、石斧、古墳時代の土師器、須恵器、等が混在して出土した。これらの遺物は、５世紀から６世紀初頭のものが比較的多く、特殊なものとして石錘がある。

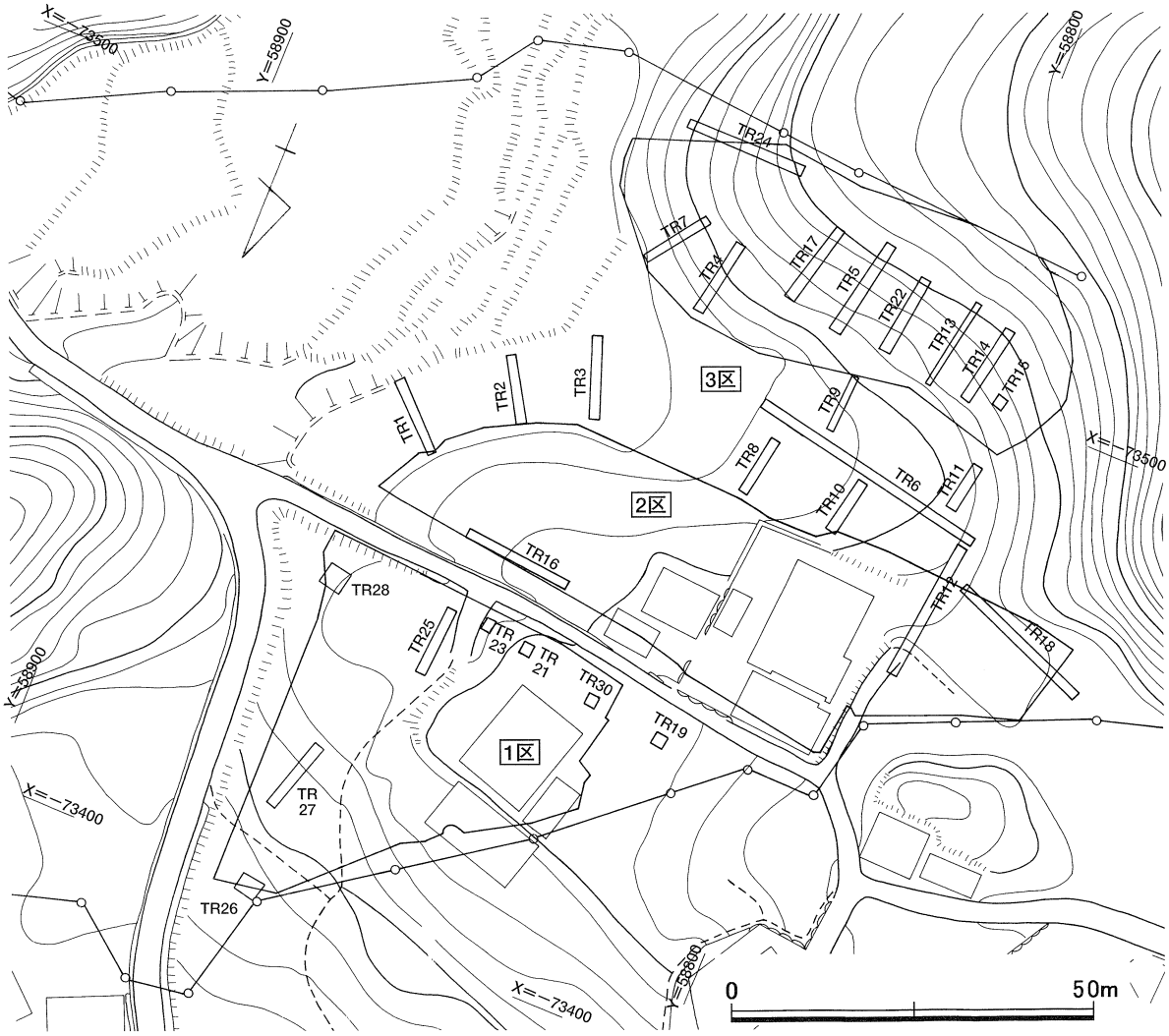
２．１区の調査

菅原Ⅱ遺跡北側尾根及び斜面に位置する調査区で、遺物が多く見つかったのは北側の緩斜面である。ここの基本的な土層は耕作土の下に暗茶色粘質土があり、その下方に淡茶色粘質土、茶色粘質土等が堆積していた。遺物は淡茶色粘質土を中心に上下の土層から、須恵器、土師器、中世土器、唐津焼・備前焼の陶磁器、青磁等が混在して出土した。検出した遺構としては中世のものと考えられる土坑や時期性格とも不明な土坑やピットがあり、北端からは桑を栽培したときに掘られた溝が数本見つかった。また、斜面上方には東方向に伸びている尾根の中央に市道が通っており、この道に接して平坦地が２段にわたって造成されている。上段は最近まで民家が存在していたところで、下段は明治時代に宅地として整地され、現在は畑地となっている。この下段の東端に元の地形がわずかに残っていたため、ここから時期不明の掘立柱の建物跡1基を検出するとともに、須恵器や土師器などの遺物が若干出土した。

１）検出した遺構

土坑１（第39図）

調査区北側の急斜面から緩やかな斜面に移る場所から検出したもので、145㎝×95㎝の小判形を呈し、深さは14㎝あまりである。床面はほぼ平らで、10㎝～20㎝大の石が4個壁際に近いところの床直上に置かれていた。また、この土坑の南側50㎝のところからほぼ完形の中世土器1点を検出した。この土器は坏で、土坑の上場とほぼ同じレベルから出土しており、元の位置をさほど動いていないと思われることから土坑に伴うものと考えられる。また、土坑を埋めた土からは中世土器片とともに須恵器の小破片が出土したが、須恵器片は埋め戻し時に混入したものと思われる。なお、こ



第34図　菅原Ⅱ遺跡　調査区配置図（S＝1/1,000）

の土坑は中世の墓に小判形の墓壙で床面に自然石を伴うものもがあることから古墓になる可能性を持っている。

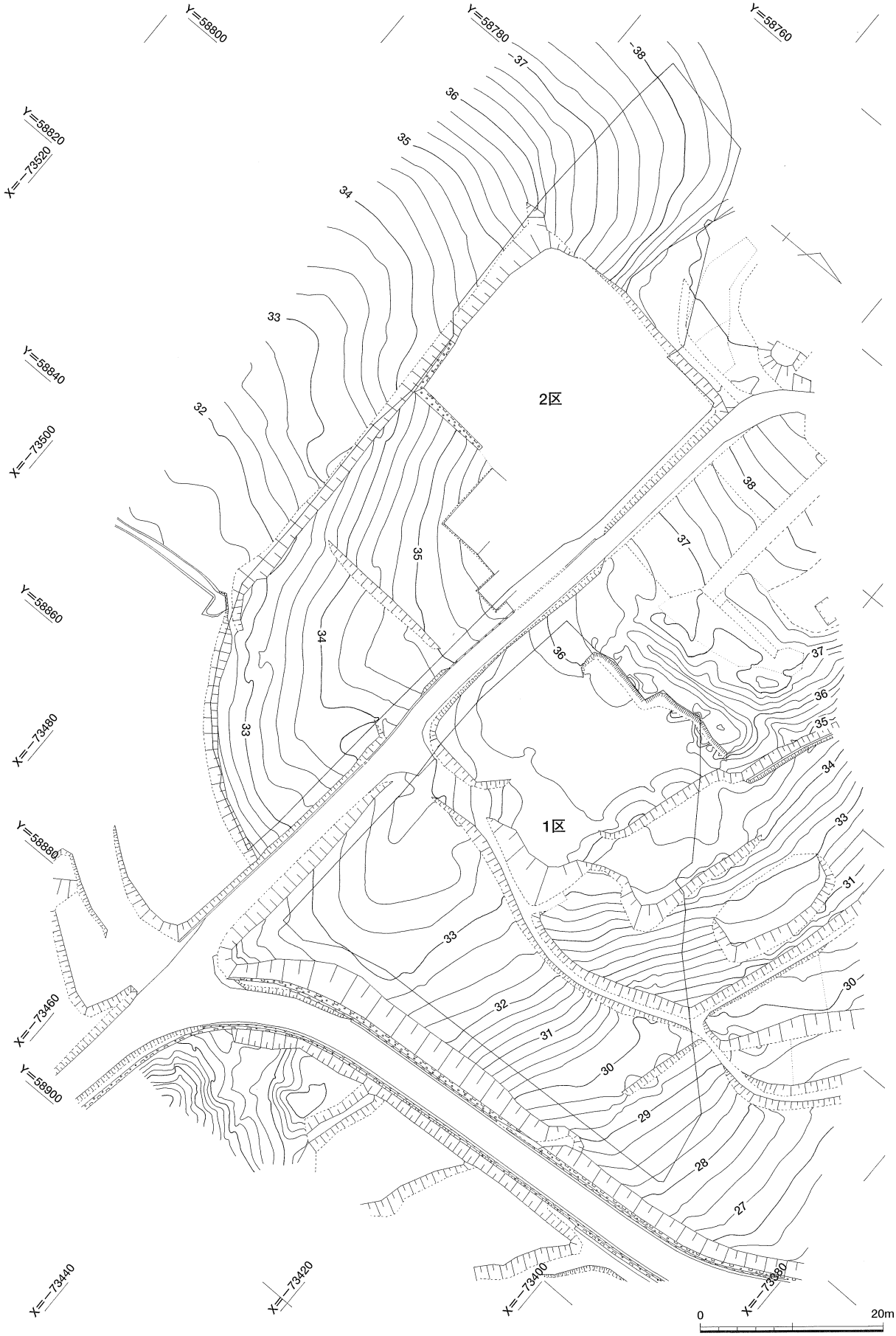
土坑１に伴う中世土器（第39図－１）は、口径9.2㎝、器高2.5㎝、底径4.6㎝を測る坏である。底部はヘラ切りによって切り放されており、やや上げ底ぎみになっている。中心部分の器壁はやや薄く、端に行くにしたがって厚みを増している。底部から体部にかけては内湾ぎみに上がり、口縁部の手前でやや外反している。胎土に金雲母を含み、焼成はやや不足ぎみである。この土器は蔵小路Ⅲ期に近い形態を呈しており、15世紀前後のものと思われる。

土坑２（第39図）

この土坑は、土坑１の北東約２mの位置から検出した95㎝×90㎝の楕円形を呈したものである。底は斜面の下方側に寄ったところにあり、径約30㎝のほぼ平らな床面を持つ。深さは30㎝あまりで、中には茶褐色、灰茶褐色、淡茶褐色の粘質土が詰まっていたが遺物は存在していなかった。性格時期ともに不明である。

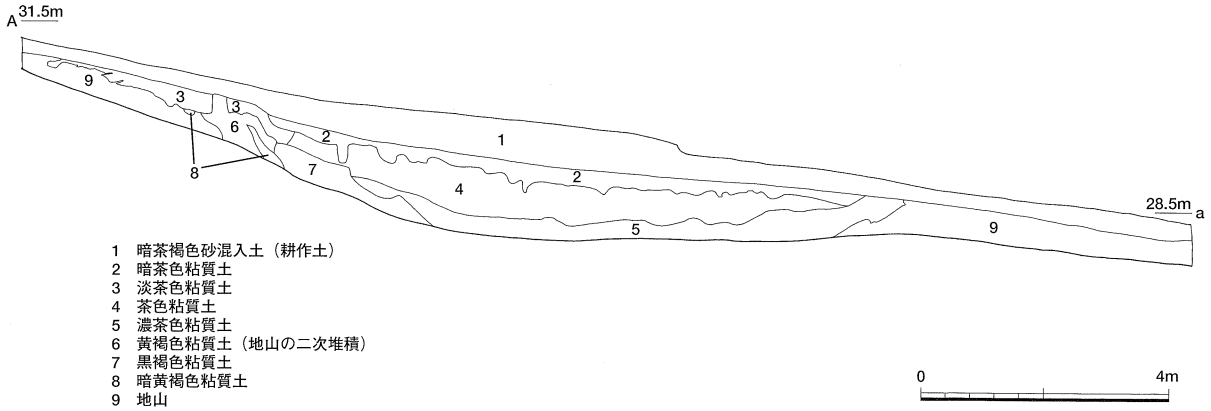
土坑３（第39図）

この土坑は、北斜面中ほどの東側から見つかったもので、125㎝×80㎝の不整台形状を呈している。底はやや傾斜しており、深さは20㎝あまりを測る。この坑の中には10㎝～25㎝大の自然石が20個あまり投げ込まれていた。これらの石は床面直上から存在しており、石の上には地山の土が混っ



第35図　菅原Ⅱ遺跡１・２区　調査前地形図（S＝1/600）

第36図　菅原Ⅱ遺跡１・２区　調査後地形及び遺構配置図（S＝1/600）



第37図　菅原Ⅱ遺跡１区　土層実測図（S＝1/120）

た土が覆っていた。時期は遺物が出土していないので不明で、性格についても不明である。

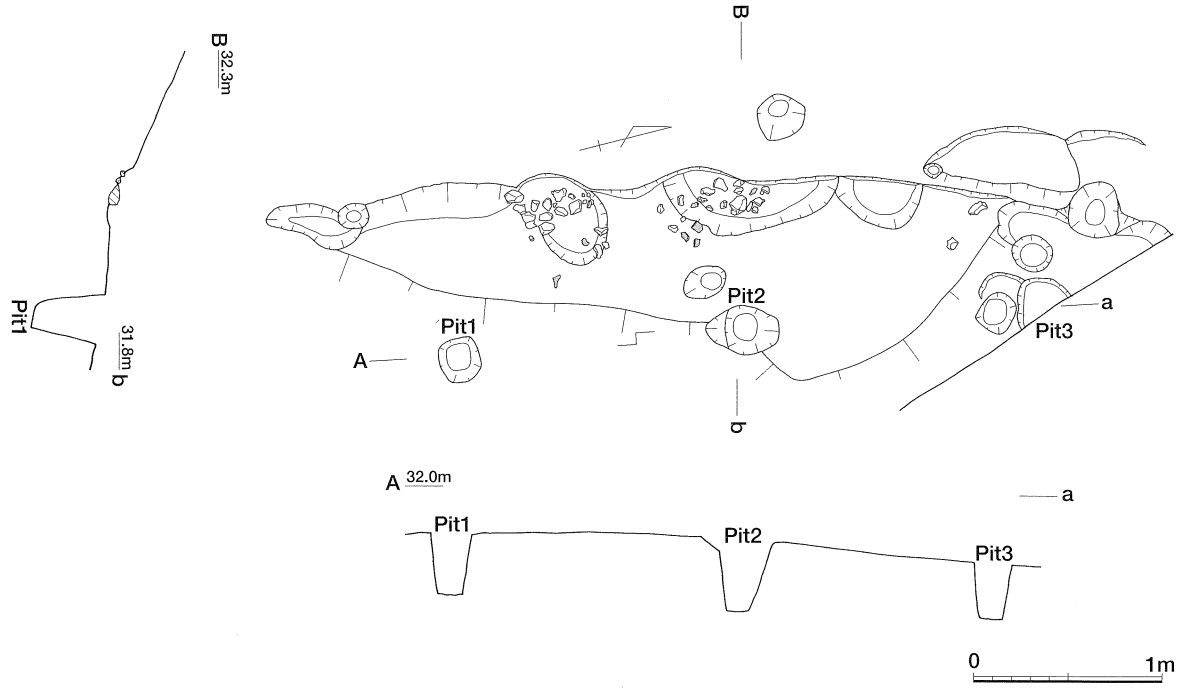
加工段１（第38図）

南側尾根の東斜面で検出した長さ４m前後の加工段で、段の高さは15cmあまりである。平坦地は長さ3.5m、最大幅1.1mを測り、前面が崩れているものと思われる。上方の壁際に拳大の自然石を伴う土坑が２基あり、この部分から須恵器、土師器の小破片が出土している。また、平坦地の前方には一直線に並ぶピットが３基見つかった。その間隔は1.3mと1.5mで、ややばらつきが見られるが、これらの穴はいずれも30cm～40cmの深さを持ったしっかりしたもので、建物の柱穴になる可能性が高い。ただ、加工段との関係は明確でない。

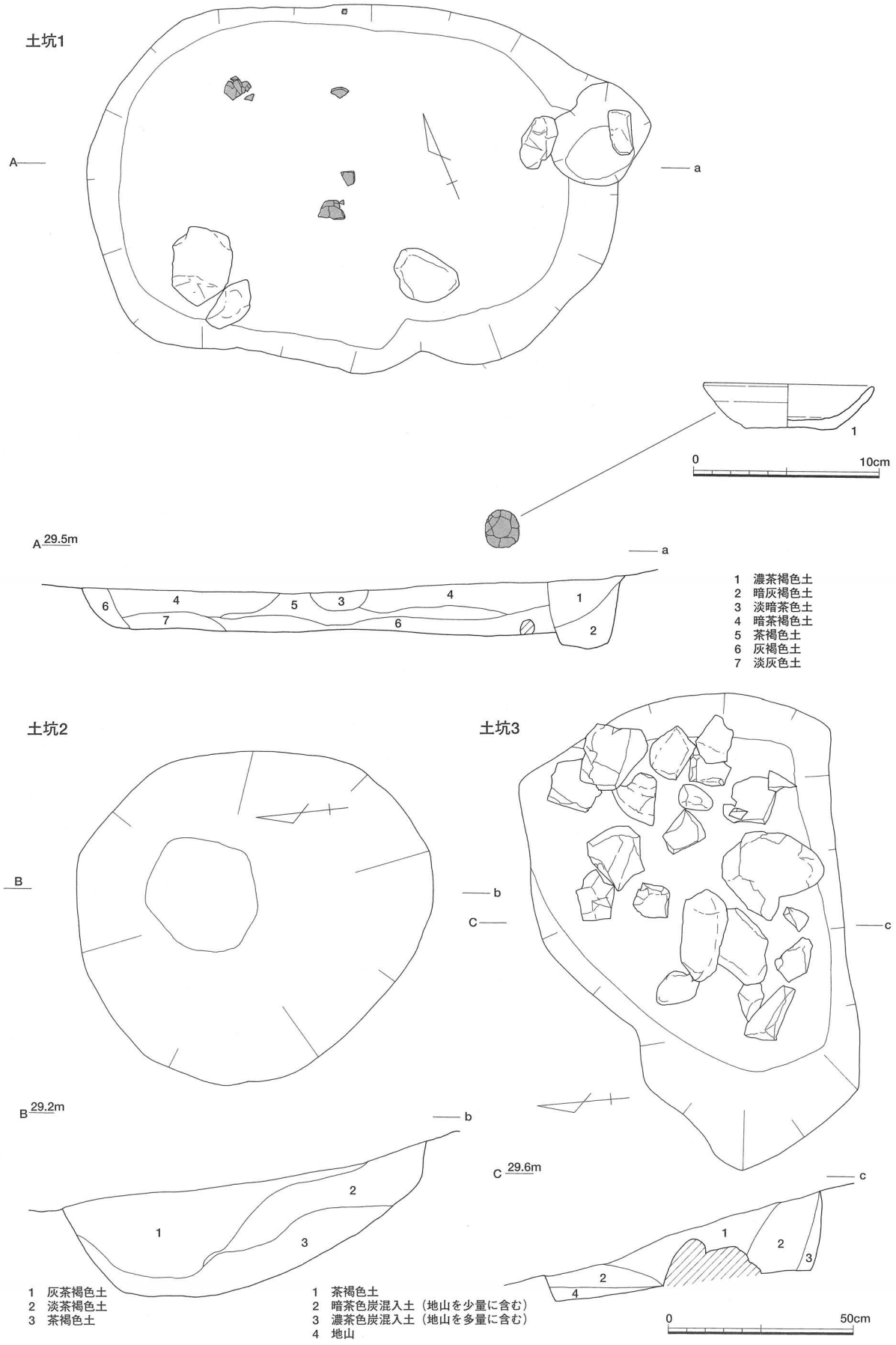
２）遺構に伴わない遺物（第40図）

１区から出土した遺物の大半は北側斜面の茶褐色粘質土から見つかったもので、その他、南側の宅地造成地から若干検出されている。２～７は須恵器である。２は古式須恵器の高坏ないし器台の口縁部で、推定口径28.0cmを測る。頸部には２条のしっかりした断面三角形の突帯が廻り、短く外反して口縁部にいたっている。口縁部は中ほどにやや膨らみを持ち、口唇部は丸い。３～５は古墳時代後期の蓋坏で、３は天井部と体部の境に２本の沈線を廻らしており、天井部には回転ヘラケズリを施している。４・５は1.1cm～1.4cmの立ち上がりを持つ坏身で、４がやや古い様相を呈している。６は壷の頸部から口縁部にかけての破片。推定口径12.4cmで、頸部は外側に大きく反って丸い口縁部にいたっている。７は推定口径11.9cm、高さ4.2cmを測る坏で、底端部の器壁は厚く、底部から体部下方にはヘラケズリが施されている。体部から口縁部にかけては若干外反している。

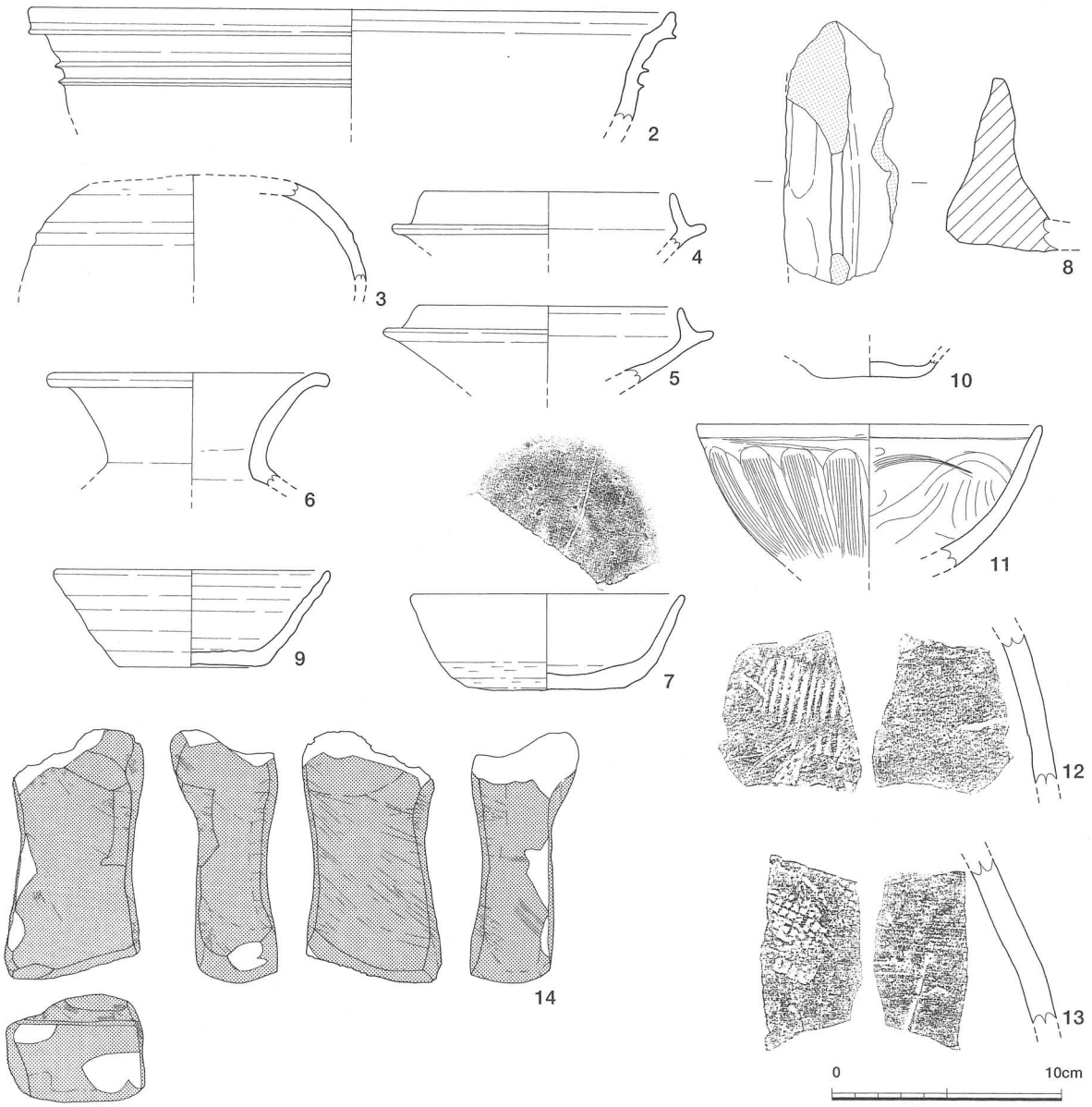
８は竈の破片である。９は土師器の坏で、口径12.0cm、器高4.2cmを測る逆「ハ」の字形に開いたタイプのものである。10は底径4.5cmを測る中世土器の皿ないし坏の底部片。11は竜泉窯製（Ⅱ類）の青磁の碗で、外側には蓮弁を削りだし、その上から櫛目を縦に入れた蓮弁文、内側には草花文と思われる文様が描かれているものである。12・13は備前焼きの胴部片で、14は砥石である。



第38図　菅原Ⅱ遺跡１区　加工段１実測図（S=1/40）



第39図　菅原Ⅱ遺跡１区　土坑１・２・３実測図（遺構：S＝1/15，遺物：S＝1/3）



第40図　菅原Ⅱ遺跡１区　出土遺物実測図（S＝1/3）

３．２区の調査

この調査区は１区と市道を挟んだ南側の尾根及び斜面に所在する。西側は民家によって地山が一部削り取られ、東及び南側斜面は表土のすぐ下に地山が存在していた。遺物は北側中央の尾根で集中して見つかった。ここの基本的な土層は表土の下に遺物を含む黒褐色粘質土があり、その下に茶褐色粘質土、地山がある。黒褐色粘質土から出土した遺物は縄文時代、古墳時代～中世のもので、縄文時代の石器及び古墳時代の土師器、須恵器が大半を占める。遺構は明確なものは検出できなかったが、時期性格共に不明な土坑やピットが30あまり見つかった。

１）検出した遺構（第41図）

今回の調査では、時期性格ともに明らかでない土坑やピットが北側尾根部分から多数見つかったが、ここでは中から遺物が出土した土坑について述べることとする。

土坑１

この土坑は調査区北側の尾根部分から見つかったもので、90㎝×80㎝の楕円形を呈している。深さは40㎝あまりを測り、底は丸く窪んでいる。坑の中には茶褐色粘質土及び黒褐色粘質土が詰まっ

ていた。遺物は黒褐色土中から土師器小破片30片あまりを検出した。この黒褐色土は、調査区北側尾根上に広く堆積していた土で多くの遺物を含んでいた層である。

土坑２

土坑１の北東約４mのところから検出したものである。75㎝×60㎝の楕円形を呈し、東側は新しい落ち込みによって切られている。床はほぼ平らで、中には土坑１と同じ土が詰まっていた。出土した土器は須恵器片１点、４㎝以下の土師器片30点あまりである。

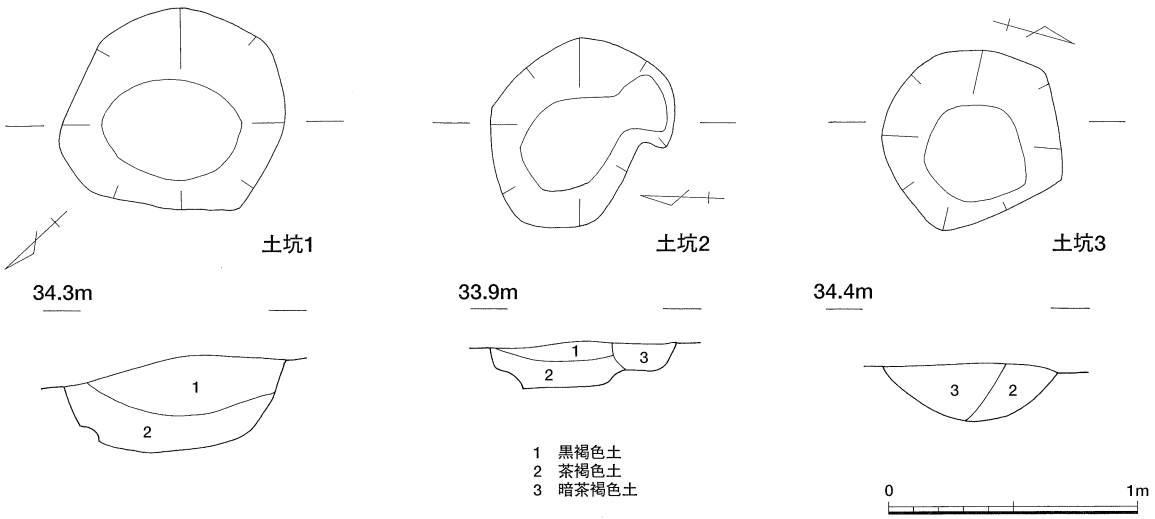
土坑３

土坑２の北側４mあまりのところから見つかった径70㎝の不整円形の土坑である。深さは25㎝で、底は丸く窪み、中に詰まった土層は他の土坑と同じである。遺物は小さい土師器片が５点あまりである。

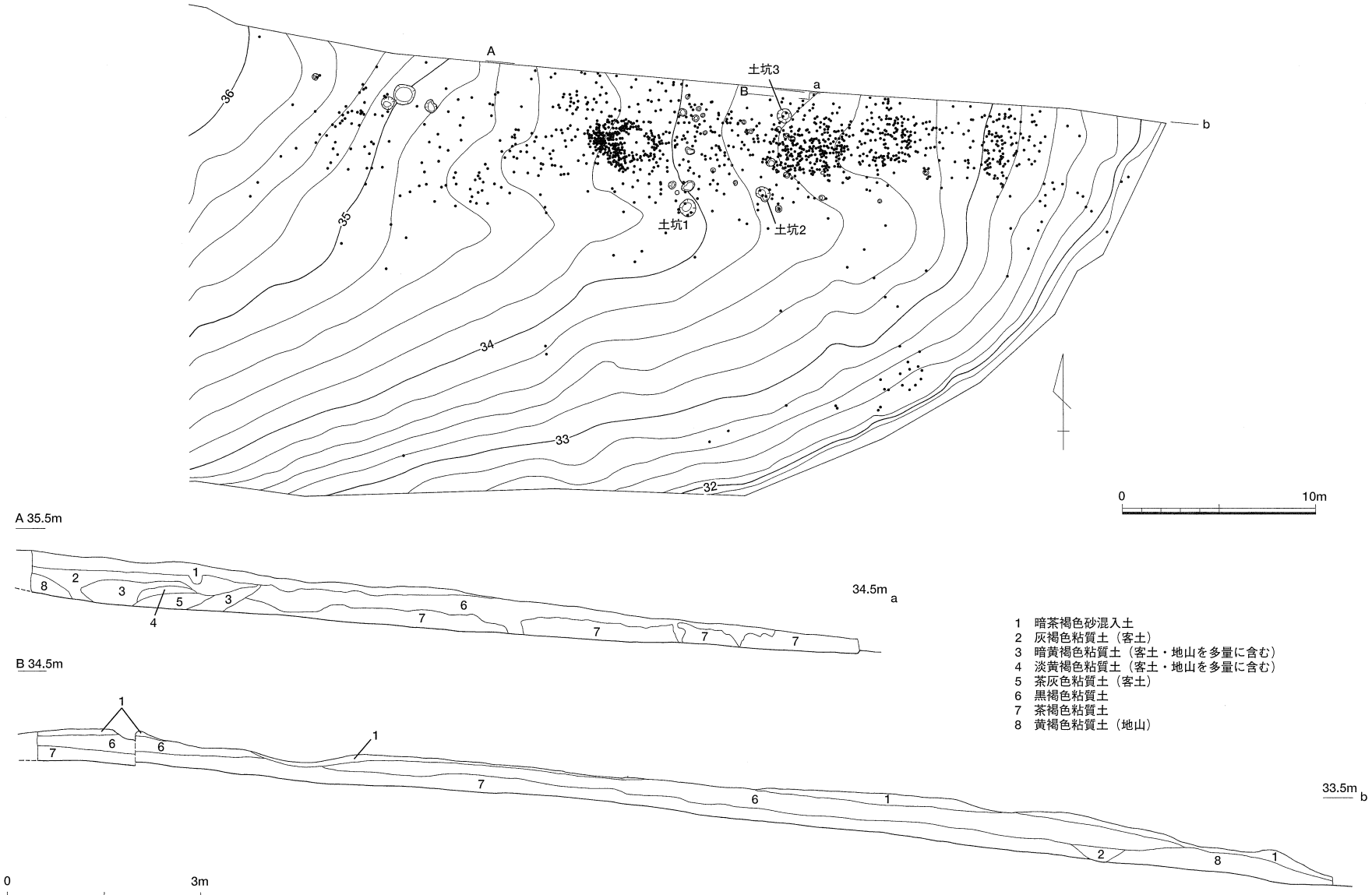
２）出土した遺物（第43・44図）

１～14は古墳時代の土師器である。１～４は壷ないし甕の口縁部片で、頸部から口縁部の境の稜は退化して丸みを持つ。１・２は口縁端部が平らで、３・４は端部が丸い。１の口縁部は若干外側に傾むいて立ち上がっているが、中ほどはやや膨らみを持っている。２～４はやや外反して端部にいたっている。これらの土器は古式土師器の退化した形態を呈しており、５世紀代のものと考えられる。５は器台筒部の破片と思われるもので、内面上方は横ナデ、下方はミガキ風の調整が施されている。６は全体的に薄い壷甕類の頸部片である。７～14は高坏片。７・８は口径17.0㎝～18.5㎝を測る坏部片で、逆ハの字形に外側に開いている。坏部の下方には段がついており、上方は口縁部の手前でやや外反している。口縁端部は丸く尖り、坏部の高さは4.0㎝～4.5㎝あまりである。９～12は脚部片で、９は底部径11.5㎝を測り、内外面ともに赤色顔料が塗られている。10～12は脚の筒部片。10は外面に赤色顔料が施され、11・12は内部にヘラ状工具でケズリを施している。13・14は坏部下方の破片で、器壁が厚い。

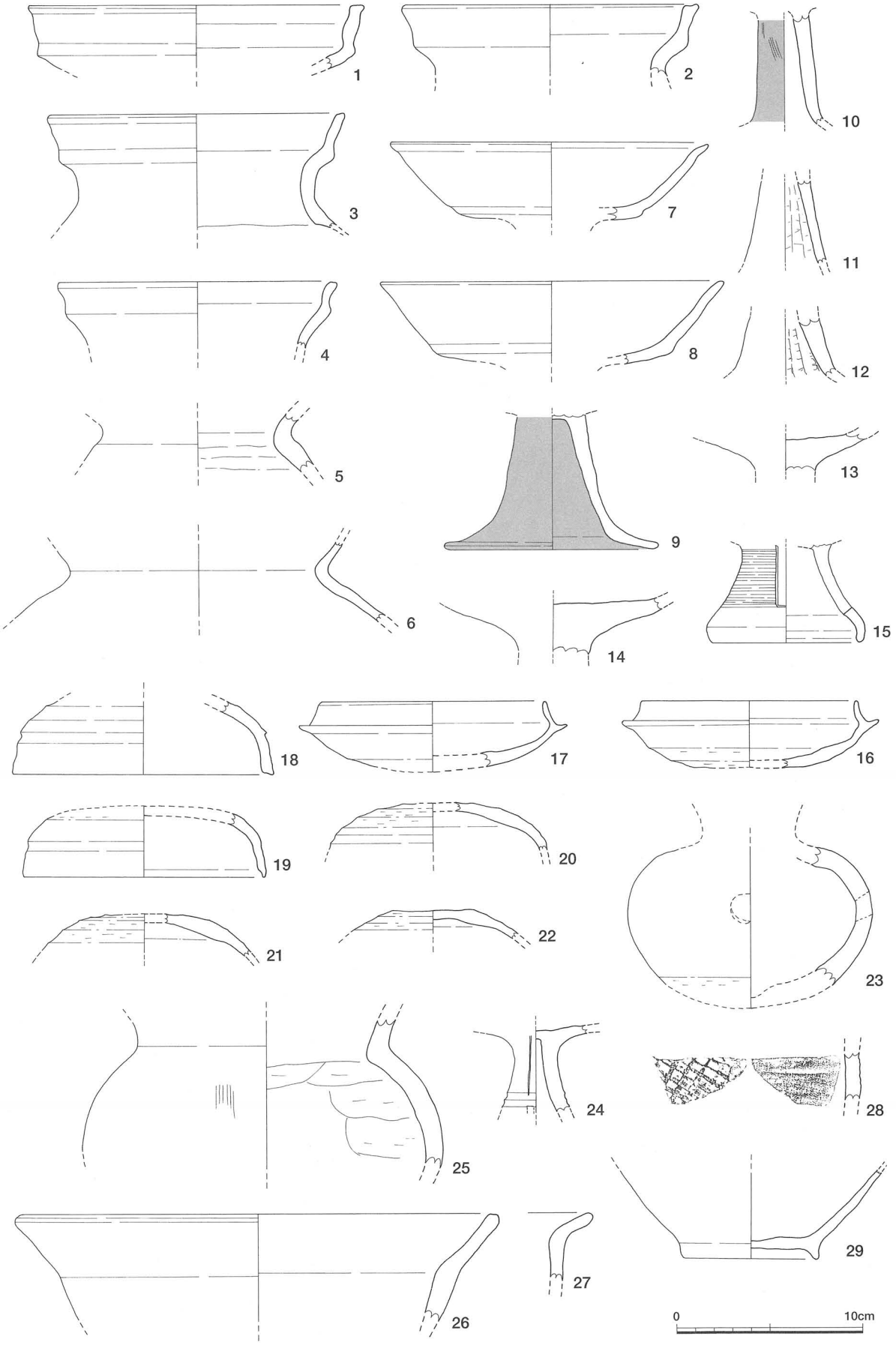
15～24は須恵器片である。15はやや古いタイプの高坏の低脚部片で、底部径8.2㎝、底部高5.1cmを測り、内湾して端部にいたっている。外面にはカキ目が施され、長方形の透かしがあるが、数は不明である。この高坏は古式タイプの中ではやや新しいものと思われる。16～22は蓋坏片で、16・17が身、18～22が蓋になる。身はいずれも口径がやや大きく11.5㎝～12㎝を測り、立ち上がりの高



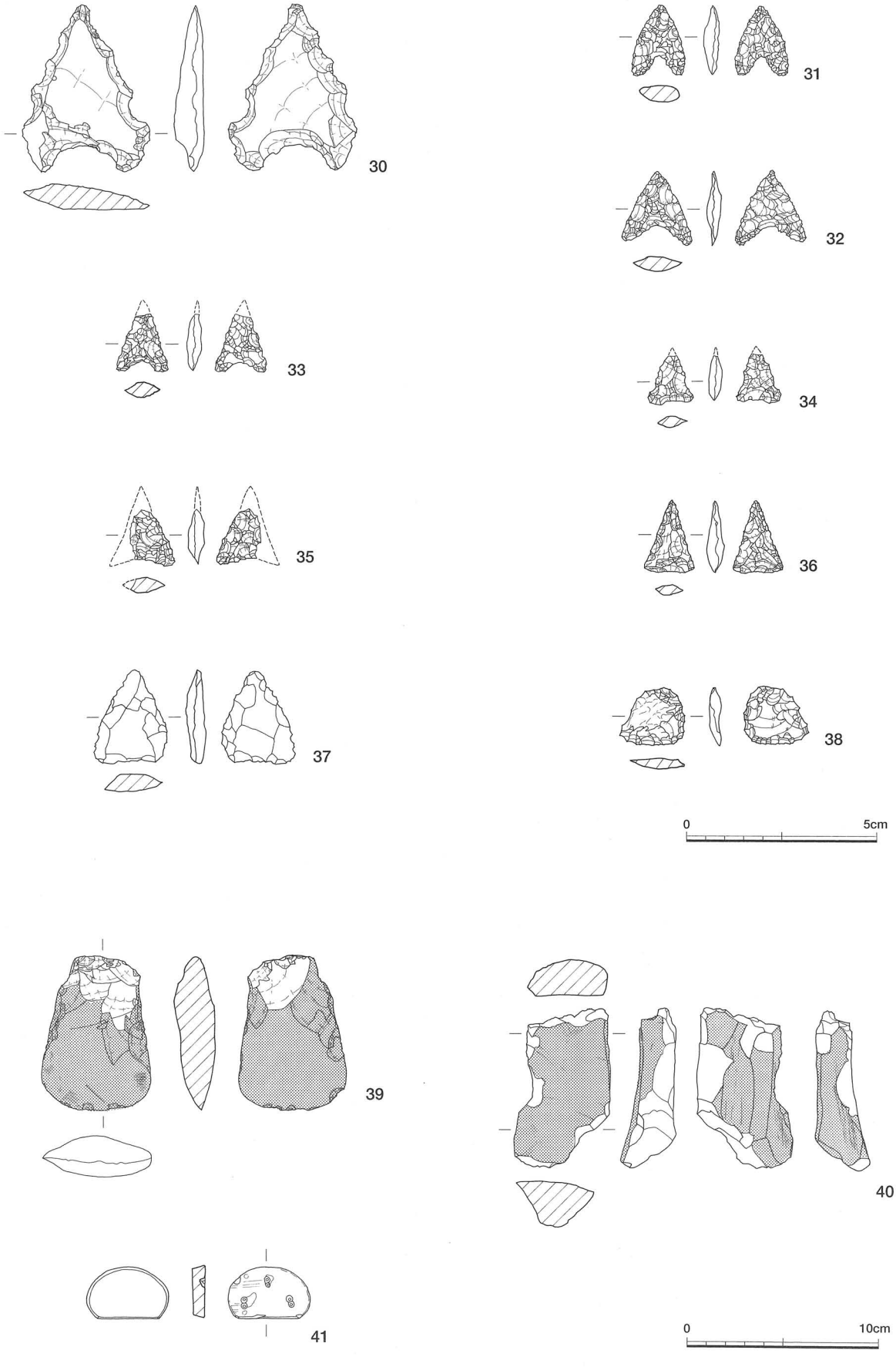
第41図　菅原Ⅱ遺跡２区　土坑１・２・３実測図（S＝1/30）



第42図　菅原Ⅱ遺跡２区　遺物出土位置及び土層実測図（遺物出土位置図：S＝1/300，土層図：S＝1/90）



第43図　菅原Ⅱ遺跡２区　出土土器実測図（S＝1/3）



第44図　菅原Ⅱ遺跡２区　出土石器実測図（30～38：S＝2/3，39～41：S＝1/3）

さは1.0㎝～1.3㎝である。体部下方 には回転ケズリが施されている。受け部は16がやや上方、17がほぼ水平に作られている。18、19の蓋は天井部と体部の境に段が付くもので、口唇部も鑿形の段を有する。19が18に比べやや退化した形態を呈している。20～22の天井部片はいずれも回転ケズリがある。22には窯印と思われる沈線があるが破片のため全体の形は不明である。またこの土器片は身の底部片になる可能性があるとともに、他の蓋よりやや新しい形態を呈している。23は瑞の体部片で、最大径13㎝を測る大形のものである。下部にはケズリが施されているが、肩部付近に沈線等の装飾は施されていないシンプル作りとなっている。器壁はやや厚く、古いタイプの瑞になるものと考えられる。24は新しいタイプの高坏片である。脚部の中ほどにやや幅広の凹線が２条廻る。その上方には透かしを意識した縦方向の沈線が描かれている。

25～27は古墳時代後期～奈良平安時代の土師器である。25は壷の頸部から胴部にかけての破片で、やや厚手の作りで、内面にはヘラケズリ、外面の一部にはハケ目がある。26は頸部から口縁部にかけて「く」の字形に屈曲した形態を呈した破片。27は甑と思われる口縁部片である。28は外面に格子状のタタキを施した中世須恵器片で、いわゆる亀山・勝間田系の土器である。外面は淡灰色、内面は暗茶褐色を呈し、焼きは硬い。29は土師器の碗で、底径6.2㎝あまりを測る。底部には高さ0.5㎝の断面三角形の高台が廻る。内面の底端には指によって回転ナデが施され、浅く窪み、体部は薄作りとなっている。

30～40は縄文時代～弥生時代にかけての石器である。30～38は無茎石鏃で、それらの石材は30・36はサヌカイト、37が堆積岩、その他は黒曜石である。30は長さ4.4㎝、幅3.3㎝を測る大形の鏃である。基部のえぐりは浅い円弧状を呈し、脚部の外側は内湾している。両側縁にはやや幅広の押圧剥離による調整加工が施されている。31・32は三角形のえぐりを持つものである。31は長さ1.9㎝、幅1.4㎝、えぐりの深さ0.5㎝を測り、両側やや内湾して丸みを持っている。脚端部は丸い。32は長さ1.9㎝、幅1.8㎝、えぐりの深さ0.5㎝あまりである。脚部は先端に向かって尖っている。33～35は浅い円弧状のえぐりを持つものでいずれも先端を欠いているが1.5㎝～1.9㎝あまりの長さを持つものと思われる。36・37は平基無茎式で、36はやや細長の二等辺三角形を呈し、37はやや丸みを持った幅広のものである。38は側縁に調整加工したもので石鏃の未製品になる可能性がある。

39は基部を欠いているが残存長８㎝あまりの磨製石斧で、基部より刃部の方が幅が広い。刃部は蛤刃で石材は安山岩である。40は流紋岩の砥石で両端を欠き２面が使用されている。41は石錘の丸鞆で、無孔タイプのものである。横の幅4.2㎝、縦の長さ2.8㎝、厚さ0.6㎝あまりを測り、石材は黒色の貢岩である。表面は研磨によって光沢がでている。

４．３区の調査

遺跡周辺の歴史的環境～菅原集落の開発

菅原集落周辺の景観が現在の姿にかなり近くなったのは18世紀後半であった。

この時期、松江藩直営の大規模な斐伊川治水事業が相次いで実施されている。それまでは、上津付近の斐伊川の川筋は上之郷村（上島町の旧名）山の手と対岸の阿宮山の手の二筋有り、中間の中州上に中ノ島村が営まれていた。この中州を破壊して新たに土手を築く工事が明和７（1770）年から安永２（1774）年にかけて行われた。砂の堆積による斐伊川河床の上昇に対処するのが目的で、上津の中之島の他約百箇所にのぼる斐伊川の中州が破壊された。これにより斐伊川の流路が安定し、

左岸側土手の外に安定した耕地が生まれ、現在の上島町の基礎となった。

また、上津丸山（近世上之郷村と船津村の村境であった）から下流の来原岩樋にかけて旧来の土手の内側に鯰尾土手を新設する工事が天明２（1782）年に完成している。これは、下流の来原岩樋の取水口が、やはり砂の堆積で使えなくなりつつあったので、斐伊川主流の西岸に取水用の水路を新設したのである。上流の上之郷村側に鯰尾土手を新設する工事も、安永７（1778）年に完成している。

菅原地区でも、上津丸山を一部削って、それまで蛇行していた斐伊川を直流させる工事が安永４（1775）年に完成した(1)。新たに築かれた左岸側土手の外には安定した耕地が生まれ、農村としての開発の条件がこの時期に整った。

遺跡の位置、原地形と層序（第45～47図）

３区は、菅原集落の西端と重なる１区、２区よりもさらに西側の小丘陵に位置する。民家はなく、桑畑として利用されていた。

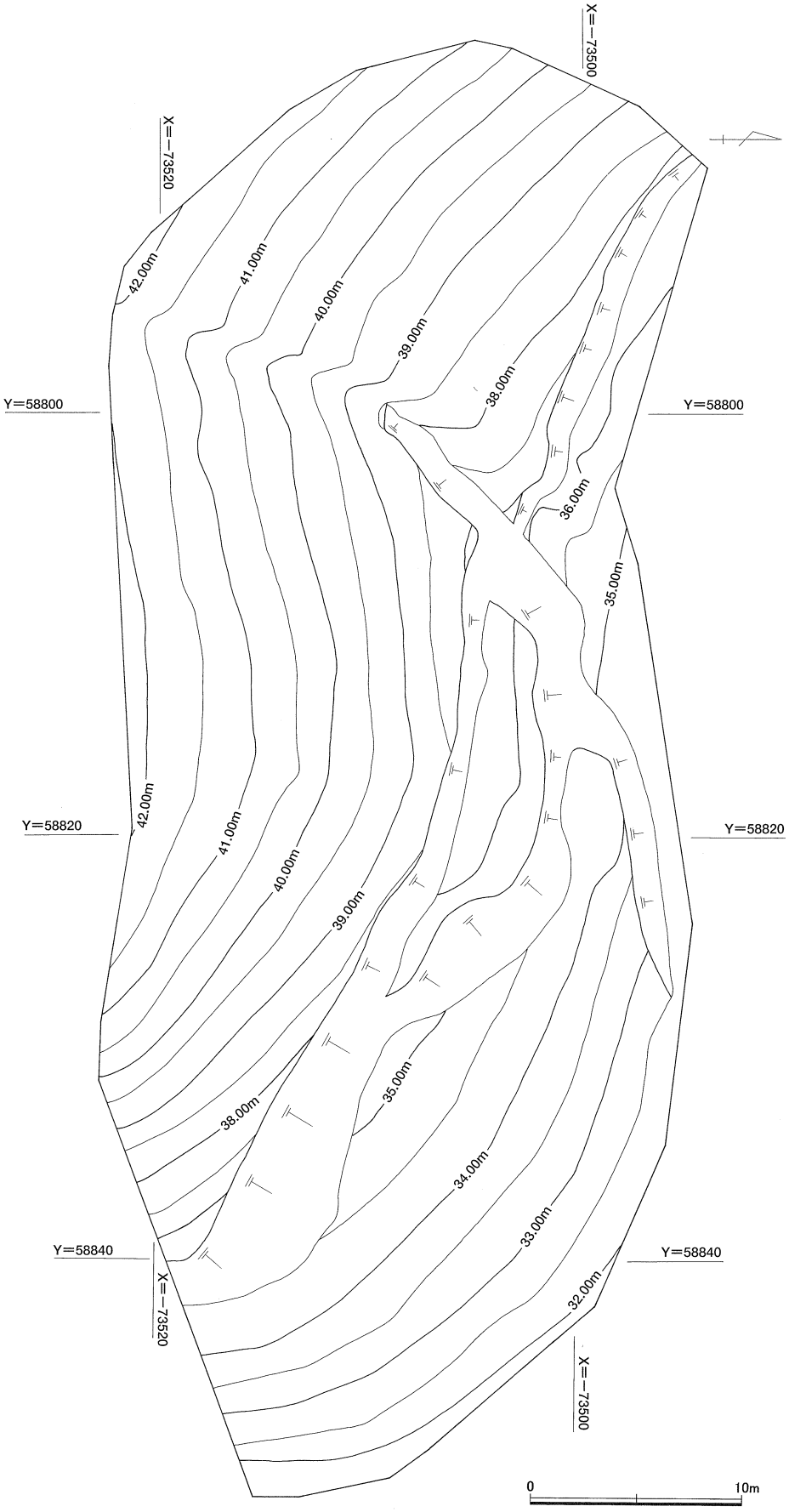
調査区のすぐ西には南西の高丸城から派生する急峻な尾根がひかえ、菅原Ⅲ遺跡（通称地名奥ザコ）と菅原Ⅱ遺跡を隔てている。調査区東半分は表土直下に赤橙色の地山面があって、現在と大きく変わらない小丘陵地形であったと推定されるのに対し、急峻な尾根と小丘陵にはさまれた調査区西半分には狭く深い谷が入り込んでいた。小丘陵の最も高い部分の地山面で標高41.5mであるのに対し、谷底部の地山面は標高35mで、６～７m低かった。この谷に、周囲から灰オリーブ色の土砂が多量に流れ込み、1.5m～２mの厚さで堆積した結果、古墳時代中期までには調査区東半分より１～２m低い程度のレベルに達し、現在の地形に近くなった。灰オリーブ色の堆積土は、周囲の山の基盤岩が風化したものである。

この部分を深掘りしたトレンチ調査で、灰オリーブ色層から縄文時代の石器が出土した（第66図５・６）が、原位置ではなく灰オリーブ系の土とともに流入してきた可能性が高い。堆積土の下の地山面からは、遺構は検出されなかった。そして灰オリーブ色土層中からの出土遺物もこの２点のみであったので、調査を灰オリーブ土上面の遺構面（古墳時代中期）までとした。建物２や加工段１は、赤橙色の地山と灰オリーブ色の堆積土の境界付近で検出、土坑2などは灰オリーブ色の堆積土の上面で検出した。

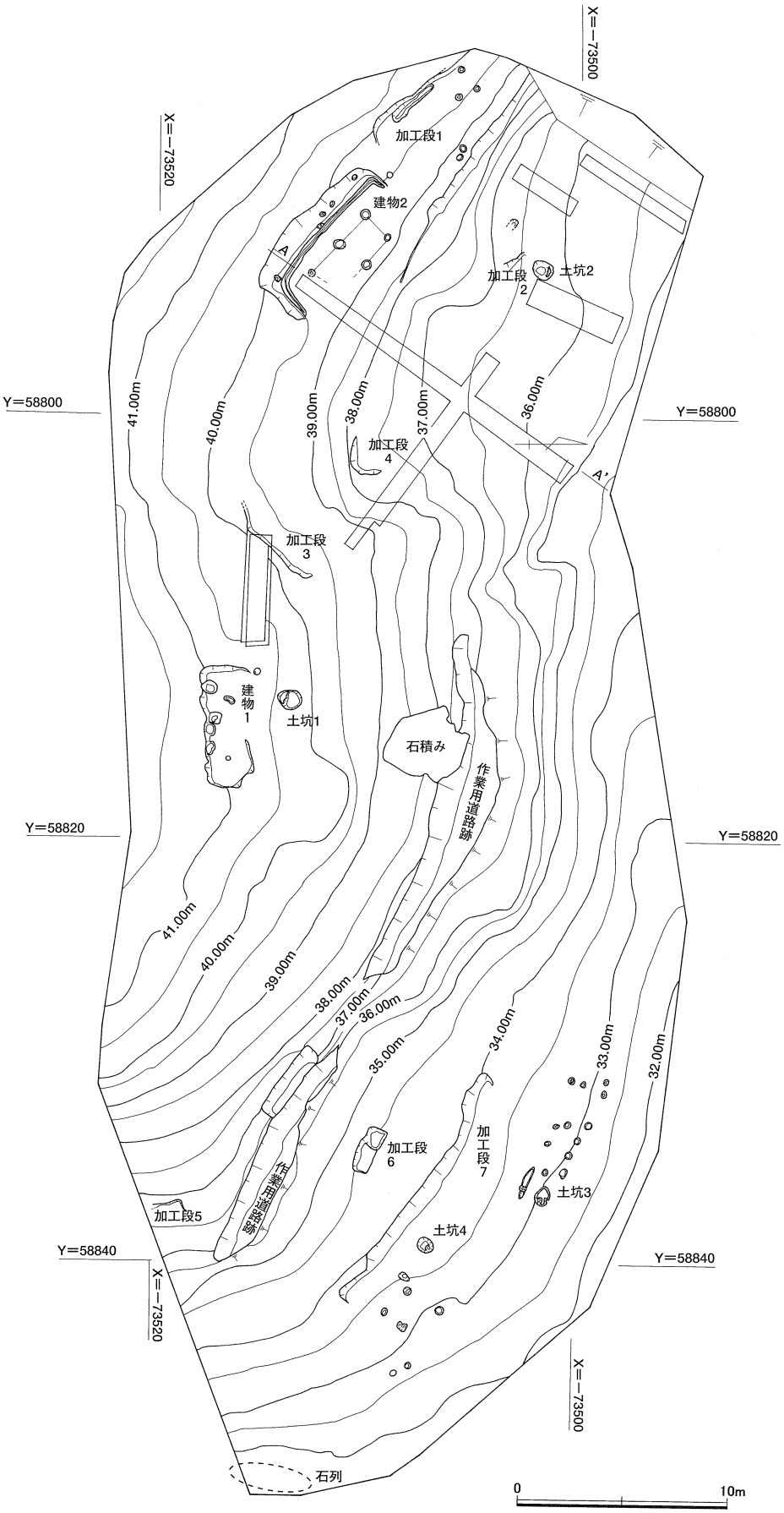
遺構と遺物

建物１（第48、49図）

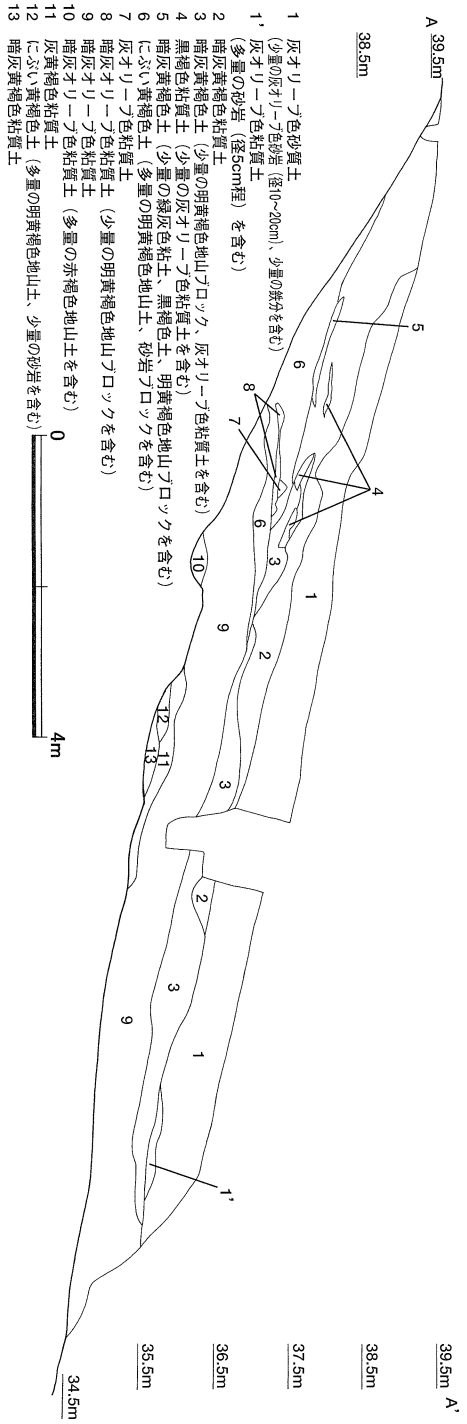
遺構　調査区中央南寄りで検出した古墳中期の建物跡である。褐色系の土（第49図、Cライン１～４層）をとり除き、赤橙色のよくしまった床面まで掘り下げた時点で、土坑を３穴確認した。建物の山側（南側）の壁際に３穴が並ぶような配置である。土坑の位置と大きさから、古墳中期の竪穴住居にしばしば見られる壁際土坑と判断した。床面には太く深い柱穴は見られず、径20㎝、深さ５㎝に満たない、ごく浅いピットを検出したのみであった。柱を据えるために掘った本格的な柱穴ではなく、柱を立てたために重みで地面が沈んで生じた圧痕と見られる(2)。山側の壁から北へ２mの位置で床面がわずかに盛り上がっており（第49図平面図及びCライン土層断面）、これが建物床面の北端と見られる。但し、Cラインより西の２mの間では、この盛り上がりを平面的に確認すること



第45図　菅原Ⅱ遺跡３区　調査前地形図（S＝1/300）



第46図　菅原Ⅱ遺跡３区　調査後地形及び遺構配置図（S＝1/300）



第47図　菅原Ⅱ遺跡３区　基本土層図
（S＝1/100）

ができなかった。

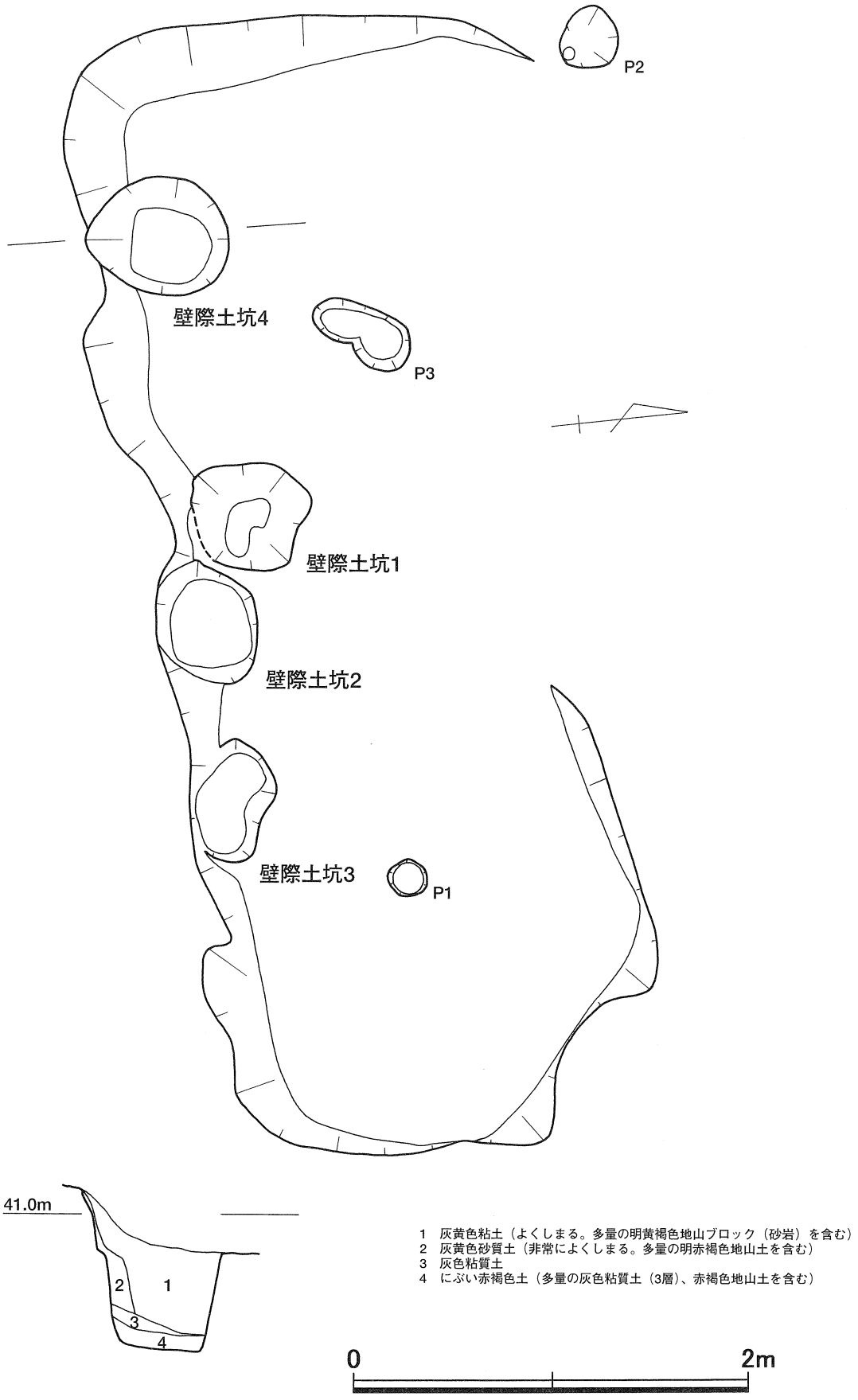
この盛り上がりを建物１の北辺とすると、建物１は南北方向の長さ２mに対し東西方向は６mという、細長い長方形の平面形になる。造成された平坦面の範囲もここまでであり、谷側に土を盛って平坦面を広くするなどの加工は行われなかったと思われる。仮に、建物１が方形で盛り土により平坦面が造成されたと想定した場合は、同時期の遺構である土坑１を建物１の床面が覆ってしまうことになるが、建物１の床土が土坑１に侵入しているという状態も見られない。建物１は、谷側に広がることなく長方形であったと考えられる。

東端には床面より一段高い、1.5m×0.6mのステップ状の平面が造成されていた。

当初はこの面を最終の床面と判断していたが、サブトレンチによりさらに深くなることが判明した。地山を削り出した建造当初の床面の上に、赤褐色ブロックを多量に含むよくしまった褐色の土が盛られていたのである（第49図Aライン６層）。この、貼り床土を取り除いた当初の床面では、壁際土坑１～３の北の壁際にもう１基の壁際土坑が作られていた。埋土は、他の３基が自然に堆積したと見られるしまり悪い褐色系の土であるのに対し、土坑４だけは灰黄色のよくしまった粘土であった。自然堆積ではなく、建物の改修に際して貼り床を行った際に、床面が陥没しないよう人為的に充填した土と考えられる。

土層及び遺物の出土状況　１層・２層は表土であり、無遺物層である。３層はしまりの悪い暗灰褐色土である。その下の4層は、壁面が崩れたと見られる地山ブロックを含んでおり、山側の壁際に堆積している。５層は壁際土坑１の埋土である。しまりが悪い暗褐色土で、自然堆積であろう。建物廃絶後、最初に壁際土坑内に４層が堆積し、次に地山ブロックを含んだ４層が堆積し、その後３層が徐々に堆積した。遺物の多くは４・５層より上の３層から出土したので、出土位置が山側に寄っている遺物ほど出土位置が高くなる（第49図Aライン）。ただ、この傾向に反して山側壁際にもかかわらず低い位置から出土した遺物が２点存在する。壁際土坑１の上面及び埋土（５層）から出土した1・3・17である。４・５層で出土したこの３点については、直接建物1に伴う遺物である可能性が高い。

しかし、この２点以外の遺物はすべて３層からの出土であり、建物廃絶後しばらく時間をおいてからこの場所にもたらされたものである。従って、これらは建物１に伴う遺物ではない。廃絶した



第48図　菅原Ⅱ遺跡３区　建物１実測図（完堀後）（S＝1/30）

建物跡が完全に埋没せず窪みとして残っていた時期に、土器の廃棄場所として利用されたのであろう。

遺物の出土状況は、多数の土器が集中的に捨てられ、累積したような状態ではなかった。全体に散漫で広く薄い出土状況であるが、以下に挙げるように近い位置から出土した遺物の器種をみると、｛7・10（ともに甕）｝、｛1（甕）・19（高坏）｝、｛2（甕）・13・15（高坏）｝、｛4・6（甕）・14・18（高坏）｝、｛16・20（高坏）｝、｛5・8（甕）・21・22（小型丸底壺）｝となっている。いずれも異なる器種の遺物同士が近接した位置から出土しており、特定の器種が特定の場所に集中する出土状況ではない。

器種構成　建物に伴う遺物は甕２点、高坏１点である。いずれも小片で、完形にはなりえない。壁際土坑１から出土した土器片は他にもあるが、いずれも接合しなかった。建物存続時に使用されていた土器は、おそらく使用に耐えるものは持ち去られ、1・3・17はその拾い残しであろう。これら３点を除くと、図化した資料は甕11点，高坏９点，小型壺３点の構成になり、食膳具と煮炊き具を均等に含んでいる。貯蔵具は、小型壺３点と少ない。

遺物（第50、51図）　甕は、退化した複合口縁を持つ物が多く（１～８）、いずれも口縁中位に稜がつく。単純口縁の甕も少数含まれる（９・10）。内面の頸部直下からただちにヘラケズリし始めるものは少数で（５・８）、多くは頸部直下を押さえたりなでたりしている。高坏は、坏部が椀形のもの（12）や、形骸化した段をもつもの（13）がある。坏部と脚部の接続は、粘土塊を充填するものが多い（14～18）。脚部は、残っているもので径2.5㎝～2.8㎝と細いが、19は例外的に４㎝と太い。また、坏部と脚部を別途製作して接続していることがわかるのは19と24のみで、脚部上面が坏部を貫通して坏底部内面まで達している。胎土も、他の遺物が浅黄橙色に対して19は赤みを帯びた橙色で、他からかけ離れている。他に、小型の直口壺（おそらく丸底か）が３点（21・22・25）出土している。21・25は精選された胎土を使用して赤彩されるのに対し、22は赤彩されない。外面の胴部最大径付近にハケメ調整が集中し、同じ位置の内面には指押さえの痕跡が集中する。胴下半部をふくらませ、安定させるための調整か。

須恵器は含まれていないが椀形の高坏があること、甕の複合口縁の退化が進んでいることから、これらの遺物の時期は松山編年４期に位置づけられる。

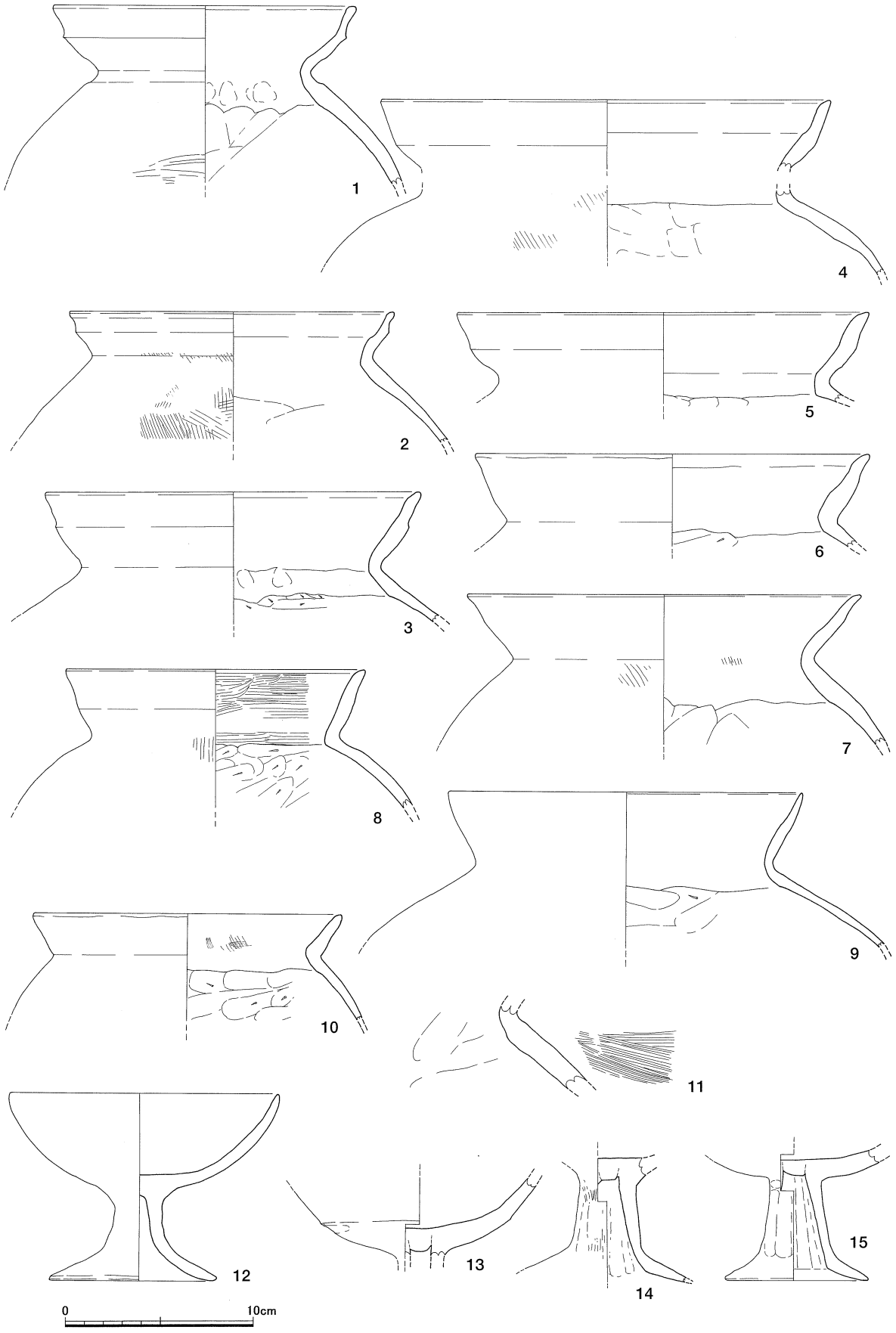
建物１の性格　全体が細長く、谷側に盛り土をしないこと、ピットも細く浅いので、上屋構造も簡易なものであったと推測される。また、通常竪穴住居で確認される壁体溝が無い。遺構に直接関係する遺物は少量で、遺物から建物の性格を類推することは難しい。ただ、改修後の建物１床面には、壁際土坑が3穴並んで作られており、床面積10.4㎡のうち壁際土坑の占める面積が0.5㎡（4.8パーセント）と高い。

土坑１（第52図）

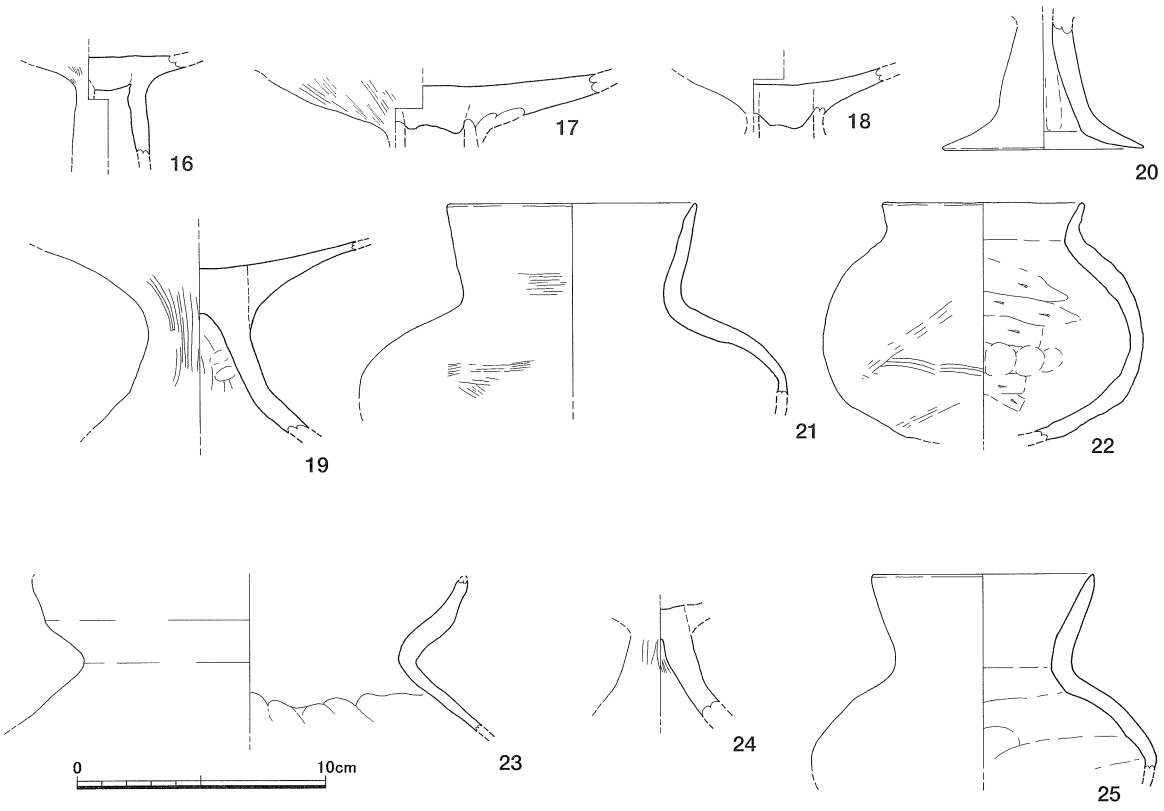
遺構　建物１の北端から２m下方で検出された径１m、深さ50㎝弱の土坑である。検出面の標高は、建物１の床面40.8mより40㎝低い40.4mである。底面近くから１・２が、上面から３・４・６がそれぞれ出土しており、中位に20㎝大の石を含んでいる。底面付近の埋土は特に土器片を多く含んでおり、湿った灰のような触感があった。土坑内で火が使用され灰が溜まったか、あるいは他の場所で生じた灰をここに捨てた可能性が考えられる。

1　暗灰黄褐色土（少量の土器片、木根を含む。しまり悪い）
2　にぶい褐色土（しまり悪い）
3　暗灰黄褐色土（多量の土器片、少量の炭化物、明黄褐色ブロックを含む）
4　にぶい黄褐色土（多量の土器片、明黄褐色地山ブロックを含む）
5　灰褐色土（少量の炭化物、明黄褐色地山ブロックを含む）
5'　灰褐色土（少量の炭化物、青緑色地山ブロックを含む）
6　褐色土（多量の明赤褐色・黄褐色地山ブロックを含む。しまり良い）

第49図　菅原Ⅱ遺跡３区　建物１及び遺物出土状況実測図（S=1/30）



第50図　菅原Ⅱ遺跡３区　建物１出土遺物実測図１（S=1/3）



第51図　菅原Ⅱ遺跡３区　建物１出土遺物実測図２（S＝1/3）

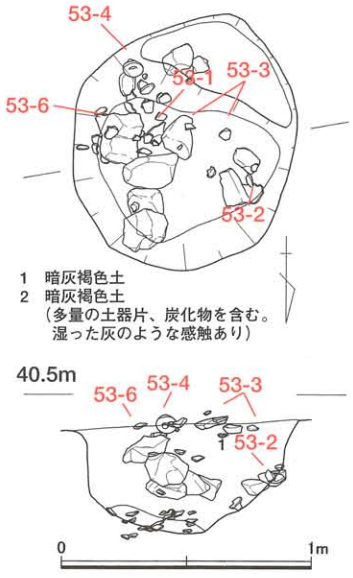
遺物（第53図）

甕は頸部の破片が１点のみ（１）で、他は高坏が４点にのぼり（２～５）、高坏に偏した器種構成である。坏部と脚部の接続法がわかる２・３はともに坏部と脚部を別途製作してつなげているが、第51図19と異なり脚部の上面が坏部内面に到達していない。２・３・５の外面には赤彩が見られる。４は、赤褐色粒を多量に含む橙色の胎土であるが、外面に浅黄橙色の土を薄く塗りつけている。この化粧土は赤褐色土を全く含んでいない。６は器種、天地とも不明の小型土製品である。何らかの器を模したミニチュアであろうか。使用されている胎土は赤みがかった橙色である。

第10表　菅原Ⅱ遺跡　建物１出土土器観察表

挿図番号 (写真図版)	出土地点	種別	計測値 ①口径cm ②器高cm ③低径cm	形態の特徴	調整・文様の特徴	色調	胎土	備考
50－1 (32)	4～5層	土師器 甕	①(16.2) ②(9.5)		外面：口縁横ナデ、頸不明、胴ハケ目 内面：口縁横ナデ、頸指オサエ、 胴ヘラ削	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	やや粗 (２㎜以下の石英、金雲母、黒雲母、褐色粒を含む)	
50－2 (32)	3層	土師器 甕	①(17.4) ②(6.9)		外面：口縁横ナデ、頸~肩 ハケ目後横ナデ、胴ハケ目 内面：口縁横ナデ、肩ナデ、胴ヘラケズリ	外：淡黄褐色～ 淡橙褐色 内：淡橙褐色	やや密 (２㎜以下の白色の砂粒を多く含む)	口縁部にスス付着
50－3 (33)	4～5層	土師器 甕	①(20.0) ②(6.5)		外面：口縁・頸横ナデ、 内面：口縁・横ナデ、頸直下 指オサエ、胴ヘラケズリ	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	やや密 (多量の石英、赤褐色粒、黒雲母、金雲母を含む)	
50－4 (33)	3層	土師器 甕	①(24.0) ②(7.6)		外面：口縁横ナデ、 胴ハケ目後横ナデ 内面：胴ヘラケズリ、不明	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	やや粗 (１㎜以下の石英、金雲母、黒雲母、褐色粒を多く含む)	外面にスス付着
50－5 (32)	3層	土師器 甕	①(22.0) ②(4.4)		外面：口縁横ナデ 内面：口縁不明、 胴・ヘラケズリ	外：淡灰褐色 内：淡黄褐色	やや粗 (１㎜以下の石英、金雲母、黒雲母、褐色粒を含む)	外面にスス付着

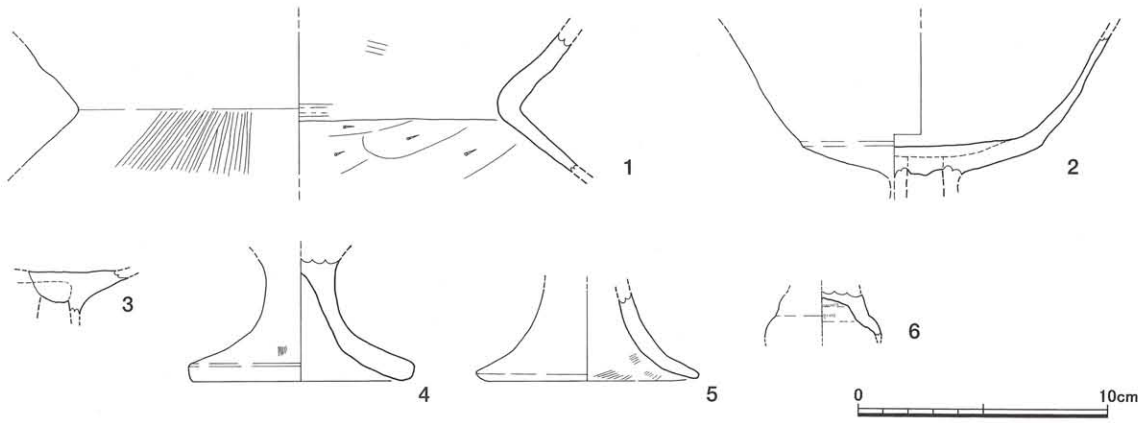
50－6 (33)	3層	土師器 甕	①(21.0) ②(4.9)		外面：横ナデ 内面：口縁横ナデ、 胴ヘラケズリ	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	やや粗 （2㎜以下の砂粒を多く含む）	
50－7 (32)	3層	土師器 甕	①(21.0) ②(8.0)		外面：口縁横ナデ、胴ハケ目 内面：口縁不明、 胴ヘラケズリ	外：淡黄褐色～ 淡赤褐色 内：淡黄褐色	やや粗 （1㎜以下の石英、金雲母、黒雲母、褐色粒を多く含む）	
50－8 (32)	3層	土師器 甕	①(16.0) ②(7.2)		外面：口縁横ナデ、頸ハケ目 内面：口縁ハケ目後横ナデ 胴ヘラケズリ	外：淡灰褐色 内：淡灰褐色	やや密 （2㎜以下の石英、金雲母、褐色粒を多く含む）	外面にスス付着
50－9 (32)	3層	土師器 甕	①(18.8) ②(8.2)		外面：不明 内面：口縁横ナデ、 胴ヘラケズリ	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	粗 （石英、金雲母を含む）	内画面とも表面剥離
50－10 (33)	3層	土師器 甕	①(16.4) ②(5.6)		外面：不明 内面：口縁横ナデ、頸ハケ目 胴ヘラケズリ	外：淡黄褐色 内：灰褐色	粗 （3㎜以下の石英、金雲母、褐色粒を多く含む）	表面剥離
50－11 (33)	3層	土師器 甕	②(4.4)		外面：横ナデ、ハケ目 内面：ヘラケズリ	外：淡灰褐色 内：淡橙褐色	やや密 （3㎜以下の砂粒を多く含む）	外面にスス付着
50－12 (33)	3層	土師器 高坏	①(14.4) ②(10.0) ③ 8.8		外面：ハケ目後横ナデ 内面：脚シボリ目残存	外：橙色	密	
50－13 (33)	3層	土師器 高坏	②(4.4)		外面：横ナデ 内面：横ナデ	外：橙褐色 内：橙褐色	密 （5㎜大の砂粒をわずかに含む）	
50－14 (32)	3層	土師器 高(脚)	②(6.7)		外面：ハケ目後縦方向のナデ 内面：縦方向のナデ	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	密 （多量の石英、金雲母、赤褐色粒を含む）	
50－15 (32)	3層	土師器 高坏(脚)	②(6.9) ③ 7.6		外面：坏底部不明、 脚筒部縦方向のナデ 内面：坏底部不明、 脚筒部縦方向のナデ	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	密 （少量の石英、金雲母、赤褐色粒を含む）	
51－16 (33)	3層	土師器 高坏(脚)	②(4.0)		外面：不明 内面：不明	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	密 （微量の石英、金雲母、黒雲母、赤褐色粒を含む）	
51－17 (33)	4～5層	土師器 高坏	②(2.5)		外面：ハケ目 内面：不明	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	密 （石英、金雲母、褐色粒を　わずかに含む	内外面とも赤彩
51－18 (33)	3層	土師器 高坏	②(2.5)		外面：不明 内面：不明	外：淡褐色 内：黄褐色	密 （細かい白色砂粒を少し含む）	充填された粘土塊の径2.2cm
51－19 (33)	3層	土師器 高坏	②(7.7)	坏部、脚部を別に作って接続 坏内面まで貫通	外面：ヘラ磨き 内面：坏底部不明、 脚筒部シボリ目をナデ消す	外：橙黄色 内：橙黄色	密 （0.5mm大の砂粒をわずかに含む）	
51－20 (33)	3層	土師器 高坏	②(5.2) ③ 8.0		外面：不明 内面：脚部縦方向のナデか	外：黄褐色 内：黄褐色 脚端部は内外面ともに黒変	密 （細かい白色砂粒を少し含む）	
51－21 (34)	3層	土師器 直口壷	①(10.0) ②(7.8)		外面：口縁横ナデ、頸ハケ目、 胴ハケ目後ナデ 内面：口縁横ナデ	外：橙褐色 内：橙褐色	密 （微量の石英、金雲母黒雲母、赤褐色粒の細片を含む）	内外面とも赤彩
51－22 (34)	3層	土師器 短頸壷	①(8.0) ②(9.6)		外面：ナデ後一部ハケ目 （内面指オサエの位置付近が中心） 内面：ヘラケズリ後指オサエ （胴左回り、底部不定方向）	外：灰褐色 内：淡黄褐色	密 （石英、金雲母、黒雲母、赤褐色粒を含む）	胴部にスス付着
51－23 (33)	覆土	土師器 甕	②(6.1)		外面：不明 内面：胴ヘラケズリ、不明	外：灰褐色～ 淡黄褐色 内：灰褐色～淡黄褐色	粗 （3㎜以下の石英、雲母、褐色粒を多く含む）	
51－24 (33)	覆土	土師器 高坏(脚)	②(4.5)	坏部、脚部を別に作って接続 坏内面まで貫通	外面：ヘラ磨き 内面：胴不明、シボリ目残る	外：橙褐色 内：橙褐色	密 （少量の赤褐色粒を含む）	
51－25 (33)	覆土	土師器 直口壷	①(8.9) ②(7.7)		外面：口縁横ナデ、 胴ナデか 内面：粗い横方向のナデ	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	密 （微量の石英、金雲母、黒雲母、赤褐色粒を含む）	口縁に赤彩



第52図　菅原Ⅱ遺跡３区　土坑１実測図（S=1/30）

建物２（第54図）

斜面を削って造成した平坦面の上に建てられた建物である。主柱穴は検出できなかったが、おそらく北東端にもう一本あり、６本柱で構成される建物であったと推定される。山側の壁には径20㎝程度の浅い小ピットが６穴検出された。これらの柱穴の配置から、平面形が長方形の建物跡と考えられる。断面で見ると、掘り方はわずかに建物の中心部に向かって傾いており、ここから柱ないし杭が斜めに立っていたと見られる。山側壁面には幅15～30㎝、深さ６～８㎝の溝がめぐっている。壁体溝の用途として、排水、壁の崩壊を防ぐための支え板を立てる、炉の煙を建物外へ排出する、等が想定されている。この建物の場合は、炉と見られる施設が無いことから排煙用ではない。また、溝と壁の間に幅15㎝以下の平坦部があるので、壁を支える壁体とも関係ない。以上の理由



第53図　菅原Ⅱ遺跡３区　土坑１出土遺物実測図（S=1/3）

第11表　菅原Ⅱ遺跡　土坑１出土土器観察表

挿図番号 (写真図版)	出土地点	種別	計測値 ①口径cm ②器高cm ③低径cm	形態の特徴	調整・文様の特徴	色調	胎土	備考
53－1 (34)	埋土	土師器 甕	②(5.7)	頸部内面ゆるい	外面：口縁横ナデ、胴ハケ目 内面：口縁横ナデ、胴ヘラケズリ	外：暗灰褐色 内：暗灰褐色	密 (多量の石英、金雲母、黒雲母、赤褐色粒を含む)	
53－2 (34)	埋土	土師器 高坏	②(5.9)	坏部段あり		外：淡黄褐色 内：橙黄褐色	密	外面、赤彩
53－3 (34)	埋土	土師器 高坏	②(1.3)	坏部、脚部を別に作って接続後粘土塊充填	外面：ハケ目	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	密 (微量の石英、赤褐色粒、黒雲母を含む)	赤彩
53－4 (34)	埋土	土師器 高坏	②(4.9) ③ 8.4	坏部、脚部を別に作って接続坏内面まで貫通	外面：ハケ目、後ナデ 内面：脚筒部シボリ目をナデ消す	外：にぶい橙色 内：浅黄橙色 断面：黄橙色	密 (多量の赤褐色粒を含む)	浅黄橙色の化粧土を塗布
53－5 (34)	埋土	土師器 高坏	②(3.7) ③(8.8)		内面：脚筒部横ナデ 脚端部ハケ目	外：淡黄褐色 内：にぶい黄褐色	密 (少量の石英、金雲母、赤褐色粒を含む)	外面、赤彩 内面、黒変 (焼成時？)
53－6 (34)	埋土	土製品 機種不明	②(1.7)		内面：ハケ目	外：黄橙色 内：黄橙色	密 (1.5㎜大の砂粒をわずかに含む)	

第12表　菅原Ⅱ遺跡　建物２出土土器観察表

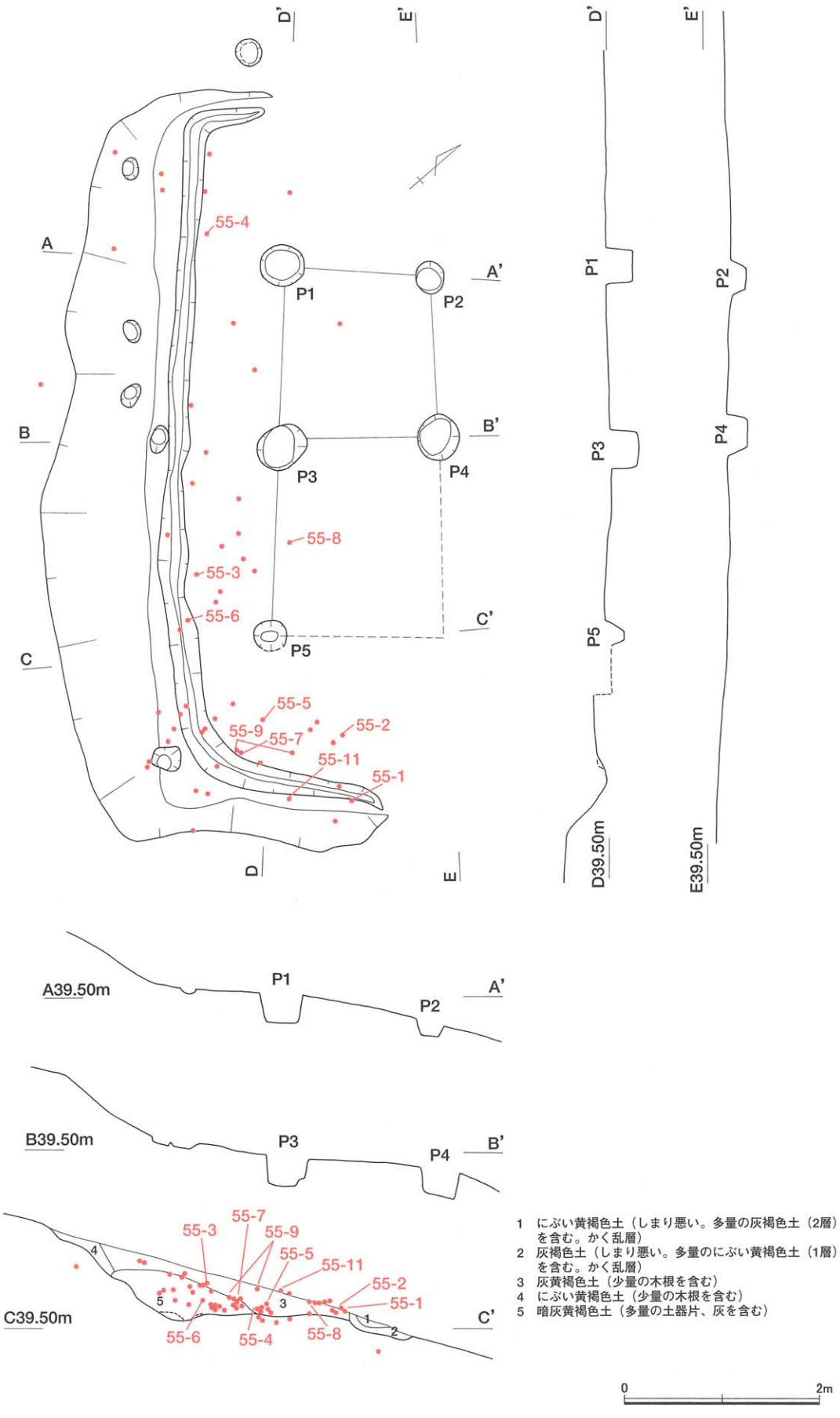
挿図番号 (写真図版)	出土地点	種別	計測値 ①口径cm ②器高cm ③低径cm	形態の特徴	調整・文様の特徴	色調	胎土	備考
55－1 (35)	床面直上 壁際	土師器 甕	頸部径 (18.8) ②(6.6)	大型	外面：不明 内面：不明	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	やや粗 (多量の石英、金雲母、黒雲母、赤褐色粒を含む)	
55－2 (35)	床面直上 壁際	土師器 甕	②(4.9)		外面：横ナデ 内面：横ナデ	外：暗黄褐色 内：暗黄褐色	やや密 (多量の石英、金雲母、黒雲母、赤褐色粒を含む)	
55－3 (35)	床面直上 壁際	土師器 甕	①(18.4) ②(2.5)		外面：横ナデ 内面：横ナデ	外：暗黄褐色 内：暗黄褐色	やや密 (細かい砂粒を含む)	外面にスス付着
55－4 (34)	床面直上 壁際	土師器 甕	① 16.6 ②(7.5)	頸部直下が厚くなる	外面：口縁横ナデ、胴ナデか 内面：口縁~肩横ナデ、胴ヘラケズリ	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	やや粗 (石英、金雲母、黒雲母、赤褐色粒を多く含む)	
55－5 (35)	床面直上 壁際	土師器 高坏	②(2.1)	坏部、脚部を連続して作る	外面：ナデ、不明 内面：不明	外：淡橙褐色 内：淡黄褐色	密 (微量の石英、金雲母、黒雲母、赤褐色粒を含む)	
55－6 (35)	床面直上 壁際	土師器 高坏	① 15.0 ② 11.3 ③ 9.3	脚部に形骸化した段	外面：坏横ナデ、脚端ナデ、脚筒ヘラミガキ 内面：坏ハケ目後ナデ	外：淡橙褐色 内：淡橙褐色	密	
55－7 (34)	床面直上 壁際	土師器 高坏	②(4.4) ③ 8.4	坏部、脚部を別に作って接続。坏内面まで貫通。	外面：ヘラミガキ 内面：脚端指オサエ、脚筒シボリ目	外：淡橙褐色 内：淡橙褐色	密 (少量の白色砂粒、赤褐色粒を含む)	
55－8 (35)	床面直上 壁際	土師器 高坏	②(5.3)		外面：横ナデ、不明 内面：ハケ目後ナデ又は横ナデ、不明	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	やや粗 (少量の石英、金雲母、赤褐色粒を含む)	
55－9 (35)	床面直上 壁際	須恵器 坏蓋	① 12.5 ②(4.3)	肩部、口縁端部に明瞭な段	外面：天井回転ヘラケズリ 口縁回転ナデ 内面：口縁回転ナデ	表：灰色 断：赤灰色	密	
55－10 (35)	覆土	土師器 甕	①(17.2) ②(4.3)		外面：横ナデ 内面：横ナデ	外：淡灰褐色 内：暗黄褐色	やや密 (多量の石英、金雲母、黒雲母、赤褐色粒を含む)	
55－11 (35)	覆土	土師器 高坏	②(2.3)		外面：一部ハケ目 内面：一部ヘラミガキ	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	密 (少量の石英、金雲母、黒雲母、赤褐色粒を含む)	内外面とも赤彩
55－12 (35)	覆土	土師器 高坏	②(2.1)		外面：横ナデ 内面：ヘラミガキ	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	密 (微量の金雲母、赤褐色粒を含む)	内外面とも赤彩
55－13 (35)	覆土	土師器 高坏	②(1.9)		外面：ナデ 内面：不明	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	密 (微量の石英、金雲母、赤褐色粒を含む)	外面にスス付着

から、消去法的であるが、排水溝と判断した。

土層堆積と遺物出土位置（第54図）、器種構成　１～４層はまだ腐っていない木の根を含む、比較的新しい堆積土や攪乱層である。これらの層からは遺物は出土していない。遺物はすべて、最も壁際に堆積した暗褐色土に含まれていた。建物中心部から出土したものは少なく、ほとんどが山側の壁際からの出土であるから、堆積土に混じって後から流れ込んだ可能性は低い。建物廃絶時に廃棄され原位置にとどまっていた、この建物に直接伴う遺物である可能性が高い。

器種構成は、甕５点（１点）、高坏７点（２点）、須恵器の坏蓋１点である。[(　) 内は出土位置の不明なもの]。須恵器は坏身とセットにならない、蓋だけの出土である。土師器の坏と同様の使い方をしていた可能性もあろう。煮炊き具、食膳具の両方を含み、わずかに食膳具が多い。

遺物（第55図）　甕（１～３）は退化した複合口縁、４は単純口縁の甕である。４内面のヘラケズリは頸部より２㎝下から始まっている。高坏のうち６・７は坏部と脚部を別途製作して接続しており、ともに脚筒部の外面を入念にヘラミガキする。６の坏部は、段が形骸化して稜になるとともに、

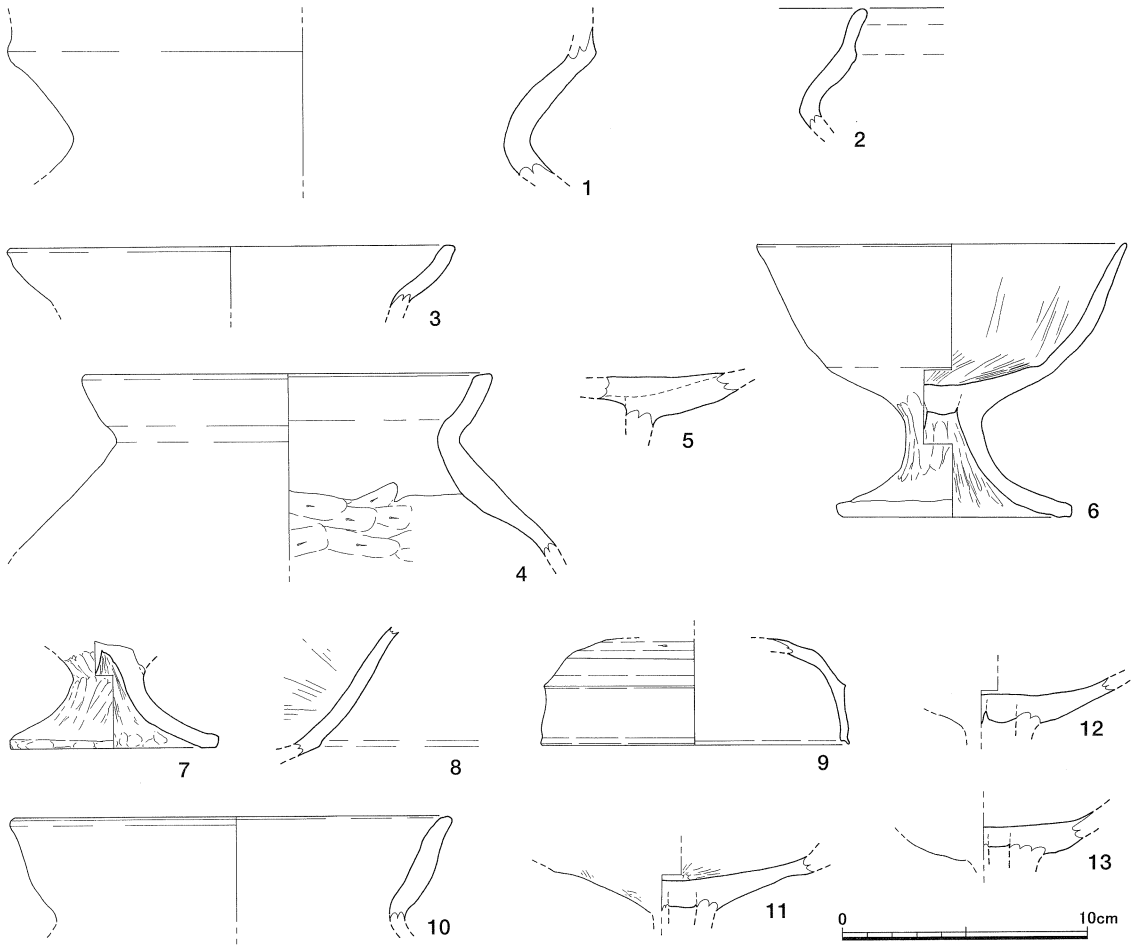


第54図　菅原Ⅱ遺跡３区　建物２及び遺物出土位置図（S＝1/60）

第13表　菅原Ⅱ遺跡　建物２計測表

建物２（菅原Ⅱ）							
規模		梁行き			桁行き		
		一間（1.5m）			二間（3.8m）		
主軸		N－48°－W					
柱穴（cm）	番号	Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３	Ｐ４	Ｐ５	
	上面径	45×42	53×42	34	46×42	33×30	
	深さ	30	32	20	32	19	
柱間距離（m）		Ｐ１－２	Ｐ２－３	Ｐ４－５	Ｐ５－１		
		1.9	1.9	1.6	1.5		

Ｐ３の短径は計測不可



第55図　菅原Ⅱ遺跡３区　建物２出土遺物実測図（S=1/3）

坏底部の径は小さくなっている。須恵器の坏蓋９は天井・口縁境の段が明瞭である。口縁端部は、わずかに外へ折り曲げて沈線を入れることによって段をつけており、大谷編年１期に属する。

建物の性格　菅原Ⅱ遺跡で確認された建物跡や加工段の中で、造作が最もしっかりしているのが建物２である。太く深い主柱穴をもち、柱穴の軸も直線的で、しっかりした上屋構造をもっていたことが想定される。遺存状況にもよるであろうが、建物１や他の加工段よりも深く地山を削りこんで平坦面を造成している。出土遺物の器種構成は、供膳具である高坏と煮炊き具である甕が同等の比率を占めており、生活臭を感じさせる。ただし、壁際土坑は伴っていなかった。

加工段１（第56図）

建物２の北に隣接する位置で検出した。検出時は加工段１と建物２を一続きの遺構と誤認していたため、南北方向の土層観察畦を設定しておらず、両者の前後関係を確認できなかった。平坦面のレベルは、建物２の床面より0.5m高い。建物を建てるなどの目的で造成されたと推測されるが、平坦面上に検出されたピットは規則的に並ばず、建物の主柱穴と確定できない。ピットの径は大きいもので30㎝を測る。山側の壁沿いに2.5mにわたって溝状遺構が確認された。建物２が建っていた平坦面の場合と同様、排水用の溝の可能性があるが、谷側へ続かない。

遺物（第57図）　いずれも覆土中からの出土である。土師器の高坏１点、須恵器の坏蓋１点、須恵器の坏身１点で、煮炊き具は出土していない。椀形の土師器の年代が５世紀半ばと見られるのに対し、須恵器（２）は天井にヘラケズリを残していることと、坏身の受部の長さと角度から６世紀と考えられ、年代差がある。遺存状況は土師器の高坏（１）が良好だが、須恵器が３点と多数を占めており、６世紀後半の可能性が高い。坏身３は受部が全壊している。

加工段２および土坑２（第58図）

加工段２は遺存状況が非常に悪く、確認できた部分は長さ１m、深さ20㎝程度にとどまる。北西端がわずかに曲がっているのが確認される。これが加工段の端部であろう。隣接する位置で土坑２が検出された。径１m、検出面からの深さは60㎝を測る。遺構周辺には、図化できなかったが土師器片が多数散布していた。

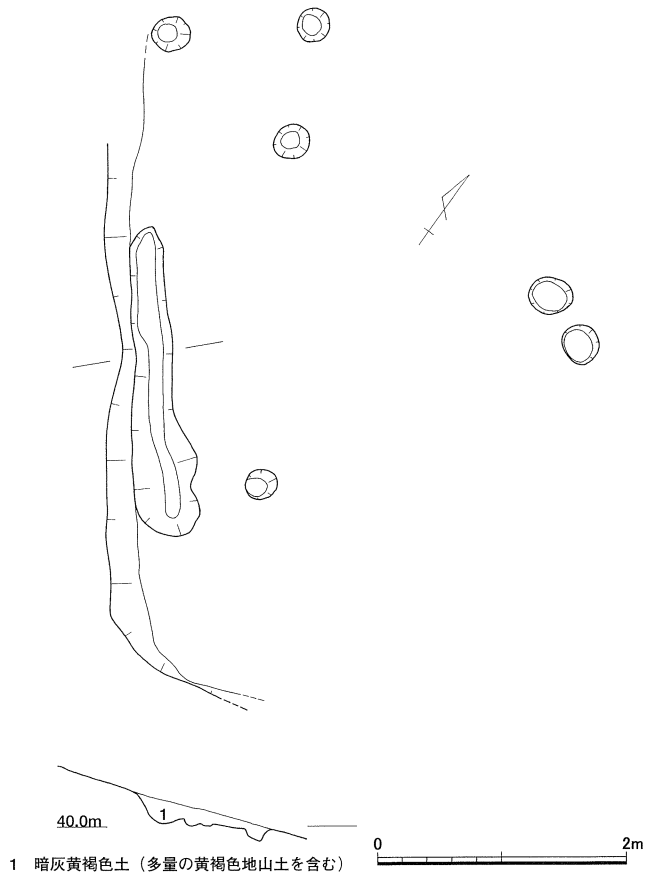
加工段２の遺物（第59図）　いずれも埋土中から出土したもので、完形の物はない。甕の口縁部が退化した複合口縁であることから、古墳中期に属すると見られる。須恵器の坏蓋（５）は、口縁端部をわずかに外反させて沈線を入れることで段をつくり出しており、大谷１期に属する。

土坑２の遺物（第60図）　埋土中には、遺存状態の良好な土師器が納められていた。甕は頸部の破片１点のみと少なく、高坏、坏（合わせて４点）と供膳具が多数を占める器種構成は土坑１と共通するが、土坑1のような大きい石は出土していない。高坏（第60図２～４）は脚筒部の径が小さく、シボリ目が残る。

加工段３、４（第61図）

調査区の中央やや北よりの位置から、上下に並ぶ位置で検出された。加工段３の山側の壁は遺跡の等高線とほぼ平行である。加工段３の山側の壁は遺跡の等高線とほぼ平行である。加工段４も、西辺が等高線に平行、南辺は等高線に直交している。また、両者とも土層断面から山側の壁際がわずかに窪んでいる状態が確認される。平面的には検出できなかったが、壁際に溝状遺構が存在した可能性が高い。これらの特徴は、建物２の床面や加工段１と共通しており、加工段３・４も建物や何らかの施設を建てるために造成された平坦面と考えられる。ただ、関連するピット等は検出されなかった。遺存していた部分の規模は、加工段３が長さ4.4m、深さ20㎝、加工段４は長さ２m、深さ40㎝であった。

加工段４の床面から遺物が１点のみ出土している。第61図１は土師器の高坏の接続部で、径の細い刺突痕が確認される。破損が著しいが、原形をとどめている部分で径４㎜を測る。ほとんど半裁状態となった断面の観察から、別々に作られた坏部と脚部が接続されていることがわかる。このような特徴から、この高坏は松山編年の４期（古墳時代中期）に位置づけられ、加工段４も同じ時期

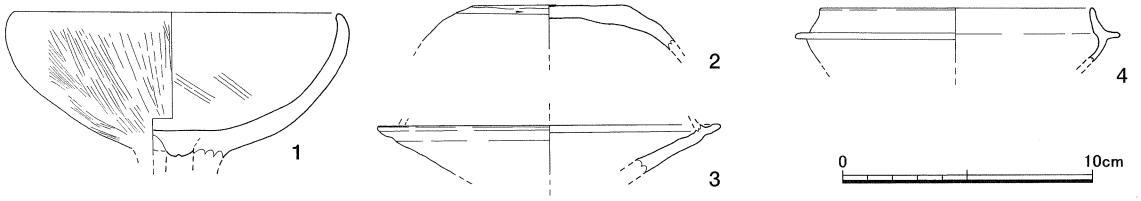


第56図　菅原Ⅱ遺跡３区　加工段１実測図（S=1/60）

の遺構と見られる。

加工段５（第61図）

加工段５は調査区の東端で検出されたため、検出できたのは遺構の西端のみである。山側の壁はほぼ直角に折れ曲がっており、南辺は等高線に平行、西辺は等高線と直交する。山側に溝状遺構が無い点が建物２や加工段１・３・４と異なり、建物１に近い造りである。出土遺物は、単純口縁の甕１点（第62図１）と甑の把手部及び受部（同２・３）である。遺構全体を調査できていないという限界があるが、高坏や坏が全く出土しておらず、遺物の器種構成は煮炊き具に偏っている。



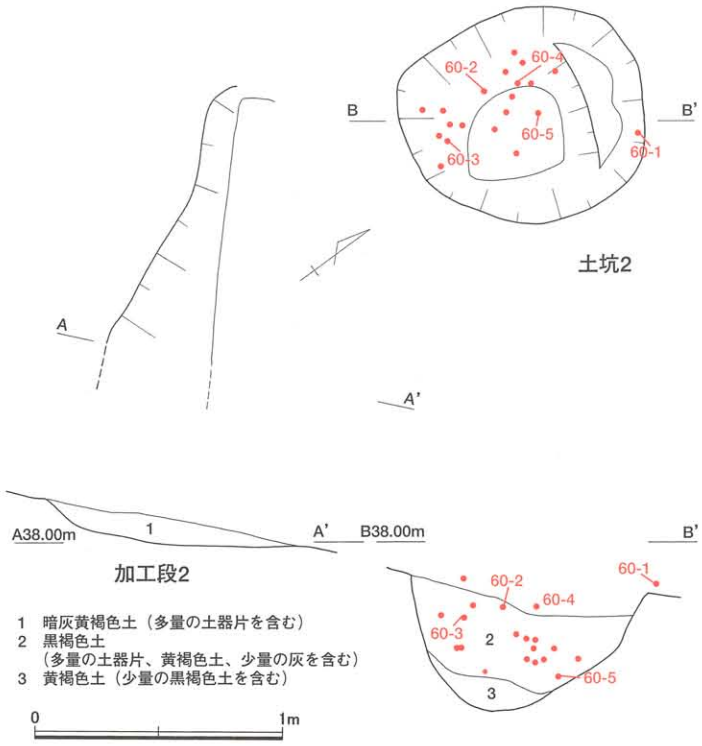
第57図　菅原Ⅱ遺跡3区　加工段1出土遺物実測図（S=1/3）

作業用通路跡（第46図）、石積み（図版29中段）、調査区下段の遺構群（第63図）の位置関係

調査区東半分の緩斜面では建物１や土坑１が確認されているが、この緩斜面の北は急な段差がついた後再び緩斜面になり、緩斜面上で加工段６・７や土坑３・４・小ピット群が確認されている。

第14表　菅原Ⅱ遺跡　加工段１出土土器観察表

挿図番号 (写真図版)	出土地点	種別	計測値 ①口径cm ②器高cm ③低径cm	形態の特徴	調整・文様の特徴	色調	胎土	備考
57－1 (35)	覆土	土師器 高坏	①(13.12) ②(5.9)	坏部、脚部を別に作って接続後粘土塊充填	外面：口縁ハケ目・胴横ナデ 内面：口縁横ナデ 胴ハケ目後ナデ	外：橙褐色 内：橙褐色	密 （２㎜以下の砂粒を少し含む）	
57－2 (35)	覆土	須恵器 坏蓋	①(13.8) ②(2.0)		外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外：淡灰色 内：淡灰色	密	
57－3 57－4 (35)	覆土	須恵器 坏身	① 11.0 ②(4.3) ③(6.2)	受部はやや低い	外面：口縁・胴回転ナデ、底ヘラ削り 内面：口縁・胴回転ナデ 底ナデ	外：淡灰色 内：淡黄灰色		

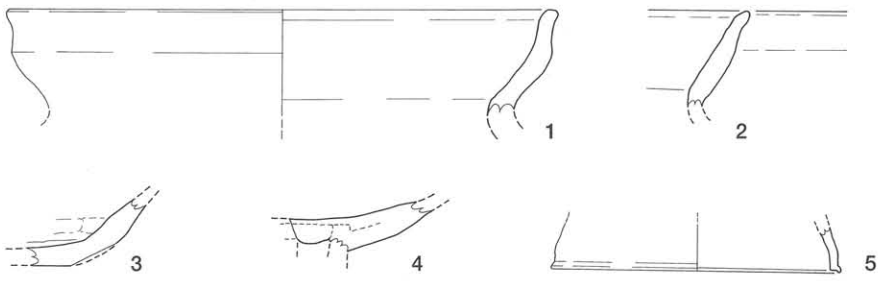


第58図　菅原Ⅱ遺跡３区　加工段２・土坑２実測図（S=1/30）

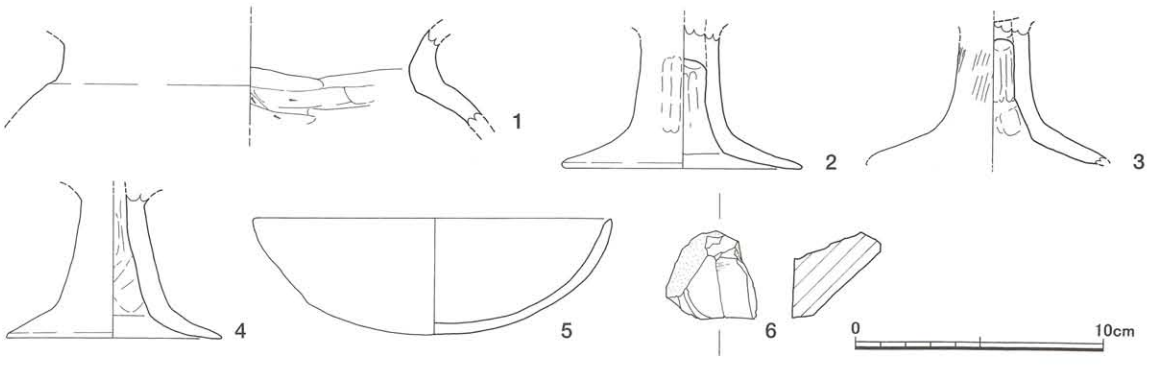
これらの遺構群を「調査区下段の遺構群」として、第63図以下にまとめて掲載した。ほとんど遺物が出土せず、土坑３の須恵器の直口壺破片が唯一遺構に伴う出土遺物である。これによれば、遺構群の時期は古墳時代中期または後期の可能性が高い。

作業用通路跡（第46図）、石積み（図版29中段）

段差の部分を地山面まで掘り下げる過程で検出されたのが道路状の遺構である。調査区中央に露出する石積みから始まって、調査区南端付近へ向かって緩やかに下る路で、石積みから17m南へ続いた後一旦とぎれ、２m南から再び確認できるようになって、12m南の調査区南端平坦面に至って終わる。地元の古老からの聞き取りによれば、この石積みは、戦前桑畑に露出していた岩をハッパで破砕して石材を採取した際に、余った岩を脇に積み上げてできたものである[(3)]という。道路状



第59図　菅原Ⅱ遺跡３区　加工段２出土遺物実測図（S=1/3）



第60図　菅原Ⅱ遺跡３区　土坑２出土遺物実測図（S=1/3）

第15表　菅原Ⅱ遺跡　加工段２出土土器観察表

挿図番号 (写真図版)	出土地点	種別	計測値 ①口径cm ②器高cm ③口縁高cm	形態の特徴	調整・文様の特徴	色調	胎土	備考
59－１ (36)	床面	土師器 甕	①22.2 ②(4.3)		外面：横ナデ 内面：横ナデ	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	やや密 (2㎜以下の石英、金雲母、黒雲母、褐色粒を少し含む)	
59－２ (36)	床面	土師器 甕	②(3.9)		外面：横ナデ 内面：横ナデ	外：淡白褐色 内：淡白褐色	やや粗 (石英、金雲母、黒雲母、褐色粒を少し含む)	
59－３ (36)	覆土	土師器 甕(底部)	②(2.6)	わずかに平底	内面：ナデ (わずかに指頭圧痕残る)	外：白褐色 内：白褐色	やや粗 (石英、金雲母、黒雲母、褐色粒を多く含む)	
59－４ (36)	覆土	土師器 高坏	②(2.0)	坏部、脚部を別に作って接続		外：淡橙褐色 内：淡橙褐色	密 (石英、金雲母、黒雲母、褐色粒をわずかに含む)	
59－５ (36)	床面	須恵器 坏蓋	①(11.8) ②(1.9)	口縁端部に明瞭な段	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外：淡灰色 内：淡白褐色	密	

第16表　菅原Ⅱ遺跡　土坑２出土土器観察表

挿図番号 (写真図版)	出土地点	種別	計測値 ①口径cm ②器高cm ③口縁高cm	形態の特徴	調整・文様の特徴	色調	胎土	備考
60－１ (36)	埋土	土師器 甕	②(3.9)		外面：横ナデ 内面：頸ナデ 胴ヘラ削り	外：淡黄褐色 内：淡橙褐色	密 (石英、金雲母、黒雲母、褐色粒を多く含む)	
60－２ (36)	埋土	土師器 高坏 (脚)	②(5.7) ③9.5	接続部に粘土塊を充填	外面：脚筒部ナデ（縦方向） 内面：脚筒部ナデ（縦方向）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	密 (微量の石英、金雲母、褐色粒を含む)	内外面とも赤彩
60－３ (36)	埋土	土師器 高坏 (脚)	②(5.8)	接続部に粘土塊を充填	外面：脚筒部ハケ目後ナデ 内面：脚筒部ナデ（縦方向）	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	密 (石英、金雲母、黒雲母、褐色粒をわずかに含む)	内外面とも赤彩
60－４ (36)	埋土	土師器 高坏 (脚)	②(5.9) ③8.7		内面：ヘラ削り	外：黄褐色 内：黄褐色	やや密 (1㎜以下の石英、黒雲母、金雲母、褐色粒を含む)	
60－５ (36)	埋土	土師器 坏	①14.5 ②4.7		外面：ナデ 内面：ナデ	外：明橙褐色 内：明橙褐色	やや密 (石英、金雲母を少し含む)	

第17表　菅原Ⅱ遺跡　土坑２出土石器観察表

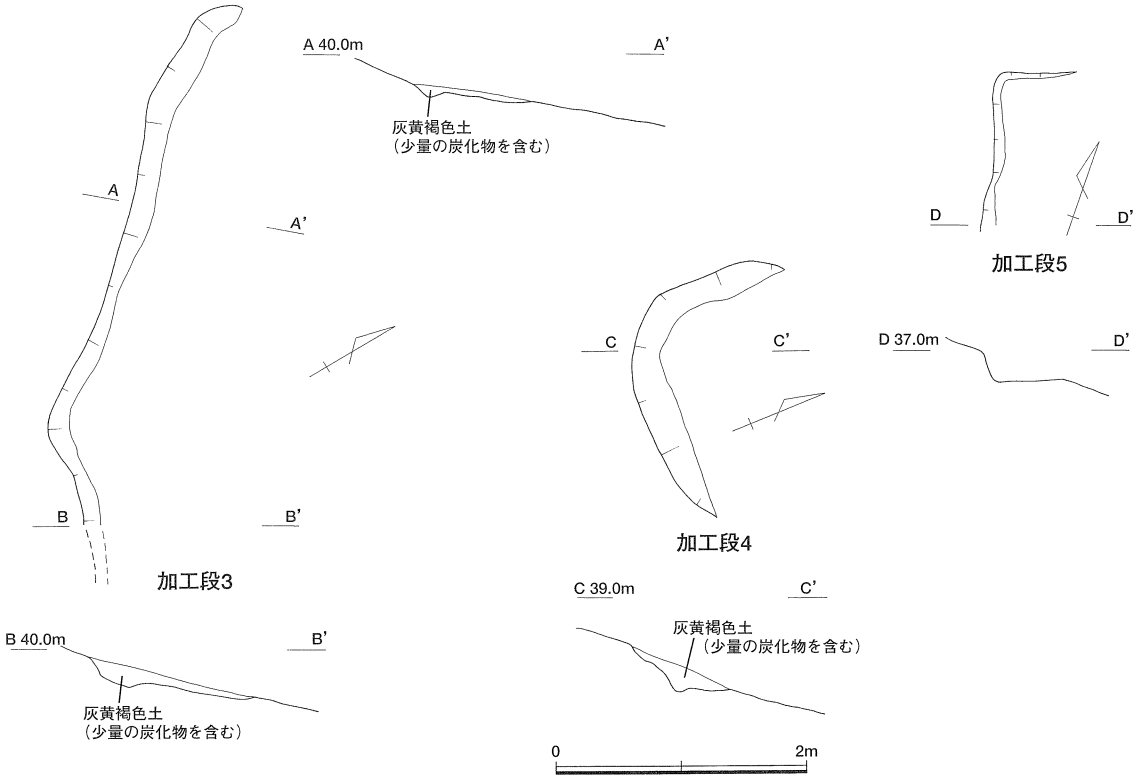
挿図番号 (写真図版)	出土地点	種別	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	研磨・使用状況	備考
60－６ (36)	埋土	石製品 砥石	凝灰岩	(3.6)	(3.6)	(3.6)	１面のみを使用	

第18表　菅原Ⅱ遺跡　加工段４出土土器観察表

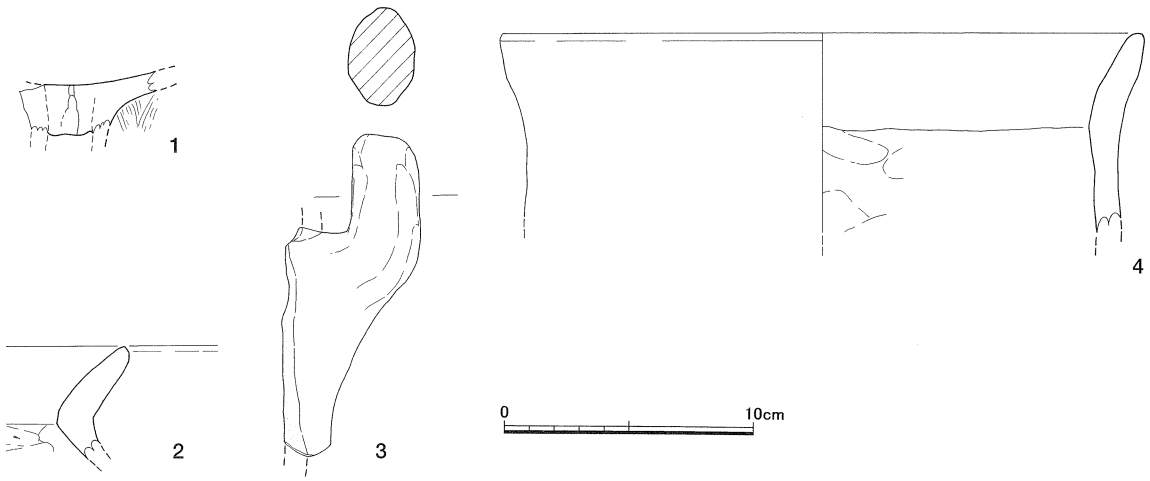
挿図番号 (写真図版)	出土地点	種別	計測値 ①口径cm ②器高cm ③口縁高cm	形態の特徴	調整・文様の特徴	色調	胎土	備考
62－１ (36)	覆土	土師器 高坏 (坏)	②(2.5)		外面：ハケ目	外：淡橙褐色 内：淡橙褐色	密 (微量の石英、黒雲母、赤褐色粒を含む)	

第19表　菅原Ⅱ遺跡　加工段５出土土器観察表

挿図番号 (写真図版)	出土地点	種別	計測値 ①口径cm ②器高cm ③口縁高cm	形態の特徴	調整・文様の特徴	色調	胎土	備考
62－２ (36)	床面直上	土師器 甕	②(4.5)		内面：横ナデ、ヘラ削り	外：黄褐色 内：暗褐色	やや粗 (2㎜以下の砂粒を少し含む)	
62－３ (36)	床面直上	土師器 甑 (把手)	②(12.9)	本体壁面に接着	外面：ナデ 内面：ヘラ削り後ナデ	外：黄褐色 内：黄褐色	やや密 (少量の石英、黒雲母、赤褐色粒を含む)	微量の炭化物が付着
62－４ (36)	床面直上	土師器 甑	①25.8 ②(10.0)		外面：横ナデ 内面：横ナデ、ヘラ削り	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	やや密 (石英、黒雲母、金雲母、褐色粒を少し含む)	内面スス付着



第61図　菅原Ⅱ遺跡３区　加工段３・４・５実測図（S＝1/60）



第62図　菅原Ⅱ遺跡３区　加工段４・５出土遺物実測図（S＝1/3）

遺構は、このとき石材をネコ車などで搬出するためにつけられた作業用通路であろう。石積みの付近で幅が３mと広くなっているのが作業用のスペースと考えられる。

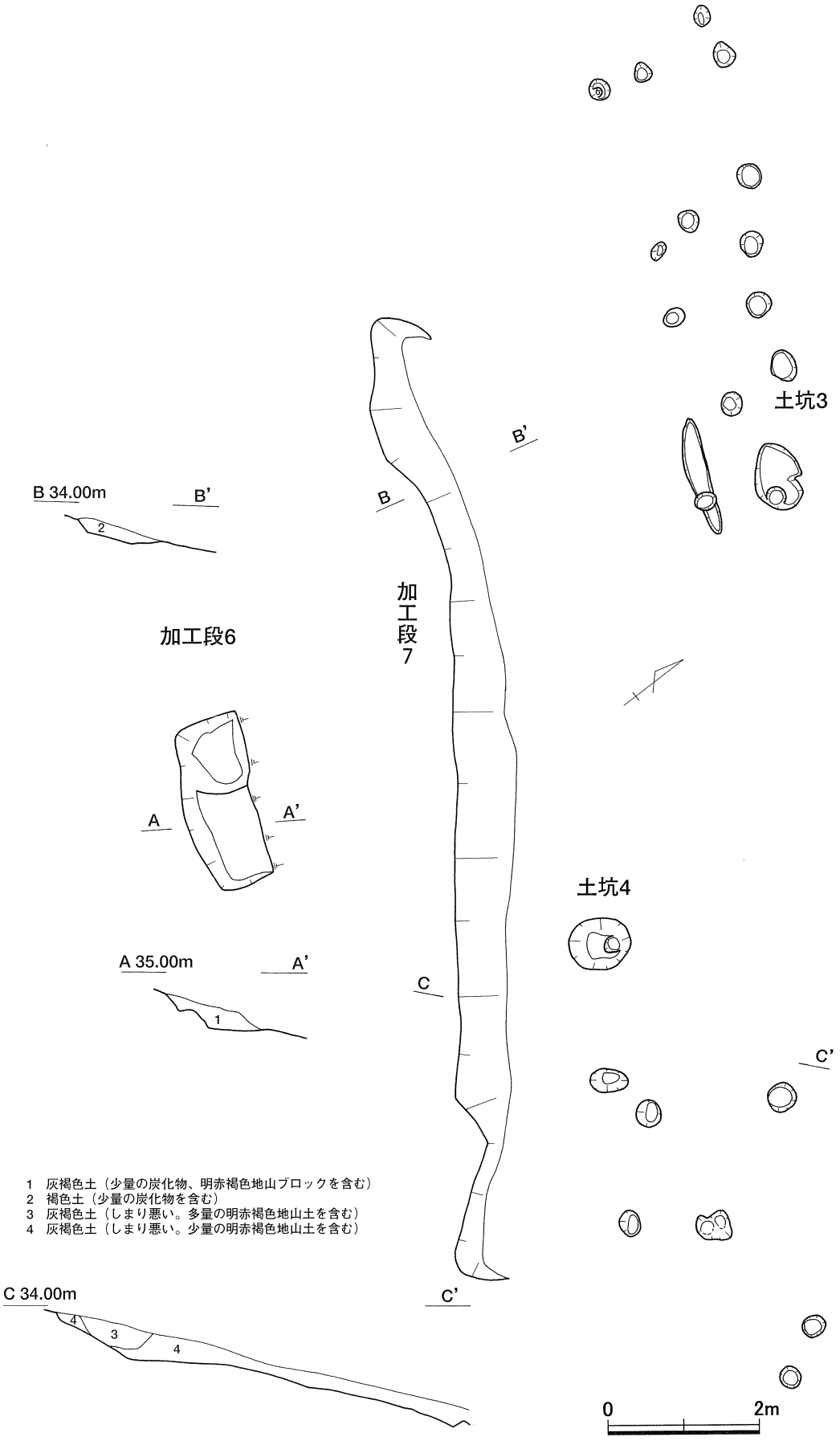
調査区下段の遺構群（第63図）

加工段６

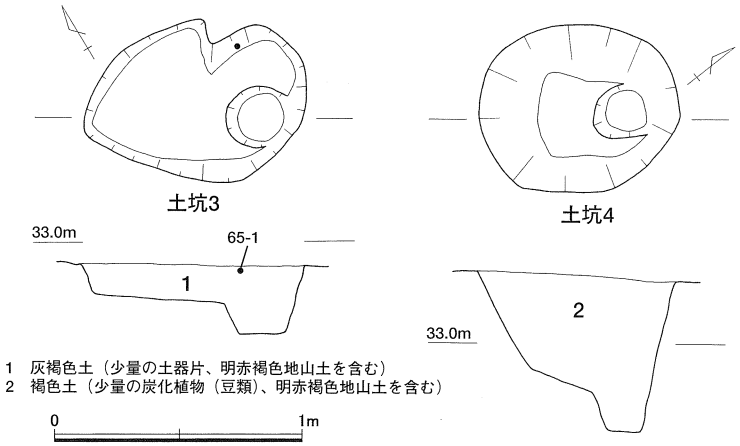
他の遺構から孤立した位置で検出され、遺物も出土しなかった。時期、性格ともに不明である。長さ2.1m、幅１m、深さ40㎝を測る。

加工段７、小ピット群

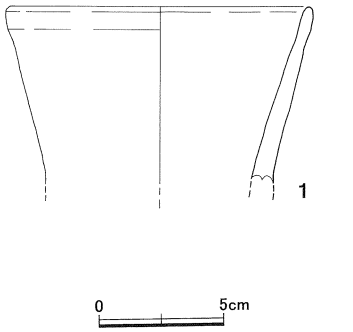
長さ13mにわたって検出された長大な平坦面である。平坦面の南半分には土坑４があり、その南側に接して小ピット群が不規則な位置で検出された。平坦面の北端付近でも土坑３と、その北側に



第63図　菅原Ⅱ遺跡３区　道路状遺構下方遺構群実測図（S＝1/80）



第64図　菅原Ⅱ遺跡３区　土坑３・４実測図（S＝1/30）



第65図　菅原Ⅱ遺跡３区
土坑３出土遺物実測図（S＝1/3）

第20表　菅原Ⅱ遺跡　土坑３出土土器観察表

挿図番号（写真図版）	出土地点	種別	計測値 ①口径cm ②器高cm ③低径cm	形態の特徴	調整・文様の特徴	色調	胎土	備考
65－1（36）	上面	須恵器 直口壺	①(7.2) ③(12.0)		外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外：淡褐灰色 内：褐灰色	密	

接して小規模な溝状遺構や小ピット群が検出された。柱の並びは明らかにできなかったが、建物か、より簡易な構築物か何らかの施設が存在したと考えられる。加工段７はこれらの施設を構築するために造成されたのであろう。

小ピット群は、すべて地山面で検出したが、地山面は傾斜がある。残存する埋土はいずれもしまりの悪い暗褐色土である。

土坑３・４（第64図）

平坦面の北端、南端付近で、それぞれピット群の端に接する位置で検出された土坑である。底面の一部が他の部分より10cm深くなっており、径20cm程度の柱が立っていたことを予想させる掘方であるが、これらの土坑と組になるピットは無く、単独の土坑と判断した。規模は、土坑３が長径90cm×短径70cm、深さ15cm～30cm，土坑４が長径80cm×短径70cm、深さ60cmである。

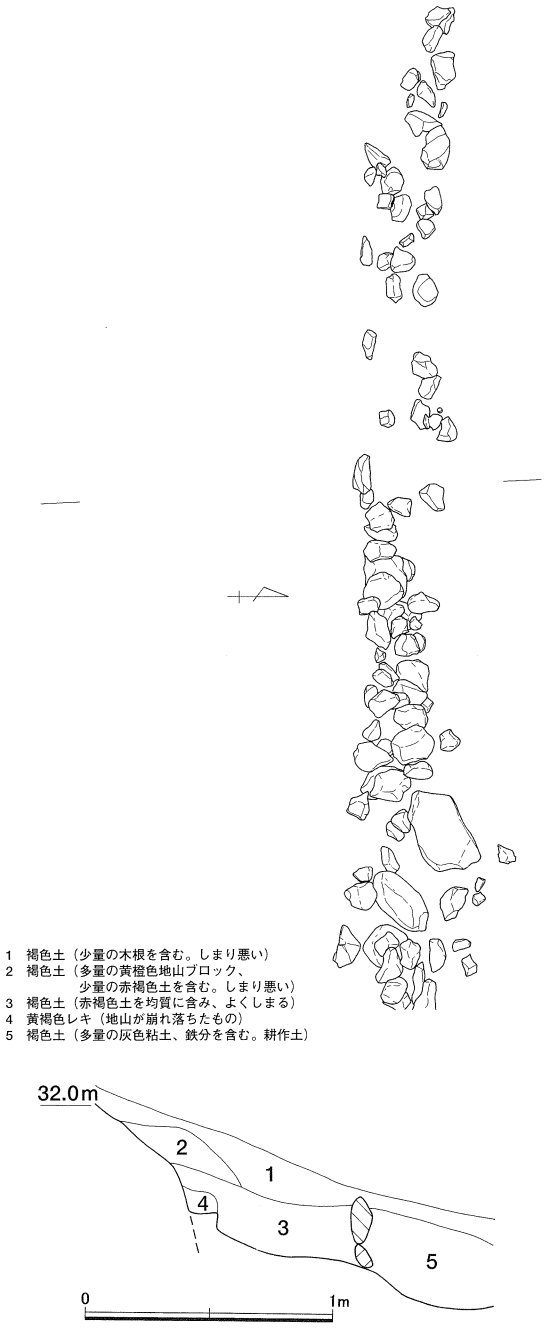
土坑３の上面から須恵器の直口壺の破片が出土している（第65図１）。

石列（第66図）

加工段７の南側のピット群よりさらに南方で、現水田面付近まで下がった位置で検出された石列である。遺物は全く出土しておらず、時期は不明である。石列より山側は赤褐色土を均質に含んでしまりのよい褐色土（第66図３層）であり、反対側は青灰色の粘土、鉄分を多量に含む現水田の耕作土である。前者の土はおそらく造成土で、これを上から充填してたたきしめ、側面谷側から石で支えて崩落を防いだのであろう。

遺構外出土遺物（第67・68図）

１は複合口縁が退化して、稜が口縁先端近くにつく。２は椀形の高坏の坏部である。別途製作されたはずの脚部との接続部は半球形の窪みとなっている。３は手捏ねの坏である。他に、移動式竈の下端部の破片が１点だけ出土している。５，６は調査区西半部のトレンチで出土した。５は磨製石斧で、先端に刃こぼれが見られる。６は黄橙色～赤色を呈する瑪瑙製の石器である。半分欠損し



第66図　菅原Ⅱ遺跡３区　石列実測図（S＝1/30）

ているが、本来の形状は横長で、現存部分の倍ほどの横幅があったと推測される。上側面方向から打撃を加えて横長の剥片を得た後、下側面に細かい剥離を加えて刃部としている(5)。

第68図は鉄器である。１は一端を欠損している。ヤリガンナまたは刀子と推測されるが、基部から先端まで形態変化に乏しく、器種を確定できない。２は、左側縁の先端側（欠損している）から12㎜～７㎜を境に、基部側は面があり、先端側は細くなって尖る。刀子の身部から刃部への変わり目と推定される。３～６は釘で、太い部分で４ないし５㎜ある。７は袋状鉄斧で、刃先から３㎝の位置に肩がある。袋部は右側がわずかに残り、左袋部はほぼ全壊している。断面は方形で、面を取りながら丁寧に成形される。平面形は非対称で、刃の長さが左と右で違う。８は板状の鉄器片である。上端から28～33㎜の位置で肩もしくは段がつく。上、左、右の３側面とも面をもっており、刃物ではないと見られる。

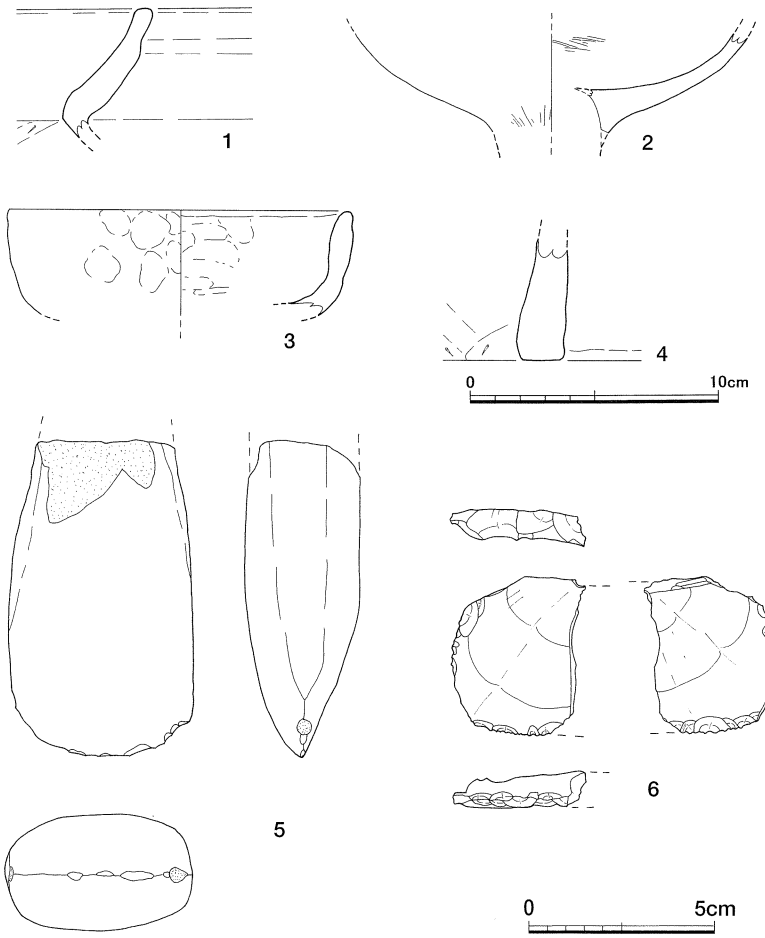
註

(1) 上津郷土誌編纂委員会編『上津郷土誌』（上津地区自治会、1993年３月）401～403Ｐ、及び411Ｐ。このうち、船津丸山の開削工事については、曾田一富氏（元上津公民館長）の御教示による。

(2) 柱穴を掘らず、地面に柱を置いただけのような柱の圧痕は、時期は異なるが上野Ⅱ遺跡のSI11（弥生後期）でも確認されている（『上野Ⅱ遺跡』（島根県教育委員会、2001年12月））。SI11は掘り込みが浅い小型の竪穴建物である。柱の立て方が簡単である建物は全体の規模も小さいという傾向は、菅原Ⅱ遺跡の当建物跡と共通している。

(3) 金山元治郎氏の御教示による。

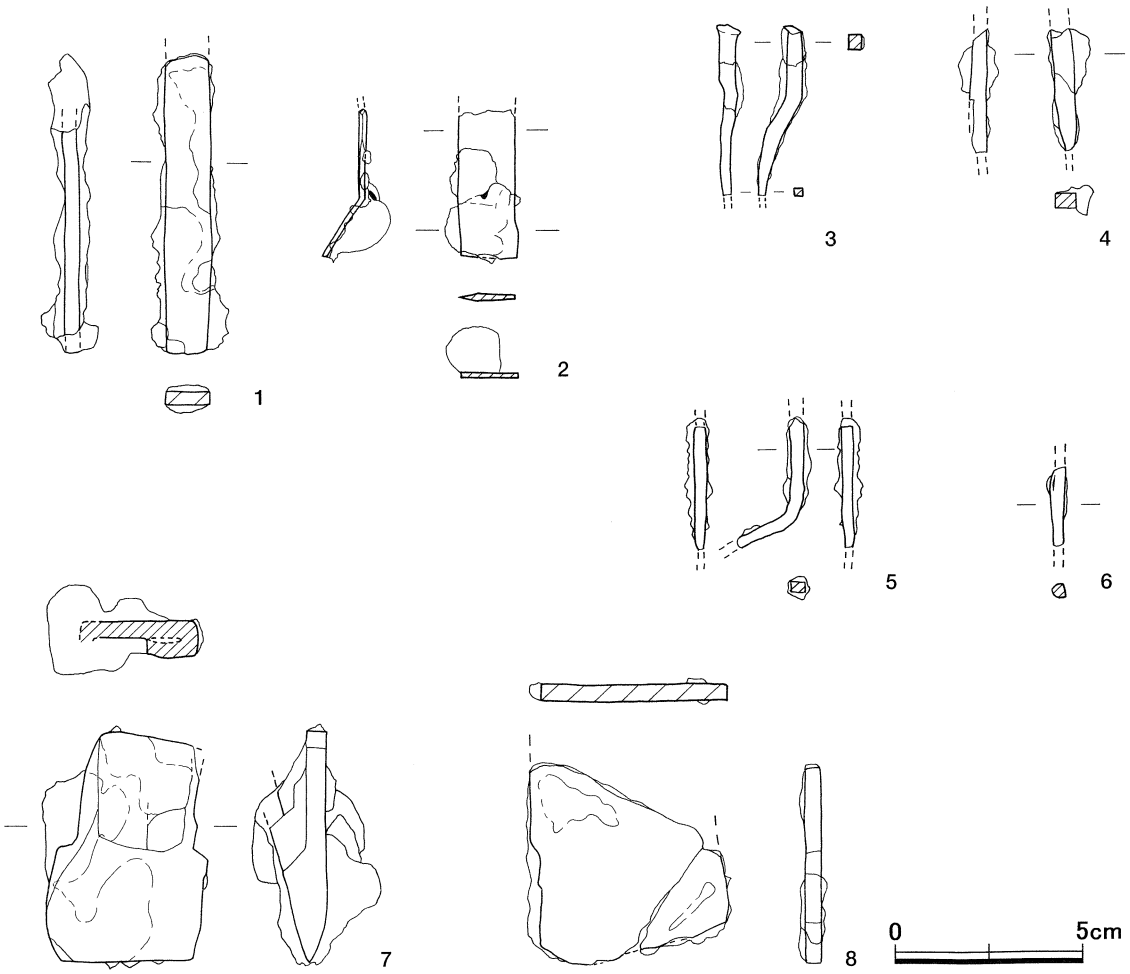
(4) 製作技法については、当教育委員会職員の丹羽野裕の教示による。



第67図　菅原Ⅱ遺跡３区　遺構外出土遺物実測図（１～４：Ｓ＝1/3，５～６：Ｓ＝1/2）

第21表　菅原Ⅱ遺跡　遺構外出土土器観察表

挿図番号 (写真図版)	出土地点	種別	計測値 ①口径cm ②器高cm ③低径cm	形態の特徴	調整・文様の特徴	色調	胎土	備考
67－1 (37)		土師器 甕	②(5.2)		内面：口縁横ナデ、 胴ヘラ削り	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	やや粗 (多量の石英、金雲母、 黒雲母、赤褐色粒を含む)	
67－2 (37)		土師器 高坏 (坏)	②(4.0)	坏部、脚部を別に作って接続	外面：ハケ目 内面：ハケ目後ナデ	外：黄褐色 内：淡橙褐色	密 (石英、金雲母、 黒雲母を多く含む)	内外面とも赤彩
67－3 (37)		土師器 手捏ね 土器	①(13.8) ②(4.2)		外面：指オサエ 内面：ナデ	外：淡黄褐色 内：淡黄褐色	密 (少量の石英、 赤褐色粒を含む)	
67－4 (37)		土師器 竈	②(4.9)		外面：ナデ 内面：ヘラ削り	外：淡黄褐色 内：淡橙褐色	密 (２㎜以下の砂粒を 少し含む)	



第68図　菅原Ⅱ遺跡３区出土鉄器実測図（S＝1/2）

第22表　菅原Ⅱ遺跡　遺構外出土石器観察表

挿図番号 (写真図版)	出土地点	種別	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	研磨・使用状況	備考
67－5 (37)		石器 磨製石斧	砂岩か	8.4	5.0	3.1		
67－6 (37)		石器 スクレイパー	瑪瑙	4.2	(3.1)	1.0		

第23表　菅原Ⅱ遺跡　遺構外出土金属器観察表

挿図番号 (写真図版)	出土地点	遺物名 (名称)	計測値（㎜） 長×幅×厚	重量 （g）	遺存度	形態的特徴	備考
68－1 (37)		鉄器 刀子または ヤリガンナ	80×12×4	15.63	半分以上		
68－2 (37)		鉄器 刀子	(41)×20×1.5	7.48	半分未満 但し基部は 残存か	断面：基部は長方形。 先端部は左側縁を頂点とする横長の三角形。	
68－3 (37)		鉄器 釘	455×35×4	1.92	半分以上	頭部は叩かれてつぶれている。	
68－4 (37)		鉄器 棒状金属片 （釘か？）	33×5×4	3.21	半分未満		
68－5 (37)		鉄器 釘	32×4×3	1.49	半分以上		
68－6 (37)		鉄器 棒状金属片	21×3×4	0.75	半分未満	両端破断。 断面形、 器種ともに不明。	
68－7 (37)		鉄器 斧	袋部：32×31×15 刃部：29×41×11.5		半分以上	肩を持つ。 折り返しなし。	
68－8 (37)		鉄器 板状鉄器片	5.3×5.3×4.5	59.13	半分未満	肩または段がつく。 全体的に非対称。	

6．まとめ

菅原Ⅱ遺跡の発掘調査で検出した遺構は3区に集中していた。ここは、東向きの斜面であるが5世紀代の建物跡2、加工段跡7等が見つかった。出雲市では平野部を中心に最近調査が進められ集落の変遷がある程度捉えられるようになった。しかしながら、それは弥生時代や奈良時代を中心とするもので古墳時代の集落はあまり知られていないのが現状である。そこで、出雲市における集落の変遷を今一度検討し、菅原Ⅱ遺跡の位置付けを行いたいと思う。

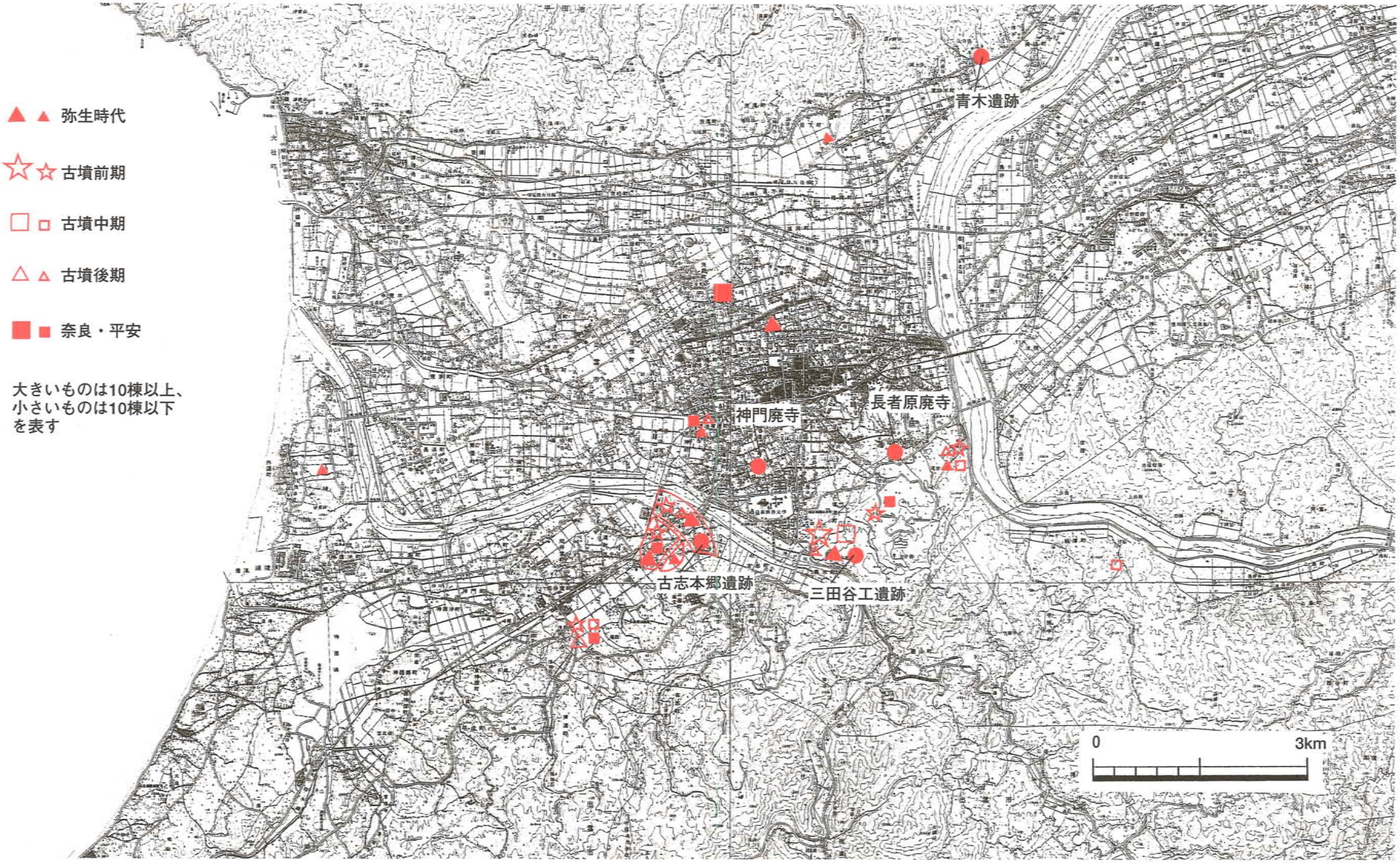
出雲平野における集落は弥生時代中期になると急増し、平野部全域でその存在が確認されている。それらは大きく分けて3つの地域に分けられる。当時、入海である神門水海に向かって斐伊川と神戸川の2つの大きな川が流れこんでいた。これら2つの川によって区切られた3地域にそれぞれ大規模な集落が存在している。すなわち、斐伊川の北側に位置する山持川遺跡、青木遺跡等の地域、斐伊川南側の矢野遺跡や天神遺跡を中心とする地域、そして神戸川の南側の古志本郷遺跡を中心と

する地域の３地域である。これらの集落は水田耕作等の水の管理をとうして共同体の絆を深め拠点集落を中心に発展していったものと思われる。そして弥生共同体が崩壊し、首長墓である西谷墳墓群が出現した後までこの集落は存続していることは注目される。集落には溝を伴っているものが多いが、中期～後期に掘られた溝が埋まる時期を見てみると、古志本郷遺跡、天神遺跡、四絡遺跡群では古墳時代前期、下古志遺跡は後期前葉、後期中葉、古墳時代前期があり、出雲平野の集落は青銅器を埋納する時期や西谷墳墓群出現の時期に大きな変化が見られないことは重要な意味を持つものと言えよう。また、弥生時代中期には山陽地方の塩町式土器、九州の須玖式土器、弥生時代後期～古墳時代前期になると朝鮮半島の土器や中国大陸の弓の模倣品、畿内の土器等が出土しており、大陸を含めた各地域の情報が当時この地にもたれされていた。このことが出雲平野の集落の発展をもたらしたものと考えられる。

なお、出雲平野では弥生時代から続く集落が古墳時代前期中葉まで続くのに対し、安来平野では、弥生時代終末期に消滅している。かって門脇俊彦氏は石見山間部の大規模な弥生集落が古墳時代前期に村落分解を起こし、集落が拡散し小規模なものに移っていくと論じられている[(1)]が、弥生時代中後期から続いた大規模な集落が弥生時代末か古墳時代初頭に消滅しているのは県下全体で見られる傾向であるといえる。ただ、消滅する時期が地域で若干異なることは古墳の出現と何らかの関係があるものと考えられる。すなわち、集落が早く消滅した安来平野は出雲平野より早く大成古墳等の古墳が出現しているのに対し、古墳時代前期中葉まで残る出雲平野では、前期後半になってはじめて古墳が造り始めている。このように弥生社会から古墳時代へ移る時期に弥生集落は消滅し、新しい体制の中で集落が再編成されたものと考えられ、地域によって古墳文化を受容する時期が異なっていることが集落の消滅時期に差を生じているものと推測される。

このように出雲平野では、弥生時代から古墳時代前期中葉まで大規模な集落が存在していたが、その後、急速に集落が減少し、集落の中心は前期の古墳が存在している知井宮地区や主要な後期古墳が造られている塩冶地区等、平野部南側の山際に移ってくるようである。神戸川の南側の谷入り口にある知井宮地区の浅柄遺跡や、斐伊川放水路建設予定地の谷部に存在する三田谷Ⅰ遺跡、長廻遺跡では古墳時代前期～後期にかけての住居跡が数棟確認されている。また、知井宮地区の古志本郷遺跡は弥生時代から続く集落であるが、古墳時代前期後半～後期の建物跡も検出されている。これは、平野部に存在していた他の拠点的集落が古墳時代前期中葉に消滅していることを思えば特異な存在といえるが、当遺跡のある知井宮地区には前期古墳の浅柄Ⅱ古墳や中期の前方後円墳である北光寺古墳が存在しており、古墳時代には出雲平野の中で中心的な地域になってきたことに起因しているものと思われる。ただ、知井宮地区の集落の中心は古志本郷遺跡から南側の浅柄遺跡に移っているものと考えられる。なお、今まで平野部では天神遺跡で古墳時代後期の建物跡が１棟検出されている他は知られていなかったが、昨年調査した中野清水遺跡６区では、５世紀代の建物跡が１棟検出され、４世紀中ごろの朝鮮半島の陶質土器が出土している。今後、平野部でも古墳時代の建物跡が見つかる可能性を持っているが、弥生時代のような大規模な集落は存在していないものと考えられる。

このように古墳時代になると集落が減少してくるが、これは、弥生集落が溝によって区画された中にまとまって住居を築造しているのに対し、古墳時代の集落は拡散され規模が小さくなるとともに竪穴住居から掘立柱建物に変わっていくことが住居跡を発見しにくくしているものと考えられ



第69図　出雲平野における建物跡検出状況図（S＝1/75,000）

る。出雲平野では北光寺古墳を除き大規模な中期古墳が知られていないが、後期になると最新の土木技術を持った大念寺古墳の被葬者が出雲平野を開拓し、再び当地域が活性化し、人口が増えてきたものと推測される。しかしながら、集落の検出例が少ないのが現実である。

奈良時代になると出雲平野全体から遺物、遺構が検出され、弥生時代以来再びこの地域が活性化してくる。拠点となる公的な機能を持った遺跡は知井宮地区の古志本郷遺跡、塩冶地区の三田谷遺跡、それに北山の麓にある青木遺跡、斐川町の後谷遺跡等、出雲平野の各地域に広がっている。また、平野の中央部にあたる小山遺跡、天神遺跡でも建物跡が検出され、神門廃寺のように寺院も平野部に造られるようになる。『出雲国風土記』によると奈良時代に出雲平野では2郡15郷があり、かなりの人口があったものと思われ、政治的中心地は国府があった松江の意宇地方であるのに対し、出雲平野は経済及び文化の中心地であったものと推測される。

以上のように出雲平野のおける集落は弥生時代と奈良時代が最も栄えているが、古墳時代は縮小傾向で、平野の南側にあたる知井宮及び塩冶地区に集落が集中して存在している。菅原地区では縄文時代の落とし穴は見つかっているが、弥生土器は検出されず、本格的な集落が出現するのは今回の調査で見つかった5世紀に入ってからである。出雲平野では弥生集落が消滅し、古墳文化を受容した時期に集落の再編成が行われ、今まで本格的な集落が無かった浅柄遺跡や長廻遺跡のように南側山間地にも広がっている。菅原Ⅱ遺跡の集落もそのような集落の変遷過程の中で出現したものと考えられ、その後、菅原横穴墓群のようにこの地でも後期古墳が築造されるようになる。このように、菅原Ⅱ遺跡の集落跡は、出雲平野における古墳時代の集落の変遷を考える上に貴重な資料を提供するものとして重要なものであるといえる。

註

(1) 門脇俊彦「古墳の普及と其周辺」『考古学研究』第10巻－3号　考古学研究会 1963.12

参考文献

出雲市教育委員会　『遺跡が語る古代の出雲　－出雲平野の遺跡を中心として－』1997.2

島根県教育委員会　『古志本郷遺跡Ⅰ』1999.3

島根県教育委員会　『古志本郷遺跡Ⅱ』2001.3

島根県教育委員会　『蟹谷遺跡・上沢Ⅲ遺跡・古志本郷遺跡Ⅲ』2001.3

島根県教育委員会　『古志本郷遺跡Ⅴ　出雲国神門郡家関連遺跡の調査』2003.3

島根県教育委員会　『古志本郷遺跡Ⅵ　－K区の調査－』2003.3

出雲市教育委員会　『一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　下古志遺跡』2001.3

島根県教育委員会　『三田谷Ⅰ遺跡（VoI.2）』2000.3

島根県教育委員会　『三田谷Ⅰ遺跡（VoI.1）』1999.3

島根県教育委員会　『三田谷Ⅲ遺跡』2000.3

出雲市教育委員会　『西出雲駅南土地区画整理に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　浅柄遺跡』2000.3

出雲市教育委員会　『三谷遺跡・藤廻遺跡・長廻遺跡・大井谷Ⅱ遺跡・瀧谷山城跡』2000.3

島根県教育委員会　『長廻横穴墓群・長廻遺跡（VoI.1）』2001.3

島根県教育委員会　『長廻遺跡（VoI.2）・権現山古墳』2003.3

島根県教育委員会　『姫原西遺跡』1999.3

島根県教育委員会　『上沢Ⅱ遺跡・狐廻谷古墳・大井谷城跡・上塩冶横穴群第７・12・22・23・33・35・36・37支群』1998.3

出雲市教育委員会　『市道山陰本線北沿線設置予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　天神遺跡（第10次発掘調査）』2002.3

出雲市教育委員会　『斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書Ⅲ　大井谷Ⅰ遺跡大井谷Ⅱ遺跡』2001.3

出雲市教育委員会　『上長浜貝塚』1996.3

出雲市教育委員会　『山持川川岸遺跡』1996.3

出雲市教育委員会　『天神遺跡　国立島根医科大学教職員宿舎建設にかかる緊急発掘概報』1977.3

出雲市教育委員会　『出雲市埋蔵文化財調査報告書』第４集　1994.3

出雲市教育委員会　『出雲健康公園整備プロジェクト事業に伴う矢野遺跡第２地点発掘調査報告書』1991.3

出雲市教育委員会　『神門地区遺跡詳細分布調査報告書』1989.3

出雲市教育委員会　『建設省新庁舎建築に伴う天神遺跡発掘調査報告書Ⅳ』1986.3

出雲市教育委員会　『出雲市天神遺跡　調査の記録』1972.3

出雲市教育委員会　『建設省職員宿舎新築に伴う天神遺跡発掘調査報告書』1982

出雲市教育委員会　『市道四絡30号外１線道路改良工事に伴う小山遺跡第３地点発掘調査報告書（第３次発掘調査）』2002.3

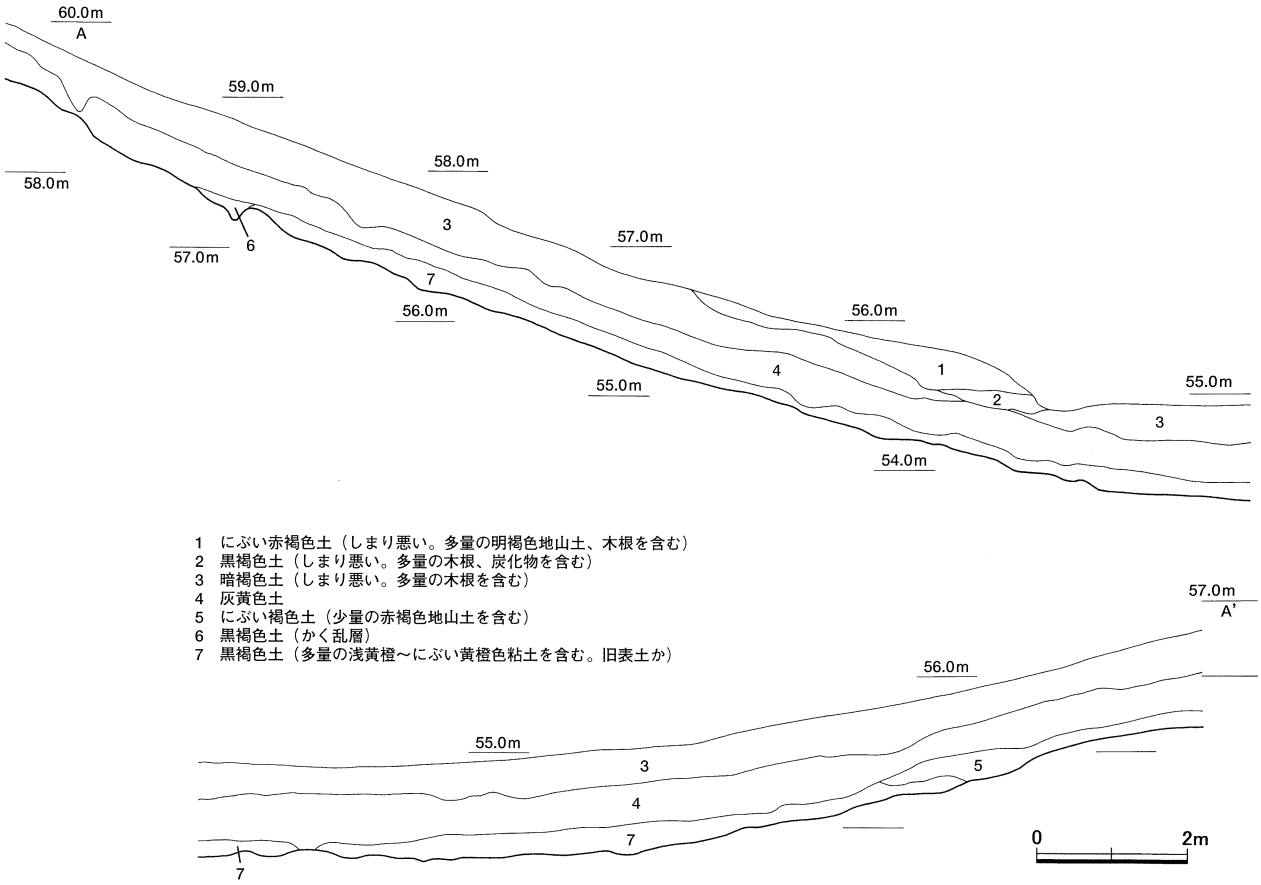
出雲市教育委員会　『四絡幼稚園改築事業に伴う小山遺跡第３地点発掘調査報告書（第４次発掘調査）』2002.3

第５節　菅原Ⅲ遺跡

遺跡の立地

菅原Ⅲ遺跡は、上之郷城の出城と伝える高丸城の北東麓の谷に位置する。高丸城の東麓から、この谷（通称地名「奥ザコ」）の南から東へとまわりこむように尾根がのびており、この尾根の先端部が菅原集落および菅原Ⅱ遺跡と「奥ザコ」菅原Ⅲ遺跡の間を隔てている。尾根の頂上部は南北45m、東西7.5mの広い平坦面となっている。高丸城の麓という立地から、この平坦面に城館関連施設があることが予想された。また、山頂平坦面から谷にかけては緩斜面となっており、遺跡の存在が予想された。したがって、平成13年度の試掘調査ではこの山頂平坦面から緩斜面、谷部にかけてトレンチを入れた。だが、予想に反して山頂部からは遺構も遺物も検出されなかった。遺構が検出

第70図　菅原Ⅲ遺跡　調査前地形図（S=1/300）



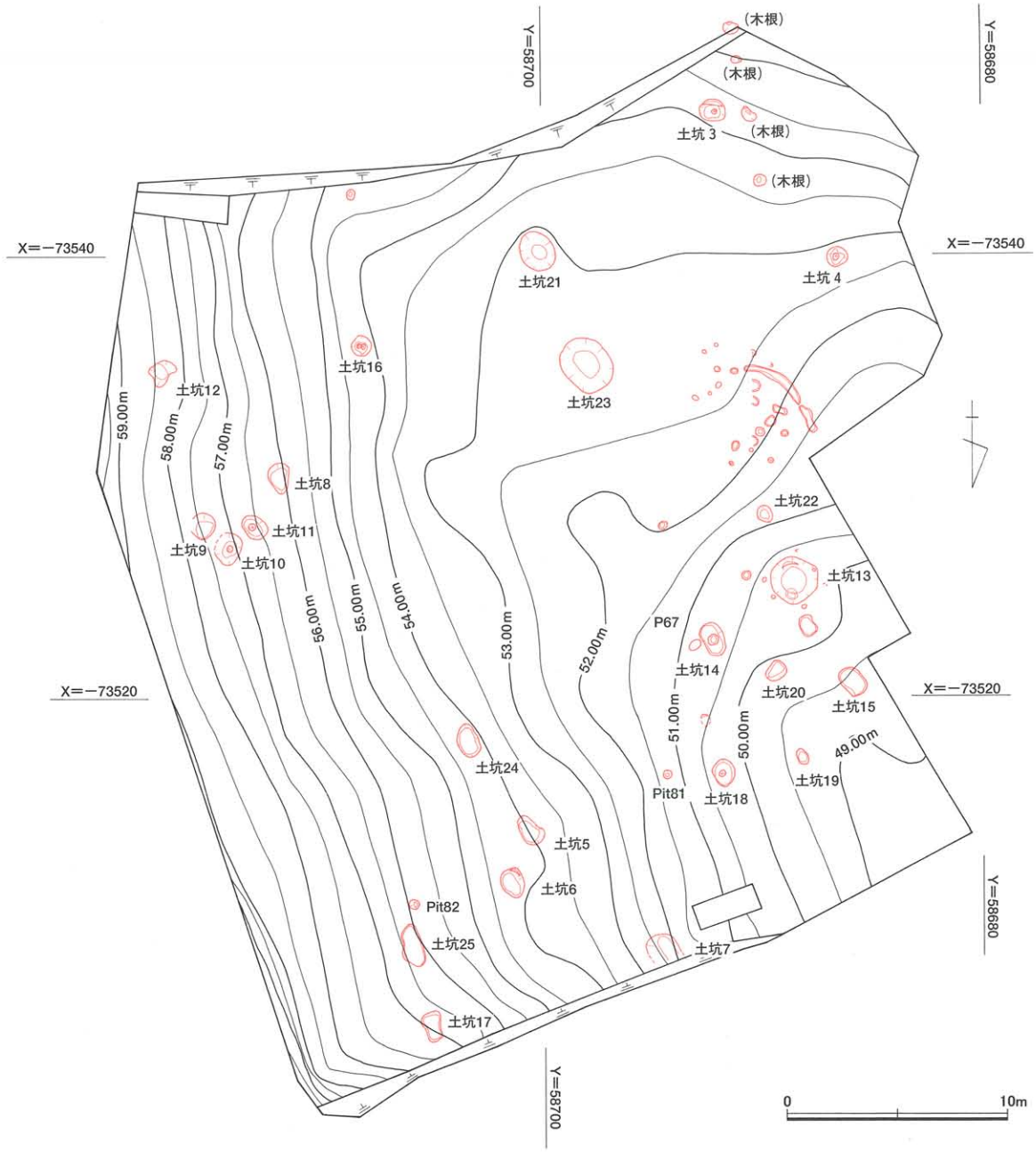
第71図　菅原Ⅲ遺跡　基本土層図（S＝1/100）

されたのは、緩斜面の下半部から「奥ザコ」の谷間にかけてであった。この緩斜面は桑畑・果樹園として利用されており、谷部では簡単な炭焼きが行われていた。本調査は平成14年度７月から平成15年１月にかけて実施した。

基本層序

暗褐色の表土（第71図１～３層）を除去すると、よくしまった灰黄色土（同図第４層）の上面に達する。試掘調査では、この層の上面で、平安期の土師器を含む遺構（土坑１）を検出した。最上層の遺構面である。灰黄色土を掘り下げると、より硬い黄色粘土層（地山）に達する。これが最下層の遺構面であり地山である。地山の色調が黄色いのに対して、遺構の埋土はやや青みをおびた灰オリーブ色の細砂質土である。遺構面を覆っている灰黄色土（第４層）と同質で、山の基盤を構成している岩盤が風化・堆積した土であるが、長期間土坑内に埋没しているうちに還元状態となって、青く変色して灰オリーブ色を呈している。ただし、灰黄色土（第４層）が堆積していない調査区西半部では、遺構面は地山面の１面だけであった。

試掘調査の結果から、遺構面は第４層上面と地山面の２面であると考えていたが、谷中央部では第４層上面と地山面の中間からも遺構が検出されたため、さらに２段階の遺構が加わることが判明した。すなわち、地山面の土坑23の上に建物２が重なり、建物２の上に土坑26が重なっていた。土坑26の南東には、黒褐色土が広がり、この黒褐色土の上に建てられた建物３が最上層の遺構である。従って、谷中央部では合わせて４段階の遺構の存在が確認できる。



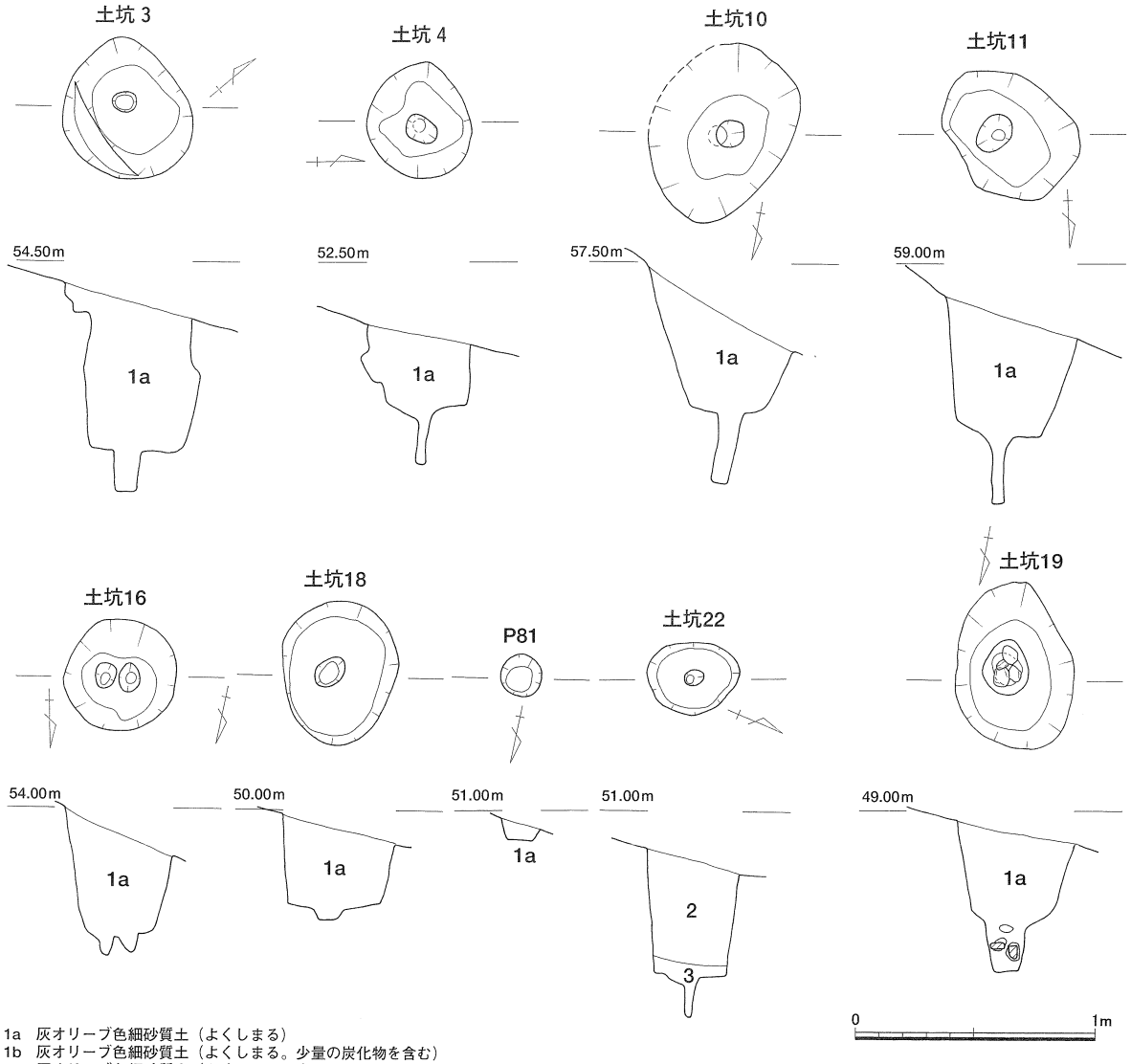
第72図　菅原Ⅲ遺跡　調査跡地形及び遺構配置図１（S=1/300）

遺構と遺物

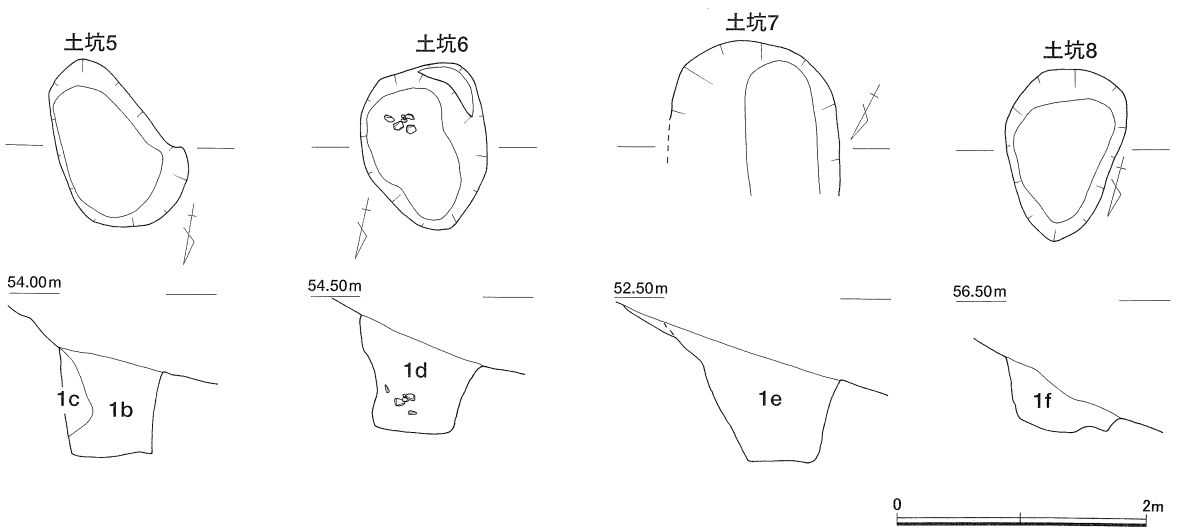
地山面で検出された遺構群――第１段階および時期不明の遺構（第72図）

埋土の質から二群に大別できる。92Pの「地山面検出の土坑一覧表」に記すように、多くの土坑の埋土が「A：よくしまった灰オリーブ色粘質土」に分類され、「B：暗灰黄褐色土」としたものが少数存在する。埋土がBである遺構は、灰黄色土（第４層）が堆積していない調査区西部に集中する。土坑13・22、それらより少し南方で検出された一連の溝状遺構・ピット群（第78図に一括して掲載）が埋土Bである。これらの遺構は、埋土Aのものより時期が新しくなると考えられる。

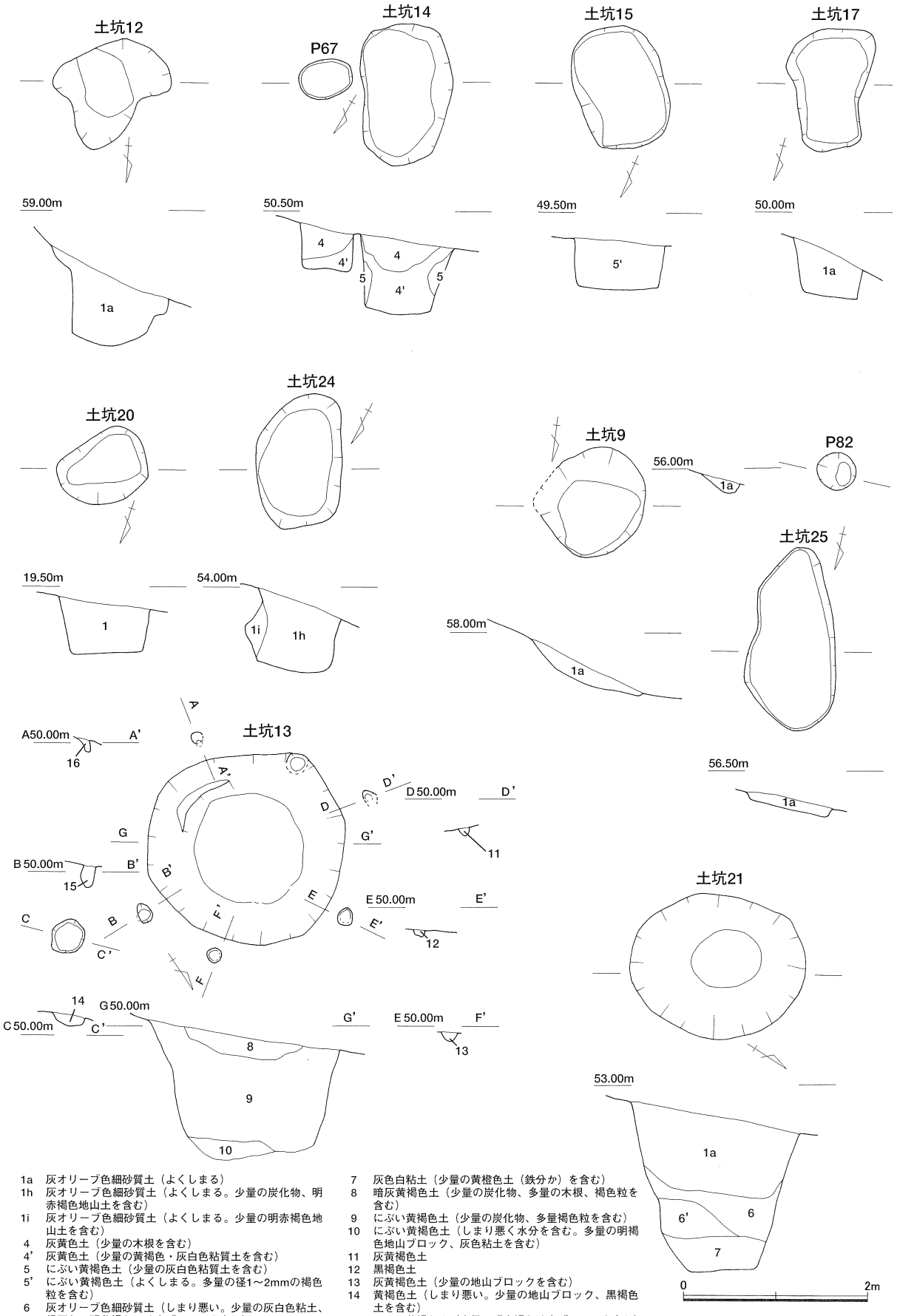
調査区東半分の緩斜面から谷中央部にかけては、しまりのよい灰黄色土（第４層）が堆積してお



1a　灰オリーブ色細砂質土（よくしまる）
1b　灰オリーブ色細砂質土（よくしまる。少量の炭化物を含む）
1c　灰オリーブ色細砂質土（よくしまる。少量の明赤褐色地山を含む）
1d　灰オリーブ色細砂質土（よくしまる。少量の炭化物、明黄褐色地山ブロックを含む）
1e　灰オリーブ色細砂質土（よくしまる。少量の明赤褐色地山ブロックを含む）
1f　灰オリーブ色細砂質土（よくしまる。少量の明黄褐色の崩れた岩盤を含む）
2　灰黄褐色土（少量の明赤褐色地山ブロックを含む）
3　灰黄褐色土（少量の炭化物、多量の明赤褐色地山ブロックを含む）



第73図　菅原Ⅲ遺跡　土坑群実測図１（S＝1/60，土坑19のみS＝1/30）



1a　灰オリーブ色細砂質土（よくしまる）
1h　灰オリーブ色細砂質土（よくしまる。少量の炭化物、明赤褐色地山土を含む）
1i　灰オリーブ色細砂質土（よくしまる。少量の明赤褐色地山土を含む）
4　灰黄色土（少量の木根を含む）
4'　灰黄色土（少量の黄褐色・灰白色粘質土を含む）
5　にぶい黄褐色土（少量の灰白色粘質土を含む）
5'　にぶい黄褐色土（よくしまる。多量の径1～2mmの褐色粒を含む）
6　灰オリーブ色細砂質土（しまり悪い。少量の灰白色粘土、緑灰色～明黄褐色の地山ブロックを含む）
6'　灰オリーブ色細砂質土（しまり悪い。多量の灰白色粘土、緑灰色～明黄褐色の地山ブロックを含む）
7　灰色白粘土（少量の黄橙色土（鉄分か）を含む）
8　暗灰黄褐色土（少量の炭化物、多量の木根、褐色粒を含む）
9　にぶい黄褐色土（少量の炭化物、多量褐色粒を含む）
10　にぶい黄褐色土（しまり悪く水分を含む。多量の明褐色地山ブロック、灰色粘土を含む）
11　灰黄褐色土
12　黒褐色土
13　灰黄褐色土（少量の地山ブロックを含む）
14　黄褐色土（しまり悪い。少量の地山ブロック、黒褐色土を含む）
15　にぶい黄褐色土（少量の明赤褐色地山ブロックを含む）
16　暗灰褐色土（多量の明赤褐色地山ブロックを含む）

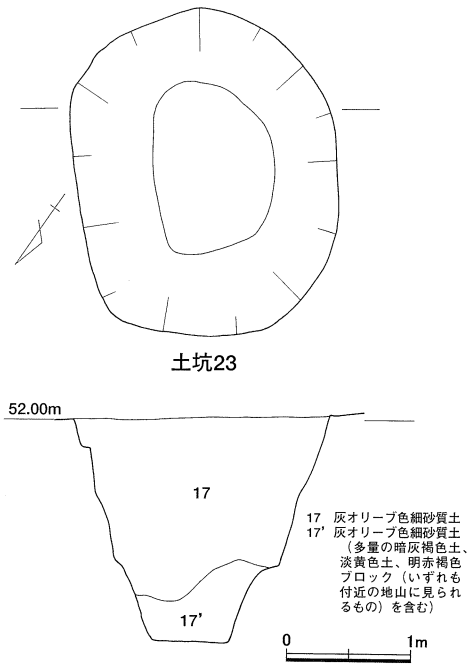
第74図　菅原Ⅲ遺跡　土坑群実測図２（S＝1/60）

り、その範囲内にある土坑の埋土はいずれもAであった。灰オリーブ色でよくしまった埋土Aは、埋土Bや上層の遺構の埋土とは色調もしまり具合も全く異なっており、埋没以後の時間が上層の遺構よりも相当長期であったことを推測させた。このうち、土坑６から縄文時代後期に遡る土器片が出土したので、埋土が灰オリーブ色系のAである土坑の年代は縄文時代に遡ることがわかる。これらの土坑の性格は、出土遺物から判断するのが基本である。大型の土坑21，23については石鏃が出土したので、大型動物を捕獲する落とし穴と判断される。遺物が出土していない土坑についても、７穴（３・４・10・11・16・18・19）（第73図）が底面中央に落とし穴特有の小ピットを持っていることから落とし穴と判断してよい。土坑16は小ピットを２穴有する。小ピットを作る目的は、この

第24表　菅原Ⅲ遺跡　地山面検出の土坑一覧表

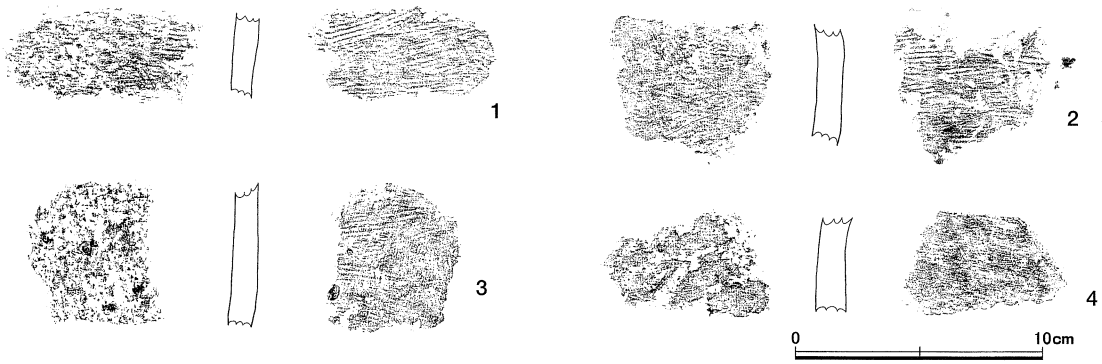
番号	遺物	杭穴(径×深さ)m	規模(長軸×短軸×深さ)m	平面形	埋土
3		0.2×0.3	1.2×1.0×1.4	円	A
4		0.2×0.4	0.9×0.9×0.7	不整円	A
5			1.4×0.8×0.8	楕円	A
6	縄文土器		1.3×1.0×0.9	楕円	A
7			(1.2×1.3)×1.2	調査区外へ続く	A
8			1.4×0.9×0.6	鶏卵	A
10		0.2×0.6	1.5×(1.1)×1.1	楕円	A
11		0.3×0.6	1.2×0.9×1.3	楕円	A
12			1.1×1.0×1.1	不整	A
13			2.2×2.2×1.4	円	B
14		0.5×0.3	1.6×1.0×0.8	長い	A
15			1.3×1.0×0.5	長い	A
16		0.2×0.2、0.1×0.2	0.9×0.9×1.1	円	A
17			1.3×0.9×0.6	不整形	A
18			1.2×1.0×0.8	楕円	A
19			1.5×0.9×0.4	楕円	A
20			1.0×0.8×0.6	楕円	A
21	石鏃		1.9×1.6×1.9	楕円	A
22			0.8×0.6×1.0	楕円	B
23	石鏃		2.6×2.1×1.8	楕円	A
24			1.4×0.9×0.9	楕円	A
25			2.0×1.0×0.2	不整形	A

埋土　A：よくしまった灰オリーブ色粘質土。
B：暗灰黄褐色土。Aほどのしまりは無い。
網かけは特に規模の大きな土坑

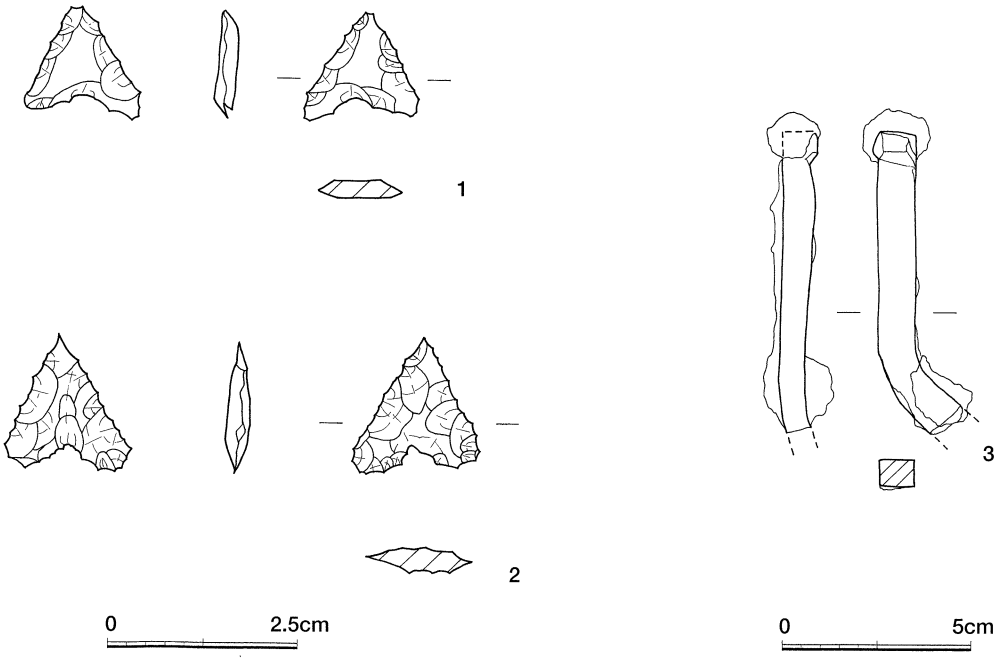


上に杭を立て、中に落ちた動物の動きを封じて跳び出せないようにするためであろう。土坑19では、杭の支えとして川原石を小ピットに充填しているのが確認された。他の14穴は底面中央の小ピットを持たない。落とし穴の多くが複数隣接して作られている。（土坑5・6及び8～11など）、土坑14・18・25のように、すぐ近くに径40㎝程度の円形のピットを伴う場合がある。これらの土坑やピットも、動物を捕獲する仕掛けの可能性があろう(1)。長径2m近い土坑21・23（第74・75図）が大型獣を対象としている以外は、規模から見て小動物を対象とした落とし穴であろう。大型の土坑13（第74図）は、埋土が暗褐色でしまりが悪いことから、新しい遺構である可能性が高く、落とし穴と考える積極的な証拠はない。谷筋に位置していることや、

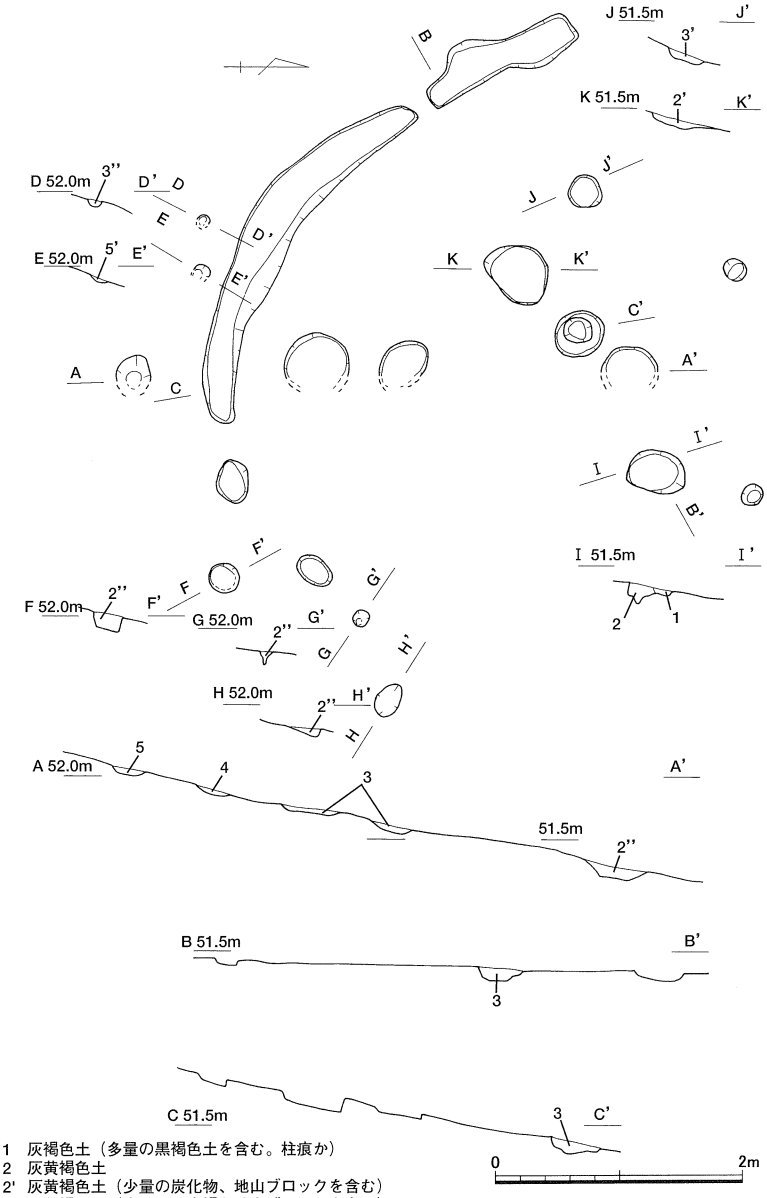
第75図　菅原Ⅲ遺跡　土坑群実測図3（S=1/60）



第76図　菅原Ⅲ遺跡　土坑6出土縄文土器実測図（S=1/3）



第77図　菅原Ⅲ遺跡　出土石器・鉄器実測図（1・2：S=1/1，3：S=1/2）



1　灰褐色土（多量の黒褐色土を含む。柱痕か）
2　灰黄褐色土
2'　灰黄褐色土（少量の炭化物、地山ブロックを含む）
2''　灰黄褐色土（少量の明赤褐色地山ブロックを含む）
3　暗灰褐色土（少量の炭化物、多量の明赤褐色地山ブロックを含む）
3'　暗灰褐色土（多量の明黄褐色地山ブロックを含む）
3''　暗灰褐色土（少量の炭化物、明赤褐色地山ブロックを含む）
4　灰黄褐色土（しまり悪い。多量の黒褐色土、少量の木根を含む）
5　暗灰褐色土（しまり悪い。多量の焼土、炭を含む）
5'　暗灰褐色土（しまり悪い。多量の木根を含む）

第78図　菅原Ⅲ遺跡　調査区西半の遺構群（S=1/60）

調査中もよく水が溜まっていた経験から、水場遺構の可能性を考えたい。周囲を取り囲むように径10㎝程度の小ピットが６穴ある。西側にあった小ピットは他より深く、下端が土坑13の内壁に食い込んでいた。埋土は同質で切り合い関係はない。土坑13に付属するピットであると考えられる。小ピットの機能は土坑13を覆う覆い屋の柱穴などの可能性が考えられる。

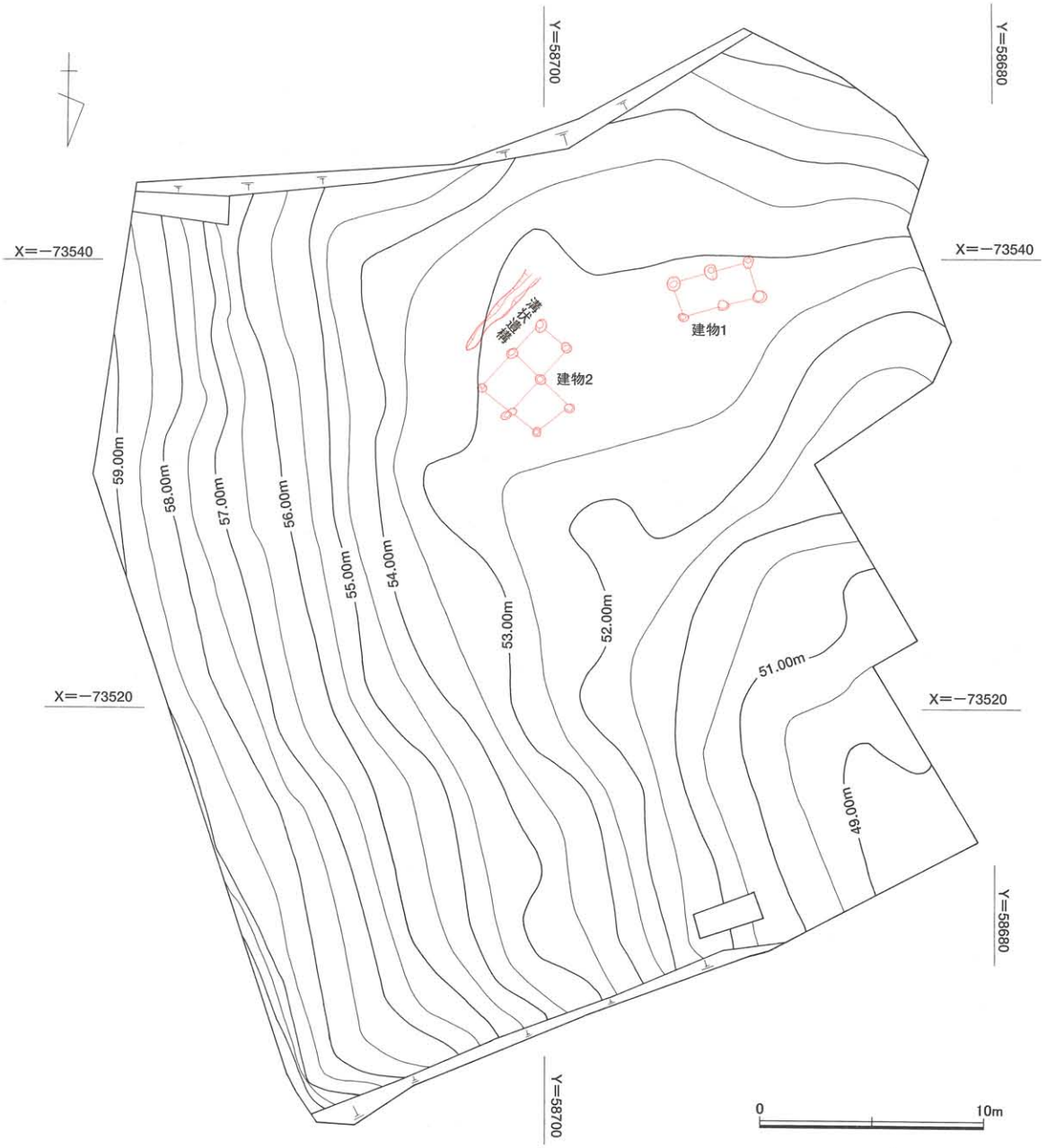
調査区西部の遺構群（第78図）

調査区西半の土坑13南方に、溝状遺構とピットが集中している箇所がある。ピット群を囲むように西から南へカーブする溝状遺構は、竪穴建物の壁体溝の可能性を強く示唆するものであった。しかし、ピット底面のレベルはばらつきが著しく、掘り込みが浅すぎる。配列も、建物を支える主柱穴のような規則性が認められなかったので、建物と断定するには至らなかった。だが、これが竪穴建物の残骸である可能性は捨てきれない。

地山面の遺構及び包含層出土遺物（第76・77図）

第76図は土坑６の埋土から出土した縄文土器片である。１は表裏面とも条痕がよく残るが、２や３は表面の条痕をナデ消している。断面形は、２がゆるく内彎、４がゆるく外反する。胎土はいずれも粗く、径２～６㎜の砂粒を多く含む。色調は白に近い浅黄橙色である。縄文後期の遺物と思われるが、詳細な時期は不明である。

第77図には土坑21から出土した安山岩製の石鏃（1）、土坑23から出土した黒曜石製の石鏃（2）、包含層から出土した釘（3）を掲載した。石鏃は１、２とも凹基式で、基部の凹みを作り出した後側縁を調整している。



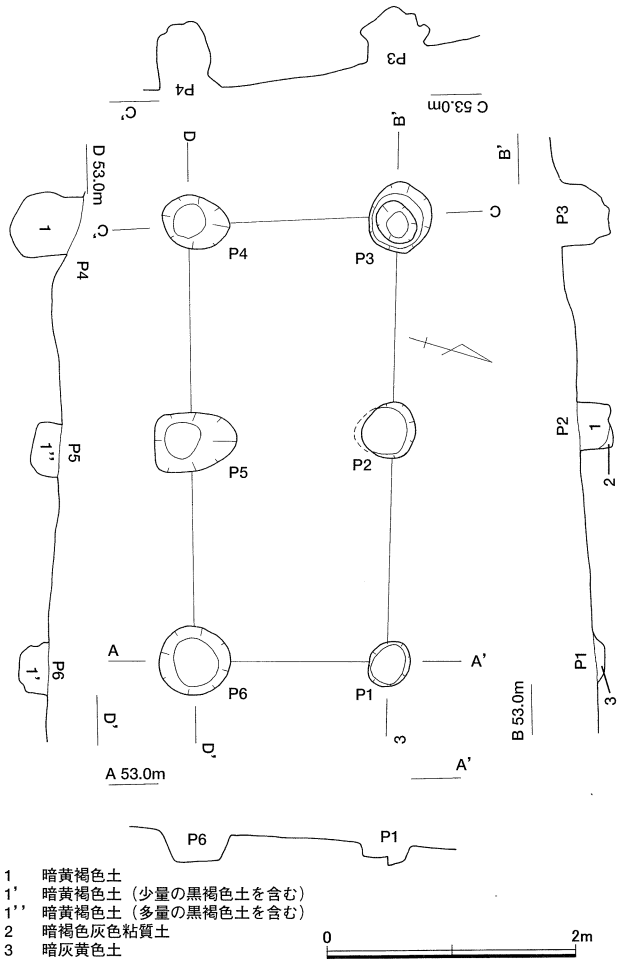
第79図　菅原Ⅲ遺跡　調査後地形及び遺構配置図２（S＝1/300）

褐色土下層の遺構――第２段階（第79図）

調査区中央に広がる谷の中央南よりの位置で、４層（灰黄色土）を掘り下げる過程で建物２や土坑を検出した。両者は同じ位置で重層しており、下層の建物２を切ってその上から土坑26が堀りこまれている（第83図Bライン）。下層の建物２の埋土はしまりの悪い暗灰褐色土であるのに対し、上層の土坑26の埋土は濃い黒褐色で、埋土の質の違いから両者は明確に区別できる。建物１及び溝状遺構２は、埋土が前者と共通しているので建物２と同時期または近い時期であると判断した。

建物１（第80図）

調査区西部で検出された、１間×２間の建物である。柱の軸線は建物２と異なるが、埋土が建物２と同様しまり悪い暗褐色土であること、柱穴の大きさも建物２に近いことから、近い時期の遺構であると判断した。厳密な時期を確定できる遺物は出土していない。Ｐ３底面で径20㎝の柱痕が確



第80図　菅原Ⅲ遺跡　建物１実測図（S＝1/60）

認されており、径20cmほどの柱を使用した掘立柱建物である。

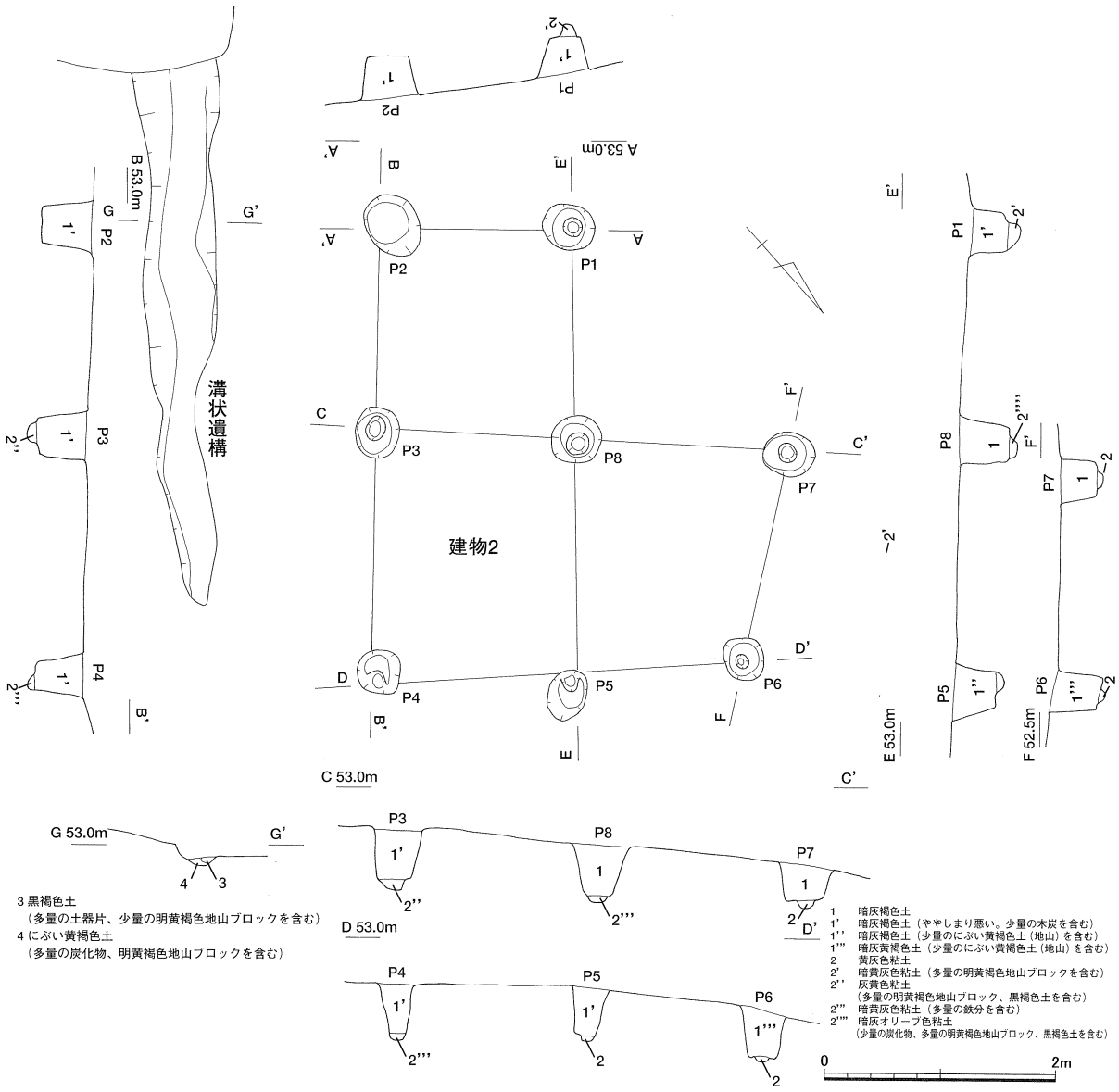
建物２、溝状遺構（第81図）

調査区中央の谷の南よりで確認された建物跡である。２間×２間の掘立柱建物であったと考えられるが、北西隅の柱穴は、すぐ上層から掘り込まれた土坑26に切られて消滅している。残る８穴のうち７穴は、底面の径10cm程度の範囲が灰黄色に変色していた。柱の重みによってできた圧痕であろう[(2)]。柱穴の規模は建物１と大差なく、間数は梁行きも桁行きも建物１より多いにもかかわらず、柱自体は10cmと細めであったことが注意される。

溝状遺構は、建物２の柱穴の軸線と方向が一致することと、埋土が建物２の柱穴と共通であることから、同じ時期の遺構と考えられる。周囲の地形は、南から北へ向かって緩く傾斜していく谷地形である。建物２を建てる必要から平坦面が造成され、溝状遺構はその平坦面の山側の際壁に設けられた溝であろう。菅原Ⅱ遺跡における、加工段の壁際にめぐる溝と同様の機能を果たしていた溝と思われる。

第25表　菅原Ⅲ遺跡　建物１計測表

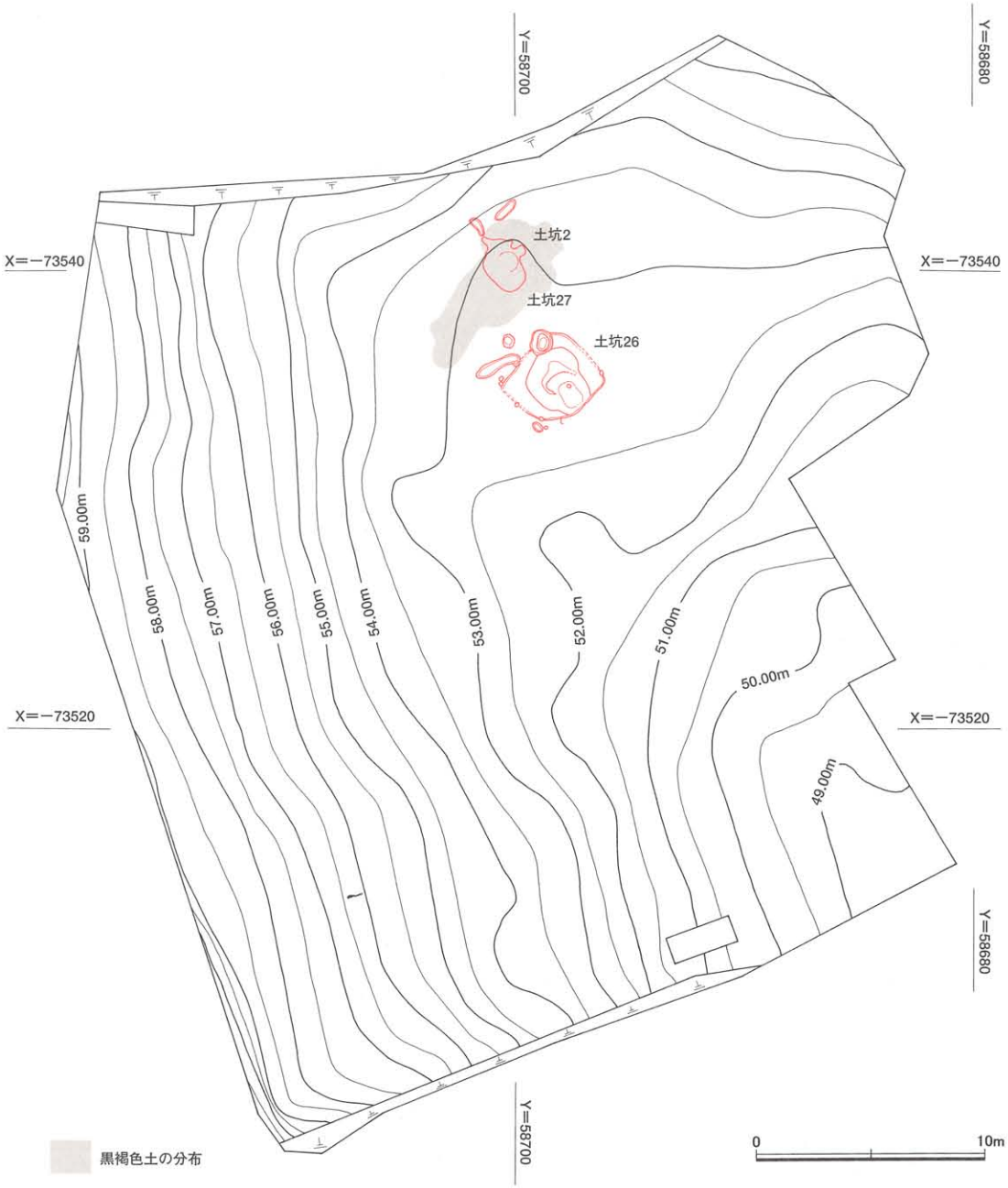
建物１（菅原Ⅲ）							
規模		梁行き			桁行き		
		一間（1.6m）			二間（3.5m）		
主軸		N－75°－E					
柱穴（cm）	番号	P１	P２	P３	P４	P５	P６
	上面径	54×41	66×48	58×55	38×32	47×41	58×48
	深さ	60	26	26	12	28	44
柱間距離（m）		P１－２	P２－３	P３－４	P４－５	P５－６	P６－１
		1.8	1.8	1.6	1.9	1.7	1.7



第81図　菅原Ⅲ遺跡　建物２実測図（S＝1/60）

第26表　菅原Ⅲ遺跡　建物２計測表

建物２（菅原Ⅲ）							
規模		梁行き			桁行き		
		二間（3.2ｍ）			二間（4.0ｍ）		
主軸		N－43°－E					
柱穴（cm）（ ）は柱痕径	番号	Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３	Ｐ４	Ｐ５	Ｐ６
	上面径	57×46	44×38(9)	41×37(9)	33×46(9)	39×33(5)	46×38(11)
	深さ	45	54	50	48	48	41
	番号	Ｐ７	Ｐ８				
	上面径	46×39(9)	46×42(11)				
	深さ	47	52				
柱間距離（ｍ）		Ｐ１－２	Ｐ２－３	Ｐ３－４	Ｐ４－５	Ｐ５－６	Ｐ６－７
		1.8	1.8	2.1	1.8	1.4	1.8
		Ｐ７－８	Ｐ８－５	Ｐ８－３	Ｐ８－１		
		1.8	2.1	1.8	1.8		



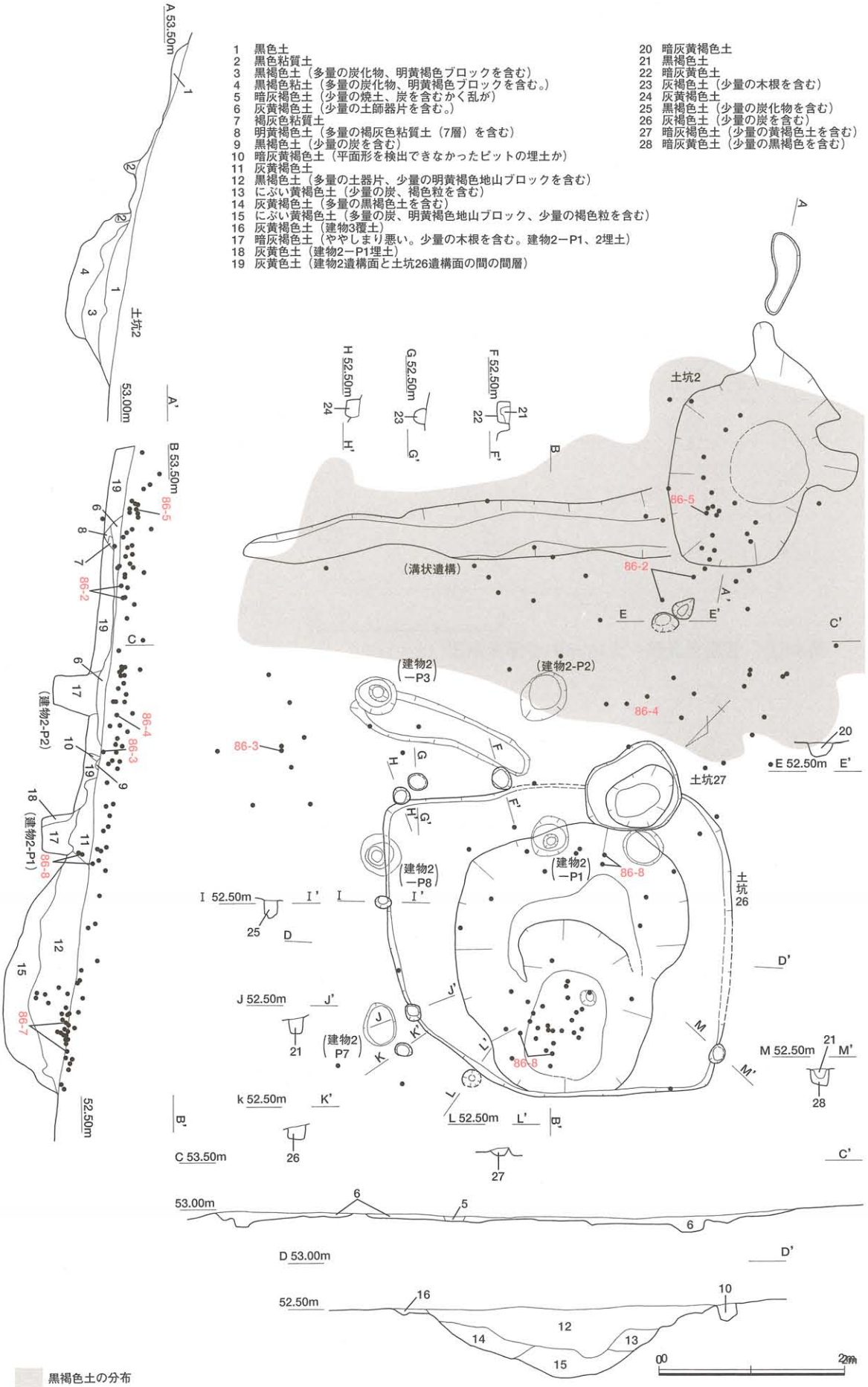
第82図　菅原Ⅲ遺跡　調査後地形及び遺構配置図３（S=1/300）

黒褐色の埋土を含む遺構――第３段階（第82図）

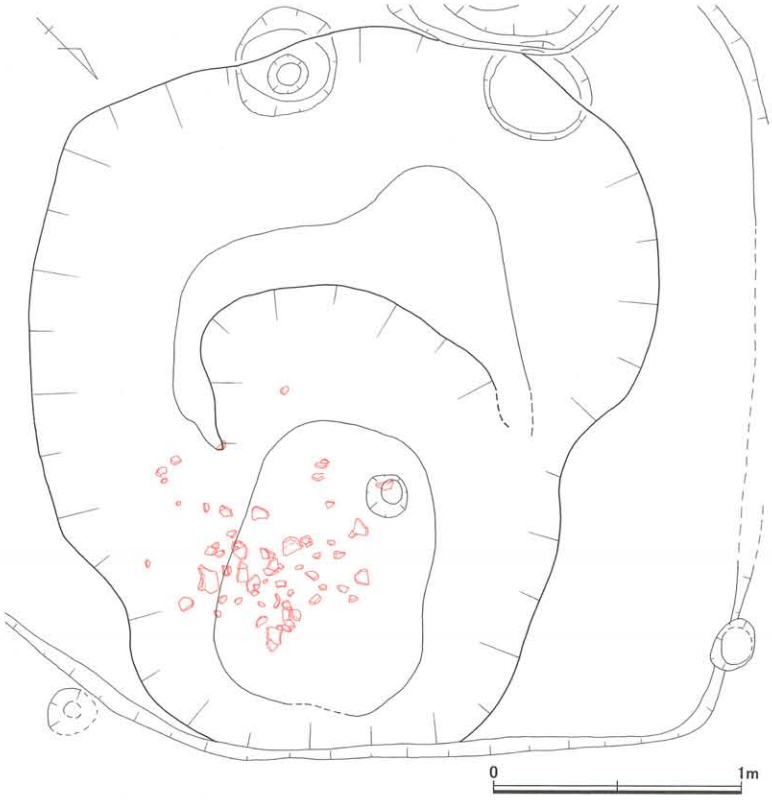
建物２の柱穴（Ｐ１・８など）を切って上から掘りこまれていた土坑26を中心とする。土坑26の埋土の上層には濃い黒褐色土が含まれる。土坑26の南東辺のすぐ南に平行するように黒褐色土の広がりが確認されており、この土が土坑26の上層に流れ込んだものと推定される。土坑２の埋土も同じ黒褐色土である（第83図Ａライン）。

土坑26（第83図）

建物２（第２段階の遺構）のすぐ上層で検出された巨大な土坑である。埋土の上層は上方からの流れ込みと推定される黒褐色土、下層は多量の炭化物を含むよくしまった黄褐色土である。外周が一辺3.5m～４mの方形で、外周部が浅く中心部が深い段状となっている。外周から幅50㎝～1.1mま



第83図　菅原Ⅲ遺跡土坑２・26・27及び遺物出土位置図（S=1/60）

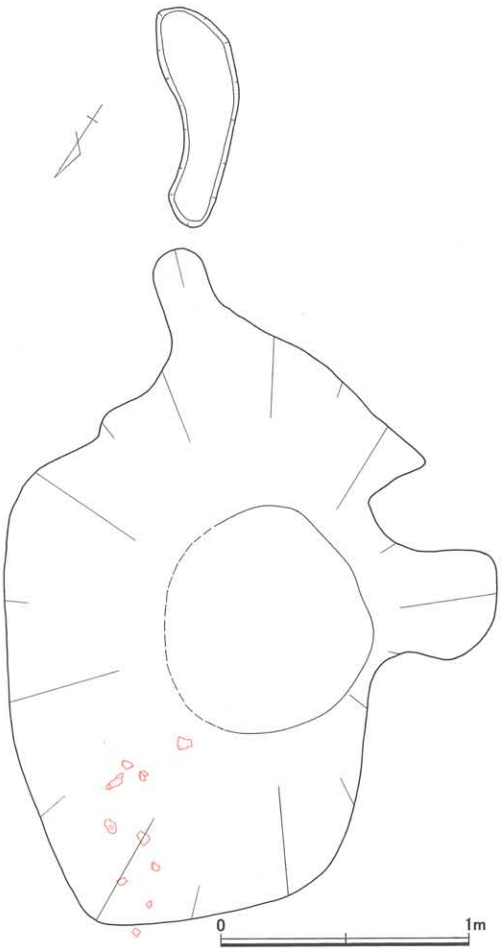


第84図　菅原Ⅲ遺跡　土坑26中心部実測図（S＝1/30）

での範囲はきわめて浅く、検出面からの深さが10㎝程度しかないが、中心部は一段低くなり70㎝の深さがある。深くなっている部分の平面形は不整長方形で、長辺３m、短辺2.5mを測る。南西から北西壁際へ向かって低くなる。

径20㎝の小ピットが遺構の上場に沿って並ぶ。埋土も土坑26の中心部と同じ黒褐色土であることから、土坑26に付随するピット－覆い屋根の支柱など－が考えられる。

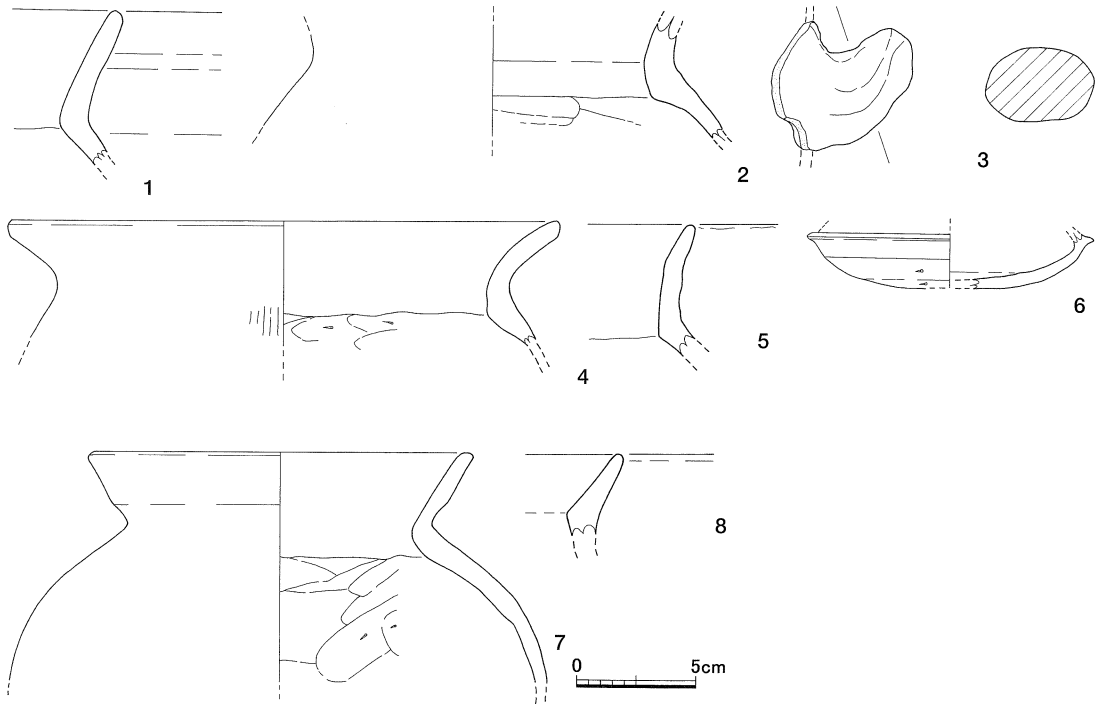
遺構の外周部分がごく浅いことから、削平されて浅くなっている可能性も考えられるが、上場に沿う位置の小ピットはよく残っているので、大規模な削平は考えにくい。当初から掘方が浅かった可能性が高い。



第85図　菅原Ⅲ遺跡　土坑２実測図（S＝1/30）

土坑２（第85図）、及び黒褐色土の広がり（第82図）

土坑26の南に接する位置では、東西方向８m、南北方向４mの範囲にわたって黒褐色土が広がっているのが確認された。この黒褐色土の上に建物３が建てられている。この位置に埋土が黒褐色土である遺構（恐らく竪穴建物か）が存在し、その廃絶後同じ位置に建物３が建てられたと考えられる。分布範囲の平面形も断面形（第89図Ｆライン）も全く遺構の体をなさず、細長い範囲に散らばっているのは、土坑26が掘り込まれたとき、または建物３建造時に大きくかく乱を受けたからであろう。黒褐色土の分布範囲の南寄りで土坑２を検出した。長辺２m、短辺1.5m、深さ60㎝（83図Ａライン）を測る。土坑の南辺から幅20㎝のごく浅い溝状部分が南方向に伸びている。黒褐色土の分布範囲に重なる位置にあり、埋土が同じ黒褐色土であったことから、かく乱で消失した遺構に伴う施設であった可能性もある。



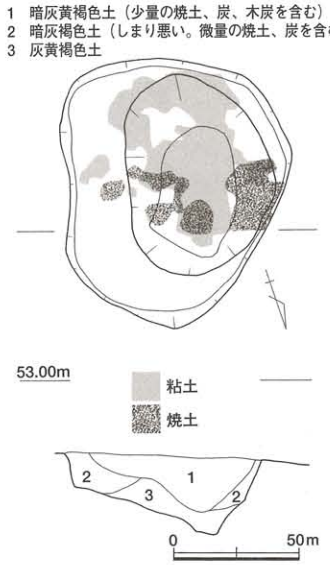
第86図　菅原Ⅲ遺跡　土坑26及び周辺出土遺物実測図（S＝1/3）

第27表　菅原Ⅲ遺跡　土坑26及び周辺出土土器観察表

挿図番号 (写真図版)	出土地点	種別	計測値 ①口径cm ②器高cm ③低径cm	形態の特徴	調整・文様の特徴	色調	胎土	備考
86－1 (53)	土坑26上方 黒褐色土	土師器 甕	②(6.6)		外面：口縁横ナデ 内面：口縁横ナデ 頸ナデ	表：橙色 断：浅黄橙色	密 (少量の石英、 黒雲母を含む)	
86－2 (53)	土坑26上方 黒褐色土	土師器 甕	②(4.9)		外面：横ナデ 内面：口縁、頚部横ナデ 胴部ヘラ削り	外：黄褐色 内：暗黄褐色	密 (少量の石英、 黒雲母を含む)	
86－3 (53)	土坑26上方 黒褐色土	土師器 甑	②(5.5)		外面：ナデ	浅黄橙～ 黄橙色	密 (少量の石英、 黒雲母を含む)	
86－4 (52・53)	土坑26上方 黒褐色土	土師器 甕	①(23.2) ②(5.3)		外面：横ナデ、ハケ目 内面：ヘラ削り	浅黄橙～ 黄橙色	やや密 (少量の石英、黒雲母、 金雲母、色粒を含む)	
86－5 (53)	土坑2上面	土師器 甕	②(5.6)			浅黄橙～ 黄橙色	やや粗 (細かい砂粒を 含む)	
86－6 (53)		須恵器 坏身	①(11.7) ②(2.4)		外面：回転ヘラ削り 内面：回転ナデ	外：青灰色 内：黒色塗彩	密 (2㎜大の砂粒を わずかに含む)	
86－7 (52)	土坑26 床面	土師器 甕	①(15.4) ②(9.8)	単純口縁	外面：横ナデか 内面：横ナデか、ヘラ削り	浅黄橙～ 黄橙色	やや粗 (1㎜以下の砂粒 を多く含む)	
86－8 (53)	土坑26内 土坑	土師器 甑	②(3.5)			浅黄橙～ 黄橙色	やや密 (細かい砂粒を 多く含む)	

土坑26及び周辺出土遺物（第86図）

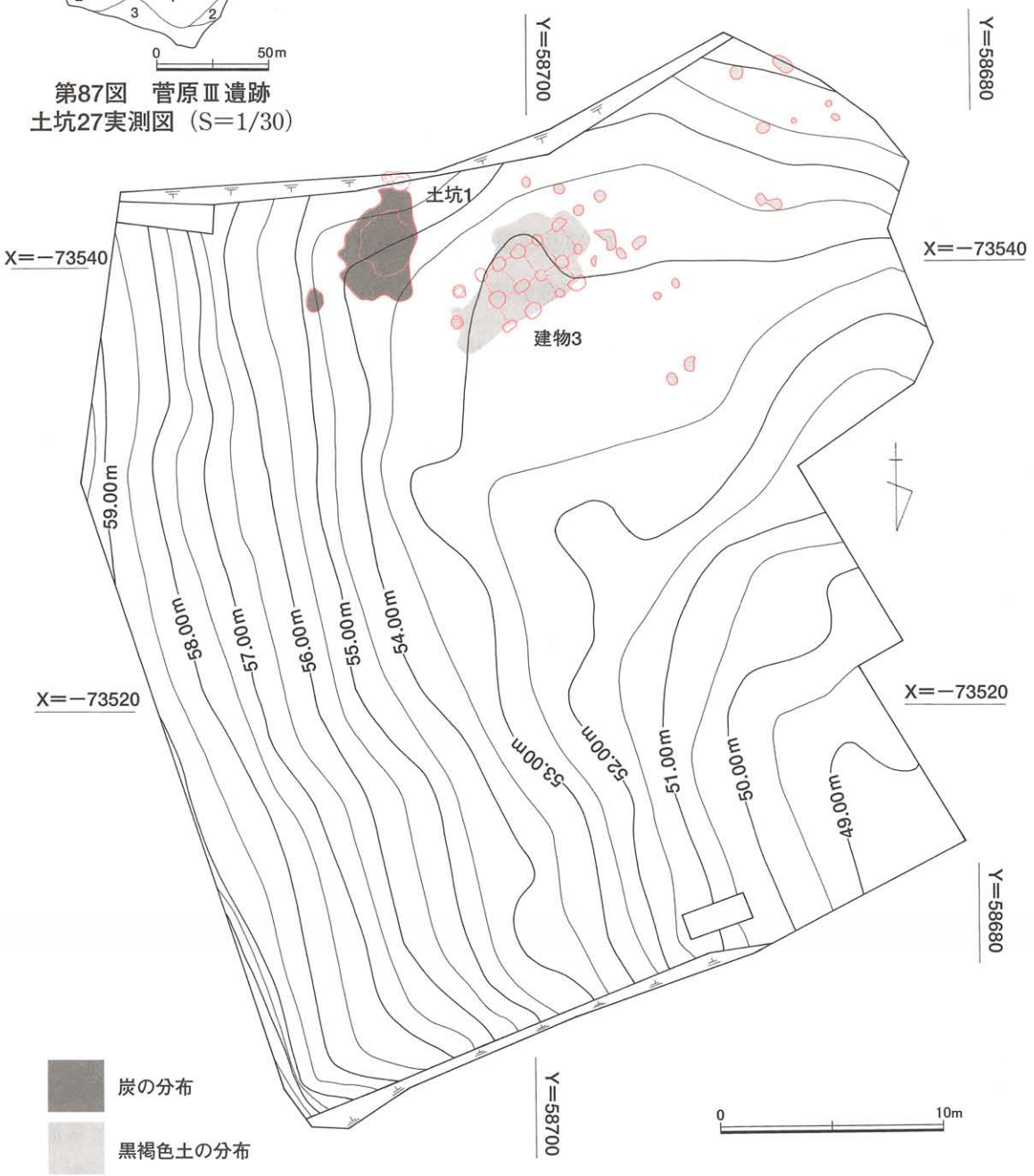
7は土坑26の中心部から、8は土坑26の南辺近くから出土した。2点とも土坑26に伴う遺物であるが、7は上方から流れ込んだ黒褐色土に含まれていた遺物であり（第84図）、土坑26の時期を示す遺物ではない。1～4は土坑26より山側の平坦面からの出土である。黒褐色土の広がる部分と位置が重なっており、これらはかく乱で消失した建物（推定）に伴う遺物であろう。また、5が上面から出土した土坑2も、黒褐色土の広がり部分と一続きの遺構であった可能性がある。このうち供膳具は須恵器の坏身1点のみ（5）で、受部が破砕されている。他はすべて甕・甑等の炊事具であり、炊事具に偏した器種構成である。甕のうち単純口縁のものが（1）（2）（4）（5）4点と多数を占め、複合口縁が退化したものは建物3の土坑内部から出土した（7）のみである。出土位置がやや離れるが、甑（8）と合わせて使用されたと考えられる。



第87図　菅原Ⅲ遺跡
土坑27実測図（S＝1/30）

土坑27（第87図）

土坑26の北辺の一部を切って掘られた焼土坑である。内部には粘土が広がり、その下層では赤橙色の焼土が認められた。いずれも土坑の底面に密着せず、わずかに浮いた状態であることから、粘土や焼土の部分は土坑の上方にあった構造物が崩落して土坑内に堆積していたものと見られる。時期は不明である。土坑26を切っているので、土坑26よりは新しい段階の遺構である。



第88図　菅原Ⅲ遺跡調査後地形及び遺構配置図４（S＝1/300）

最上層の遺構――第４段階（第88図）

建物３（第89図）

建物３は、土坑26とほぼ同時期の遺構（ただし消失）の埋土であったと推定される黒褐色土の上に建てられている。２間×５間の東西棟の掘立柱建物である。柱穴の多くが一辺50㎝をこえる比較的大きな方形あるいは長方形である。Ｐ４に残る柱痕から、径18㎝の柱が使用されていたことが判明する。遺存状況が悪く、残っている柱穴の深さはいずれも22㎝以下であった。柱穴の埋土はいずれも明るい灰黄褐色土であった。

総柱で、重量を支えることが可能な構造に加え、柱穴がいずれも方形で大規模であることから、高床倉庫であったと推定される。この遺構に伴う遺物は出土していない。

土坑１（第90図）

建物３の南東方向５mの位置で検出した土坑である。底面付近には、焼土や木炭を多量に含む土が堆積しているので、火を使用したことは確実である。ただし、出土した坏や皿には火を受けた痕跡が認められなかったので、これらの遺物は土坑内で火を使用した後に埋納されたのであろう。

遺物は、第88図１・２とも底面付近に集中しており、ともに高台を上に向けた状態で出土した。３はやや上方から、底面を上に向けた状態で出土した。火葬跡の可能性が考えられるが、骨片などは出土していない。

出土遺物（第90図）

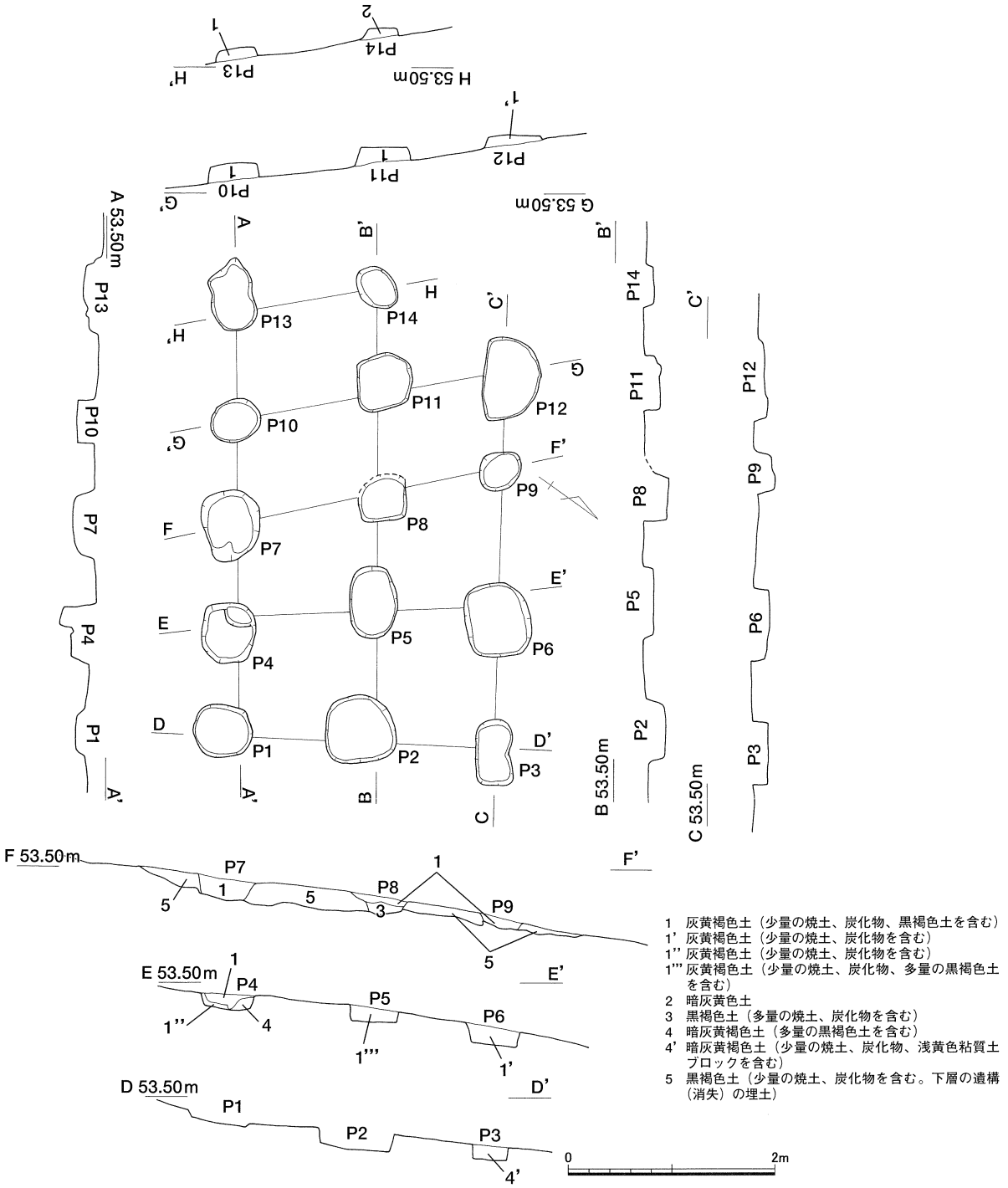
いずれも土師質土器で、高台のついた坏２点（第88図１・２）と、坏または皿の底部が１点[3]出土している。高台付坏のきゃしゃな高台、「ハ」の字に開く坏部などの特徴は門生黒谷Ⅱ遺跡SX01（10世紀半ば）出土遺物と共通しており[4]、土坑１の遺物も10世紀頃に属すると思われる。

まとめ

菅原Ⅲ遺跡は山間の小さな谷に存在しているが、今回の調査では27基あまりの土坑及び掘立柱建物３棟を検出した。土坑は調査区全体に存在し、建物跡は谷頭の緩斜面に集中していた。土坑は径２m前後のやや大型のものと径１m～1.5mの小型ものがあり、大型土坑は谷部、小型土坑は斜面から主に見つかった。これらの土坑の中には、底に小ピットが存在しているものや石鏃・縄文土器が出土しているものがあることから、土坑３．11．21．23等は獣を捕るための落とし穴になるものと考えられる。ただ、小型土坑の中には不整形な平面形を呈し、比較的浅いものが多くあるが、これらは人工物でない可能性もある。

その他、焼土や炭化物が詰まっていたものや大型の方形を呈するものがあった。焼土を伴う土坑１は、径0.8mあまりの円形を呈した深さ0.25mもので、10世紀後半から11世紀にかけての土師器の碗や坏が出土し、土坑の壁面は焼けていた。ほぼ同時期で、これに類似するものが安来市大坪古墳群から検出されており[5]、この土坑は土師器を焼いた窯跡になる可能性がある。また、６世紀後半の須恵器や土師器が出土した土坑26は、3.5m×4mの方形を呈し、中央が擂鉢状に窪んでいる特異なものであった。

建物跡はいずれも掘立柱建物で、２棟が総柱、１棟が普通の建物である。建物跡２は９本柱の方形を呈した２間×２間の総柱建物で、その規模は3.2m×4.0mを測る。この建物は、６世紀後半の土器を伴っていた土坑26が柱穴を切って造られていたので、それより古い時期になる。また、建物１

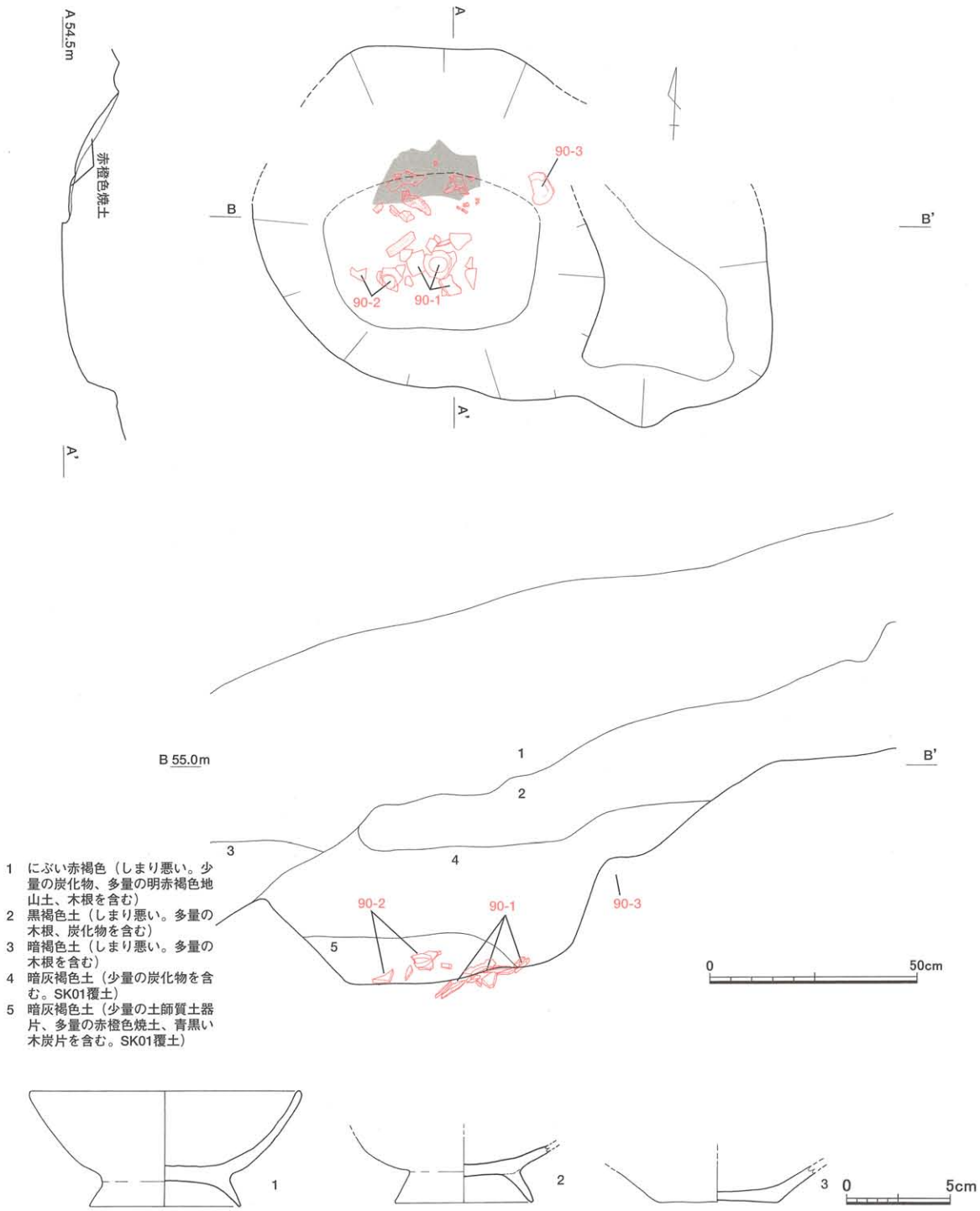


第89図　菅原Ⅲ遺跡建物３実測図（S＝1/60）

第28表　菅原Ⅲ遺跡　建物３計測表

建物３（菅原Ⅲ）							
規模		梁行き			桁行き		
		二間（2.6m）			四間（4.1m）		
主軸		N－58°－E					
柱穴（cm）	番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6
	上面径	57×50	63×69	63×30	63×50	70×46	71×63
	深さ	10	16	22	18(34)	10	22
	番号	P7	P8	P9	P10	P11	P12
	上面径	70×54	47×(44)	43×36	48×40	52×54	76×53
	深さ	16	14	16	16	12	15
	番号	P13	P14				
	上面径	70×38	36×46	方形のものは長辺×短辺			
	深さ	4	18				
柱間距離（m）		P1－2	P2－3	P3－6	P6－9	P9－12	P12－11
		1.3	1.3	1.3	1.5	0.9	1.3
		P11－14	P14－13	P13－10	P10－7	P7－4	P4－1
		1.0	1.4	1.2	1.0	1.1	0.9

P13の短辺は計測不可



第90図　菅原Ⅲ遺跡　土坑１遺物出土状況及び出土遺物実測図（遺構:S＝1/15,遺物:S＝1/3）

第29表　菅原Ⅲ遺跡　土坑１出土土器観察表

挿図番号 (写真図版)	出土地点	種別	計測値 ①口径cm ②器高cm ③低径cm	形態の特徴	調整・文様の特徴	色調	胎土	備考
90－1 (53)	底面付近	土師質土器 碗	①12.9 ②5.5 ③7.2	高台は華奢。 体部はわずかに内湾。	外面：回転ナデ？ 内面：回転ナデ？	外：明橙褐色 内：明橙褐色	密 (1㎜前後の石英粒、赤褐色粒、金雲母、黒雲母細片を含む)	底部内面にわずかにロクロ痕が残る
90－2 (53)	底面付近	土師質土器 坏	②(3.2) ③6.6	高台は華奢。 体部は湾曲して立ち上がる。	外面：ナデ 内面：ナデ	外：明黄褐色～明橙褐色 内：明黄褐色～明橙褐色	密 (1~2㎜程度の石英、赤褐色粒、金雲母、黒雲母細片を微量に含む)	底部内面にわずかにロクロ痕が残る
90－3 (53)	上面	土師質土器 坏	②(1.7) ③5.8		外面：不明、回転糸切り 内面：不明	表：にぶい黄橙色 断：浅黄橙色	密 (微量の金雲母を含む)	

は、建物跡２の西南５mあまりの所に造られている１間×２間の小型のもので、柱穴に詰まっていた土が建物跡２と同じことから、同時期かそれに近い時期になる可能性がある。さらに、建物３は建物１・２より上面で検出された２間×４間の総柱の建物で、古墳時代後期以降に築造されたものと思われる。

掘立柱建物は弥生時代から出現しているが、それらは竪穴住居跡とセットで検出されることが多いいことから菅原Ⅲ遺跡の建物跡１・２は、古墳時代前期から中期に築造されたものと考えられ、倉庫的なものと推測される。しかし、菅原Ⅲ遺跡のように山間の谷部に単独で造られた例がほとんど知られていないので、このような場所に倉庫的な建物をなぜ建てたのか明らかでない。ただ、この時期には、出雲平野部から山裾や山間部に集落が移るとともに住居跡が竪穴住居から掘立柱建物に変わっていくことが知られており、それらと関連しているものと推測される。ともあれ、この問題については、今後、類例の増加を待って再検討することが必要と思われる。

註

(1) 一つの落とし穴群の中で、底面に小ピットを持つ落とし穴と持たない落とし穴がともに見られる場合がある（島根県教育委員会『福富Ⅰ遺跡・屋形１号墳』1997年）

(2) 榊原重高「柱穴の調査方法を考える」（東北中世考古学会編『掘立と竪穴』高志書院、2001年）

(3) 岩橋孝典「山陰地域の古墳時代後期～奈良時代の炊飯具について（2）」（『古代文化研究』12、2004年）。

(4) 島根県教育委員会『門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡』1998年

(5) 島根県教育委員会『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』1　1976年

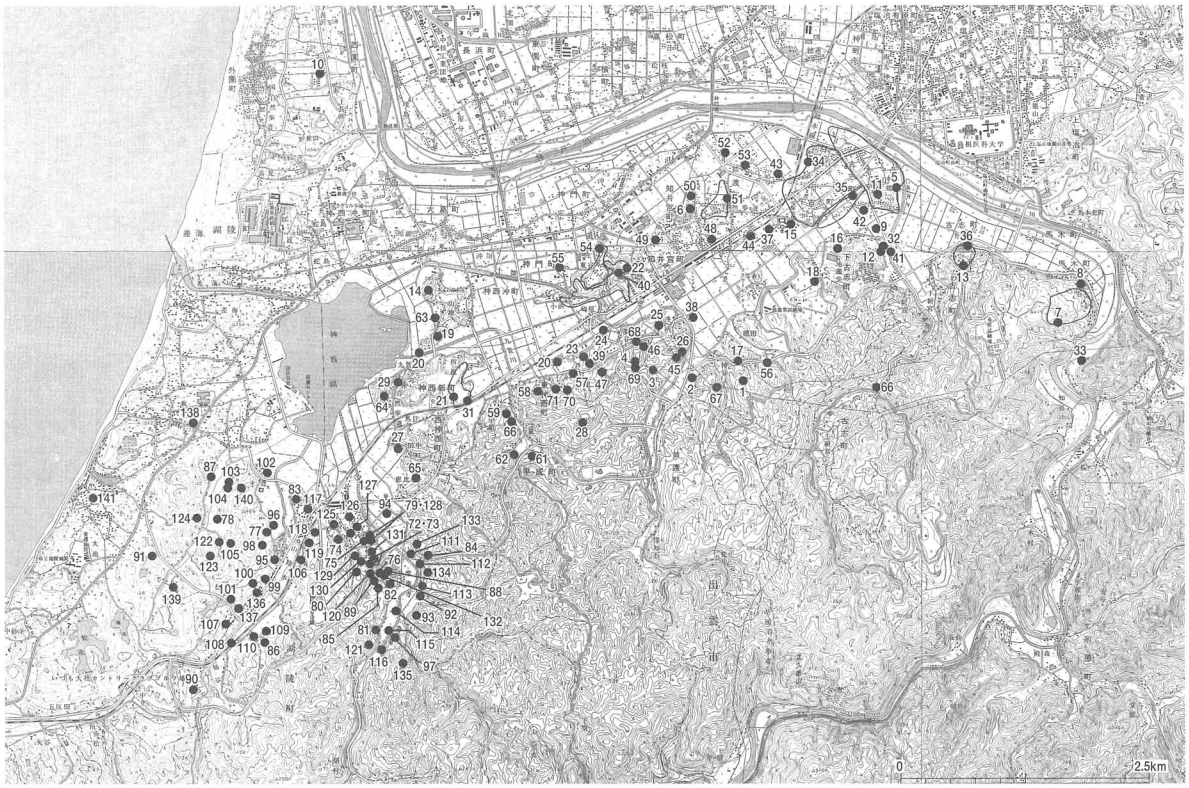
4. 出雲市神門地区の調査

第１章　遺跡の位置及び周辺の遺跡

出雲市神門地区の本書掲載遺跡は廻田Ⅴ遺跡、保知石遺跡、浅柄Ⅱ遺跡、栁ノ内Ⅰ遺跡の４ヶ所で、これらの遺跡は出雲平野南部の低丘陵地帯に存在している。ここはJR西出雲駅の南方にあたり、出雲平野に向かって流れている保知石川の東側に廻田Ⅴ遺跡、保知石遺跡があり、西側の丘陵地に浅柄Ⅱ遺跡、栁ノ内Ⅰ遺跡が存在している。調査は、平成14年８月27日～10月29日にかけて廻田Ⅴ遺跡を行い、他の遺跡は翌年の８月19日～平成16年２月13日にかけて調査員２人、補助員１人の体制で実施した。その結果、保地石遺跡から縄文時代晩期・弥生時代前期の遺物が出土するとともに浅柄Ⅱ遺跡では前期古墳が見つかるなど注目されるものが検出された。

保知石遺跡の北側約600mのところに存在している浅柄遺跡からは縄文時代後期末から弥生時代前期にかけての遺物、遺構が検出されているが、出土遺物の量が少なく規模が小さい。出雲平野南側の他地域では、斐伊川方水路の建設予定地の三田谷Ⅰ遺跡や湖陵町の御領田遺跡、斐川町の後谷遺跡等では多量の遺物や住居跡が見つかっている。この時期は出雲平野南部の端の谷状の地形のところに縄文農耕から稲作を行った集落が点在していたものと思われ、その一つが保知石遺跡になることが今回の調査で明らかになった。弥生時代中期になると古志本郷遺跡のように本格的な集落が出現してくる。この遺跡は弥生時代中期から古墳時代前期の環濠を持つ集落で、朝鮮半島、北部九州、近畿地方の土器や中国大陸で作られた銅鏃など他地域との交流を示す遺物が多く見つかっている。また、溝を持つ遺跡は隣接する田畑遺跡、下古志遺跡からも検出されており、当時かなりの人がこの周辺に住んでいたものと思われる。古墳時代前期後半になると巨大な集落は姿を消し、古志本郷遺跡の南側に小規模な集落が出現する。浅柄遺跡は古墳時代前期後半から中期にかけての住居跡が見つかっており、浅柄Ⅱ遺跡の前期古墳との関係が問題となる遺跡である。また、前期古墳は神西湖の東側の丘陵に筒形銅器が出土した山地古墳があり、中期には標高100mの山頂に造られている前方後円墳の北光寺古墳がある。また、中期前後のものと考えられている箱式石棺が浅柄Ⅱ遺跡と同じ丘陵の北側から発見されている。古墳時代後期になると出雲平野でもいち早く横穴墓が出現するとともに、妙蓮寺山古墳のように前方後円墳で、観音開きの閉塞石を持つ横穴式石室を主体部した古墳や、石室の構造が朝鮮半島との関わりがある放れ山古墳、さらに線刻による壁画が描かれている深田横穴墓群等、出雲平野の中でも特色を持った古墳が存在している。このようにこの地域は古墳時代前期から後期にわたって絶え間なく古墳が築かれているとともに、朝鮮半島との関連を示唆するような古墳が築かれていることは興味深い。奈良時代になると、このあたりは神門郡の古志郷になるが、古志本郷遺跡で神門郡家の建物跡が検出されている他、出雲国風土記に記載されている宇加池と推定されているところがあり、神門郡の中心地であったものと思われる。

参考文献　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター『斐伊川放水路　発掘物語』総集編 2003.3
出雲市教育委員会『西出雲駅南土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　浅柄遺跡』2000.3
出雲市教育委員会『市道浅柄古志線歩道設置に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　田畑遺跡』2000.3
出雲市教育委員会『山地古墳発掘調査報告書』1986.3
河上稔・西尾克己「宇賀池について」『風土記論叢』第二号 1986



第91図　廻田Ⅴ遺跡・保知石遺跡・浅柄Ⅱ遺跡・柳ノ内Ⅰ遺跡とその周辺の遺跡（S＝1/75,000）

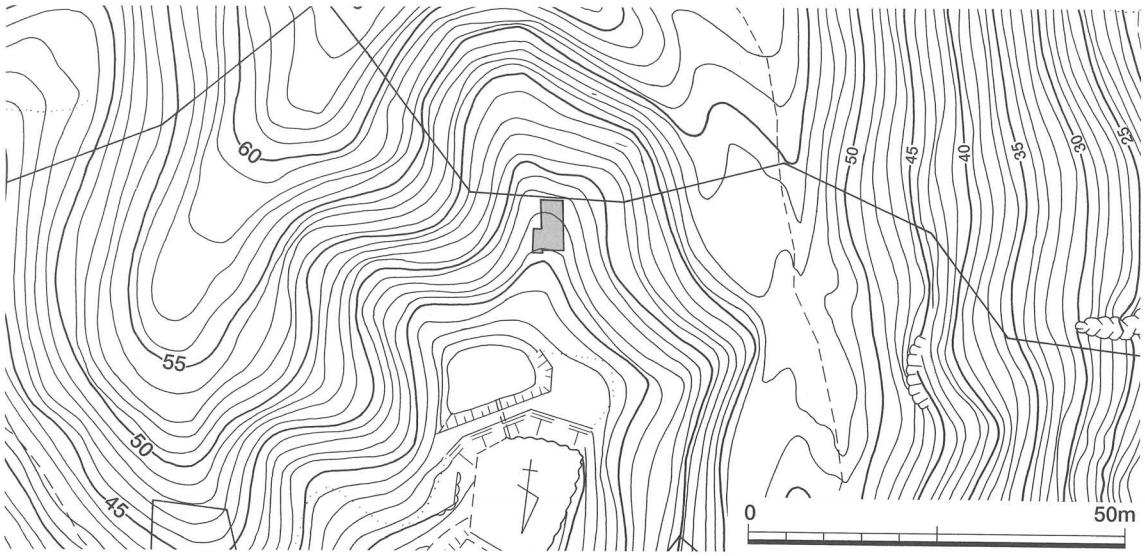
第30表　廻田Ⅴ遺跡・保知石遺跡・浅柄Ⅱ遺跡・柳ノ内Ⅰ遺跡とその周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別
1	廻田Ⅴ遺跡	祭祀遺跡	37	天神原古墳	古墳	72	雲部Ⅰ遺跡	散布地	107	岡屋新花前遺跡	集落跡
2	保知石遺跡	散布地	38	浅柄遺跡	集落跡	73	雲部Ⅱ遺跡	散布地	108	上深田遺跡	散布地
3	浅柄Ⅱ遺跡	古墳	39	浜井場古墳	古墳	74	倉道古墳群	古墳	109	姉谷柿木田遺跡	散布地
4	柳ノ内Ⅰ遺跡	散布地	40	福知寺裏土壙墓	土壙墓	75	竹崎遺跡	散布地	110	高畦遺跡	集落跡
5	古志本郷遺跡	集落跡	41	放れ山横穴墓群	横穴	76	庭反Ⅰ遺跡	散布地	111	松ノ前遺跡	散布地
6	知井宮多聞院遺跡	貝塚	42	思案橋北遺跡	散布地	77	八幡宮横穴群	横穴	112	板高池遺跡	散布地
7	刈山古墳群	古墳	43	下古志天満宮付近遺跡	散布地	78	松崎谷横穴群	横穴	113	柿木田家下遺跡	散布地
8	小坂古墳	古墳	44	芦渡遺跡	散布地	79	森の前古墳群	古墳	114	大河原遺跡	散布地
9	古志遺跡	散布地	45	浅柄南古墳	古墳	80	雲部古墳群	古墳	115	京田遺跡	散布地
10	上長浜貝塚	貝塚	46	間谷東古墳	古墳	81	産の岩古墳	古墳	116	京田坂遺跡	散布地
11	大梶古墳	古墳	47	間谷西古墳群	古墳	82	常楽寺遺跡	集落跡	117	広田屋古墳	古墳
12	放れ山古墳	古墳	48	嘉儀遺跡	散布地	83	中島遺跡	散布地	118	中島古墳	古墳
13	井上横穴墓群	横穴	49	観知寺付近遺跡	散布地	84	ののこ谷横穴群	横穴	119	的場古墳	古墳
14	佐伯神社古墳	古墳	50	多聞院北遺跡	散布地	85	安子神社横穴群	横穴	120	庭反古墳	古墳
15	宝塚古墳	古墳	51	東原遺跡	散布地	86	柿木田古墳	古墳	121	菰田上古墳群	古墳
16	妙蓮寺山古墳	古墳	52	極楽寺付近遺跡	散布地	87	水原横穴群	横穴	122	松崎谷古墳群	古墳
17	深田谷横穴墓群	横穴	53	阿弥陀寺西遺跡	散布地	88	庭反Ⅱ遺跡	散布地	123	由ヶ廻古墳群	古墳
18	地蔵堂横穴墓群	横穴	54	東谷Ⅰ遺跡	散布地	89	西蓮寺山古墳群	古墳	124	打蒔田古墳	古墳
19	山地古墳	古墳	55	東谷Ⅱ遺跡	散布地	90	狩又古墳群	古墳	125	土器出遺跡	散布地
20	丁之内古墳	古墳	56	廻田谷遺跡	散布地	91	大池横穴	横穴	126	小路遺跡	散布地
21	神待山古墳群	古墳	57	御崎谷遺跡	散布地	92	奥ノ谷遺跡	散布地	127	大垣内遺跡	散布地
22	神門横穴墓群	横穴	58	金屋谷遺跡	散布地	93	御領田遺跡	集落跡・貝塚	128	森の前遺跡	散布地
23	古垣内遺跡	土壙墓	59	中上Ⅰ遺跡	散布地	94	三部竹崎遺跡	散布地	129	畑田南遺跡	散布地
24	間谷西遺跡	土壙墓	60	中上Ⅱ遺跡	散布地	95	姉谷恵比須遺	散布地	130	山根遺跡	散布地
25	間谷古墳	古墳	61	麓Ⅰ遺跡	散布地	96	三部八幡下遺跡	集落跡	130	本中境遺跡	散布地
26	浅柄古墳	古墳	62	麓Ⅱ遺跡	散布地	97	滝ノ尻遺跡	散布地	132	狩山遺跡	散布地
27	田中谷貝塚	貝塚	63	山地遺跡	散布地	98	保知石谷遺跡	古墓他	133	松ノ前古墳群	古墳
28	北光寺古墳	古墳	64	九景横穴墓群	横穴	99	只谷Ⅰ遺跡	散布地	134	常楽寺柿木田古墳群	古墳
29	正久寺横穴墓群	横穴	65	恵比須遺跡	散布地	100	只谷Ⅱ遺跡	散布地	135	寺田古墳群	古墳
30	湖東屋山横穴墓群	横穴	66	新宮遺跡	古墳	101	只谷Ⅲ遺跡	散布地	136	山田屋古墳	古墳
31	神待山横穴墓群	横穴	67	宮下遺跡	横穴	102	西安原遺跡	集落跡	137	古垣内古墳	古墳
32	放れ山遺跡	散布地	68	間谷東古墳群	古墳・集落跡	103	中原Ⅰ遺跡	散布地	138	板津遺跡	散布地
33	大井関遺跡	堰跡	69	龍宮山遺跡	古墳？	104	中原Ⅱ遺跡	貝塚	139	刈山下遺跡	散布地
34	下古志遺跡	集落跡	70	玉泉寺裏遺跡	集落・古墳他	105	東沢田遺跡	散布地	140	本要寺古墳群	古墳
35	田畑遺跡	集落跡	71	九景川遺跡	集落跡	106	姉谷東遺跡	散布地	141	惣荒神社祭祀跡	祭祀遺跡
36	井上古墳	古墳									

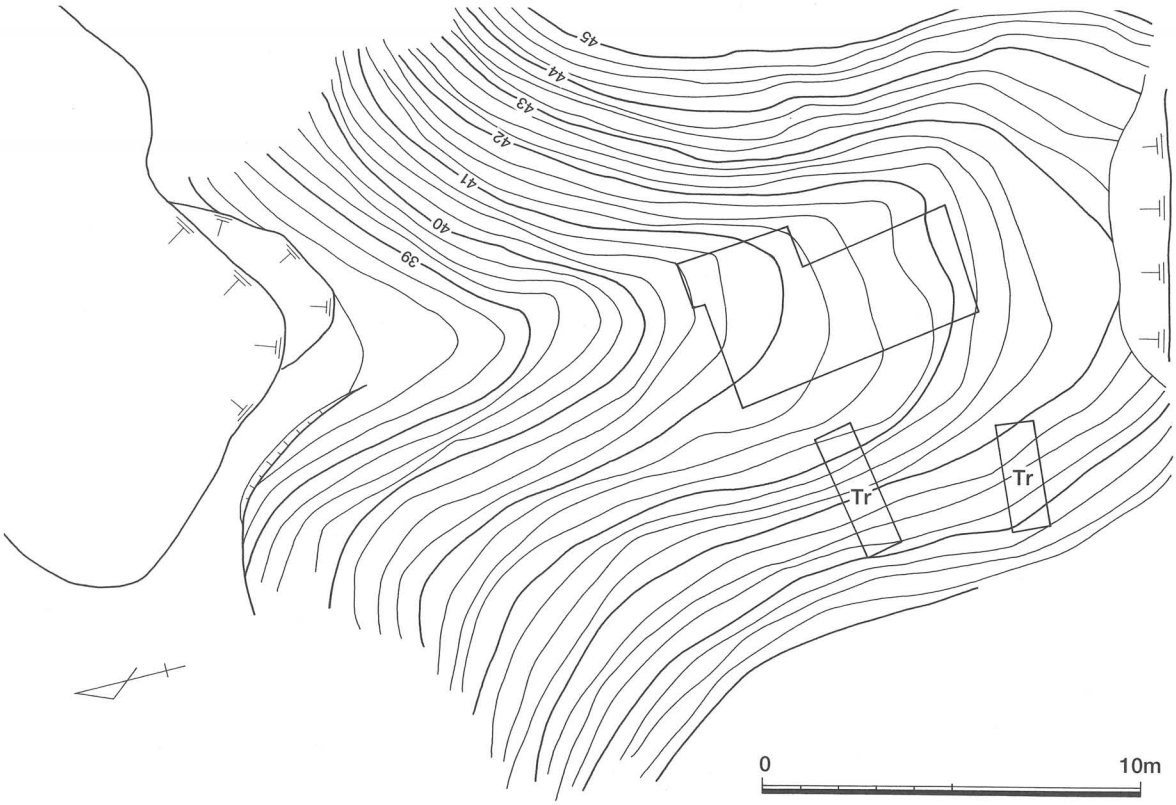
第２章　調査の概要

第１節　廻田Ｖ遺跡

この遺跡は出雲市芦渡町廻田2376－４番地他に所在する。ここはJR西出雲駅の南方約１㎞にあたり、小さな谷の谷頭に位置する。谷の中ほどには東西を走る大型農道が横ぎり、農道のすぐ北側には線刻壁画で有名な深田横穴墓群が存在している。谷は農道の南側で枝分かれしているが、この遺跡は西側の谷を上がったところにある。トレンチ調査で30数本発掘した結果、谷の最も奥部から須



第92図　廻田Ｖ遺跡　周辺地形図（S＝1/1,000）



第93図　廻田Ｖ遺跡　調査前地形図（S＝1/200）